女學世界

第一巻第拾三號

口繪

華頂宮妃殿下

聖母マリア

泰西名都（伊國ナープル府）

紀州名所（瀞八丁）

鄭夫人濱子

淑德女學校

女子美術學校

割烹會

慈善旅行の撮影

大和名所（鳳凰堂）

名流筆蹟





三井呉服店
季節向き新柄流行品を階上階下總躰に陳列致し尚は御休息室をも取設け置候間御慰み旁御子様方御連れ遊ばされ緩々御遊覧なし下され度願上候
地方よりの御注文は御手紙にて御申越し被下候はゞ即日小包郵便にて發送可仕候尚は注文御案内書御入用の節は御一報次第御送り可申上候
電話
東京本局 特 五二五 一二一七 一八六〇
大阪東 特 四七三 一六五〇
東京日本橋區駿河町
大阪高麗橋二丁目

女學世界第十三號目次

少女文庫

華族女學校學監下田歌子女史著（製本出來）

第二編

庭訓お伽噺

菊判和綴
正價卅五錢
郵税六錢

此書は我邦古代のお伽噺より近代のものに至る迄多くの同書類中より其今に至りて可なりと思ふものゝみを撰出せるもの、すべて此類の書は中には面白き無考のものあり、又往古の風俗を尋ぬる栞とせんには此上なきものあれども其詞の解し難き其事柄の少女が耳にすべからざるものも交りたる故に今其採用すべきものを注意し且つ丁寧に注解を加へたれば一讀明了大に少女風教の裨益となるべし

全部目次

（○正價一冊三拾五錢●三冊前金壹圓●六冊前金壹圓九拾錢●郵税壹冊に付金六錢づゝ）

發兌元 東京 博文館



華頂宮妃經子殿下



伊太利ナープル港



靜八丁 (紀州名所)

聖母マリアの像



（ラファエルの筆）

歌舞伎座新興行

福地櫻痴居士新作脚本

市川團十郎
尾上菊五郎
登場

芳哉義士譽

（かんばしやぎしのほまれ）

全壹册

洋裝菊判繪表紙美本

口繪極彩色刷細川侯大石對面の圖（山中古洞筆）

（正價三拾錢
郵税四錢）

此脚本は櫻痴居士の新作にして團、菊兩優久振の登場演劇に上る者なり其の筋書は赤穗義士復讐事畢りて諸侯四家へ預けらる大石内藏助等十七人は細川邸に在りて愼て幕府の裁許を待つ、幕府にては其所刑に關して議論兩派に別れ、遂に切腹に決す此際大石の心事細川侯の義狹又は夫妻親子の訣別最後の決心等を脚本として、之を五幕に作る、櫻痴先生の斯文に堪能なる新に喋々を要せず江湖の諸君請ふ陸續御購讀あらんことを

（十月上旬發兌）

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（甲の一）

巖谷漣山人著　有名畫伯挿繪

世界お伽噺

菊判洋裝美本

每月壹回發行　全部壹百冊

既刊目次

全壹冊　正價七錢　郵稅貳錢

第卅二編　中川苹舟編

南亞米利加　**虹の橋**　附錄新世界

此お噺は原著を「カックルの旅行」と言つて南亞米利加の有名なるお伽噺です昔支那に公冶長といふ人が居てこの人がまた鳥や獸の聲を聞き別けたさうですが「虹の橋」のカックルも鳥や獸の聲を聞き判たお陸での一羽の鴨に案内され虹の橋を渡れば雲の洞へも這入りとう〳〵神様に人間の大將になれと云ふ命令を受けると云ふのですが「新世界」もまた北亞米利加のお噺がこれもカックルに能く似た面白いお伽噺ですからサア〳〵讀んで御覧じろ

正價　前金　壹冊七錢　●六冊四拾錢　●拾貳冊七拾八錢　郵稅壹冊貳錢宛

(甲の二)

名流筆蹟



大河内伯令妹　　末松男夫人　　四男爵母堂



(寶冠章佩用)

鄭夫人濟子

畿內名蹟



南都法隆寺



宇治鳳凰堂



長野縣割烹講習會員撮影

（その一）

新婦人會編『新婦人觀』第壹編

小金井喜美子女史序文

文學士 寺内子誠君著

定價貳拾五錢 郵稅四錢

婦人の使命

（南風館藏版）

口繪……佳人讀書の圖……一條成美君畫

肖像……寫眞銅版印刷……鳩山春子夫人

婦人の首に枷械あり、婦人の手に鐵鎖あり、婦人は遂に男子の足下の蹂躙に甘ぜざる可からざる乎。本書堂々の論、縱横の筆、以て婦人の使命を說く。要、滿腔の同情を憐れなる弱者に灑ぎて、彼枷械と、彼鐵鎖とを除き去らんとするのみ。

正岡藝陽君著

婦人の側面

全一冊 定價貳拾錢 郵稅四錢

即快に、縱横に、而して最も眞に、婦人を論じたるものにして、世に出てゝ未だ半歲に滿たず、而も江湖の需急にして、今回六版を發賣するに至れり

發行所 東京神田錦町二丁目 電話本局二八五八番 新聲社

（乙の二）

（乙の三）





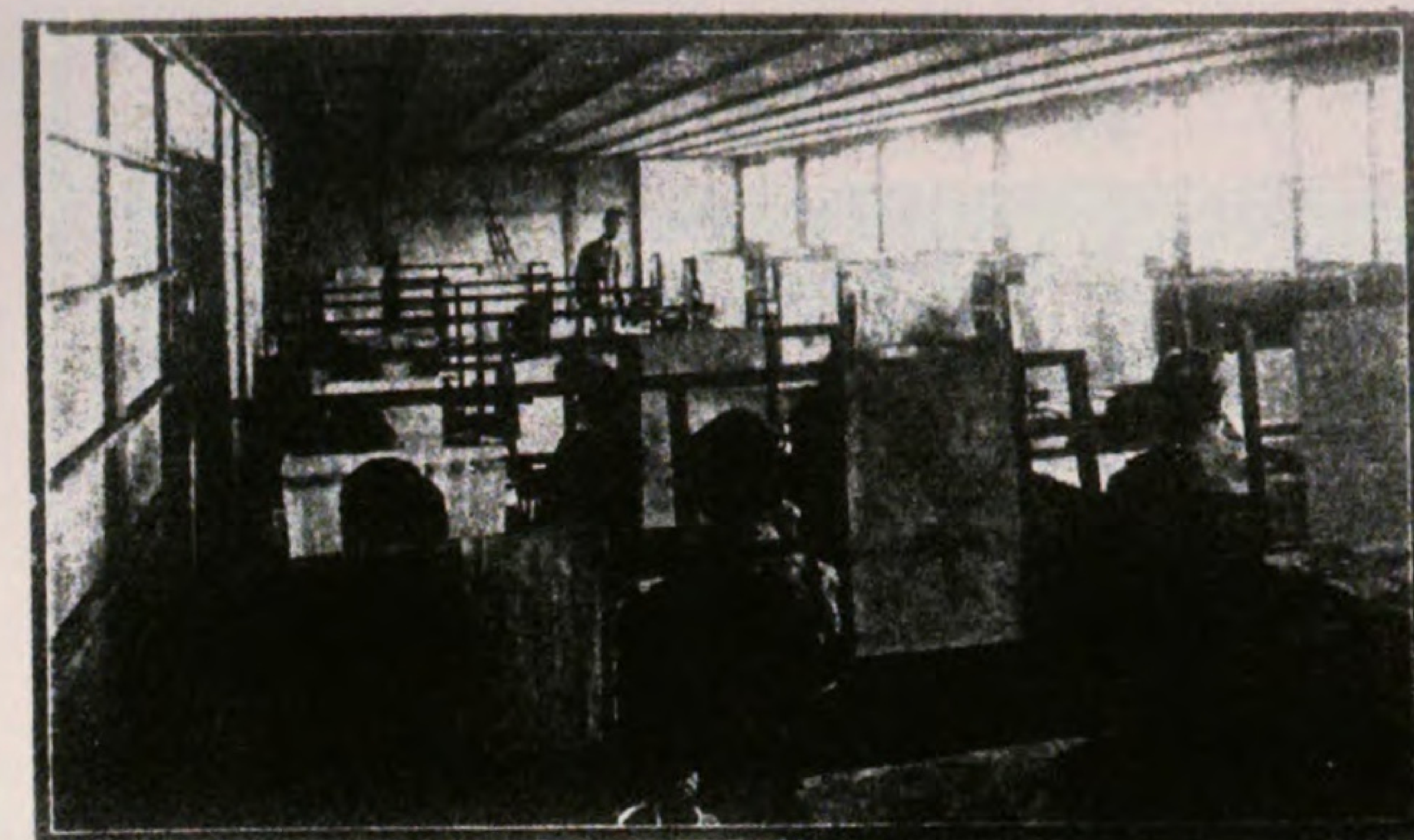
（齋藤紫白氏撮影）

淑德女學校生徒　（寄宿生）

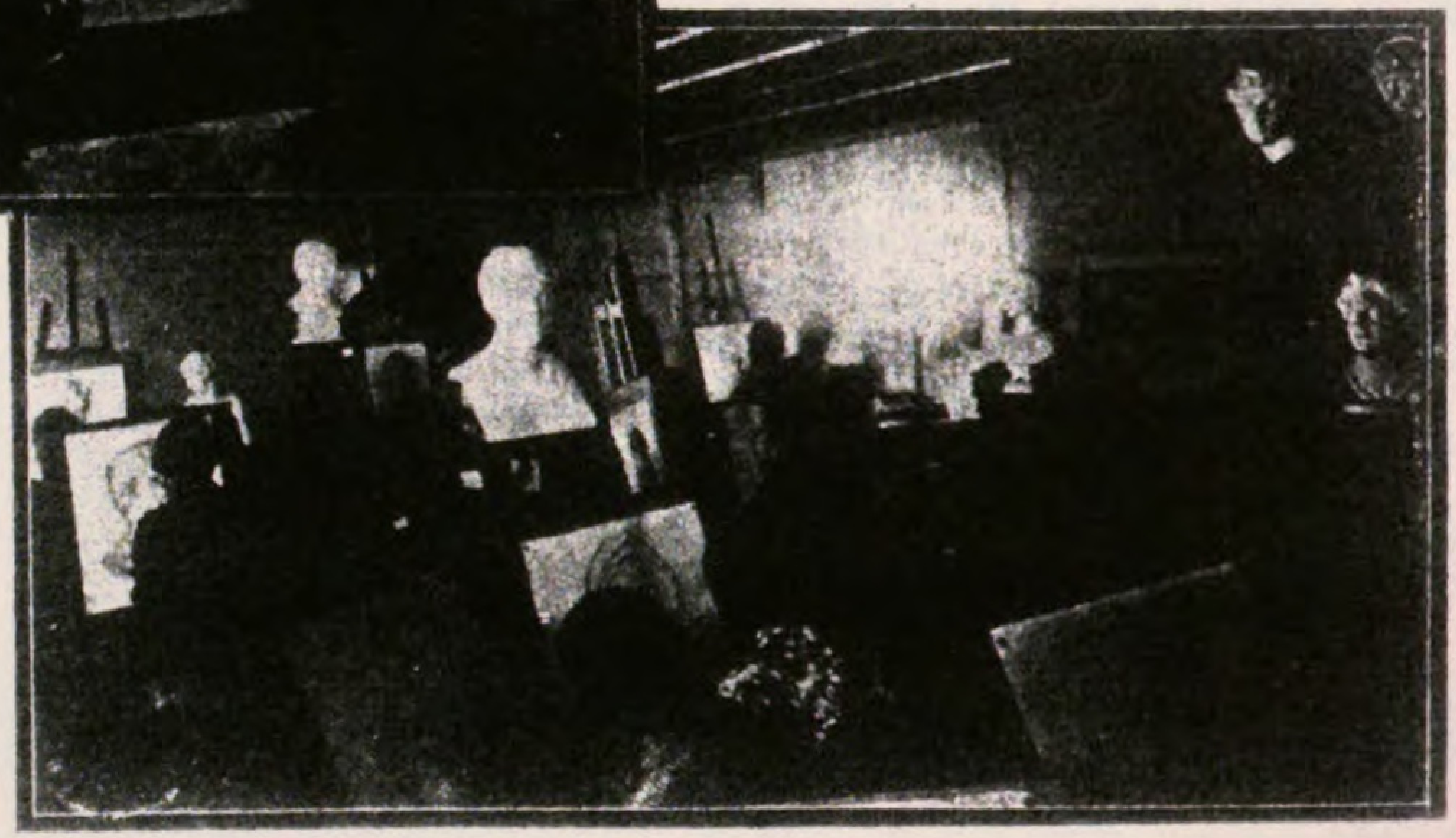


慈善旅行（鎌倉建長寺前の撮影）

女子美術學校



日本畫教室



西洋畫教室

通俗百科全書

全部五十册　全壹册菊判三百二十頁　每月一回發行

安田清忠君著

第廿三編

通俗學校管理法

（十月中旬發兌）

全一册菊判
三百二十頁
正價三十錢
郵稅八錢

本書は務めて實際につき平易なる文字を以て小學校管理法の一斑を通俗的に說明せり而して其材料を內外教育家の著述に基き其理論と應用とを參酌し加ふるに多年斯道に從事せし實驗に徵し其利害得失を講究す卷頭には本邦學者列傳及現行教育諸法令を揭け一は以て碩學鴻儒の性行を知らしめ一は以て教育令の通覽に便せり故に教育に從事するの諸君は素より本書を机上に備へざるべからず

既刊目次

正價前金　●自一編至十五編一册廿五錢　●六册壹圓四十錢　●十二册貳圓七十錢　●十六册以下一册三十錢　●六册壹圓七十錢　●十二册[illegible]圓[illegible]十錢

（酉の一）

發兌元　東京　博文館

工業叢書

工學士　市川俊雄君著

水及油

全壹冊洋裝
金字入上製

正價五拾錢
郵稅六錢

水と油とは人生秒時も缺く可らざる必要品なり、人類之に由て生活し、機械之に由て運轉し、萬種の製産之に由て運轉し、萬種の製産之に由て始めて成る、而して其工業上に於ての作用を詳論したるもの、從來我國に此の如き良書なし、世の工業家、機械家及化學者を始めとし艦船鐵道の機關士工業學校の教員及生徒は勿論其他總ての技師、技手等の必讀すべき良書なり

獨逸國カール、ランゲンベック氏著
東京高等工業學校教授 東京帝國大學講師 工學士細木松之介君校閲
尾州瀬戸陶器學校長　黒田政憲君譯

陶器製造化學

（製本出來）

全壹冊洋裝
金字入上製

正價六十錢
郵稅六錢

本書譯者黒田氏は我國陶器の最も盛んなる産出地なる尾州瀬戸の陶器學校長にて、校者細木氏は工科大學に於て專門として陶器の製造を研究したる工學士なり而して本書の原著は歐洲に於て陶器の産出の最も盛んなる獨逸國のカール、ランゲンベック氏が多年苦心して研究したる陶器製造の原理及方法を編述したるものにて方今世界の各國を通じて斯業の爲めに唯一の原理として賞讃せらるものといふ、當業者の爲めには無上の參考書たるべし是れ工業叢書の第貳編として出版するものなり

汽關車

工學士糸山孝吉君著

（續刊）

（丙の二）

發兌元　東京　博文館

蠶業叢書

全部十二冊
毎月一回發行
菊判美本

正價一冊三十錢六冊前金一圓七十錢十二冊前金三圓廿錢郵税六錢宛

本書は農商務省蠶業講習所本科出身の諸氏分擔編述し斯業改善の良友たらんヿを期す」

蠶業叢書 全部目次

東京蠶業講習所技師本多農學士校閲
東京蠶業講習所在勤三谷徹
橫濱生絲檢查所技手池田榮太郎 合著

蠶業通論

全一冊正價三十錢　郵税六錢

本書は所謂蠶業叢書の總論にして世界蠶業の起源より蠶業に關する萬般の事項を括論せるものなり本邦從來此に類似せる一二の著書なきにあらずと雖も殆んど陳腐にして見るに足るものなし然るに、本書は嶄然奇拔蠶業界の既往に鑑み現在に照し以て將來執るべきの方針に及ぼせり、卓觀特絶の論鋒人をして奮然蠶界の活劇に遊ばしむるの感を與ふ、實に空前の良書と云ふべし

發兌元　東京本町　博文館

陸軍中將男爵黑川通軌君序文　西川政憲君著

育兒體育 健康要訣

全壹冊美本
正價金三十錢
郵税四錢

人生の幸福は健康にあり而して之を圖るには幼時に於てせざるべからず然るに從來の家庭を見るに育兒の方法其宜しきを得ず往々にして發育を妨げ反つて不健康を招くの弊あり著者玆に經驗する所を記して育兒の概要を世に公にし世に親たる人の參考に資す家庭上缺くべからざる要書なり

博文館發兌

奏効確實 器械不要 簡易複寫インキ

蒟蒻版或は天板及び其他の印類又は器械類品等を要せず此のインキ一品にて簡便迅速座上立どころに同一の文書圖畫數十百枚を印刷し得へし即ち此インキを以て書したる原稿より直接他の白紙へ字畫を透寫する者にして一枚の原稿より凡七八十枚宛を寫し一瓶のインキにて原稿百數十枚を作り複寫壹萬餘枚を得るものなり
（使用法說明書を附す）

◎本品は既に諸官衙及郡區町村役場等の御用品たり

●定價二オンス 堅装箱入　送料共 金四拾錢　●●高價は郵便爲替　●●信局郵券壹割增

發賣元　神田區末廣町三十八番地　中村屋商店

（丙の三）

英才詞苑

秋の巻

九月二十日發行
寫眞銅版口繪數葉入

季方に秋に入り青年諸氏の机上新讀物なかるべからざるに際し英才詞苑秋の巻は出でんとす、體裁は例の如く紙數二百四十頁の中其三分の二を以て懸賞文の披露に宛て殘餘を以て附錄とし之れには知名家の佳作數篇を收む、懸賞作品の選評は**大町桂月、中内蝶二**の兩氏主として其任に當られ、公明に、懇切に添削批評せられたれば、當選の文は直に作の模範となすに足る、種目は小說、論文、叙事文、抒情文、英文、新體詩、漢詩、和歌、俳句等なり、又本號口繪には殊に奇拔の材料を蒐め、表紙は山中古洞氏の揮毫に係り、意匠最嶄新、而して附錄收むる所は左の如し

附錄

●**彼得大帝**（評傳）……在露國 法學士 夏秋龜一

稿を削つと九、紙數四十頁、此東歐の偉傑の一代を評叙し評論せるものにして大帝即位以前の露西亞より筆を起し、帝の幼時、歐洲の旅行、境土の擴大、東方政略等に至る迄、帝が生前の經營叙せて漏すなし、行文殊に流麗

●**復讐**（小說）……德田秋聲

泰西四名家の筆になる面白き軍事小說を秋聲氏の抄譯の筆にて反譯せしものにして快活なる軍人生活紙上に躍動せり、青年諸子には殊に絶好の讀物なり

●物外の偉人 **賣茶翁**（傳記）……宮田木佛

松籟颯々たる下熱湯を滴はんとして玉露を煮、たま〳〵豪際の内に古人高遊外の遺風を見る、此傳は即ち作者が當時の幻覺に筆を起して我國物外の偉人煎茶道の宗祖賣茶翁の高風を描寫せるもの

●**文學としての言語**（論文）……永井金風

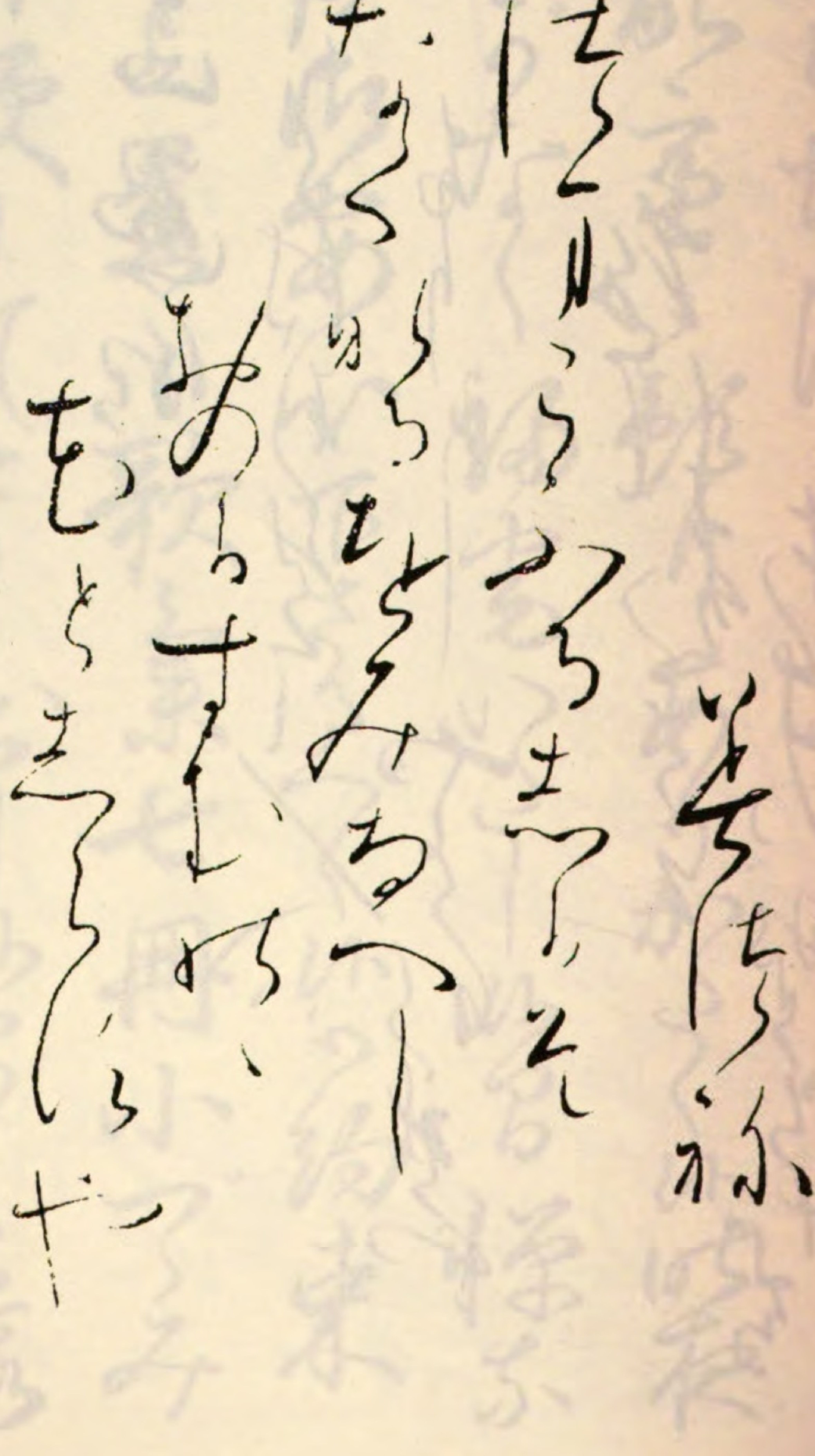
英國の名家ローレー氏の「言語及び言語學の方則」中より最も適切なる數章を譯出せるものにして、文學に志す者の必讀すべき資料たり、

●**文武叢誌**（逸話）……柳緑郎

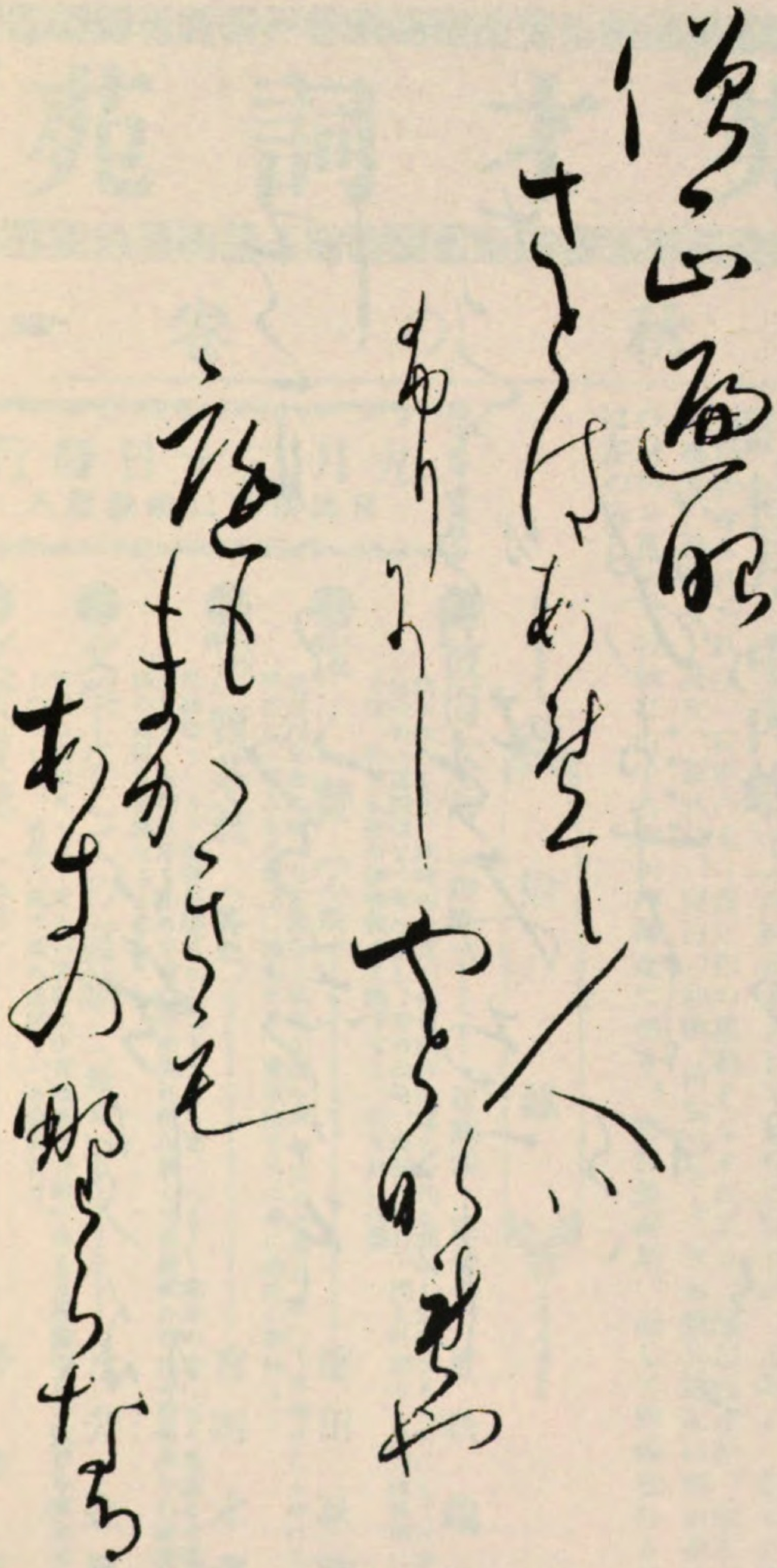
我國古今の武士が軍旅野外に在りて文藝を弄せし幾多の佳話を蒐錄せるものにして亦英雄の雅懷を窺ふに足る

（丙の四）

多田親愛先生筆



多田親愛先生筆



坂正臣先生筆

其の地滞留ハ幾日に
の頃亀三郎よりありがたくは候
てごゆるなく帰宅いたし候得共
がら御安心下さるべく候御約束
申上置候歌集七冊小づつみ
郵便にて差出し候まゝ御落

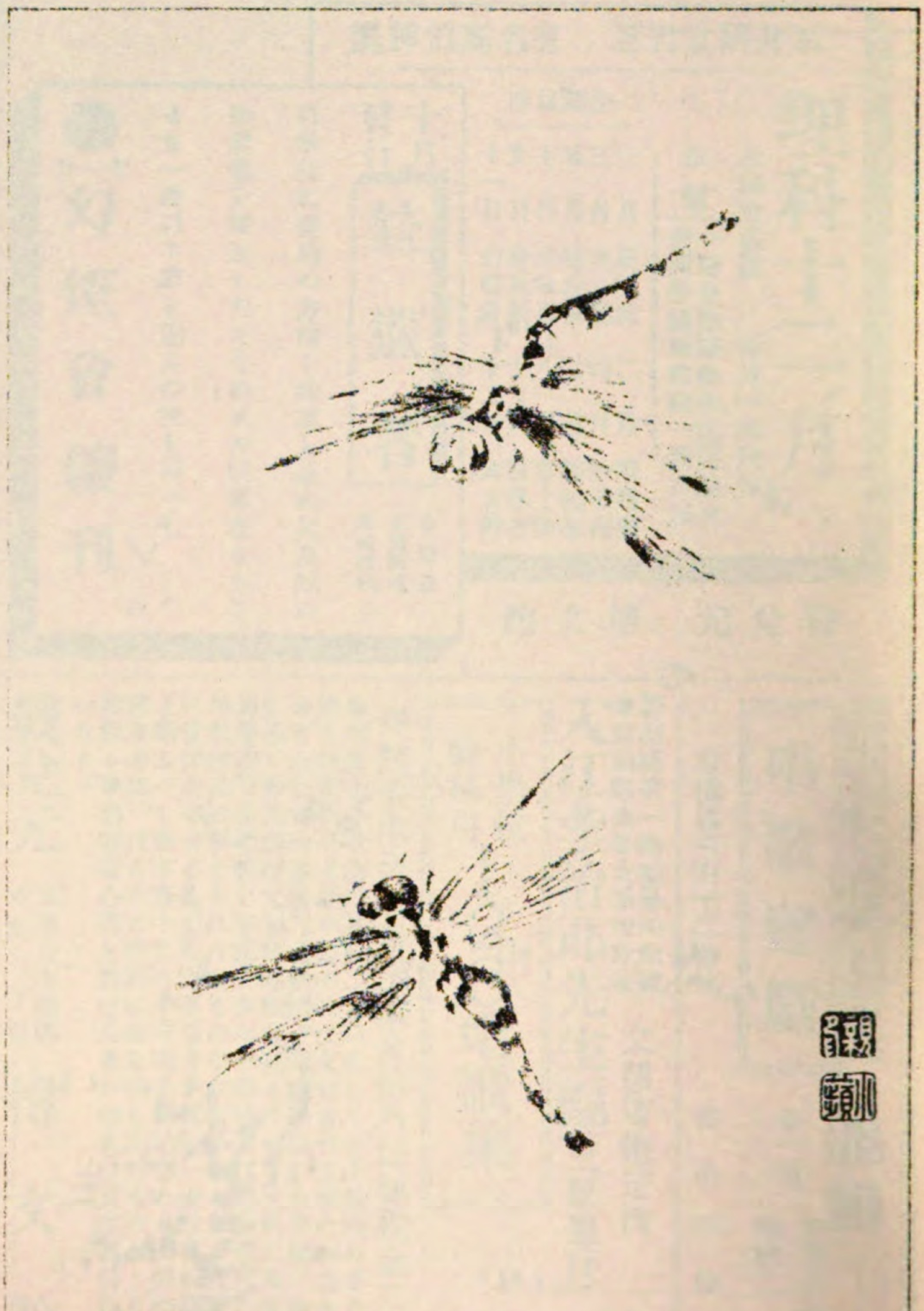
まのよはいつまでなりとも御とめ
おき候後極暑もやうやく此地も
その外冷気に相成燈火親し
むべきよき頃に御座候此上一層御勉
強なさるべく先生の教をまもりつゝ
の稽古よく〳〵かしこ



野口小蘋女史筆

野口小蘋女史筆





野口小蘋女史筆



野口小蘋女史筆

最も信用ある
最も正確なる
當用日記懐中日記發兌廣告

（丁の二）

明治三十五年 當用日記

菊判形四六判形は紙數各五百四十頁菊半截形紙數五百二十餘頁
御注文は必前金

當用日記 五種

菊判大形 特製（舶來洋紙背皮美製金文字入）……正價金六拾五錢 郵稅拾四錢
菊判大形 上製（舶來洋紙總クロース金文字入）……正價金五拾錢 郵稅拾四錢
四六判形 特製（舶來洋紙背皮美製金文字入）……正價金五拾錢 郵稅拾二錢
四六判形 上製（舶來洋紙總クロース金文字入）……正價金三拾五錢 郵稅拾錢
菊半截形 上製（舶來洋紙總クロース金文字入）……正價金三拾錢 郵稅八錢

明治三十五年 懐中日記

全壹冊毎月の初めには年中行事遊覧案内食品月令等の記事便覧依例材料最豊富御注文は必前金

特製……（表紙厚薄二種舶來洋紙頗美本 總クロース金文字入紙數二百八十頁）　正價金拾八錢　郵税四錢

並製……（表紙厚薄二種上等洋紙表紙 摸造皮金文字入紙數二百八十頁）　正價金拾二錢　郵税四錢

弊館出版の當用、懐中各日記の正確堅牢にして實用に適するまた多言を要せす今回用紙印刷體裁製装に至るまで尚一層の改善を加へ懐中日記は從來の厚表紙の外に屈折自在の薄表紙製を案じ又當用日記に新たに菊判大形の分を創製し且當用日記には中央氣象臺技師和田雄治君の調査に成る全國氣候一斑を掲け各月の溫度天氣晴雨等の豫測に便す之を舊年の日記に比すれば材料の愈よ豊富なると記事の愈よ精確なること江湖坊間の日記と同日に論すべからす請ふ續々御愛購あらんことを　（十月上旬製本出來）

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（丁の三）

女學世界
第壹巻　第拾三號
明治三十四年十月五日發行
紀元二千五百六十一年　西暦一千九百一年（辛丑）

論説

家内經濟の整理

法學博士　添田壽一

元來一家經濟の歸する所は、自營自足に在るのであります。所謂天然の分業に依りて、男子は外に在つて自己の業務に從事し、女子は内に居りて、家政を整理すべきものであります、けれども、一家の需要は成るべく戶内にて充足するやうな策を取らなければなりません。斯の點から觀察すると、婦女は内に居て、掃除や、裁縫や、洗濯や、料理や、兒童の教育

や、奴婢の監督や、來客の應接や、出納の記帳等、要するに家政の整理に從事せねばならぬやうな譯であります。けれども之と反對で、或は少額の賃錢に迷ふて工場等に這入つたり又は世上の事に奔走して家政に怠つたり、子女の教育を忽せにしたり、衞生や、清潔法等を等閑にしてつまり一家の幸福を省みないやうなことがありては、大に婦人たるの本分に反し、且得失決して相償はないものであります。苟にも一家の主婦たる地位に立ちて多くの人を使用しやうと欲へば、兎に角使用せらるゝものゝ地位に立ちて、僕婢の監督、驅使共に宜しきを得る樣に心掛けねばなりません。就中多數の冗員を使役ふのは、大に注意せなければならぬ。冗員の淘汰は一國の經濟に於ても必要であるが家計上に於ける其必要は殊に大きいものであります。而して自營の原則から申せば、家内に於ける需要はなるべく外部に依賴しないやうな方針を取らなければならぬ。例へば饗應や、遊戲のやうな事も家内に於て家内同志で之をやるのが一番の利益であります。總じて家政の眼目とする處ろは費ふ所をなるべく少なふして、得る所を澤山にせねばならぬ、そして一家をして成るべく經濟の根據、快樂の淵源、幸福、德義の涵養所たらしむにあります。

扨て分業の原則を家内經濟に及ぼすときは、一家の主婦自ら綿布を織るよりは、之を購入

するとが利益の樣であります。けれども若しも家婦が機織に費す時間を徒費して、一物をも生産しないばかりか其の上無用の浪費を爲すときは之を一家から云ッても、將た亦國家の上から見ても、生産の增加とはならないで唯消費の增加を釀すのであるから大なる損失が生じます。故に家でこしらへるのと購買品との得失問題は、輕々しく斷言することが出來ません。

今女子に關する事務の中で、衣食住に關する要件に付いて、少しく述べよふと思ひます。衣服の調製は外觀や流行に關はらず、廉價くして久しく耐えるのが肝要でありますと共に又活動に便利なる樣にしなければなりません。そして屢々洗濯を爲し以て衞生に適するやうに努めなければならぬ。本邦のやうに徒らに衣服の美を競ひ、就中絹布を徒費するのは至ッてよくない事であります。甚だしきは衣服の損傷のを憂ひて、之が爲めに却ッて身体の活動を避けるものがある、其の愚かなる事は實に笑ふべきの至りであります。若し今内國で浪費する絹布類を生糸の儘でか、又は更に製造して、外國に輸出したならば、其利益は實に莫大なものであらう。

次に食物の撰び方は廉價にして、淸鮮なるのが肝要で、分量よりは滋養に富むものを採用

し、そして調理、調合、利用其宜しきを得せしめなければなりません。

次に住所は空氣の流通が宜ろしく、内外とも清潔を主とせなければならぬ。亦高燥にして、日光の注射を十分ならしむるのが必要であります。

其次に必要なのが日用品の購入法の注意であります。今日一般に行はれてゐる通帳取引の方法に依るときは、皆掛賣であるから、購入者は決算までの利子に加ふるに、中には正直に拂はぬ人の分までも分擔せしめられて、結局高いものを購入する譯になります。さればなるべく一家の主婦たるものは自ら店頭に就いて、現金で以て低價に買入るゝやうな習慣をつけたいものであります。其他數人共同して、日用品を卸賣價格で購入る組合を設けて、その組合員には極めて低價く販賣し、組合外のものには市價で賣渡し、決算上に生ずる所の利益を分配するやうな方法を設くるなどは有益なことであります。(未完)



家庭



島津家の家庭教育

舊薩摩藩主、島津公爵家に於ては、今回新たに西洋より家庭教師を聘して公達の教育を掌どらしむるととせられぬ、目下時勢の變遷に伴ひ、子女の教養に就ては一段の注意を要するの秋、島津家が他の華族社會に卒先して家庭教育の上に此の一新生面を開かれたるは頗る英斷の事にして又前途有望の事ならんと信ず、依て此の事に與つて尤も盡力せられたる某貴顯を其の官邸に訪ひ、實際の成蹟に就て聞く處ろあり、本篇は即ち其の談話にして記者の筆記したるものなり

(一)家庭教師の招聘に就て

元來島津家に於ては極めて古しより家庭の教育といふ事に就ては餘程重きを置かれたもので、今日に至つても家庭の教育は十二分に備はつてゐる。けれども今回は聊か時勢の變遷に伴ふて今の御子達が此處十年か十五年先の世に立たるゝ頃には又世の中も餘程變つて來るであらう、それ故、現今よりは多少進歩した空氣、即ち新らしい文明的の素養を御受けになッたならば、他日世間に立たれた折り、一身の仕末はいふまでもなく、聊か世益の爲め、又國家の爲めにならうといふ事で、當主の伯父君に當る島津忠濟公、後見人の島津男爵(珍彥)其他薩州出身先輩の松方伯、大山侯、川村伯などが大に協義を盡されて、そこで新らしく家庭の教師を招聘して、それにこの御子達をつけたらばよからうといふ事になッたのである。

公爵家の公達といふは當主忠重公を始めとして先代忠義公の令息等五人、年齡十六歳より七歳まで

それから其の教師はどんな人がよからうかと、其の雇入方に就ては私が擔當してやる事になッたが倩と考へて見るのに、日本の華族に外國人の教師を招聘して其

の家族と一所に生活させるといふ事は、後にも先にも此度が始めてである、それゆえ其の教師を撰ぶに就ては十分に注意を加へなければならぬ、そこで私は當時英國の代理公使ホワイトヘッド氏夫婦に依頼した、すると同氏が一切引受けて周旋をしやうといふ事になッたそれに就て一言して置たい、親切と厚意を以て此の勞を執られたる代理公使夫婦は英吉利ではまづ身柄の有る方で、夫婦の間に子供がある故、其の子女の家庭教育等に就てはなか〲經驗があるのみならず、實際斯かる事には十分注意してゐる人達であるから其人に諮つてやつたのである、

扨て其の教師を雇ふに就ては、ホワイトヘッドの夫人の姉さんに當る、レ、チー、ビックといふ人、これも隨分身柄のよい人で、倫敦の社交場裡に立つて廣く交際する人だが此人が早速尋ね合はして呉れられて其の候補者が三名程あッた、其の中の一人が、ミス、ハーウォルドといふ人、此人は一と通り子供の教育に經驗のあるのみならず、曾て獨逸の帝室に居て現皇帝ウエルベルム陛下の御子樣達の世話をした人で、餘程上流社會の御子達の教育と、その生活には熟練した人である、斯る人を招聘して御子達の教育を司どらせたならば間違はあるまいといふので、即ちミス、ハーウォルド夫人を招く事にしたのである。

家庭生活の模樣

現今島津家には當主忠重公（滿十四歲と十一ヶ月）次男富次郎君（男爵滿十歲と五ヶ月）三男諄之介君（男爵滿八歲と十一ヶ月）四男韶之進君（滿七歲と八ヶ月）五男陽之助君（滿六年と八ヶ月）の五名居られこれは皆兄弟である、扨て家庭生活の模樣はなか〲規則正しいもので。

〇起床　午前六時

〇朝餐　同六時半より七時の間、それ終つて學習院へ通學するまでの間英語の稽古

〇運動　午後學習院よりの歸邸は不同なれども大抵二時より三時までの間にて一同歸來の

後三時より午後の茶を催ふし、二十分程經て其の日の都合により、天氣快晴ならば庭前に出で〻運動、又雨天の際は室內にて種々の遊戲を催ふす、それより復習のある向は復習、復習のなきものは再び教師の手に就きて談話、或は英語の讀本又は其他に從事すると

○晩食 午後六時を以て晩食とす、扨て其の食事に就く前には必ず顏を洗ひ、髮を梳り、總て衣服を掃除し行儀正しくして食事に就く

○遊戲 晩の食事了るや、暫時にしてそれ〴〵遊戲を爲す(勿論小兒の年齡に應じて差別あり)奏樂としては洋琴を彈じて唱歌をなす、即ち所謂精神の壯快を感ぜしめるやうな習慣になッてゐる。

○就寢 それより三十分乃至四十分經て再び勉强し、年齡の長幼に依つて七時より八時までの間に入浴して寢床に入るに定まれり、

これがまづ實際の模樣である、それに就て玆にまづ歐羅巴の貴族社會に於ける子供の生活の有樣を一寸申して置かう、これは所謂模範的小兒養育の仕方といふても宜からう

歐洲上流社會の小兒生活

▲入浴及身體の洗淨 毎日一回とす、朝なれば眼覺めたる時、夕なれば床に就く際に之を行ふべし、冷浴は朝に於てす、冷水浴には石鹼を多量に使用すべからず故に一週間に二回は床に就く際多量の石鹼を用ゐて温浴を爲すべし、頭部は一週に一回石鹼及び温湯にて洗ひ、且つ爪を清潔にすべし、齒は毎朝齒磨粉を用ゐてブラシにて磨き、又毎夕齒磨粉を用ゐずして齒ブラシと水のみにて磨くべし、手は食事前には其都度必らず石鹼及び爪ブラシにて洗ふべし、又寒天には皮膚のわれざるやう床に就く前グリスリンを手に塗抹すべし、又兒

童の耳の内部は充分清潔に爲し置くやう特に注意せざるべからず、又齒も格別に注意を加へ三ヶ月中一回は齒科醫の診察を受くること必要なり

▲兒童の日課　歐羅巴に於ける六歳前後の兒童の日課は午前七時起床、冷浴を爲す、（溫浴なれば夜分に行ふ）手、顔、耳、頸、腋下、並に股の間を石鹼にて洗ひ、齒を磨く、朝飯は八時にして九時より十二時まで運動、此の運動といふは玉乘、綱曳、綱飛競爭等なり、此の時間中二回程放課、十二時より一時まで遊歩、了つて午後一時に於て午餐す、食後半時間手慰みをなし、又玩具を弄ぶ、午後は二時間半遊歩して五時に茶を喫す、夕景七時より再び遊戯をなし、又觀畫、及び唱歌をなし、斯くして七時三十分までの間に床に就く、尤も床に就く前ビスケット或はベタをつけたる麵麭の片等と共に牛乳を與ふ（牛乳は冷溫何れにても宜く）若し好みによりては又は學校へ通はざる生徒ならば、定時の間に遊歩をなさしむることを得、又十二時より一時まで仰臥せしむ、是は六歳の兒童に多く行ふ所なり、何となればかくして脊髓を壯健にし且つ猫背を醫するの法又七八歳の兒童は八時に床に就くことを得、且つ晝間若干の少時間内兒童を仰臥せしむ、是又其身體を眞直に爲し、且つ其成長を助くるの良法と爲すなり、八九歳の兒童は常に一週に三四回、冬期は蹴鞠、夏時は打球を爲し又は之を爲さしむ、而して水曜日及び土曜日の半休日に甲乙の學校相對して蹴鞠、又は打球の競技を爲す、是は兒童の競爭心を惹起さしむるが爲めなり、又兒童は一週に一回歡待保養の爲め外出し、動物園、博物館、又は郊外へ遠足せしむ、兒童は成べく郊外に居らしめ、夏時は郊外に於て喫茶をなさしめ、又は課業なき時には園内に於て遊戯を爲さしむ、

＊　＊　＊　＊　＊

歐羅巴に於ける貴族社會兒童の生活はまづ斯樣な有樣である、その外食事のこと又家政の事などがあるけれども、是れはあまり規則正しく今日の日本では一寸行はれないから、別に精しくは申さないが、右の時間等は何とか日本でも應用すれば出來やうと思ふ、穴勝ち貴族

の家族でなくても通例中等以上の社會に於ては實行して宜しからうとおもふ。

家庭教師と兒童の薫陶

世上の事は如何ほど其の形式が能く整ふてゐて、表面が立派であるといふても、實際の効力がなくてはつまらぬものである、然るに今回此の家庭教師を招聘して御子達の教訓方を委ねてからの成績は著るしく實際に顯はれて參つた、教師もこの所謂訓練薫陶に付ては餘程手馴れたもので其の始め、御子達も未だ英語が解らず、教師の方でも全く日本語を知らず、双方共に言語不通であつた、それゆえ通辯を置かなくてはなるまいかと云ふ話はあつた、所が〻を置くは巨し悪しである、教師も通辯に依り御子達〃通辯に依るやうなことでは語學の發達の上に於て如何と思ふから先づ通辯なしにやつて見やうと云ふことに話が纏まつたのである、互ひに談話が自由になれば此方の斯くまでに御心配申して居る事斯くまでに注意して居ると云ふことを能く御子達に知らしめてさうして御子達の同情を得て親愛の情を生ずるやうに致すのは言語の力である。言葉が通ぜずしてアレだけ御子達が馴付くやうにしたのは多年の經驗に依る外にはない、今では餘程能く御子達も懷いてござる、モウ今日は島津公爵は語學も餘程發達されて大抵な談話には差支ないやうになつた、隨つて其下の御子達も段々英語が御分りになつて、モウ一寸したことは何等の差支もない、これは主として當初通辯を置かなかつた賜であると言つてよい。



次に御子達の内には隨分幼年の方もあるけれど、別に乳母といふものはない、唯教師に付いて居る即ち教師

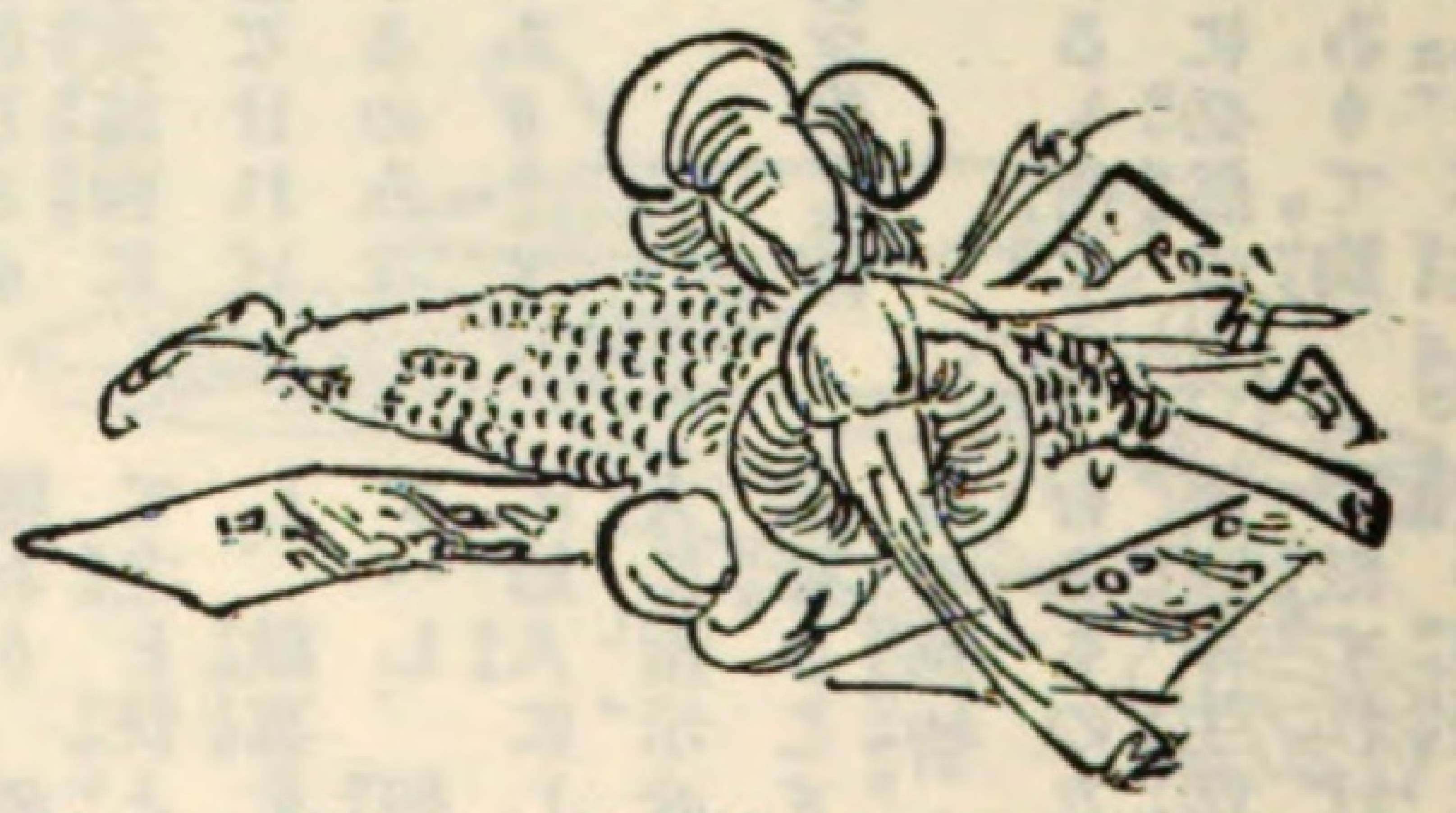
の世話をする女中が一人ある、其女中は御子達の世話は一切せぬ、すべて教師が一人で萬端やつて居る、其他は皆男の御付です、詳しく申せば御子達が學習院に通ふに衣服を二組と云ふもの、チャンと備へてある、靴も其通り、今日御子達が學習院へ着用して行ッた着物は歸られると屹度新しい物と着替ゆる、其着物は直ぐブラシを掛ける、且つ破綻がありはせぬか、釦は何うか、其他又ズボン等に着用に差支はないかとスッカリ改めて若し釦が取れ、或は破綻があれば直ぐ綴てさうしてチャンと掛けて置く餘程それは規則正しいものである靴の如きも又其通りてスッカリ磨上げて置いて、明日出られるときは其着物を着て行く、隔日に着物が變つて行くです、さうして彼の歐洲に於ける家庭の定義にある通り(家庭の定義は最後に詳説す)貴族は貴族の品位を失はぬやうに注意せむければならぬ、又さう御育ちなければならぬ、即ち所謂高尚閑雅の風と、有爲活潑の資を養成するの點に於ては非常に注意して居る、それて學習院に御通ひになるときは無論徒歩である、是までは雨の降るときは人力車と云ふものがあッたが、歩いて雨に少々叩かれたとても病氣になることはないと云ふので一歩進んで雨が降る時でも學校通いは必らず徒歩と極めて居ります。

家庭教育の精神

家庭教師招聘に就ては斯くも幼少の兒童を西洋人に付けたならば、其の感化の及ぶ所ろ遂には悉く西洋化して仕舞はねばよいがといふの話であるけれどもそれには家庭教育の精神がある、島津家代々の嘉言善行といふものがチャンと家に傳へてあッて、之を大成として教師に示して、所謂日本魂と島津家歷史的の精神を失はぬやうにズッと注入することになつて居る、扨てそれは何からその感情を起したかといふと、これは伊太利のサボイ家、其サボイ家では代々の嘉言善行を大成して御幼少の折りは、御附の女、其他の者が丁度日本で御互ひが幼少の際に歷史的のエライことや結構なことを話して聽かされると同じ樣に、子供の心象を啓發せ

しめてエライ事、良い事の眞似をするやうになる、稍く十四五にもなり意味の分るやうになつては事柄を解釋する、丁年以上になられたときには御幼少の折りに與へてある素養、即ち御代々の嘉言善行の話が活動して來る、自分もそのえらい方のやり方を眞似て見たいと云ふ感情を起して來る、取りも直さず祖先の遺德をして、何所までも子孫を薰陶してさうして家門に耻ぢざる行爲を行はしめると云ふ仕組になつて居る、

それから又世間では島津家は守舊的の家だと考へて居る、其島津家が非常な英斷で西洋人を雇つてやる、これには餘程驚いて居るやうであるけれども諸君がよく島津家の歴史を調べて見ると決して異しむに足らない即ち此間　陛下より特に贈位追陞あらせられた齋彬公（俗に之を順聖公と云ふ當主忠重公の祖父さんに當る人）この人などは維新以前に文明的のことを悉く用ゐられた、それから御維新の際に兵隊の中に伍を爲して洋服を着ておつた人は誰かと云ふ今の當主の父、忠義公である、皆當初の精神はさう云ふ風になつて居るのである、それから最終に臨みまして日本の貴族と云ふ上から否唯貴族のみならず、富豪の家にも



この家庭教育といふことに就ては十分愼重してやられたいと思ふ。華族の生活とか或は富豪の家の生活と云ふものが從來兎角左右にはんべる世話役が總てのことを皆手傳つてやるのですが、それが爲に一身上の世話が自分で出來ないと云ふことになる、これば歐羅巴的に云ふと畢竟獨立の精神に乏しいと言ふ事になる、それで第一着手として自導自立の精神を養成することがまづ家庭教育の最も大なることゝ思ふ、それから第二は思ひ遣りの人情に乏しいこれは今申上げたやうに兎角人の世話を受くる慣習になり居る爲め自然自ら思慮を加ふるの觀念に乏しいのである第三は感謝の意に乏しい、即ち始終人の世話を受けつゝあるが故に人の厚意を受けて

も誠に御親切であると云ふことを、我が腦髓に感じて感謝の意を表することが乏しい、此三はどうも注意せなければならぬ、是までのやうに唯一家の中に生存して居るばかりであれば兎も角も、左まで之を改むる必要はないとしても内外人の間に立つて廣く社交場裡に臨むやうになれば今の三點が充分發達して居なければ所謂德望を進め人心を歸せしむること能はざるのみならず己れの身を完ふすることか六ヶ敷いのであります

歐洲家庭生活の定義

此の一節は家庭教育談の參考として歐洲家庭生活の定義を解釋せしとの有益の文字なるを以て之に錄す

家庭とは吾人の知悉せる如く吾人の親愛せらるゝ所なり、吾人の常に同情を寄せられ補助を受けるに必然の所なり、吾人の全く信頼するに足るべきものありて胸襟を開き共に困難苦惱を語り、共に誘惑錯誤を質し、共に快樂歡喜希望を談ずるの所なり、假令吾人の執拗なるあるも他人よりしてある如く苛酷の難詰を受くることなく、假令過誤の行爲あるも寛恕に浴するを得べきの所なり、斯かる感情は自家以外に之を表示せざるに優れるのみならず亦品位を保つに然せざるべからざるなり、自家に在りては全く萬般を天眞に委し得るの特權あり、外部に至愛の情を示し之に感ずるあれば唯以て之を快とし、悲憂を示し之を知るや直ちに同情を表し、歡喜を示すや眷族の之に於ける尚一層の幸福を感ずべし、何等を問はず開放して事を談ずるを得るは單に婦人にして、又他の口端に係る吾人の過失をして吾人に指示せしめ得る者も亦婦人にあり、(之を自覺するは難きことなり)是れ他なし婦人たる者は吾人を愛するの熱情より、温厚篤實此過失を示して吾人に知らしむるものなり、

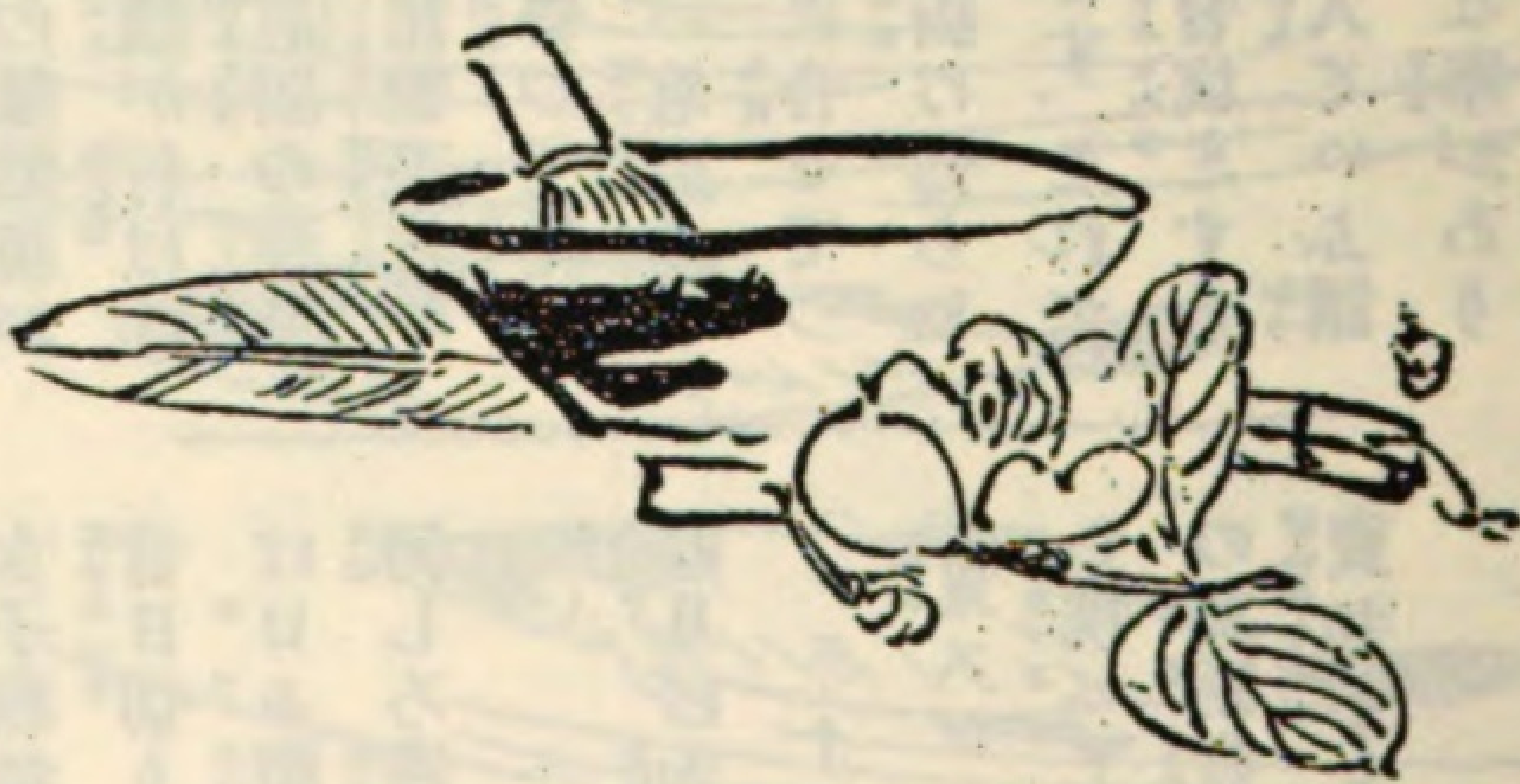
家庭の生活の感化力の如何は男子に付いて之を其結果に徴すれば贅せずして明かなり、豪勇一世を蓋ふたる者の經歷に付いて之を見るに過半は此偉効を奏せしもの、概して之を家庭生活に歸せざるは少なしとせず、抑も家庭教育の薫陶たるや第一に風丰自ら雅致を學び禮讓に移り我慾を押へて他の便安に意を注ぎ深く自己を

戒しめて眷族の上に心を焦し知らず識らずの中に武士(ナイト)の氣風を養成して薄弱なる者を保護し自家の煩悶のことあるに方りてや補助の地に立て同情を寄する愈々切なるに至る、殊に其抑制主力のある所は眷族を顧るの情心頭を去らず又眷族をして悲哀の渦中に落入らしむるを恐れて終生男子をして兇惡の處行を爲し能はざらしむるにあり、蓋し愛情たるや世上に付いて之を見るに最も抑制主力たるものにして吾人の愛情更に切なるときは倍々難に堪へ効を奏するの度を加ふ又社會にありて極めて高潔なる事業を成し極めて偉大なる効蹟を奏せしものは皆愛情に起因せざるはなし

夏季割烹講習 (長野縣教育會)

女子職業學校
割烹科教員 岡野をりに

校長中川先生の御紹介で信州長野教育會長戸野視學官が、同市に開かれる三週間の夏期割烹講習に講師として參るやう御依囑があつたが、土地が違ひ隨て材料がちがふ地方の講習へは未熟の覺束ない事に思つて、一旦御斷り申したが中川宮川兩先生のおすゝめもあつて、一は自分の練習にもと考へ直し八月一日に東京を立て同日長野市へ着した、當日夏期講習會は開會式を擧行されたようで、翌日から直に講習に着手しました、割烹科は本年初めて加へられたので女子ばかり、新學科で珍らしいそのわけでもあつたが、豫期よりも講習生が多く、六十二人の多數で、他科の男子講習生はいづれも三十人に足らず、豫期の數に達さなかつたさうで、まづ女子部隆盛の割烹科萬歳といふ景氣でありました。



△講習の場所

長野市師範學校男子部食堂を用ゐて假講習場としまし

た。間口五間の奥行二十一間、柱なし石疊みの建物で、中央に大七輪二個(長野の七輪は丸形の石です)を据へ俎板は高く立て働かれる樣になつて居る。一躰今日の庖厨はどう改築すべきものか、竈には改良の鐵鑄製が出來、水道は流し下へ引かれる、食品には肉類が行はれ和洋兩食が常食にならうとするには、模範庖厨の建築案は定めしある事でありませうが、東京の諸割烹會からがヤット一二年來開けた今日、どちらへ參つて見ても、ホンの間に合せのこれといふ勝手のよい庖厨はまだ見ませぬ、それだけにどんな場所でも間に合せてつかふ方には慣れて居りますので、完全の庖厨は知らぬ代り、どこでも庖厨にするだけの事は出來ます、それでこの五間口二十一間の石疊みの大建物を講習場とするのは、實に之までにない便利を得て、六十餘人といふ講習生を引うけて、少しも肩肱のつかへる樣な事がありませぬが一つの喜びでありました。井戸は講習場の傍らに大きな車井戸があり、傍に四斗樽四個を備へ、男子の小遣ひが汲み入れてくれました。

△講習の順序、

朝七時から凡一時間、當日献立の説明を別室の敎場で開き、それから實習にかゝる、實習の順序は一ッ橋共立女子職業學校で致して居る通りに、六十人を區別して、當日切り方、鍋方、洗ひ方等それ〴〵部署を定め、これは日々順回りに當る樣に幹事が名札を掛け直される、何しろ廣いのでこの部署もよく屆きました。

△器　具

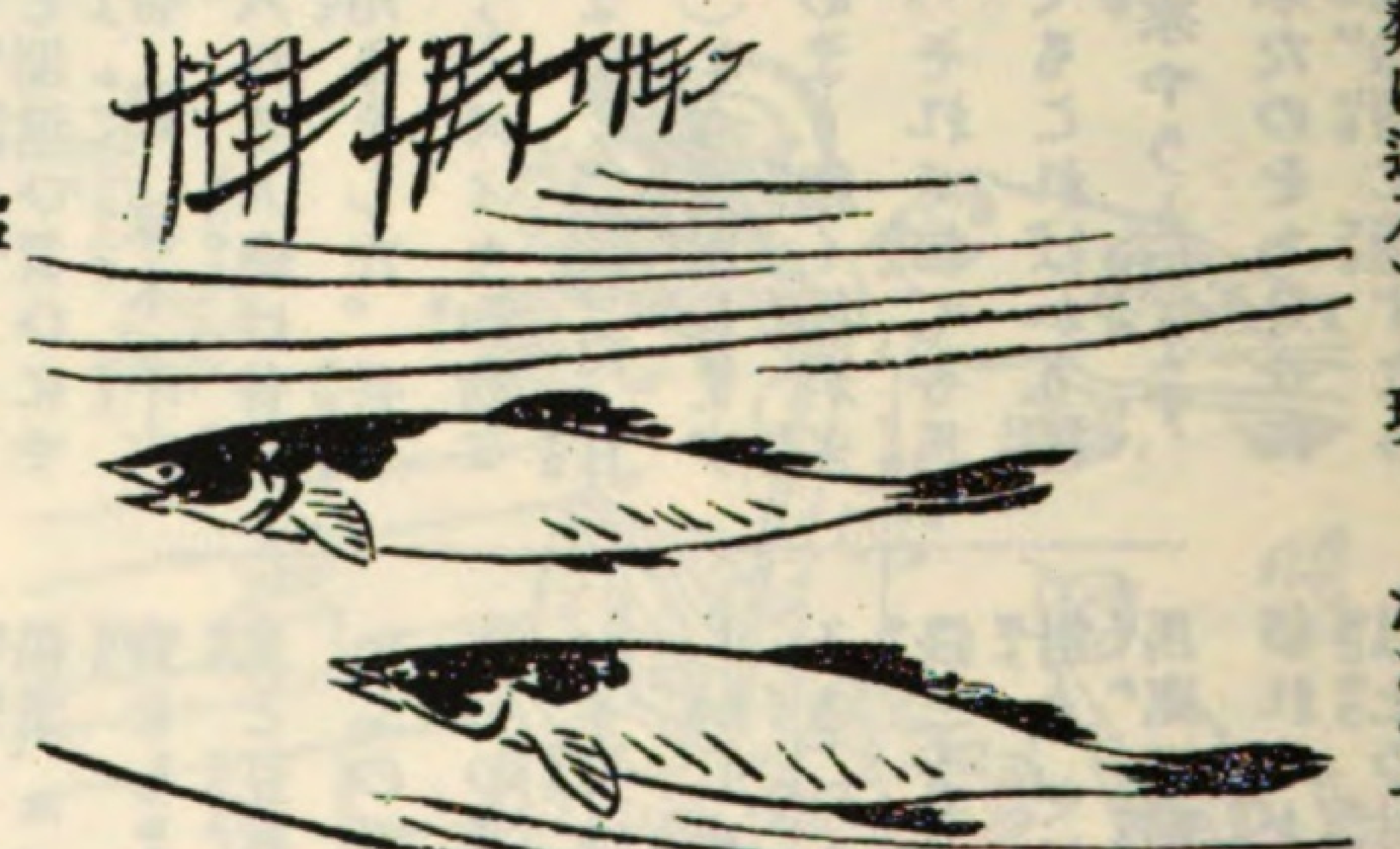
器具は大概長野で整ひましたが「テンピ」「ハースパン」「フライパン」「パン皿」「玉子泡立器」「押し枠」「煮笊」「鬼スダレ」「海苔卷スダレ」「引筒」などは豫じめ東京から携へて行きました、後の話ですがこれ等は講習末日の茶話會の時、敎育會は鬮引て(望人が多かつたので)賣却するとにした、一つも廢物になりませなんだ。

△材料及實費

土地がちがふので原料が違ふであらう、未熟の庖丁のどう應用していゝか、それが第一に心配でありましたが、さて參つて見ると、それよりは寧ろ材料が乏しいの

が誠に心配でありました、材料に富んだ東京さへ夏季はすくないところへ、山國の信州の夏季のそれは甚だ少ない事でした。尤も越後から多少魚類は這入て、現に初一夜止宿した犀北館（長野一等の旅店との事）では、椀に車海老（皮ぐるみつかつてありましたには少々驚きました）が用ゐてありました、しかし越後からの魚類は大概割烹店又は旅店へ分配されますので、講習會から注文して得やうとしても思ふ樣なものは得られず、且つ講習費用があまり多額に上るのは元來日用家庭料理が目的の講習にはあまり望ましくないので、一層材料に究しました。

十六日間の講習中に、「魚類」は鯛を一度、甘鯛を一度、章魚一度、鯖一度、鯉（これは多くあれど風味わるく矢張高し）一度を用ゐたぎり、たゞ秋季に魚の出た時に用ゐ得られる樣の割烹法は口述に止めました



「阿羅」といふ魚が最も多く、これも越後より這入るのだそうて、丁度季節の何にも箇にもこればかり用ゐました、阿羅と申す魚は初めて用ゐて見ました、昆布鮨照り燒、ボイルなど手あたりに使用しましたが、風味のわるい事はありませぬ、この外魚類は何もつかふ事が出來ませなんだ、「肉類」は罐詰ものをつかへはこれもありましたらうが、費用が嵩むので、手輕くあるもの丈を用ゐ、牛並肉、鷄肉の二種の外なく豚肉は夏季は得られぬかしてないのに困りました。講習會の慰勞會に市中の洋食店で饗應をうけましたが、洋食店でさへ魚はつかはず、豚のハムが珍らしく、あとは牛肉と鷄肉ばかり、玉菜萵苣がないので、洋食店でさへ用ゐて居ぬくらゐ。「蔬菜」胡瓜、白瓜、茄子、南瓜、牛蒡、葱、人參、蓮根、里芋、茗荷ぐらゐ、大根は

大きなのは固くて庖刀がつかへぬくらゐ、土地の大根は至て細く長二寸五分位、これが澤菴漬にもされて居る、風味は別にわるくはないが、迚もムキものなどの細工は出來ず、私は初めこれを新甘藷と間違ひ買ひにやつて笑はれました。しかし初めに銀杏、鏡、算木、千六本、カツラはこれでむき、又シチウへ入れる人參は普通のものゆへ菊形などは人參でむいて用ゐました。長芋がなく、百合もなく、慈姑なく、根芋なく、ズイキ和物などいふうまゐ物を拵らへる事が出來ませんでした、甘藷は善光寺の盆の花市（八月十二日夜）から賣出しますこれは生靈棚へ飾るので、食用にはあまり細く筋が多すぎます。馬鈴薯は實にとく出來ます、それで何でも馬鈴薯を用ゐます、私の居た下宿などでもこればかり種々に用ゐて居ます、玉菜も作つたら出來やうと思ます、横田書記官のお宅で農事試驗場で出來たのをお見せになりました、寒國のこう林檎に適し、馬鈴薯に適すなら玉菜も赤茄子も北海道同様に屹度出來るでしようがまだ常食に開けぬからと思ひます。「乾物」は一通りありますが、キントンをつくるので勝栗を探させましたがどうしてもありませぬ、水善寺海苔の南部アラレのといつたところがあるまゐと思ひ、豫めこの二種外に紙湯葉、スダレ麩、三州味噌などは東京から持つてゆき重寶をしました、先づ材料はこんなもので、そこで玉子と鳥と豆腐を多く用ゐました、玉子小粒一個二錢五厘といふのでこれだからとて東京に比して高いとも安くはないのです。西洋林檎は季節の安く澤山得られたのでパイ又はベーキンアツプルなどに用ゐて重寶でした。しかし市中の洋食店ではパインアツプルの鑵つめを用ゐる、珍らしいといふ上からでせう。醬油は一升二十五錢三十五錢四十錢の三種の四十錢のはたゞ鹽がからい計り、それで中物をつかひ、味淋は赤いのばかり、酢は馬鹿に割がよく利き、總菜ゆへ構はず用ゐましたが、いづれも上等の用にはつかひにくいものでした。

以上の材料で日に五品づゝ（肉類二種、蔬菜二種、菓子一種）調製しました、献立は一々こゝに略しますが、それで實習費は日に最低十一錢の最高二十二錢（お鮨を

作つた時)大概十五六錢見當が多かつたのです。十六日間で凡そ口述の分とも八十種ばかりの講習をしました。秋季で材料の豐富の時であつたら、まだ多くの講習を得られたらうと思ひました。

△講習生の種類

講習生六十人は過半長野の中以上の方達ながら、一寸年齡、身分、家庭などが不同であつたので、(長野女子師範學校生徒 其他地方高等女學生)隨つて一口に日用常食といふても吾家の標準が聊かちがふかに思はれ多少斟酌が費されました、笑ひ事にして嘲るのではありませぬが、一例を示せば「口取」といふものをまだ知らぬ小女があつて、隱元豆のキントンを煑ると、味噌豆を作るのと誤解され、そんなに煮たら味噌臭くなるべいと氣遣はれ、一塲の笑ひを招かれるなど、こういふまだ地方そだちの小女と、多年東京にて女子師範學校其他女學校を卒業された夫人達の混じ居られたのです、もし餘暇があつたら、兩組ぐらゐにわければよかつたらうと思ひました。



△信州特種の食物

蕎麥は名物でありますが丁度夏季で、新蕎麥の佳味は得られず、小麥饅頭(おやきといふ)は盆の十四日の朝家々で作ります、小豆の漉し餡は普通だが、茄子を賽の目に切り、油でいため、味噌で煮て之を中味に入れたのがある、又菜葉をきざみて味噌で煮たのもある、味噌餡といへば普通に聞えますが、なれぬ舌には一寸食しにくゐ、それから又信州の名物に「蜂の子」があるといふので、聞ましたら長野にはなく、上下伊那の間にあるよしで、こゝでは鑵詰も出來る。戸野先生のお話しに中には羽根の出かゝつたのも食すと。戸野先生から鑵づめ一箇をいたゞきました。

△閉會

八月二十日閉會して、證明書を附與しました、講習には山本しげ子（高等女學校敎諭）が敎授を助けられ、山路夫人鳥羽夫人が幹事として會務を整理され、戸野會長の監督の下にすべて首尾よく終了しました。こゝに末ながら會長はじめ滯留中の懇情を賜つた皆々樣へ謝辭を述べます。

この記事は中川宮川兩先生及び井上老先生への報告のつもりで書きましたのを、御依囑にまかせ貴雑誌へ送り餘白をふさぐ事にしました。

素人 看病法

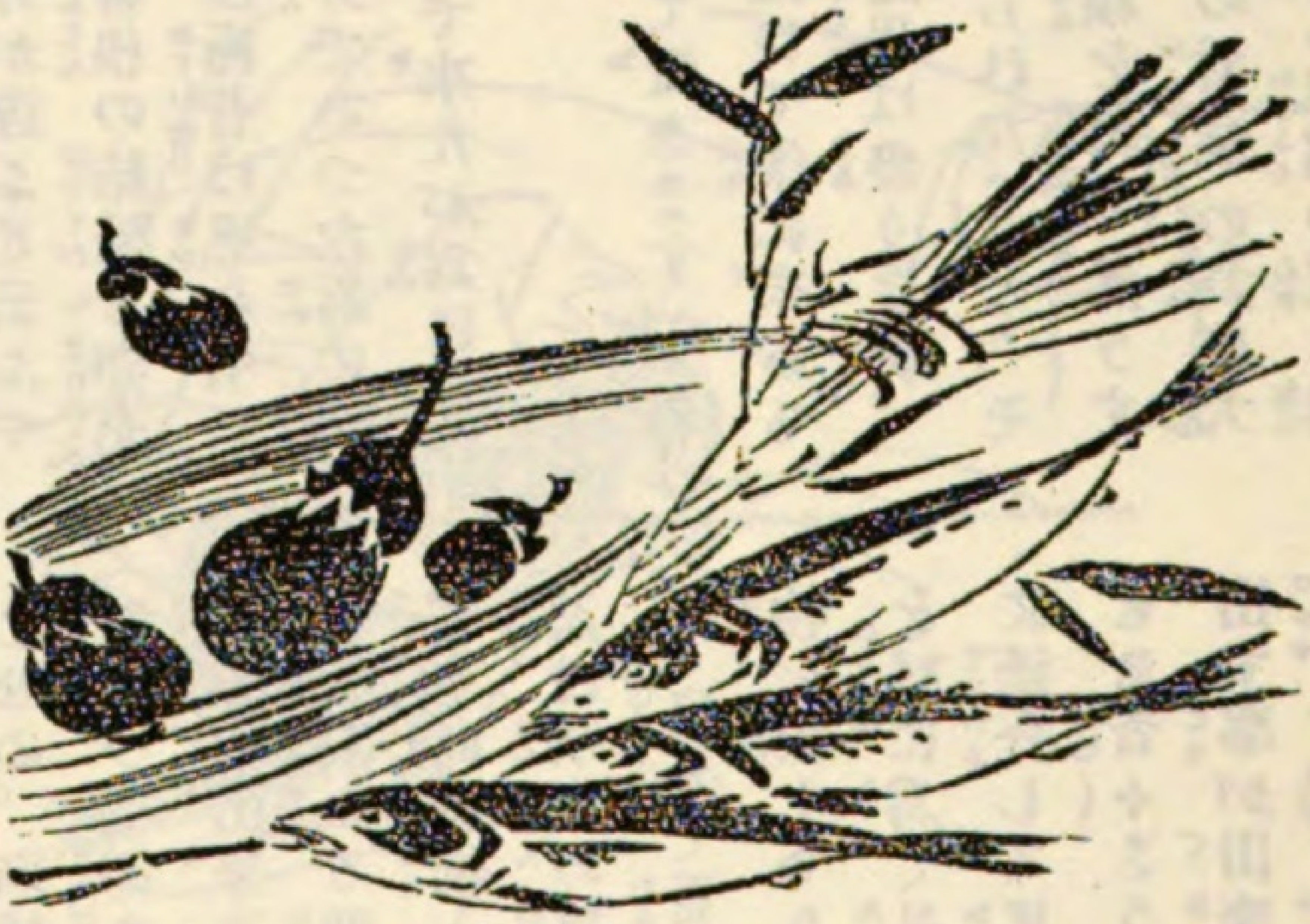
淑德女學校講師 醫學士 佐藤恒久

一般の心得

古い諺に「陰德あれば陽報あり」と云ふ事が在ります。是は佛敎の所謂因果と申す理屈で、善根を施せば、其報いとして遂に幸福快樂の境に達すると云ふ事で。何人も此幸福快樂を得度いと云ふ考はありますが、其原因となる善根と云ふものを施すには什麼云ふ方法で以て如何なる善根を施すが宜いかと云ふ事は一寸定め難い事で在います。其故に善根を施し度いと思ふ人があつても、一寸には之を施す事が出來ない。勿論善根にも色々種類がありまして、例へば人に金を施すもの一の善根、又人に學問技藝を敎へると云ふ事も一の善根。其外多く此善根の種類が在ります。然うして其善根の中で最も良いものは何であるかと云ふと、是は病人を看病爲て遣る事であらうと思ひます。何故かと申すに病人は不幸中で最も不幸なる人で在りまして、現在病に罹つて惱むで居り、便る所の者は、之を世話を爲る人だけで在います。斯程に不幸なる病人の看病を爲ると云ふ事は、善根の中の最も善根であると云ふ事は、判つた事と思ひます。又看病は貴賤貧富老幼に拘らず、何人にも出來る事で、例へば人に物を與へることは、貧乏人には出來ぬ、けれども、看病は何人にも、何處でも、何時でも、何人に向つても、出來ますから、善根中の最も

自由な、而も立派な善根である。看病を致しますには、隨分穢い事も爲ねばならぬと云ふやうな譯で、昔は之を下賤の者の爲る業と心得て居つたものが多い樣ですけれども近頃では畏れ多くも　皇后陛下を始め奉り、貴婦人の方に於ても、大に此道に力を盡さるやうに成りました譯で、決して下賤の者の爲す業ではなくして、却て中流以上の人の爲る業の樣になつて參りました。其故に我々は是非とも自分一個の爲、或は一家族の爲、又大きく云へば國家の爲に、此看病を施す法を知らなければならない。斯樣に看病法と云ふものは、大切なものと思ひますからして、私は自分の淺學をも顧ず、玆に其概略をお話爲る事に致しました。

先づ看病法の歷史に就いて一寸お話を致しますると、凡そ何時頃から此看病と云ふものが出來たかと申すに



是は人が此世に生れて來ますれば、其人の死ぬる時には必ず疾病があつたに違ひないと思ひます。疾病がある以上は其人の子孫とか親とか或は同胞とかに當る人が必ず其病人の世話を多少は爲たものと思ひます。是は人情で在いますから是非とも然うあるべき筈で在ります。して見ると看病の最初の起りと云ふものは、人類が此世に出來た時でありまして、實に古いもので、其古い時代から今日まで段々傳はつて來たものに違ひない。併し昔の看病と云ふものは、極く單簡なもので、それは只病人が喉が渇くと云へば、水を遣り、或は腹痛の時には之を押し撫ぜて遣り、頭痛の場合には擦つて遣る、と云ふ位のものであつたので在いまして、什麼云ふ樣に爲れば功能があり、又は害があると云ふやうなむつかしい事は知らなかつたのであります。其故に此時代に於ては看病と云ふ善

根も極めて單簡であつただけ隨ッて看病を爲れた人の得る幸福快樂も從つて不充分でありました。けれども其後學問が追々開けるに從つて、看病の事も複雜に成つて來まして、病に從つて看病の仕方が違ふと云ふやうになつて來ました。併しながら其善根の結果も亦充分に成つて來たので在ります。例へば極昔は風を引いたと云ふ位のものも、其看病が不充分であつた爲に死んだけれども、當節では看病法が進むで來たが爲に、其樣な病人が助かるやうに成りました。

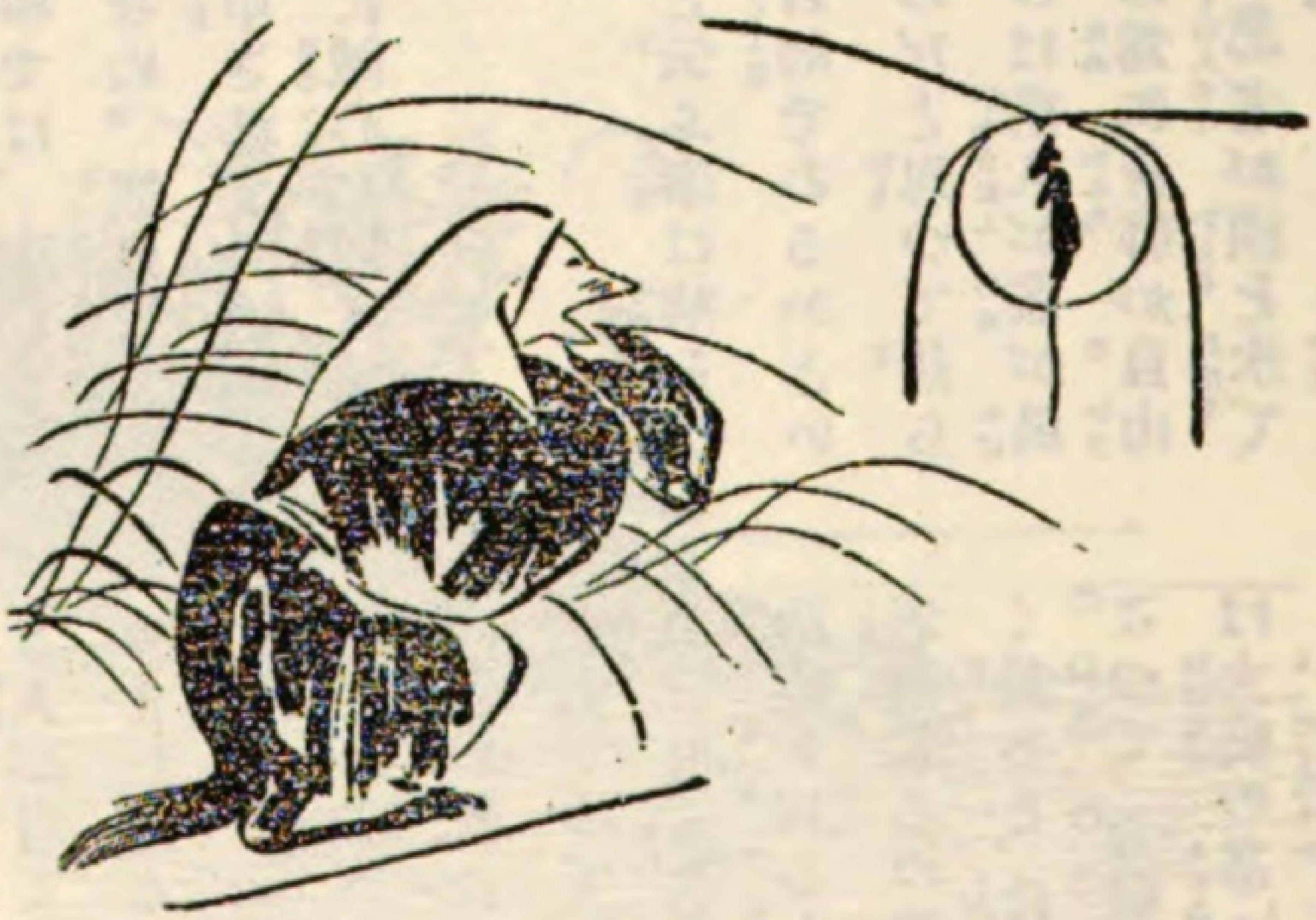
この幸福快樂の事に就て今一言申して置きますが、幸福快樂と云ふものは看病を爲て暫く經つて後に來るものかと云ふに、然うではない、直に其結果は參ります。例へば諸孃の親御さんが病氣にかゝられたとして、それを諸孃が看病を爲る、即ち其所で善根を施す、然うすると其善根を施したが爲に、即ち諸孃の看病の爲に大切な命を取り止めた、と云ふ其時が即ち幸福の域に達したのであります。

併し斯樣な幸福快樂を得るには智識と熟練とを以て土臺と爲た所の看病法を知つて居らなければなりません。憖の看病で以て充分の結果を得たいと云ふのは、蝦で鯛を釣ると云ふやうな事で迚も出來る事ではありません。斯樣な立派な看病を自分の經驗と自分の發明に依つて即ち獨習で編み出すと云ふ人が在います。是は強ち出來ない事では無い。利口の人で。多くの病人を看病する間に、看病の呼吸を得るのでありますけれども此獨修と云ふ事は、其間病人に不便を感せしめ、又は病人の害となる事を爲る事が多い。何故かと申せば、自分で看病法を發明するのであるから、丁度暗闇で物を探すやうな譯で、一人の病人に對しても色々の事を試に爲て見なければならぬ。其爲た事が丁度其病人に適合して思つた通りに行けば、大變に仕合であるけれども皆々さうは行かぬ。又縱令此獨修で看病法を編み出す事が出來ても、其目的を達するには非常に年月を費す。殊に看病中の沈着と云ふ事と確實と云ふ事は最も肝要の事で在りますが、此二を得まするには、多くの年月を經なければならぬ事で在りますから、縱令自分

で看病法を發明爲た所で、三年や五年で以て充分のものを作り出すと云ふ事は到底望まれない。

○沈着と確實の事

尚茲に一寸看病中の沈着と云ふ事と確實と云ふ事に就きお話して置きたい、是は縱令看病法を修得した人でも、實地に就いて始めて修得し得るものであるから。患者が看病人を信用爲ると爲ないとに就て大變な關係があります。例へば諸孃が病氣になられても、同じく極慣れた、什麼な事があつても狼狽しない、即ち爲る事爲す事總てキツパりと確にやつて呉れる看病人と、又一つは無闇に騷いで、一寸の事にしても手が震へると云ふ樣なものと双方を比べると、勿論初の方を信用爲るに違ひない。それですから、此沈着と確實と云ふ事は、看病法中の主眼でありまして、之れを得れば立派な看病人に成れるのであります。即ち實際に就いて段々練習して行くより外に仕方か無い。



○甲斐あるやうに看病せよ

「凡そ看病を爲すには看病を爲たる甲斐ある樣にすべし」と云ふ事が在ります。是は唯義理づくで看病を爲るのでは無いから、看病を爲るならば、此病人の不幸を救つて生き返るものならば如何樣とも手を盡して生命を取り止めて遣りたい、と云ふ本心を以て看病を爲なければならぬと云ふ事であります、斯う云ふ本心を以て看病をすれば、縱令其病人は死んだにしろ遺憾はない。又幸にして生き返れば、其誠實を以て看病を爲た甲斐があるので、其時始めて良結果を得た事になります。それを唯世間躰とか何とか云ふので看病爲るのでは其目的が違つて居る。例へば今茲に一人の病人が在りまして、餘り看病は爲度

無いけれども、見舞に來る人の手前餘り捨てゝ置く樣では耻しいからと云ふので客の居る其時だけ枕邊に据つて勞はる樣に觀せ、客の歸つた後では直く打遣つて置いて自分は遊びに行くと云ふ樣な事では、決して病人に對して看病を爲るのではありませぬ。然う云ふ心持で看病を爲るのでは無論善根とは申されませぬから何所までも看病を爲た甲斐の在る樣に誠心を以て爲なければならぬ。

○病人と醫者の手つだい

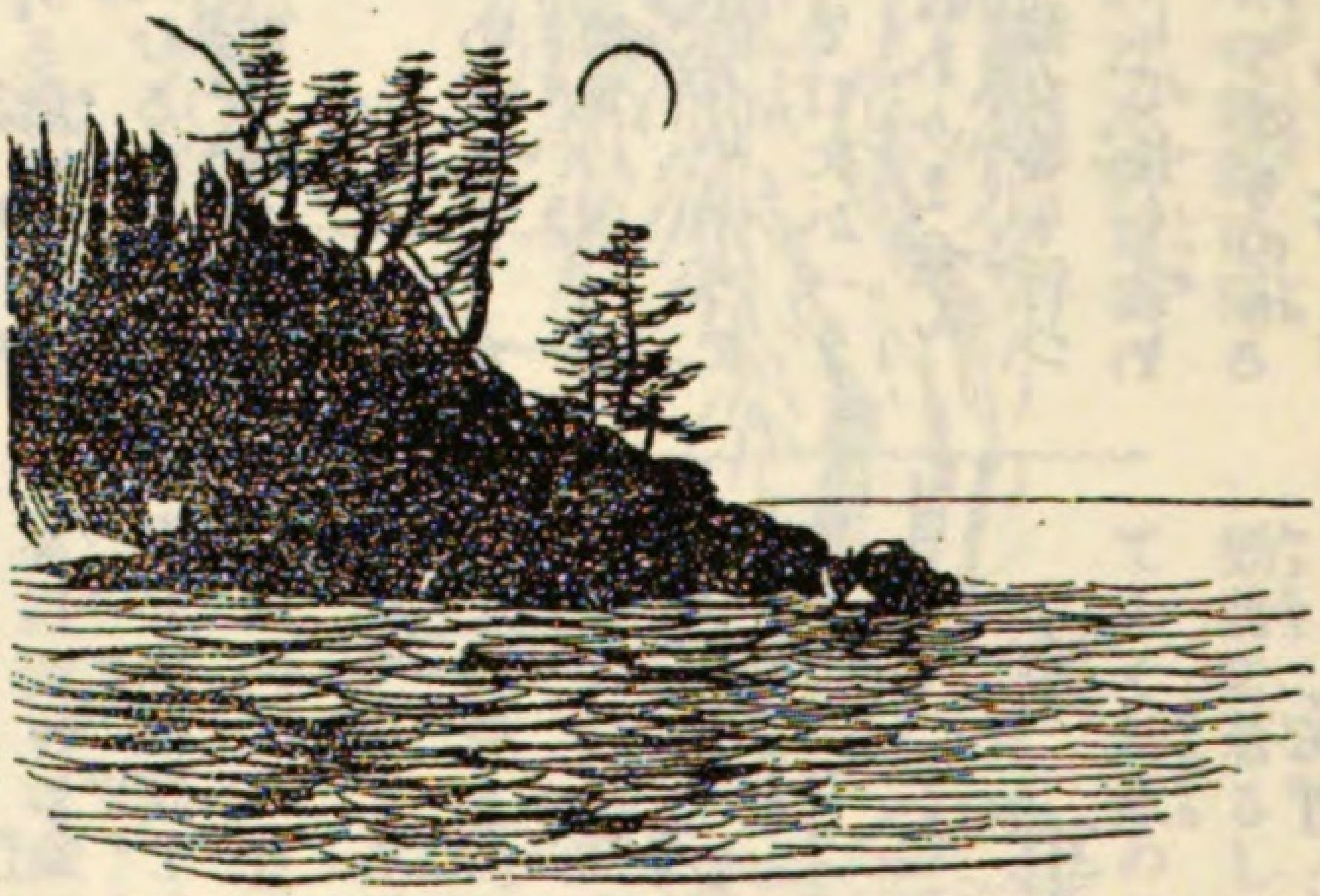
それから今一つ大切は事は凡て看病と云ふ事は病を治すと云ふ事ではない。それでは何が目的であるかといふに、是は病人と醫者の手傳を爲るのだと思つて居らねはならぬ。まづ病人の手傳と云ふのは病人が喉が渇いたから水が飲み度いと思ふても病の爲に身躰が自由にならないから、看病人に賴む。又或患者が頭を氷で冷し度いと思ふても、自分一人では出來ないから、人に賴むで冷して貰ひ、又起臥の自由でない病人が看護人に依つて起臥を爲る、是等は即ち病人の手助を爲るのである。それから醫師の手傳と云ふのは、醫師は病人の側に始終居るものではない。其醫者の居らぬ間の容躰と云ふものは誰が看て居るかと云ふと是は看病を爲る人が看て置いて、醫者の來た時に、昨晩は熱が何度ありましたとか或は昨日から今日迄の容躰は斯うでありましたと云ふ樣に醫者に告げるのである。それが充分に出來さへすれば醫者が始終病人の側に居らずとも、醫者が就いて居つたと同じ事である。即ち醫者の手助を爲るのでありますから、其心掛で看病をしなければならぬ。是が看病人の職務である。併し看病人は決して治療を爲ると云ふ考を持つてはなりませぬ。治療は醫者が爲るのである。所が生半の看病法を修つた人は惡く爲ると、此心掛が無く、自分が治療を爲るといふ氣になつて、大變な失錯を爲る事があります。所謂「生兵法は大疵の基」と云ふやうな事になるのであります。是は餘程注意しなければなりません。（以下續出）

家庭の樂

成女學校講師　嘉悅孝子

料理法と愛情

私はまだ、家政のお話など致す資格もありませず、こんな事書くは誠に鳴呼がましく思はれるのです、しかし同じく人は人なれば本分丈けは盡して見度といふがかねての希望ですから、かくもしたら女子の眞價が顯はれやうか、品位が高まるであらうか、家はかくも理めたら樂しき家庭となるであらうかなどいふやうな考は、瞬時も去らない胸中のさゝやきですから、これまで浮んだ理想の一つ二つをかきつらねた次第であります。或は出過者と評されるかも知りませんが、兎角今日の婦人がたは所謂引込思案が多く、たまたま立派なお考のあるかたも、おのれの説を公にするなどは成るだけ爲ぬといふ有樣でかやうな事も、婦人の進歩を遮ぎる一因と思でひますので、隗より初めてとの積りにて、かくはさし出ました。



さて私は、その希望をみたす第一着歩として昨年來庖厨改良に大分骨を折りまして、世の人は暑さをのみ口にし、海水浴に避暑旅行にと、西に東に我家をあとにする三伏の今年の夏も、わが成女學校では暑中を通じて六週日の間、和洋料理の講習をいたしまして、魚肉の識別、庖刀のしかたと共に、鰹の煮汁はかくしてとるもの、羹物はかくと、習つて見れば誠に容易き事で、わづかの時日に數十名の料理博士も出來たといふ次第、家庭の樂しみといふ上には、旅行に勝る大利益を得た事をたしかに信じて疑はないのです。そしてこの講習員が、中流以上の令婦人であつた事が云ひ盡されぬよろこびでした。從來庖厨の事にさ

ほど重きを措かなかつたのは、かへす〴〵も婦人の罪て、これが家庭の樂しみを作り得なかつたおもなる源因であらうと思ひます。

總て世の中の事は因あれば必らず果あり、魚は木に緣りては求められませぬ。婦人の品位を高むるには、高まるだけの原因がなければなりませぬ。即ち婦人たる行をなすの外ありますまい。

それから一ツ思ひますのは愛といふ事であります。女はどうか、愛らしとか、ろうたしとかいふ言葉の與へられるやうしたいと思ひます、所謂女壯士でないやうにしたいのです、此愛といふ事、口でこそ一と口にいへますが、さて行つて見ればなか〳〵容易くはありません。單に形式上の愛ならば現に賤しき業せる彼女等も行つて居ませうが、仁なき德なき愛敬のどうして長くつゞきませうか。これはつまり、造り花見たやうなもので、見た目は鳥渡奇麗ですが、匂ひもなければ實を結ぶ事もありませぬ。

木直なれば其影また正しく、主婦に愛があれば一家愛らしく、母愛を以て育つれば子女必らず愛らしく、可愛き無心の唇より響き出たる自然の音樂には、猛き武士の心もおのづから和らぎませう。妻子のほだしをうるさしといふ兼好法師にはしかられませうが、家を思ひ世を思ひ情を知る人には、かならず可愛らしき妻子がなければならぬと信じます。

それで子どもには無情といふやうな事は成るべく知らせないがよからうと思ひます。若松賤子の小公子、あれはたれも知る處ですが、あの純潔な可愛らしきフォントルロイ、私は、子供、殊に女子は、あんなに育てゝ見たいと思ひます。

家事經濟（二）

高木とし子

器物の保存取扱法

○木具

材木を以て作りたる器具は其の包容する處ろの範圍甚

だ廣し所謂家財諸道具の大部分はすべて皆木具なりといふべし、即ち簞笥長櫃書箱の長大なるものより、水風呂、手桶、盥其他の庖厨用諸器物膳椀の食器、机硯箱の文房具より、寢臺、椅子、衣桁、鏡臺等閨中の諸器に至るまで木具漆器の用ならざるはなし、されば木具漆器は家財中の七八分を占むると云ふべし、扨て其の木具には白木なるあり、塗物あり、まづ其白木に就て曰はんには簞笥、長持、本箱の類は桐にて造りたるを良とす是れ桐は外觀の美なるのみならず、其木質柔くして能く濕氣を吸收する性あるが故に其內部の物品を保護して濕氣を及ぼさゞる効あり、又木材は總べて能く乾燥したる物を用ゆる時は調製後其工合を損じ從て破損を生ずると少し、米櫃飯櫃等は樅または樫を以て最良とす、扨又飯櫃等の箍には金屬又は竹等を用ゆるが是れは特に銅を可とす



次に手桶盥等の如き臺所道具にして平常水使に要する物は赤身の杉を以て製するをよしとす、是れ堅固にして腐敗する事尠し且つこれに澁を塗る時は保存上其の効特に著るしきものなり。蓋し澁は木理の氣孔を塞ぎてよく外氣の浸透を防くなり、通例澁を造るには不熟の柿（澁柿と稱して多くは山林に自然に生ずるものをとる）を碎きて數日間水に涵し以て柿の實中の澁味を水に浸出せしむるなり。

簞笥書箱類は時々拭ひ又屢々空氣に觸れしむべし、且つ拭ふには乾きたる軟かき布巾を用ふべし、飯櫃盥の類は時々晴天の空氣に觸れしめて乾かすべしと雖も久しく日光に燥す可からず、日光を強く受くる時は、乾割を生じて其儘使用し難きに至るべし米櫃も又時々隅々迄能く拂ひて乾きたる空氣に觸れしめ、米を入れかふる時は陳き米の上に入れざるやうにし、もし、一所に入るゝ時

には澁紙にしてしまりをすべし米櫃は新らしき米を入るゝ毎に固着したる糠をよく拂ひ落して入るべし上へ上へ入るゝ時は陳き糠は腐敗すべし。

○漆器

漆器は木具中の一部分なれども本邦家財の重要なる部分を占めたるものは漆器なり。元來漆器は日本特種の産物にして古來種々の器物として製作せられ美術品、實用品にして珍重され、其の種類の多き器用の範圍の廣き諸器具中第一たり、扨て我國に於ける漆器の興りは何年頃なりしや詳かならざれども孝安天皇の御宇三見の宿禰といふものあり漆部の祖なるよし此の際世既に漆工ありて漆器を製造せしがごとしされど未だ彩漆を施すにはあらざりしなり、其後孝徳天皇の大化二年朝廷漆を以て棺を塗ると命せしよし、又天武天皇の御代に赤漆を用ゐて厨子を塗る、これ本邦に於ける赤漆を用ゐて器物を裝成するの始ならんと其後漸次工匠は巧となり奈良朝時代には既に朱漆、青漆又は螺鈿、蒔繪を施せる所ろの華美の器を造るに至れり。

延喜五年一千五百六十五年醍醐天皇制して内匠寮に於て年料の漆器を製造したまへり其の器數多あり黒漆器には手湯戸(湯を盛る器なり)水槽(水を蓄ふる器なり)手洗槽(手を洗ふ器なり)擽(手を洗ふ器なり)大椀(大なる椀なり)中椀(中なる椀なり)盤(平皿の類なり)窪坏(壺皿の類なり)杓(水を汲む器なり)捧壺(壺の臺あるなり)案(高き足ある器なり)榻(案の類の器なり)屏風の襲木(屏風の縁なり)斗帳(寢る臺なり)几帳(帷を懸る器なり)大小の行障(歩行するに頭上に載る案なり)大翳筥(指物を納るゝ筥なり)大笠柄、幄柱、幕柱、幕桁、幔柱、革筥、櫛筥、沓筥、床(足ある床机なり)藥袋(藥を納るゝ器なり)辛櫃(足ある櫃なり)厨子(諸物を置く棚なり)雕木(案の類にて彫刻せる器なり)樋(大便器なり)虎子(小便器なり)燈臺(燈盞を載する臺なり)等なり朱漆器には膳(食器を載する器なり)櫃(諸物を納るゝ器なり)櫑臺、酒海(酒樽の類にて大なる者なり)花盤(花卉を盛る盤なり)飯椀(食椀なり)羹椀(汁椀なり)磬子(御膳を載る盤なり)盞(平皿の小なる者なり)臺盤(食器を載る

臺なり）下食盤（方なる盤なり）机（足ある器なり）外居（食物を納れて運ぶ器なり）等なり、以て漆器の工の我國古く上代より發達せしを知るべし。

漆器、即ち通例塗物と稱するものには種々の塗方ありいづれも使用の目的に從て相當なるものを撰ぶべし。まづ食膳及び重箱の類には能代塗、春慶塗等あり普通に之を用ゐ黒塗、朱塗、蒔繪等ありて何れも高尙なるものなり、椀類は黒塗、朱塗、溜塗等を多しとす。

是等の物を購求するに當つては能く其精粗を識別して成るべく其の塗の堅固なるものを選み且つ其の價の妄りに廉なるものを購求すべからず。

新調の漆器を使用する時は宜しく其漆臭を除かざるべからず、然らざれば俗に所謂漆氣觸を生ずることあり之を除かんとするには米泔汁を微温にして數回濺ぎかくるか或は數日精米の中に埋み置くべし、また豆滓にて洗ふもよし、至急を要する時は風入のよき處に曝露し置くべし自から臭氣の脫くるものなり、又漆器に肉類の脂のつきたるを除くには灰、砂などを用ふれば器に微疵を生ずべければ靑蔬の葉を以て徐々と洗ふべしすべて漆器は之を洗拭したる後再び乾きたる布片にて丁寧に拭ふを可とす然らざれば曇を生して光澤を失ふものなれば注意せざるべからず、漆器は特に疵のつき易きものなれば之を保存せんには紙布等に包みて箱に藏め置くべし。

◎竈、火鉢、下駄、傘の類

▲竈　は其搆造の巧拙によりて、費用の點に大差あり、近頃改良竈といふもの出來て、至極便利なり、總じて竈は薪を費す事少なくして速かに火氣の廻るものを撰ぶべし。竈、地爐の類は、毎朝、能く掃除せざれば、火災の虞、食物の不潔等之れに原因すると少からず、世帶に暗き人の言として薪炭の入用何程かあるべきなどいふも毎日使ふものは目に見へずして大きなものなり、これを一月につもり一年につもり三百六十五日つもり〳〵てはなか〳〵大きなものぞ、家事經濟は微少なるところより注意すること肝要なり。

▲火鉢烟草盆　の類も、毎朝能く灰をふるひ、緣は隅々

迄も乾きたる布巾にて叮嚀に拭ひ、灰吹きは、一度々々にわけ、水少し入れ置くべし。灰固まり緣汚れなどしたるは見苦しきものなり、殊に來客多き家にては朝のみならず時々能く見廻りて、清潔にせしむべし。

▲花瓶。の水は時々取り換ふべし、花枝を挿したる儘にて久しく措く時は水腐敗して、臭氣を生し、木澁、花瓶の口に附着して容易に除き難きに至らん。

▲洋燈。は毎日心の燃えさしを、ゆがまぬやうに切去り油を入れたる所も時々微温の灰汁にて洗ひ、布巾にて拭ふべし、火屋に少しにても水氣を殘し置く時は直ちに破裂すべし。行燈は當節あまり使はぬものなれど時によりては入用のものなり、油皿を能く拭ひて油を充分に湛ふべし、油少なきは却て不經濟なり、油を一杯にして燈心は多く入るべからず、殊に細き燈心を數本入るれば、油を吸收すると速かなり。

▲傘。は紙張絹張ともに雨にあたりたる時は能く拭ひて乾かすべし、日傘は使用したる度に能く汚塵を拂ふべし、絹張の傘も、なるべく雨傘と日傘とは別々に造り置くべし、晴雨ともに用ふる時は地質を脆弱ならしむると最も速かなり、又雨傘は強き日に干すべからず、紙質の弱るものなり。

▲靴。は使用したる度に能く拭ひ、靴墨を置るべきは塗りて藏むべし、拭ひかた疎なるは、外見の惡しきのみならず、其保ち方にも損あり。

▲足駄。は汚れたる時には、鼻緒を拔取り置きて、洗ひ乾かして後、更に緒をさすべし、疊附は一々緒を取ると難ければ、緒は紙にてくるみ疊を拭き、臺のみを洗ふべし。

▲竹扉。葭戶の類を保存するには能く汚塵を拂ひ落して、空氣に觸れしめ、油紙、又は、厚紙等にて包み、樟腦を粉にして撒布し置くべし。小蟲の生ずる處無し。

▲地氈、襖紙。等を購ふには脆弱ならずして、韻致あるものと、其室內各部に相應して、色、形の配合よきものを撰ぶべし然れども、餘り珍奇なる色、形の物を用ふる時は、其破損したる時之を繕ふに困難なり、其等も能く注意して購ふべし又其裁屑は必ず保存し置きて修繕の

時に使用すべし。

▲敷紙寐席の類は、晴天の日はなるべく毎朝日光に曝すべし、寐席の汚塵を除くには醋を湯に和して、布片に浸しそれを能く絞りて力を入れて拭ふべし。

▲食器は殊に清潔に取扱ふべし、器物に移香あり、箸の端の色附きたるなど人をして嘔吐を催さしむるものなり、故に、湯呑、菓子器の如きは苟旦にも肉氣類の器を洗ひたる水にて洗ひ、又其を拭ひたる拭巾にて拭はしむ可



らず。

○書籍、及び文房具

平生座して用ふる机はなるべく、長けに相當のを撰ぶべし、昂低は共に俯くとの多きによれりといふ説あり、考ふべし、さりとて、今俄かに座禮を廢して、戸々、みな椅子卓のみを用ふべきにあらねば、座るにもなるべく身體の爲宜しきやうに注意すると肝要なり、又、机、卓はいかに麁造なる品なりとも、小刀、錐等にて傷く可らず、常に

よく拭ひて糊墨などの、固着したる儘に、置かざるやうにすべし。

▲硯は時々洗ひて使用すべし、墨の滓の溜りたるは、墨色も惡く筆の切るゝとも速かなり、筆はなるべく使用する毎に洗ひ置くべし、又日記、覺書、金錢の出納簿等雜事に用ふる筆と、書簡、或は色紙、短冊などを書く筆とは一々に區別し置き、尖の惡くなりたるを順次に雜用に使ふ方におろすべし、墨はなるべくゆがまぬやうに磨るべし、ゆがめば、いまだ盡きざるに用ひ難きに至らん、良き墨の小さくなりたるなどは墨挾を用ふべし、大抵に盡くる迄磨らるゝものなり。

▲紙は至急を要する時の外は決して引裂きて使ふべからず、卷紙など裂きて使ふ時は更に用ゆる時裂目を切捨てざる可らず。僅かに五六分の幅と思へど積もり〳〵ては實に無用に屬すると夥し。白き紙切は引出か疊紙、袋等の中に入れ置くべし、何ぞの時入用のものなり。紙綟りも調法なものなれば切端とて猥りに棄つべからず、至急の塲合に至極便利なり。

▲書簡　親戚、朋友より通信往復の書類は要用のむきと不要のものと區別し置くべし又、要用の書狀ならぬも保存し置くべきはいふも更なり、有名の人、近親、親友の書狀等はなるべく保存し置くべし、年經て後の忍ひ艸には此上なきものなり、又多數の書狀を受理する家にては一見の後無用なりと認むる書狀は月末毎に調査して取捨つるも可なり、種類によりて細かに裂き捨て火中するもあるべく或は反古として使用するもあるべしと雖も、總て、書狀は先方の姓名及び自家の姓名を記したる部分だけは、細かに裂き、又は火中すべし、人の家に往きて見よ、わが姓名を記したる紙片の泥土の中に混りて、蹈み汚されたるなど不快におもはるべし。

▲鏡　劍鏡とて、劍は男子の魂に形どり、鏡は女の操になぞらう。されば其取扱に注意すべきは勿論、毎朝心して拭ひ清むべし、其曇りたるは、婦德の汚れなりとさい古人もいひき鏡臺、櫛笸の類を總て能く拭ひ置くは婦女子のたしなみなり。櫛の歯も叮嚀に掃除して、垢の

溜らぬやうにし、脱毛なども此所、彼所に落ち散らぬやうに、能く取纏め置くべし。鼈甲の櫛は、軟かき紙にてくるみて小さき板片に挿み、紐に巻きて藏むべし、鼈甲は挿したる儘にて入湯す可からず、湯氣に蒸さるゝ時は、うきの出ることあり、もし已むを得ざる時には紙にて能く巻くべし、毛髪にかくる帛片類は取りはづして、直ちに西洋紙の類に包み、壓をかくべし紙は油を吸收する故に久しきを保つなり、珊瑚珠の汚れは、薄き味噌汁にて洗ふべし、鼈甲、象牙類は湯にて洗ふべからず。肥皀を入れたる冷水にて能く洗ふべし總て珊瑚、鼈甲の類は購ふ時は不廉にして賣る時は極めて廉なり、たとへ富貴の人なりとも、餘りに高價なる品は用ゐざるをよしとす、

○器具の配置

器具の配置に二樣あり、一つは、室内装飾の目的に出づるものと一つは衣食住に就いて要用の品を藏め置く爲に配置するものとなり故に室内装飾の物品配置は時々其位置を轉ぜざる可からずと雖も其他の物品はなるべく据附けの場所を、屡、交換す可らず譬へば正服の入りたる長櫃は甲所、褻服の入りたる簞笥は乙所、食物の戸棚は丙所といふ如く、區分し置き、且其簞笥の第一の抽斗には、外套類、第二には、表着類といふやうに戸棚もと上層の左側には、菓子類、右側には砂糖類など、區別し置きて、其秩序を亂さゞれば火急の折非常の時にも決して狼狽、紛雜の虞無かるべし、また、物品は使用したる後には、必ず、もとの場所に藏むべし、其儘になし置くが故に思はずして毀損、紛失等の過ち出來るなり、客室、居室は云ふ迄もなく土藏、納戸の如き他人の容易に見ることあるまじき處にても物品の配置を整頓し洒掃を清潔にし置くは婦人の用意ならん、火事急病の如き非常の場合にあひて人の立入るまじき所などふと見通されたる折にも室内、整然として、諸品の秩然たるは、實に其主婦が平素の心がけさへ思はれて奥ゆかしく見ゆるものなり。

諸物品は霖雨の後、多くは、黴を生じ、又蟲を生ずる等のことあり、秋晴の頃、必ず乾燥せる空氣に曝して蟲乾す

べし、大切の品は春の末がたにも、今一回蟲乾すべし。

○器物書類の貸借

すべて親族、朋友の間、吉凶相訪ひ、患難相救ひ、長きを斷ちて短きを補ひ餘れるを分ちて不給を助くるは、人間の義務なり、又人情の美點なり、故に物品の貸借も、亦已むを得ざる事なり、されども殊に隔意なき、近親親友の外はなるべく借用す可らず、物は疎末なりとも大抵ならば、わが所有品にて、事足るやうにすべし、況て都會の地に住む人は寧は損料を拂ひて、商買人より借用すとも、普通の交際なる朋友などには、依賴せぬがよし、殊に部類箇數の揃ひたる良品及び他の秘藏の品は必ず決して借用すべからず、萬一、過ちのあらん時如何とも爲し難かるべし、圓滑なる交際もこれよりして破れたる例あり、注意すべきことなり。

さはいへ、他の需めに應じて物品を貸與する時は快よく承諾すべし、もし先方にて過ちて毀損し、紛失する等の事ありとも、決して、不快の念を懷く可らず、身に着かぬ財寶ならば、自分の家に置きたりとも、火災盜難等にかゝりて失ふともあればこれを思ふて諦らむべし。又累代の重寶秘藏の珍器にて紛失毀損を怖るゝものならば、始めより程よく斷りて、貸與せざるがよし、既に門を出したる上はゆめ〳〵、其物に執着すること勿れ。

○物品の貸與

諸物品を人に貸與せんとする時は、其品を一々改め能く拭ひて、損所又は、數の不足等あらば、其由を先方へいひて遣すべし、さて取出す時に器具の目錄書と引合せ何年何月某日に貸與と、覺書したる附箋し置き、返されたる時は直ちに剝ぎ取るべし。數箇の品を貸與する時は、更に目錄書を作りてそれを添へて送るべし。若し餘義無き場合に迫り人より物品を借入ねばならぬ時は自分から行くべし、然らすんば確かなる人を先方へ遣はして、叮嚀に請求せしむべし。其折り物品は一々に改め、數、損所等を持主に答へて、受取るべし、使用し終らは、叮嚀に拭ひ清めてなるべく速かに返却すべし。最も、其運搬には、殊に能く、注意せざるべからず。自らは、無事に返したりと思ふもの丶、其途中にして紛失し、

毀損する等の事ありても使者は、其叱責を怖れて、包み藏すこと無きにしもあらず。衣類は殊に直接に身に着くるものなればなるべく貸借すべからず。もし已むを得ずして借りたる時は、能く火熨して、汚點などの附きたるや否やを調べて速かに返却すべし、但し殊に睦しき親友の中などにては、またそれにも及ぶまじ。書籍を借りたる方にては、其印無きなどは何時、誰の持ち來りしとも、解らずして、徒らに、書箱の隅などに、打込み置く等のことあるものなり。總て書物は、己が所持品なりともなるべく折目を附けずして讀みさしたる所には、枝折の類を入れ、小口の皺は、屢、伸して、叮嚀に取扱ふべきは勿論他より借りたる物は決して折目を附くべからず、況て破り汚すに於てをやとは極めて、無禮のことなり、鄭重に取扱ひて讀みたる後は、速かに返すべし。

盆石のしをり

武田櫻桃

盆石に就いては曩に聊か卑見を述べたる事ありしが、そは殆んど諸流の批評、盆石の何物なるかを紹介せしにとゞまり、盆石の打ち樣及びそれに關する諸般の要意を省きたり、蓋し局外なる予の愁に師範顔して、禿筆を呵したればとて、徒らに餘白を汚すのみにして、反つて讀者を惑はしむるに過ぎざれば、世の名人に質して再び此稿を嗣がん事を約し置きぬ。

頃日少しく閑を得たれば、斯道の名家を叩き其意見を乞ひ、初學者をして謬なからしむる底の要意を知り得たれば、爰に其最も入り易き邊より說き及ぼすべし、されど盆石もまた他茶の湯挿花と等しく、細川流にせよ、石州流にせよ、揚春流にせよ、それ／＼に家元ありて、秘傳口傳等も尠からず、之を修むるにはまたそれ／＼式法ありて、初傳、中、奧、皆傳と階級もあることなれば其秘授に亘るもの、若くは薀奧に至つては憚らざるを得ず、且つは予の筆になる盆石の要意が、讀者諸君をして名人の域に進ましむべしとも思はれざれば、未だ盆石の趣味を掬さゞる方々に、一般の作法を示して、斯道の發達を俟たんとはすなり、讀者諸君夫之を諒してよ。

揚春流の盆石

盆石の流派は曩に述べたるもの丶如し、予の爰に示さんとするは揚春流にして、他諸派に比しては稍淡白なるが如き觀あれども、技は則ち自然に近く、其打様もまた他流に比して、比較的小細工に陷らず、初學者には最も入り易かるべしと思ひ、故意と此流を撰む事となしたり。

細川流と揚春流とは酷だ相似たれども、現今細川流には男子多く、揚春流には女子多しと云ふ、此點に於ても予は強いて揚春流を擧げざるを得ず、他諸流に就いての甲乙は既に述べたればこ丶には云はずもあらん、さて何が故に細川流に男子多く、揚春流に女子多きかと云ば、そは深き原因あり、盆石は元來其打様を尊ぶものなれども 世進み人奢るに連れ、細川の流派は愈々貴紳の家庭に入りて、こ丶に奇岩珍石を誇るの風習を生じ、打様は未だ堂に入らざるも、百金を投じて天下の奇石を購ふの氣風を生じ、從つて技は未熟なるも高價なる石を置くを名譽とするに至りしかば、父の供給を仰ぐ令孃、夫の收入を俟つ令閨は、遂に此高價なる石を購ふに由なく、次漸淘汰せられて、縉紳のみ獨り奇岩珍石を誇るに至れるは、流派の爲め惜しみても尚餘ある事なり。

されば揚春派は細川流の益々奇石を貴むに從ひ、愈々其技の巧を競ひ、反つて凡石を迎ふるの傾向を示したりければ、女流は沓々として此派に入り、將來望を囑すべきものとはなれり、家元の得意想ふべし。

盆石の奬勵法

盆石が將來進歩すべき技藝なる由は先きにも云へり、蓋し茶道は寧ろ古式を尊び、挿花は挿すべき花に限りあるも、獨り盆石は天下の勝景を一盆に蒐る事なれば、其範圍極めて廣く、其技もまた從つて進歩すべきは言を俟たず、されば諸流とも新盆を打つに競ひ、新盆に打つべき勝景を得るや之を縮圖して家元に送れば、家元は之を審査して、新盆として價値あるものには、それぞれ賞狀を贈る事となり居れり、新盆とは新らしき勝景を打つ盆の謂にして、皆傳以上ならざれば新盆を打た

ざる掟なり。
さて盆石は砂もて打てる山と、實物の石と相調和する事難く、波と富士とは盆上に横はり、近き山のみが實物の石にして直立したるは不自然なりと云ふの説、近日稍喧ましくなり、宜しく山は遠近を問はず實物の石たるべし、否、盆石は元來砂を以て打つものなれば、山は悉く砂を以て打つべしと云ふの論熾なるが如きも、遠き山が横はり、近き山が立ち居るとも、決して風致を害するものにあらず、技藝巧に入らば、横はりぬる遠山と直立せる山とは自然に調和して、些の差別ある事なかるべし、以上の如く論じ來りなば、霞を奈何すべき、月を如何かすべき、蘭を培はんとして、反つて雑草の繁茂を來たすが如き事なしとも限らず、之が改善を圖るは階を追ふてすべし、以上の論の如きは到底突飛の妄論たるを免れず。

盆石に要する器具の種類

茶道の器具に數寄を盡すは皆人の知る處なれども、盆石も又凝らば凝るべし、されど要するに茶道に比しては頗る質素にして、且つ器具の價を論ぜざれば、此點に於て最も入り易きものなり、左に器具の一般を示さん。

《匙》 匙、玉匙、丸匙、雲匙の四種あり。
《篩》 三段篩、五段篩
《羽根》 干潟羽、波掻羽、其他數種
《霞板》
《月形》 滿月、三ケ月、水中の月
《羽箒》 大羽箒、小羽箒

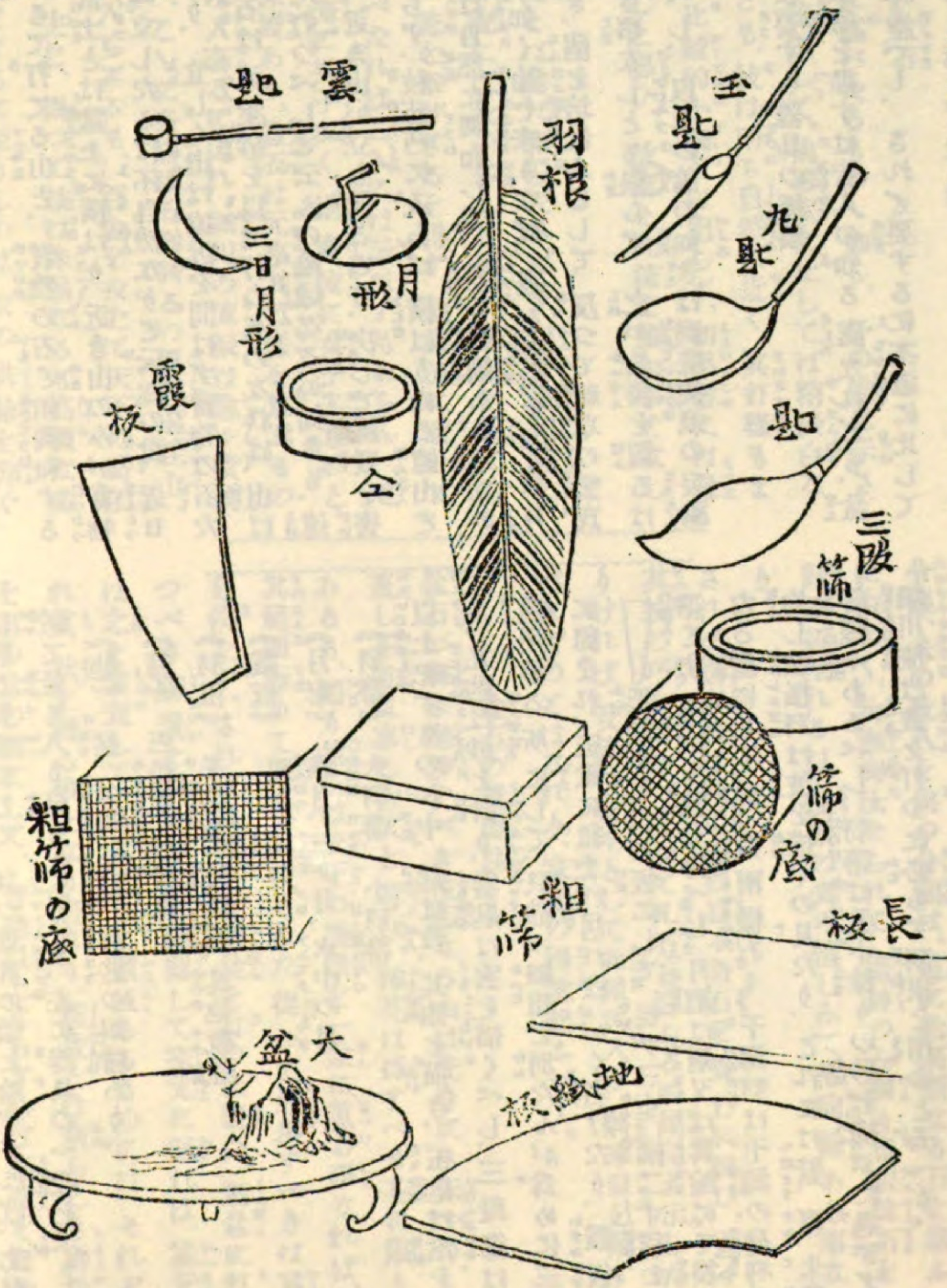
以上記すものゝ中、匙は波、其他を描き、玉匙は泡を打ち、丸匙は砂を計り、雲匙は雲を描くべし、三段篩は普通用ゆる所にして、只砂の細粗を別たんが爲めに三重に組まれ、五重に組まれ居れば、かく名けたり、霞板は形をなしたる板にして、長サ三寸、幅二寸程を標準とす、手から製し得べし、月形は銅又は眞鍮にて製したる型にして、黒、白兩様あり、干潟羽は干潟の砂利を均し波掻羽は波を描くの具たり、これには鷲、鷹、朱鷺等種々あるべし、羽箒は盆中餘りの砂を拂ふに過ぎず、細川流は波を打つに必らず羽根を用ゆと云へり。

〈盆〉長板、地紙板、大盆、中盆、小盆。

長板は長方形の盆にして、地紙板は其名の如く扇の地紙形をなせるもの、他は其大小によつて名けたる假名なり。

〈敷紙〉砂の散逸を防ぎ疊の汚れを避くる爲めなり、手から製すべし。

〈砂〉『白砂』



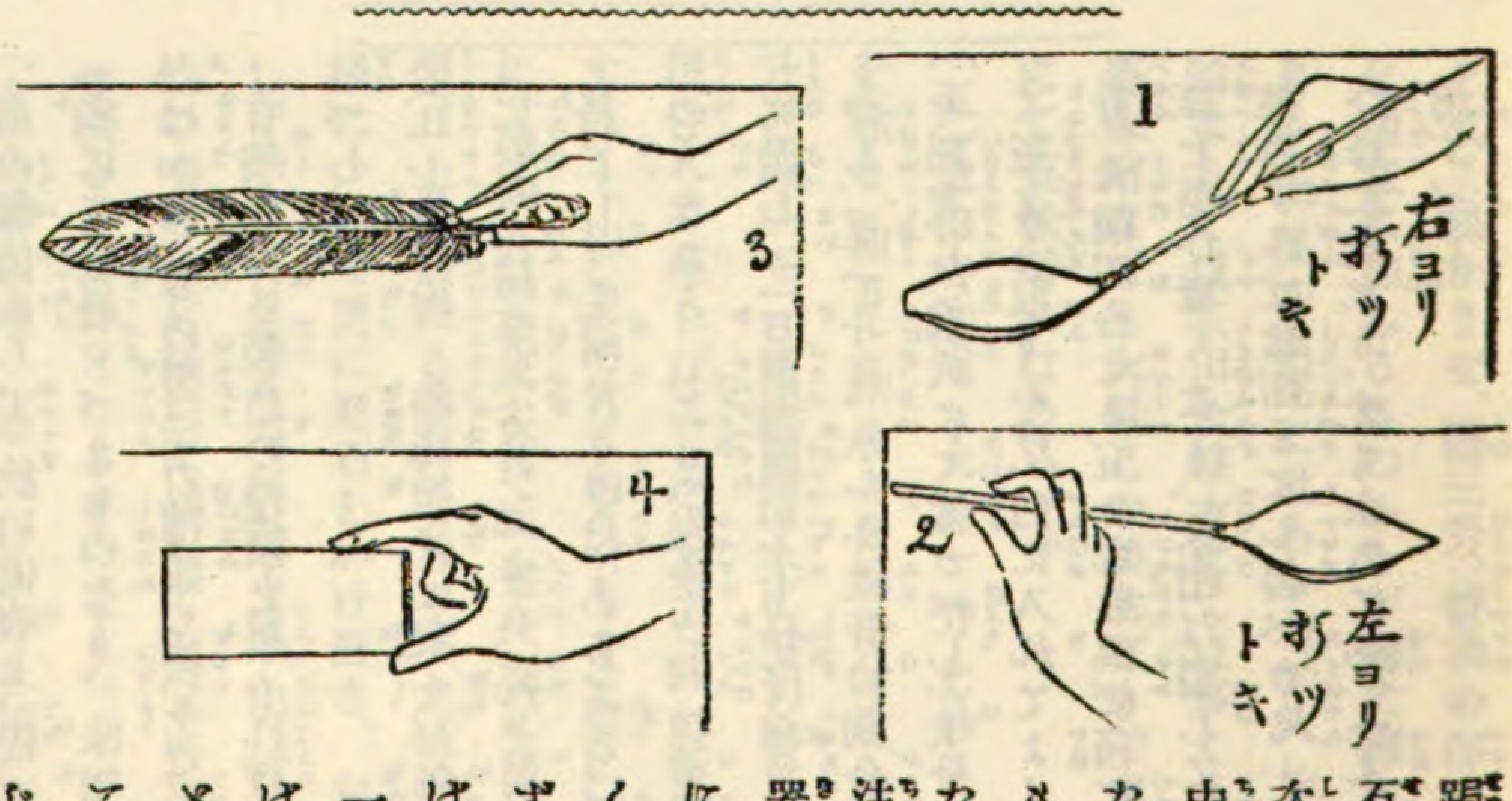
（卯の花）（五合）（六合）（七合）（八合）白「黒砂」（那智砂利、金砂、茶砂）「瑪瑙石」「五色石」

卯の花とは石膏の粉にして最も微かきものを云ふ、五合六合七合八合は細粗の差別に過ぎず、只單に「白」と稱するは石膏の稍粗なるものにして、那智砂利とは那智より產する小砂利なり、金砂は鑛物を含み、茶砂は茶褐色を帶びたるものを云ふ、而して曩昔は盆石を打つは、須磨を打つに須磨の砂を撰び、三保を打つに三保の砂利を取り用ゐたりしが、中世其不便に堪えず、普通以上の數種を撰ぶ事とはなれりと云ふ。

序ながら云はんに、此等諸般の器具は東京下谷池の端神戸屋へ注文せば直ちに調ふべし。

器具の使用法

茶を試みんとする者は先づ其躰を正しうするが如くに盆石に向はゝ苟も膝をくづし、躰を曲ぐるが如き事あるべからず、靜かに盆に向ひ、要すべき器具を膝の右に置き、さて打つべき景を撰みて、後更に石の位置、波の姿を攷へ、始めて匙を手にすべし、躰躊れば盆石もまた躊り、躰泰なれば盆石もまた豐かなるは次漸の道理なり、盆中の勝景が生きて打たるゝも、死し去るも、偏へに盆に對したる時の心にあり、注意すべき事なり。



器具の使ひ樣は茶道に於ける伏沙捌の如く面倒なる事はあらず、器用に打ち得れば足れりと雖も、今一定の使ひ樣を示さは、匙は斜めに、拇指と食指及中指とにて、ペンを持つと同じ鹽梅に把るべし。

玉匙、丸匙、雲匙、凡て然りとす、羽根の使ひ樣は、主もに『流』『打こみ』に用ゆ（流及打こみは後に說く）れども、こもまた拇指食指中指のあつかひに過ぎず、則ち第三圖を參照すべきなり、圖は右より左へ打つ樣を示したるも、左よりするものは其儘手を反對にすれば足れり、さて霞板は拇指と食指との間に挿めば乃ちよし、第四圖を見よ、篩もまた同じ、要するに、自己の打ちよしと思ふ所に當れば、それにてよき事なり、さまで六ケ敷きものにはあらず。（未完）

味噌の製法

季節はやうやう秋涼に入りて味噌を造るには屈強の時候となりぬ。抑も味噌は我が國人食料の重要品にして滋養に富めるといふまでもなし都會の生活にては住家思ひのまゝならざれば自家にて味噌を製すると容易ならず、すべて皆酒屋の御用任せにして至極輕便なるがごとし、さりながら田舍住ゐにして一々買調へるは容易の事にあらず、故に便利上、經濟上より、是非とも自家にて製造すべきものなり。味噌の製法は古へより傳はりて、其の製法の種類も樣々なるが、まづ現今世上に有觸れたる製造の種類を擧ぐれば、凡そ左の數種なるべし。

（一）赤味噌　赤味噌とは我々が毎朝食ふおつけの原料にして、關東地方は元より、凡そ日本全國毎日の朝餐の料として味噌汁なきはあらざるべし、されば其の需用の大なるといふまでもなし、扨て其の製法は大豆を水に浸し、二日間經過し、十分浸びたる上にて之を釜にうつし、豆一斗に、水一斗二升の割合にて、よく／＼これを熟煮し（弱火にて煮るべし）十分柔かになしたる上にて釜より取りあげ、臼に入れてよく搗き、豆一升に麴一升、食鹽四合より五合程を混ぜ桶に固く詰め、其上に油紙を蓋ひ置くなり、味噌は製してより大抵二三ケ月を經過すれば食用となし得べきも一年以上經たるもの味ひ殊に美なり、尤も永久に貯へんと欲せば鹽の分量を增すべし。

(二)白味噌　白味噌は多く料理用として使ふ、大豆一斗を水に浸し、やゝほとびて豆の皮のしはむだる時、笊に入れて皮を揉み離し、釜に入れて之を煮立て、一沸して皮の全面に浮ぶを待ち、其皮を除けば豆は純潔となるなり、割合は大豆一升に米麹二升と鹽三合を混れよく搗きて桶に詰め目張して置くとすべて赤味噌の製法に同じ。

(三)糠味噌　こゝに糠味噌といふは胡瓜や茄子をつける通常の糠味噌にあらず。則ち米糠を水にてかたく揑ね、甑にて蒸し、糠一升に鹽一升五合、外に醤油滓を適宜に加へ、臼に入れてよく搗きまぜ、桶につめ密封して貯ふ、これは味ひ美ならざれど一寸風味ありて原料米皮なれば蛋白質に富みて滋養の効あるのみならず至極經濟向の食料品なり。

(四)五斗味噌　これは大豆、麹、酒糟、米糠各一升づゝの割合にて製造するなり、先づ大豆を煮、米糠を炒りて加へ、麹酒糟及び鹽を入れ搗き混ぜて製するなり、又一法には、麥麹(米糠を代用するもあり)一斗に、大豆五升を煮て搗きまぜ、鹽三升、醤油の滓三貫目を加へ(酒糟を適宜に加ふるものあり)桶に藏めて貯ふこれも又あまり上品の食品にはあらねど久しきに堪へ、且つ經濟的なるを以て田舍地方にては多く此の味噌を造る。仙臺味噌なども大抵この製法なり。以上四品は使ひ味噌にて菜味噌にはあらず。

(五)金山寺味噌　大豆一升を炒りて磨り割り、其の皮を除き、粗きと細きとを篩ひ分け、よく精げたる大麥一升を洗ひて一晝夜間清水に浸し置き、大豆の粗き粉と混合して蒸し、炒豆の細末と混じ窖室に入れて麹となすなり、扨て茄子と白瓜をよき程に切りたるを一升程に、鹽四合の割合にて一晝夜桶に漬け壓石をかけ置き、翌日上に出たる液汁を取りて之に浸し、右の麹に混ぜ桶につめて更に壓石をかけ置き、毎日二三回攪きまわし、凡そ十日程も過ぎたる頃、山椒、山蓼、紫蘇、唐辛其他の嗜好品を細かに切りて適宜に加へ一ヶ月半も經過せばよき食料となるものなり。

(六)時雨味噌　蛤のむき身を笊にて篤と洗ひ、砂を去

り、から煎じして水氣を取り、味淋酒及び醬油を加へてカラリと煎りつけ、極上の赤味噌を程よく入れ、銅鍋に移し、遠火にて攪きまわしつゝ煮つめ、冷して器に盛り割山椒を炒りて振りかくれば面白し。

(七)常盤味噌 一名柚子味噌ともいふ、柚子の黄ばみて實入よきものを取り、之を十文字に庖刀を入れて實を抜き、皮のみを取り、日に曝らして貯蓄し置き、極上等の赤味噌を擂鉢にてすり、之を水嚢にて漉し、やがて椎茸の莖を去りたるを水に浸して絞り、右の柚子の皮も亦湯に浸し置き、共に細かく刻みて加へ、味淋酒にてとろ／＼と焦げぬ樣に煮つめ、冷して胡椒を炒り皮を去り、亦山葵を短冊に切りて入るれば面白し、生柚子ある時候ならば、生にて入るゝも可なり、されど永くは貯へ難し、又味噌かたくして擂り難き時は味淋酒を少し加ふべし、右に製しあげたるものは專ら田樂、湯豆腐などに用ゐて頗る妙なり。



禮法

女子の作法

實踐女學校講師
禮法講習會師範　田島秀子

熨斗三方扱法

熨斗は延ばした鮑の事で熨斗鮑と云ふべきを今は略して熨斗と許り申すので御座います、結び熨斗の添へある三方は、穴ある方を自分の前にし、箸を向う側にそへ左の手を穴の内へ差し入れ底を受け右の手を右の緣へ掛け持ち出てます。最も結び熨斗を添へた三方に限らず何にても皆前の如く致しますが、小さくして穴に手の入らぬ三方は、只兩緣を兩手にて持ち出づるので御座います。それで前の樣に致し客の前三尺位離れて坐し、三方を靜かに下に置き、左の手をそと拔き兩側を左右の手にて持ち、三寸程押し進め、少し退り一禮し更に又少し膝を進め右の手にて箸紙を拔き左の横緣の所に置き結び熨斗を結び、昆布に挾み添へ、左の掌を右の手の下になりたる所へそと添へて客に進めます、客が之れを受けて禮する時に、箸を持ちながら、其手の甲を一寸膝の上に置き、少し頭を下げ、禮を受けるので御座います。それから左の手に箸紙を取り、箸をさし、元の所へ納め、前の如く少し退りて禮をなし、三方の兩緣を持ち我が前に三寸許り引き寄せて、正しく置き、左の手を前の如くにし、右の手を右の緣に添へて退きます。又受くる人は三方を進められし時、一禮し、結び熨斗進めらるゝ時、右の掌を上に左の掌を下になして、之れを受け掌を眉の邊まであげて禮をし、懷紙を引出し、其間に結び熨斗昆布を挾みて我が横におき、先方の一禮するに應じ、答禮し、挾みし紙を懷又は左の袂に入れます、熨斗昆布を授受する事を口祝ひと申すので御座います、結び熨斗添ふる事を略し、長熨斗許り持ち出づる時は只一々挾みて進めぬ斗りて、進める人も受くる人も其禮及び進退は同じて御座います、倘略す時は三方を席の中央に持ち出て、二膝退き一禮する時客一同答禮す

る事も御座います、然し熨斗鮑は細き方が頭で御座いますゆゑ客の左にして置き又殊更に右を上席として右に致し置く事と御座います。

法書帖の取扱

次は書帖の類を申ます數冊ある物なれば順に能く重ねて兩手にて持ち出で前の如く客の前少し離れて坐り兩手にて少し押進め置きます又退き樣は例の如く坐り兩手にて確と座ち重ねた物の滑り落ちぬ樣注意しなければいけません。次は卷物で御座います之れは左の掌の上へ載せ右の手を右の横に持ち添へ前に申た如く坐し右の手にて紐を解き卷物を二寸位開き紐を表紙の端の所へくる／＼と卷き附け一尺程開き向うへ取り廻して進め客の見終る迄紙の卷き返らぬ樣に押へ見終らば又もとの如く卷き納め置きます客の方乃ち受くる人は目禮して一尺許り開きある所の端を兩手にて輕く押へ見ながら段々に靜かに右の方へ卷き左の方を開きながら其見終りたる後は左の手より曲らぬ樣に丁寧に卷き結び向うへ取り廻し三寸程押し出だし置くので御座います。

掛物及屏風

●●次は掛物又は幅とも申します之れは室內を飾る所の道具て客を通す前に掛け置くもので御座いますから御話致す必要も御座いませんが若し客の前にて掛けなければならぬ場合もあらんと此所に一通りの手續きを御話致します。

始め左の手に掛物の中央を持ち右の手に竿を持ち床の前下坐の方に進みて坐り竿は我が右の側に置き掛物は左の手に持ちしまゝ我が前に横に置き左の手を添へ右の手にて紐を解き掛緒と卷きたる方とを持ちて一尺許り廣げ右の手に竿の中央を持ち左の手は卷き殘りの所を押へ掛緒を竿に掛け左の手に竿を押へながら右の手を竿の先きに持ち換へ左の手に卷きたる方を持ち三尺許り展ばし其儘立ちて床の上に登り（然し少さき置床へは登りません）竿を延ばし靜かに掛け終りさうして

竿の尖を持ちて床の壁に立て掛けおき兩手を軸の兩端に掛け一杯に延ばしながら段々に跪き右の手に竿を持ちて退き床を下り床の前に坐り天地を能く見比べ曲みのある時は再び床に登り竿尖にて掛緒の所を直し前の如く退きまた一對の軸は上坐より下坐と掛け三幅なれば中尊乃ち中央を云ひ次に客位乃ち上坐を云ひ次に主位乃ち下坐と掛け四幅以上は上坐より段々下坐に及びますさうして掛物を取り納むるには掛くる時の反對で別に曲みを直す事のない許りと心得て宜しう御座いますが羽箒などを持ち出て卷く前に拂ふのが本儀などれ客の前で物を拂ふは失禮で御座います

次は屏風で御座います之れは抱く樣にして中央より少し裾の方になる所を持ち程能き位置に立て六枚折ならば三枚づゝ披きて上坐より下坐に展べ納むる時も同樣の心得で宜しう御座います一隻のは上坐より下坐に立て書畫の時は書を上坐に畫を下坐に立て上坐の屏風の端を下坐の屏風の端の上に一寸許重なる樣に立つるのて御座います。

実傳

戰國武人の母

（幸田彦右衛門の母の話）

依田學海

婦人で節義の爲に死にましたものは。支那の歷史に澤山あります。それは諸史のうちに。節婦傳。又は節母傳などゝいつて。その事蹟が。委しく書てあります。しかし。いづれも。學問が。あつて昔の事を善く識りまして。それを學だもの〻樣でありますが。日本でも隨分義母節婦も多くあります。それは主君に忠義を盡して。節に死ぬものと又夫の爲に貞節を盡して。死にましたものと。いろ〳〵ありますが。こゝに御話し〻ますのは。己の子の。忠義を勵まして。命をすてた美談であります。

織田右大臣信長公の子は。嫡子は。信忠と申して。明智光秀の爲に殺されました。次は。北畠信雄と申して。北畠氏の養子となりました。次は。三七信孝と申して。神戸氏を名のりました。いづれも大國を領して。勢盛でありましたが。羽柴筑前守秀吉。卽ち後に豐臣太閤と申た人が。信長公亡くなられましたによつて。己が代りまして。天下を取らうとしまして。秘計を運らし。信雄兄弟のなかを割き。兄弟爭をはしめさせ。信雄を助けて。信孝と合戰をいたし數度の戰に。信孝大に敗北しました。據なく和睦と事がきまりましたが。和睦と申と此頃は必ず人質と申ものを送りますが例でありますから。信孝は自分の乳母を人質として。秀吉の方に送りつかはしました。この乳母は幸田某といふ侍の妻で夫は早く亡くなりその子を幸田彦右衛門と申て武勇抜群にすぐれ。又忠義に篤ひ人物であります乳母もまた幼き主人に乳をもつてそだて長年奉公に怠なく實に賢婦人と稱せられましたから。人質と申と。孰でも難儀がりますに。この婦人は自ら進みまして。私は御先殿樣より厚き御恩を蒙りましたものでござります。譬いかなる難儀な事でも少しも厭ひません。萬一の事はありましても。決して人に笑はれるやうな事は致しませんから。是非自分も。まいりますと申て。出ました。信孝は大にその志を感じまして。左樣なら大儀ながら。その方參てくれ。その方に今別れるのは。實の母に別れると同じ樣に思ふと申て。涙ながらに。秀吉の方におくりつかはしたものであります。

さて乳母は秀吉の方におくられましたか。人質と申と實に憐れなとりあつかいて。一間の中に取籠て番人をつけ置きまして。一足も外出は出來ません。三度の食事も握飯かなにかで僅に饑をしのがせて。死なぬやうにするばかりて。難儀と申たら。このやうの難儀は無いと申事であります。この時乳母の外にも又他所から送られた。人質が數人居ましたか。いつれも。婦人てありますから。その難儀にこたへられません。夜晝泣明しますものもありますか。乳母一人は泰然自若としてすこしも懼れません。この乳母は昔の侍の妻てあ

りますから。何も古人の傳記を讀んでそれを學ぶものても無く。自然と節義鐵石の如く心を動かさぬ女丈夫とおもはれます。

さて乳母か人質となりまして。のち數ヶ月たちましてから。秀吉は信孝を亡さんと計略を運らしまして。窃に手を代へ品を代へまして。信孝の家臣を欺き自分の味方をさせました。そのうち乳母の子幸田彦右衞門は武勇すくれた侍てありますから。これを手に入れやうと大祿をやるから使者をもちまして味方につけと申て勸めました所か。彦右衞門はきゝ入ません。此は怪しからん事を仰らる。拙者信孝殿の乳母の子で俗に申す乳兄弟で御さる並々の家臣とは別段の恩義がわります他人は知らす。この彦右衞門に於てはさやうな不義な事は決して致しません。もし强て御勸なさるなら。御使者の首を頂戴して主人信孝殿にさし上ます。筑前守は先君樣の草履取の奴てありました。その御恩は中々申し盡されませんほどの事てありますのに。主人筋たる信孝殿に敵對申し。あまつさへ。人質などをとつて。和睦致すと申やうな無道人てありますのに。又御大祿をもつて我々を欺き主君に背かせんと致す條。天命を懼れさる不埒極まる奴て御座る。早々立還つて筑前守にありのまゝに申せと。散々罵りまして使者を追かへしました。

筑前守秀吉は使者か立還りまして。彦右衞門が返事をありのまゝに申しましたのを聽きまして。大に腹を立まして。憎い彦右衞門か惡口かな。さやうならは此方に所存かあると申て乳母を引出しきびしく拷問して。是非とも。悴彦右衞門をすゝめさせやうと。家臣ともを集めて評議に及びます。家臣とも申には。それは宜しく御座りますまい。かやうな人物の母でありますから。無理に申たらば。反て承知致すまいによつて。丁寧に御諭しなさるゝがよろしからんとの事で。乳母を筑前守の面前に呼出しまして。三七殿御事兄上に對し合戰に及ばれたるによつて。秀吉已とを得ず。御敵對申た。御手前は幼年より御附として格別奉公出精致せしとの事。秀吉實に感心致す。御子息彦右衞門殿忠節

拔群のよし。是又感心の至りに存する。秀吉感心のあまりに。彦右衛門殿を。我等方に招き申て。得と勘辨いたし。三七殿になほも御改心あるやうに御勸申さんと度々使者をもつて。申つかはした。しかるに。何と御心得違か拙者が言を承知致れず。あまつさへ。惡口に及ばれたと申事。これは秀吉が料簡を御存しないからである。御手前よりなほ書面をもつて意見を申され。秀吉に隨身あるやうに。御勸め下されと懇々と諭されました。すると。乳母は屹となつて。秀吉に向まして筑前殿なに藤吉殿御身は昔の身分を忘れさしやつたか御身が信忠樣の御氣に入て。出頭されたとき。何といはれた。此御恩は生々世々忘ません。譬城主の身となつても。昔の草履攫のやうに。御遠慮なく御使下されと申たを。その時この乳母が。はたに聽て居たぞよ。それに何ぞや。今日の有樣は大將顏の大威張信孝樣と和睦と見せ金銀財寶をもつて。人をたらし。人も有らうに。乳母の悴をよく。不忠不義のものとしやうとは。非義無道の大惡人無禮極るその一言きく耳はもち申さぬと。きつはりと言て退けた。秀吉は赫と腹を立て。家來に向て老耄めの無禮過言。それ引立ろといひました。家來はかしこまつて。はら／＼と驅けよつて。乳母を縛り上んとしましたを。秀吉の側にすはりました。一人の家來が。まづ／＼またつしやれと。とゝめまして。やがて秀吉の耳に口を寄せまして。何かひそ／＼話しました。すると秀吉は。忽ちに顏を和らげまして。さすがに信孝殿の御乳人秀吉その勇氣に驚き入たまづ／＼。この座を引とりめされと。いつて座を立た。

そのあくる日から役人が來て俄に乳母を一間のうちから出して。奇麗な座敷にうつして居間の道具夜具その外いろ／＼の物まで丁寧なとりあつかひて。丸で人質あつかひを止めてしまいました外の人質はこれを見まして何の事やら一向に合點がまいりませんが乳母は腹の中でちやんとわかつて居りますさては藤吉奴無理にしてはゆかぬと思てそれで手を替たなと思ひますからそしらぬ顏で平氣になつてそのあつかひを受て居りま

す
乳母はある日この部屋の召使の人を召ひまして日々の御とりあつかひまことに御丁寧でいたみいりますさてこれにつひて今日は悴彦右衛門の方に手紙をやりますから紙筆をもらひたいと申てとりよせまして一通の手紙をかきましたその文言の大略はかうであります
此度我等は信孝様の御爲に人質となつて羽柴方にとらはれとなつたか先日からいろ〳〵手を代へ品を代てその方を味方につけろとの事であるか信孝様の厚ひ御恩をうけたものか何んでその敵の藤吉奴に從はれやう最早我等の命は無いものとあきらめてくれ母がいかやうな死に様をするとも決してそれにおくれをとるな命を信孝様にさし上て立派に戰死して後世の名をのこしてくれよかへす〳〵もたのむ
といふやうな文言を長々としたゝめておくりましたこの文は內々ておくりましたから秀吉は一向にしりませんん彦右衛門はこれをみまして涙を流してよみ終りましたから終に心を決しまして返事をいたしまして母の仰には決してそむかぬときつぱりと答ました
それから數月たちまして秀吉から使者が立まして乳母に又いろ〳〵と恩義をきせて說きましたが少しもきゝませんます〳〵惡言雜言するのみであります秀吉もとう〳〵腹を立まして乳母とその外信孝の人質をのこらず磔の刑に處しました實にこれは殘酷きわまる刑罰でありますす長話しをしますもあまり好ませんから此位で止ます　（了）

木花咲耶姫

文學士　中内蝶二

富士の女神と世に歌はれて、淺間神社に齋きまつれたまふ木花咲耶姫命は、そも如何なる御方にておはせしか。申すもかしこきことながら、今よりは二千六百年の昔、天孫瓊々杵尊、はじめて日向の高千穗の峯に降りつきまして、この豐葦原中國に君臨したまふや、まづ高千穗の峯の麓のかた、磯うつ浪の音靜かなる笠

沙の崎に宮居をさだめ給ひぬ。世に笠沙の宮とはこれなりけり。

ある日空いとよく晴れて、朝日さしそふ海原のけしき、えもいはず美しき時、瓊々杵尊は輕らなる御装にて、濱の眞砂地はる〴〵と、波打際をたどりたまふに、松吹く風の絶え間〳〵に、何處ともなく機おる音は聞こえけり。さてもゆかしや、か〻る業知りたるもの〻、か〻る處にあらむとは思はざりしにと、あやしみながら、梭の音をしるべに進みたまへば、磯ちかく建てられたる八尋殿あり。なほ近よりて覗ひたまふに、内には雪の肌すきとほるばかりの美しきをとめの、餘念もなく機織りてありけるなりけり。

瓊々杵尊は、一たび此をとめを垣間見てより、いとゆかしきものにおぼしめしたまひて、片時も忘れたまふ時とてはあらず、焦かる〻思ひを抑へかねて、この旨を群臣にはかり、遂に宮に入れて皇后となしたまひぬ。

この美はしきをとめこそ、木の花の榮ゆるが如く、榮えましけむ天つ日嗣の、その本柱となりし木花咲耶姫なりけり。

咲耶姫は、大山祇神の女にて、磐長姫の妹なり。はじめ瓊々杵尊が姫を見そめたまひて、御口づから宮居に來ずやと仰せられたまふや、姫は尊の貴き位ひに迷うて、世の常の女の如く、飛び立つばかりに喜びて、直ちに仰に從ひはしたまはで、いとおとなしやかに、妾には大山祇と申す父の在れば、先づ父にはからせたまへと答へたまひぬ。その禮節をまもりたまふことの正しきは、この一事にても、はかり知るべきなり。

されぱこそ、姫は尊に事へたまひても、よろづ心をつくして、御なかいと睦ましく、二柱相並ひまして、政をしろしめしたまふに、もろ〳〵の臣民ども、いづれも其徳を仰き奉りぬ。

姫はほどなく御身重くなりたまひしかば、尊のお前にかしこみて、妾は既に姙みぬと覺え候とまうしけるに、尊は御首をかたけむたまひて、おかしき事もあるものよ、御身宮に入りてより、未だいくほどもあらぬに、さばかり速に姙むべき事やはある。それは思ふに、わが子

にあらで、國つ神の子にぞあらむといぶかしみたまひぬ、姫は思ひの外なる尊が御言葉に、口惜しくも、また恨めしく、腸もちぎれるばかり、身もよもあらずなげかしたまひしが、もとより尊にむかひて言葉をかへしまゐらせんは恐れあれば、涙ながらに申しけるやう、妾が君に事へまゐらする心のほどは、日頃のふるまひにても明かなるべきに、かゝる、よしなき御疑を被ることそ悲しけれ。君は未だ妾がまごゝろを、よく知らせたまはぬものと見え侍りいで〳〵この上は、まことのしるしを立て申すべしとて、恥を忍びてお前を退りけり。

さても、姫は、いかなる事を心に決めたまひし、この時の御心のうち、思ひはかり奉るだにいと哀れなり。

姫はやがて八尋殿を作らしめたまひ、其殿の内に入らせたまひて、わざと戸をつくらず、土にて四方を塗り塞がせ、みづから御心の内にて誓ひたまひけるやう、あはれ、今妾が生まむ子、天神の御子ならば幸くあれ。もし國神の子ならば、幸くあらざれといひつゝ、内より火を放ちて産ませたまふに、三人の御子すこやかに生れたまいぬ。その火の盛りなる時にあれませる御子の御名は火照命、次は火須勢理命、次に炎よわりける時にあれませしは火遠理命になむありける。姫は三柱の御子を懐きて、炎の中より出でさせたまひ、妾が誓ひまつりし言葉の如く、御子も我身もすこやかに侍り、これにても、なほ天神の御子にあらずと疑はせたまふかとまをしけるに、尊はあはれげに姫をいたはらせたまひて、われ初めより、御身が娠みし子の、まことに我子なることを知りき。されど、あまりに早くはらみぬるが故に、もし群臣どもの中、疑ふものもあらむかと、涙を忍びて、故さらに御身を苦しめしなり。これにて御身が威徳のほども、また、この子等の尋常人ならぬことも、明かに世に知れわたりたれば、今は誰ひとり疑ふものもあらずかし。わが御身をつれなくもてなせし罪は、ひとへにゆるさへたまへとのたまひて、御涙をおとしたまへば、姫もはじめて知りし尊が難有き御心のほどを、うれしとばかり泣き伏しけり。

まことに、姫が炎の中に御子を産ませたまひし時は、

既に心に死なむと思ひさだめたまひしなり。聞くさへ忌はしき汚名を被りて、これを忍びてあらむことは、死にまさる苦しみなれば、寧ろ、死して名を清むるに若くことあらじと思ひ定めたまひしなり。されば、その貴き御心を、天つ御神も感應ますく\て、御子も御身も炎の中に恙なきを得たるにこそ。

あはれ、この尊ありて、この姫あり。日の本の國開きぬる笠沙の宮の礎の、この二柱の御神おはしてこそ定りけれ。貴しとも貴く、かしこくともかしこし。

大統領の妻

（華盛頓夫人の傳）

鶯溪女史

（上）

家貧しくして良妻を思ふと古人もいへり、豈それ唯貧しき身に於てのみならんや、順境にも逆境にも相ともに善良なる內助を要す、古往今來身を立て家を起し、苟くも一藝に達し一技に熟して名を後世にとゞむるほどの人にして妻の助けを借らざるもの果して幾人かある我國にても英邁賴朝のごとき、勇略豊太閤の如きいづれも賢妻の內助に待つ處ろありし、さればこそ歌人も松にかゝれる藤と詠じ、泰西の詩人は柏に纏ふ葡萄の蔓にたとへけり。其藤や、葡萄の蔓や、晴天日朗かなる時にありては其樹のかざりとなりて色彩を添へ、怒風迅雷枝を挨ち、幹を倒さんとする日に於ては全力以て是を支ふ。世には巨人傑士の蹶出して後世の感仰を受くるもの多し、而して其巨人傑士をして斯の如くならしめたる內助者の苦心經營を知るもの尠し、米國獨立の本尊にして合衆國民の父たる華盛頓の妻のごとき豈に其一人なるべし。華盛頓の夫人は名をマルサーと呼び其先は英國ウェールスよりの移住者なりき、其家は代々農家にして、父なる人は性質善良、温和にして謙遜平和なる家庭の主として鄕黨の間に尊敬されし人なり、今を去ると百六十六年即ち西曆一千七百三十五年七月五日を以て合衆國の一洲ボルジニヤに生る、夫

人が幼少の折は、家道も豊かにして而かも極めて平和なる家庭の裡に育ちて、樂しき月日を送り迎へぬ。當時米國は未だ合衆國の姿を爲さず、凡ての地方は皆殖民地にして英國政府の支配を受けつゝありしなり、されば英國派遣の官吏は今の領事の如く各洲各位に其役所を搆へ、よろづ英國政府の指揮を待ち英國風の政治を以て振舞へりき。

當時この英國官吏の間には種々の弊風ありしが就中おのれが配下の殖民地より容貌美はしき少女を集め來りて侍女となし恰も封建時代の領主が其農民を遇するが如く、動もすれば其自由をも奪はんばかりなりき、されば後來華盛頓夫人となつて令名世界に轟く當年の少女マルサーも亦齡十六歳にしてホルダニヤ洲の知事の許に侍婢として朝夕の勉めに服しぬ、元より温良の質なる夫人は主人の命令に應じて萬事實やかに仕へしものゝ知事が配下の民に接してよこしまなる振舞ある事を彼れ是れと見聞して心密かに嘆息せしとぞ、斯くて彼女は三年の期を終へて家に歸るや彼の女の父母は最早嫁期にもなりたればとて、然るべき人に嫁らせんものをと思ふうち、軍籍にあるカスチスとて、名望もあり資産もある人より妻にとて申込まれぬ、幸ひの事なればとて其人と結婚を約しぬ、越えて一年黄道吉日を撰みて儀式も滯りなくやがて彼の女はカスチス夫人とぞなりけり。

琴瑟相和して同棲數年の間に三人の子を擧げたり、平和なる家庭、祝福は長へに此の家を見舞ふべく見へしに、實に滿つれば欠ぐる世の習ひ、間もなく總領の子は齡六歳にして果敢なくも病ひの爲めに斃れたり、日頃神經質にして健康すぐれざりし夫カスチスはこの悲しみによりていよ／＼其のこゝろをいため果ては病の床に就きて惱むこと數旬、遂には亡き子の後を追ふて空しくなりぬ。

長子去り、夫も又逝きし寡婦の身程世にはかなきものはあるまじ、如何に資産多きも慰めとはならじ、殘る二人も孤兒ありとも未だ頑是なき幼な子にて頼みとするには程遠し、當年のカスチス夫人がしみ／＼と世の味

氣なさを感ぜしはこの時にぞありける。

當時華盛頓は民兵の隊長としてオハイチ洲にありき、蓋し今の合衆國の北方に於ける一帶の地には佛蘭西より來りて住める一群の移住者あり、この移住者は次第に南方へ侵入し來りてオハイチ洲の地方に迫りしかば英國の移住人はいと不快に思ひ、一日も早くその鵬翼を支へ止めんと志し、其爲め急に一隊の師を編成せり、之れぞ即ち民兵なり、折りしも華盛頓は二十三歳或時は測量師となりて山野を跋渉し、或は人跡絶へたる地に露宿して種々艱苦を嘗め自から堅忍不拔の性を養ひ來りしが、民兵の指揮者として適當の材なりと鄕黨の爲めに擧られて其司令官とはなりける。

華盛頓部下を率いて深く敵地に侵入し、大に戰ひて勝利を得しかば州の知事(殖民地の長官にて英國人なり)に知られて稍々重要の地位を與へられんとせり。時に英國政府は一たひ佛人の侵入を耳にして事躰容易ならぬ事とし勇猛なる武官クラドックといへる人を派遣して華盛頓と共に力を併せて佛人の制禦に從事せり、されどクラドックは本國政府より派遣されしを笠に着て傲岸不遜華盛頓の忠告を用ひず、軍略其の宜しきを得ざりし爲め不幸にして戰ひ敗れ遂に敵手に斃れたり、敗報一たび到るや英國政府は大に驚きしが畢竟華盛頓の策を用ひざりし爲め是に到りしを察し此度は軍規軍略一切華盛頓に委ねたり、茲に於て華氏は敗餘の兵を集めて一隊を組織し、總大將として敵地に向へり、勇猛無比のクラドックさへ敢なく戰死せし敵地に向ひ華盛頓は如何なる伎倆を顯はすぞと上下萬人等しく注目せしが華氏の軍略宜しきを得て大に敵勢を挫きジヨルヂ二世の旗を高く敵地の朝風に靡へせしは誠に大功名にして一はブラトックの靈を慰し又一は英國の名を重からしめたり。

此目覺ましき働きによりて華盛頓の名は殖民地一般にきこへ渡り兒童走卒も其名を知らざるはなきに至れりされば其通行の地は何れに於ても拍手喝采して是れを迎へしが、パマンキーと言へる地に至りし時其地の鄕紳チヤンバーレンなる人の催ふしにかゝる歡迎會に臨

みし折、計らずも此所にてカスチスの寡婦に逢ひ、兩々相思の意通じ遂に千七百五十九年の一月十二日を以てある寺院にて目出度結婚の式は擧げられ一時不遇を歎したるカス未亡人は再度鏡面を拭ふて改めて華盛頓夫人とはなりたり。

結婚の後華盛頓は諸般の公務蝟集して、身に多くの暇とてあらざりしも三ヶ月は家に留りて其蜜乳月を樂めり、當時夫人は其二兒即ち先夫の遺り片身なる六歳の男子と三歳の女子とを伴ひてベルノン山の麓なる田舍家(ワシントンが義兄より讓り受けたる住家)に引移り華氏と共に新しき生涯に入り睦まじく家庭の樂を禀けぬ。

當時一家の生活は英國に於ける中流田舍紳士と等しく儉やかにして少しも奢らず、唯時々馬を郊外に馳せ、或は兎を屋後に逐ひ又は月夜端艇を流れに漕ぐなどする事を無上の華事とす、時には自から野に出でゝ菜蔬の園を耕やすことさへありき。

兎に角く夫人は曾て未亡人として佳なる豊かたる資產ありしが其の持ち來つたる諸什の內に、いと美しき一輛の馬車あり黑人の待者ありてこれを司とる、されど夫人は寧ろ騎馬を好み、日曜日の外は多くそれに乘らず、大抵は夫婦ともゝ轡を並べて山野に驅け競らするが常なりき。華氏が其知友の一人に與へし手簡に予は善良にして聰慧なる妻をむかへたり、誠に百年の苦樂をともにすべしと信ず、今や露ほども內顧の憂ひなしといへりき。實に華氏は善良にして慧敏の內助者を得て、其家庭は實にうるはしく、其生涯は實に幸福を以て充たされとんす。

琴瑟相和し鴛鴦相借ふて清風朗月の如きこの樂しき家庭に忽ち電光亂射、百雷一時に轟き、急雨盆を覆へすが如き凄じき出來事こそ生じたれ、こはこれ米國の歷史に於て有名なるスタンプ、アクトの破裂にして實に米國大革命の導火線なりき。

(下)

其頃英國政府は殖民地に向つて新古に苛税を誅求せしかは米國人民一同義憤を發して之に反對しボストン港

に於て端なく英國船と衝突し、事態いよ〳〵不穩となりぬ、本國にてはジョルジ三世米人の反抗を聞いて大に怒り、直ちに謀反人退治の軍隊をさし向くるに至れり。

自由の意志に富める米國人茲に於て何條團結せざらん先づ全州一致の檄は佛蘭克林(有名なる電氣發明者)によりて傳へられ、全州の大會をフヒラテルヒヤの町に開き各地の委員茲に集りて同盟一致の議を決し、茲に軍隊を組成し、華盛頓は衆に推されて其總督となり以て自由獨立の大旗を北米の野へ飜へしぬ。

かくて此年も暮、明くれば一千七百七十六年なり戰爭、の機いよ〳〵熟し、人氣ます〳〵揚りしかば、其七月の四日を期して、獨立の擧を世界萬國に宣告せり、午後四時を以て式を擧けんと前以て定らめれしに、いづれも開國以來の最大事、其盛擧を觀て、我後れじと朝まだきよりつめかけ押かけ、つめかけたる者數萬人堂々たる式を擧て獨立の擧を世界に誓ひぬ、さりながら軍隊は貧に乏しくして兵士は皆いづれも是れに苦しみ或は一杯の酒、一片の肉もなくして暑き永き夏の日に曝され、又は一枚の破毛氈さへもなくして寒き冬の夜を明せし辛苦の程は中々に筆も及ばず、全軍殆んど一週間に渡る斷食の難にあいし事さへもありしと聞く、此危運に際して士氣の依然として變ぜざりしは、ワシントンの衆望と同盟の人々の決心によるとはいへども亦婦人隊慰勞の力決して少なきによらざるなり。

華盛頓夫人は多くの婦人を集めて一隊を組織し、華盛頓の同盟軍隊にありて總督たるが如く自から此婦人隊の頭となりて群下を指揮し、衣服の事、食料の事、看護の事、出役者の留守宅の事などに力を盡し、絶へず軍中に往來して陰に陽に莫大なる助を與へたり、まさに萎靡せんとせる全軍の勇氣は是等やさしき婦人隊のなぐさめによりて常に其餘勇を恢復せり、就中尤も記臆すべきは是等婦人隊の時として傳令の任にあたりしことなり、密書を衣襟に縫込んで隊より隊に是れを傳ふ、誠に勇敢の擧動六尺の男子顏色なし、流石の英兵も初めの程は是れに氣づかざりしが、遂には是を悟り其毒手に

倒れしものも亦少からず、然して夫人も亦屢々此危險の任に當りし事あり。

されば夫人は、軍始まりてより後は多くの時を營中に費やし、餘り家に歸らざりし、其留守中は家事一切を養女カルパートこそ掌れり夫人此養女に（養女は華盛頓夫人の連子ジヤンの妻なり）書を贈り告げていふ、營中に於ける總督の部屋は誠にせまく、時々見舞われに席を許さぬ程なり、食物とては更によき物のあるなく、時としてはたゞ〳〵臭き鹽豚の一片に永き日をしのぐ事なり、されども物の缺乏は是等をさへもいと尊とからしむと、其狀思ひやるべきなり。

陽氣いたる處金石も亦とほる、貧に缺しき同盟軍隊の決心は誠に千曳の岩よりも重く、貧に富る英兵も亦是を如何ともするに難くや、其勢にひるみし折しも、かてゝ加へて義に富める佛人の一隊來つて是を助くるありしかば、いよ〳〵旗色のよくなり行くにつけて、婦人隊は少しく其閑を得て一旦其家に歸れり、されば夫人も亦ダルノン山の麓にかへりて其家事を司さどり、功なりてワシントンの歸らん時を待居たり。

然るに當時華盛頓の連子ジヨンは同盟軍司令部の幕僚として父に伴はれ居たりしが陣中圖らずも病に罹りて斃れぬ。夫人は此凶報を得て大に驚ろき且つ悲しみ再び陣中を見舞ひて其子の弔をなし且つ全軍の兵士を勞ひぬ。

英軍はコンウヱーリスに於て戰ひ敗れ、同盟軍全勝を制せしかば米國の獨立は全く此時を以て定まる、英米の全權委員は佛都パリスに相會して平和條約を結たり是實に其年の四月十九日にして今にいたるまで尤とも尊とき紀念の日なり、十二月を以て同盟軍も亦解隊し、こゝにワシントンは其職を辭して故鄕ベルノン山の麓に歸れり。

微々たる同盟の軍隊を以て、勇氣全歐を呑める英兵に對ひ、辛苦艱難、百折撓まず、遂に其効を成しけること如何に世界萬國の人を驚ろかしたりけん、各國使を馳せて是は祝し、就中獨逸のフレデリック大王は、世界に於ける最も老たる將軍より世界に於ける最も大なる將

軍に贈るてふ鄭重なる頌功の書を添へて美を盡したる贈物を贈り玉へり、又佛國の將官は相謀りて立派なる陶器の家具紀念の章を描けるものを夫人に贈れり。

戰場にありて衆望他に超へたるワシントンはこゝに再び推戴されて平和の世に立ち、任期二回、前後併せて凡て八年の間、善良なる大統領として國に臨めり、ホワイトハウスの裡にありて百事其夫を輔け、間接に米國全州に與へたりける夫人の功、史籍明細につたへずといへども、決して少々ならざるべし。

かくて一千七百九十七年の三月九日任いよ／＼滿ければワシントンは夫人をはじめ凡て七人の家族を倶にホワイトハウス(大統領の役宅なり)を出で、馬車を驅りて、戀しきもとの住居に還り、玆に純然たる田舍紳士の風に歸し、悠々自適餘年を送れり。

實に善良なる妻君、完然なる婦女の鑑として米國人今に至るまで其の德を稱して措かざるは此の夫人にぞある。

（畢）

文苑

和歌

遠山月　　從一位　久我建通

足ひきのとほやまもとの尾上より
　いてたる月の影のさやけさ

をりにふれて　　侯爵　鍋島直大

秋の夜の更けゆくまゝに雲晴れて
　ます／＼月そ照りまさりける

あるあした　　子爵　長岡護美

海をなすきり間に見れば富士の峯も
　はなれ小島の心地こそすれ

秋眺望

みなと田のすゑに入江やつゝくらむ
　いなほの浪をふねわたる見ゆ

深夜月

更け行けは月も靜ある心地して
やとれる松に山風そ吹く

翫月　伯爵　松浦詮

さかつきに月のひかりをうかへつゝ
飲む心さへみてる夜半かな

月前鴫

つき淸き夜をうれしきの羽かきも
空にすみ行く秋の夜半かな

古池月　子爵　竹屋光昭

むかしわか住にし庭のふる池に
月はかはらすやとりけるかな

日野阿新丸

親の爲め立てしいさをのひとふしは
竹のこの世にかくれさりけり

有栖川宮の御息所と共に日光山に遊はせ
給ひける頃　小池道子

玉くしけふたらのやまや寒からん
都も今朝はあき風そ吹く

高崎正風の君の家の名をわさかはのやと
おほせ給ひて其の故よししるし給へる文
を見侍りて

御めくみの露はかわかし朝顔の
花のかつらのなかき世までに

雨中虫　柳原愛子

降雨にぬるゝを虫もいとふらむ
枕にちかくこゑのきこゆる

故郷薄　小池道子

吾うれしすゝきはもとの儘なから
垣根は人のものと成りにき

草花色々

いろ〳〵に心うつりて秋の野は
花はなか〳〵折られさりけり

秋花藏路

虫の音もしたに聞えて秋はきの
末ふむみちかは行れさりけり

野徑月　一條悦子

暮れぬとて野邊のほそ路いそぐ間に
東のやまにつきは出でけり

月の歌よみける中に

訪ひ來つる友のこゝろもうちとけて
くまなき月を見るぞ嬉しき

夜むしをきゝて　大隈光子

秋はきの花のしつくにぬれながら
月夜さやかにむしぞ鳴くなる

露底朝貌　三輪義方

しのゝめの露の光は見えながら
またいろわかぬ朝がほの花

幼兒

みどり子のまだかたほなるものいひも
まほにかなしきものにぞありける

露

おもへ人野邊のかるかやかりの世は
たゞ朝露のけぬ間なりけり

月映露

よる見れば千艸の色もひとつにて
唯しらつゆにつきぞやどれる

秋夕

草しげきいちのちまたを見ても猶ほ
心さびしき秋の夕ぐれ

文章

磯の藻屑（一）

佐々木信綱

大磯漫艸

一昨年の夏は家こぞりて大磯の山かげに移りすみたりき、去年の夏はわれ一人駿河遠江の海に遊び、また安房上總の山をめぐりぬ、今年の暑さをいづこにか避けんと思ひめぐらすに、人け遠き谷陰、波荒き荒磯邊もよけれど、あまりに都はなれたらむわたりは家人のわづらひおほく、はた幼兒たちも

かよわければ、都近き海そをひとて再び大磯に夏を過す事に思ひさだめつ、出たちし日は石榑千亦、松寺久雄、橘糸重ぬしに新橋停車場に送られ、相澤求、西升子、西時雄ぬしに大磯停車場に迎へられて神明町なる家にうつりぬ、一昨年のは地獄谷とて、名おそろしき谷あひなりき、今年のはた名は町なれど桑畑芋畑の中にたてる家なりけり、二階にのぼれば、高麗山王城山は前にしみさびたち、波青き相模の海はうしろにつゝきたり、我爲は山にむかへるか嬉しく、子らの爲は山のこなたを汽車のはせゆくと、波の見やらるゝとが、こよなき喜びなりけり、

海見ゆる窓の手すりによりそひて
　幼なはらからしら帆かぞふる

都より共にこし新井幸之君は美術學校の生徒にして書に巧なり君が我家のさまを葉書にかきたる上に題して親しき友のかりおくりたる

訪ひ來ませ畑の中いほ畑の芋を
　とりてまゐらせむ何はなくとも

海邊にいでゝ鏡の浦に病をつくろひをる弟昌綱をおもふ

安房の山ふりさけ見つゝ思ふごと
　相模の海をおもふらむ吾せ

井原義矩君興津に物せし歸さとておとつれられぬ島津常治君をも誘ひて、高麗神社より花水橋のわたりを散策す

畑こえて林をこえてゆく道の
　ゆくてに匂ふ白ゆりの花

同じ歸さ平塚にかたにゆく道に二人の水兵にあひぬ帽を見れば砲術練習所とあり呼びとめて、さいつ頃初瀬艦より練習所にうつりし吉田又七君の上をとふに、我らは君より教をうくる者なりと語る、さはとて紙のはしにかきて言つく

松かけにうたかたりせむわか山を
　とひこわかせて海のうたひと

清泉君とひ來られぬ君は一昨年の夏を共に地獄谷

の家にすくしき、今日しも共にかの家のわたりそ
ゞろありきして
ゆふ〳〵書もて來つる橋のもと
　今年はしらぬ人のすゝめる
わき出る清水はもとの清水にて
　家のあるじのかはりたる哉
山かけのこその清水をとひ來れば
　こそのまゝなる水の音かな
山かけより折りもてこしき百合の花を携へて、湘
渥女史のおくつきにまうづ、一昨年の夏おとつれ
て物語らひし折の事とも、たゝ目の前に浮ひいづ、
小さなるをかめの花をなかめつゝ
　やせしおもわにうちゑみし君
枕べに香くゆらしてふしましし
　きみのすかたの今もみるごと
坂井辨君愛兒をともなひて箱根なる畑の守源寺に
あり、さいつ年の夏共に蘆の湯に浴み、二子山にの
ぼり、蘆の湖をわたりて、姥子、大地獄に物せし折
の事とも思ひいでられ、今年もいかてと思ひつゝ
君のすむ二子山のあたり見あくれは
日々海濱を逍遙して
　雲こそおほへ二子山のあたり
よる波に岸の砂山かはれども
　いははほはもとの巖なりけり
滄浪閣の花むしろに遊ひて
とぶ蝶のつはさ斜に日はさして
　蘭の香たかしゆふくれの庭
原田嘉朝、板倉藤子、印東富貴子ぬしなど打つとひ
て、歌のまとゐをす、燈を
竹馬の幼なあそひをかたりあひて
　むかしもちかき燈火のもと
ある日
我門にかよふのみなる畑の道
　誰にかあらむ打つれてくる
と眺めゐしに、石榑君中村樂水二君なりけり、いと
喜はしくて語り合ふに、關屋祐之、村田故山、池田

愛子、遠山直子、別府静子ぬしなとも訪來られぬ、さは大磯にある竹柏會々員のまとゐを物せんとてまつ共に寫眞をうつし、西ぬしの別墅につどひて、おのかしゝ樣々の遊ひをなす、終りて歌會あり、題は畑

石おほきせとのやせ畑たかへして
　今年みのりぬ小麥大麥

大塚楠緒子ぬしの書のはしに、こたひ擧けし女子の名を綾子とおほせつとあり、返りことに

ゆくすゑの綾よ錦よいかならむ
　ほゝゑみそめしなでしこの花

橘糸重子ぬし姉君姪君たち打つれとはれしに、あやにくにも雨打しきりし日にて、雨の中に來り雨の中に歸られぬ

さゆりさく淸水がもともとふへきに
　をしくも雨の君をかへしつる

家近き山にのほるに、書よむによき老木の木陰あり、

明日も來て又書よまむゑつかにも
　書よませたるならのしたかけ

夜ふかく磯つたひして

天地もねふりはてたる眞夜中に
　ひとり聲あるなみの聲かな

藤澤に物しつる歸さ

富士まうで大山まうでふるさとの
　話をかしき滊車のうちかな

文綱いさゝか病みしかは、進藤氏の診察を乞ひしに、やゝ日比經しまゝに、小原國手、國崎氏都よりふりはへ訪ひ給ひぬ、厚き御心いはん方なく嬉し、

くるしさに志はふく我子みる儘に
　親のむねこそくるしかりけれ

加藤氏古稀祝歌の序

坂　正臣

をはりたのあつたの北、神御衣の機屋のまちは、昔の松風の里にて、今も歌人のとのはにしらべあはする所な

り。こゝに、くれ竹のよゝをかさねてすまれたる、喬松齋加藤景鄰の翁は、古年古稀といふ齡、そのめぐみは、還暦とよぶ年なりしかば、子秀一ぬし、東西京のやむよなきわたりより、津輕沖繩のはて〴〵なるみやびをたちにまで、いはひのことのは、書畫のたぐひをこひたわし、かず多くあつめて、うつしまきもいとしたちかなるものとなりぬれば、こたび版にすりてわかたむとせらる。此のぬしは、はやくよにまなびのわざにたけ、さきには學習院の敎授となり、中ごろ名古屋の中學に移り、いまは甲斐のくにの視學官たり。この家數百年の前より、蓬が島の南の海岸、城の內といふ所にたち榮そしを寛文九年よりいまのなに所へはうつられき。景鄰翁うたよみゑかき、すゑものつくり、めぎみはたこのめ煑るわざにふかしとかや。さきに翁のつくられたるくさくさのもの、賜られしゐやびに、機家の家をおとなひしかば、翁いたくよろこび、家のおくのきよよなる亭へいざなひ、このめすゝめつゝ、古年この老松かげに園遊會をひらきし事などかたらいでゝ、さてその賀集の序は、たゞひとゝたりとも、かならずおのれにものすべくあつらへられぬ。おのれかの賀の歌を、いと久しくつなびきおきし罪もあり、かつは翁の系統、夫婦のよはひ、子のすぐれたる、家のとめる、そのふのものふりたる、ひとつとしてめでたからぬはなきまゝに、得もいなひしてずとゝのほらぬ一ことを、知多の浦扇が島なる、老たる樅のこかげの庵にしるす。時にゆふだち一しきりして、したたるしずくのすゞしさいひしらず。

明治三十三年八月十五日

秋の八千ぐさ

大橋孤帆

おのれに秋草を好める友あり、兒玉蘭陵子といふ。ことし八月の中頃。うちつれて百花園に遊び、くさぐさの花を見て、閑に半日を消しぬ。おのれの之れをものせんとするにあたりても、亦た子の力に藉ること尠なからねば、特に記して芳志を謝す。

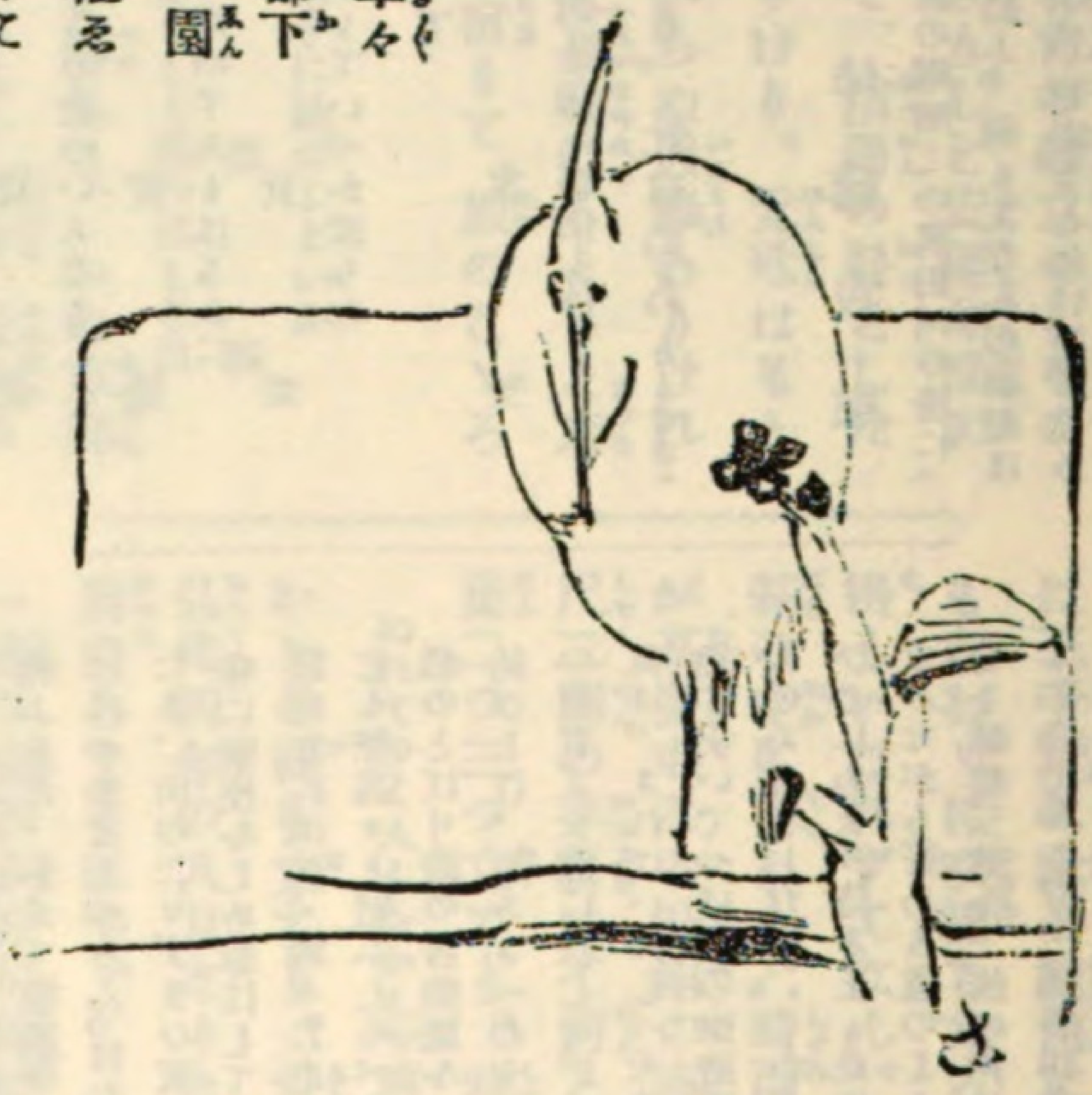
秋立ちて、まづ人の眼にうつるものは千草の花なるべし。歌人のうたひ出でんものもまた千草なるべし。千草の中にも、山上憶良の歌に、

芽子之花乎花葛花瞿麦之花女郎花又藤袴朝貌之花

これを秋の七種と稱へて、殊にあはれなるものに數へたりき。後の世になりては、桔梗刈萱女郎花荻萩薄瞿麦をもて、七種とするに至りぬ。されば七種につきてはいろ〳〵の說あれど、そは人々のこのみに委せおきて、今はたゞ廣く秋草につきて、聞き得たる事から書き試みんとす。

◉百花園

鹿の音のみを野邊に殘して、秋の草々を植ゑつくしたる百花園こそは、都下第一の秋草の名所なるべけれ。この園は文化の昔俳人菊塢が甫めて梅を植ゑて、梅花園と名づけけるを、つぎ〳〵に四季の花を移して、其景色を添へたりければ、終に百花園とは呼びかへたるなりけり。そのかみ菊塢のものしつる遊覧のつてに、



春は梅の香を茶に投じて參らせ、夏は牡丹芍藥の色を茶の水に寫し、時鳥の雨水を取り茶に煎じ、呼子鳥の聲に稀人をもてなし、秋は朝顔の露を百花にかもして、そが菊の匂まで來客をまつたよりとし、冬は紅葉のもとに尾花刈萱を榻にたきそへてうつりとし、春秋の名殘を思ふ風流の愚人のさかすみかに入ります惠に依りて、淸貧を養ふ雪の夜は松の葉をかき釜をたぎらせ、宇治の茶を角田川の水にてんじ、これを生涯の樂とす、培花餘暇角田川の土を以て都鳥或は盃或は湯呑等を製しひさぐ又手製梅干もあり

淺草觀世音のひがし吾妻橋より十二三丁三圍の堤づたひ筑波山を目あてに武藏雪月花名所角田川白鬚明神の森の麓にて

梅屋菊塢

天保十四年長月二日の事とかよ。德大寺大納言實堅卿日野前大納言資愛卿、勅使として關東御下向の砌、幕府の催によりて角田川に船逍遥をぞし給ひける。黑塗の舷丹塗の欄干に錦の幕打廻らし、朝霧を排して靜に川上へ漕ぎ上りたる、いかばかりま

ばゆかりけん。三圍の堤に船を寄せ、兩卿は御徒歩にて三圍神社に詣で、それより梅花園にぞ向ひ給ひける

梅花園の秋の草々を見て　實堅

いろごとに幾世かされむ百草のさかりひさしき長つきのあき　資愛

心ある誰がいつの世に植初めてさくやまがきの秋のいろぐさ

木母寺にて　實堅

世にふるもたえずすむらむ隅田川こぎゆく舟のすゑもはるかに　資愛

墨田川めぐみの波のかゝらずば名にのみきゝていつか渡らむ

實堅卿はなほ風雅の情に堪へずとて

山水秋深　實堅

色はまだ流れぬながら秋ふかきみいけにうつる木々の山かげ

短册にしたゝめて園主に贈り給ひき。此日のありさまを記しゝは

船逍遙を拜觀する辭　法橋寂樵

ことし天保十まり四の年長月ふた日、御勅使の兩卿この隅田川の邊に、遊覽あらせ給ふよし、人皆その日をぞ待ち給ふ。御もてなしの御船は麒麟丸とぞ聞え侍る。綾錦の幕もて裝ひたて、朝霧さしわけ漕ぎ登るけしき、優美ともみやびともいはん方なし。畵工の筆つくすともえやは及ばじ。やがて待乳山麓崎近くわたりに、御船さしとゞめ爰よりみかちにて、三圍の社に詣でおはしぬ。沓の音けだかく、神もさぞかし珍らかにやきこしめしけん。やゝこゝら優遊おはしまして、秋の草々とり集めたる園にならせられたり。色草もけふ思出と咲匂ふらんかし。猶四方の風景御覽ぜんとて堤つたひひろはせたり。里わの賤童どもはひうづくまりて、實にけうとくや思ひつらん。はた此川の名におふ鳥も、あひ難きけふに逢ひて、昔や忍びつらん。はた入江に苫ひきおほふ舟の、芦間にさし捨てたるなん、事さらに、御目とゞめて心よせ給ふらん。かくて梅若寺の墓のもと、柳さびたる叢祠のさま、いと哀れにやおぼしつらん。はた富士の白妙に粲えたると、筑波の緑は晴れ渡りたる、山のたゞずまひ實に目ざましう御覽じけん。かくてしばし木母寺に御座をしめおはして、日も西にかけるふころ御舟に召されつ。夕霧由江に流れ、瀨々たえ〴〵なる川の西に供奉の舟ひきつゞき、船子ども聲高々と唄ふしらべ遙に聞ゆるは、いと豐に見えていはん方なし。錦のとばり綾の苫美麗をつくしたるに、烏帽子狩衣召具して打のらせ給ひしは、見るさへ心うかるゝ粧なり。やゝ御船遠く見送るに、白妙の吹貫さゞ波に映じなびくは、さながら天つ少女のひれふる袖かとも見ゆ。さればいにしへ大井川に三つの船うかべしも、今こゝに見る心地す。いでやけふの御逍遙こそ都と吾妻の譽にて、四つの海靜なる御代のあらましなれ、しかあるに梅花園の主人も、かゝる折にあふを悦び心にあまり侍るまゝ此故よしを綴りてちと乞ひ求めらる。稲舟のいなみながら好める道のよるべなれば、そのありのまゝをつゞり猶つたなき蜂腰三首を、流の声の葉の短き筆を走らしむるは、かの難波津のよしあしをしり、淺香山のあさき源おひ辨ふるにも侍らず。たゞ主人の需に應ずるのみなりかし

めでつらむ雲の上人うへもなきみよながつきのみ舟あそびは

なれもいざこと語らへや都どり大みやびとのふなでする日を

唄ふその聲もほのかに夕ぎりのひまもれにほふあきの美うふれ

◉萩寺

柳島の龍眼寺はと問はゞ知る人も稀なるべけれど、萩寺といはゞ昔より萩の名所として、誰れ知らぬ者もなかるべし。この寺は應永三年良博和尚の建立せしものにて、當時は未だ何の風情もあらざりしを安延年間に至りて元珍和尚が始めて萩を植ゑて、消閑の料としたるより以來萩の名所とはなりしなりけり。元珍はもと京都の人にて、公卿高辻家とは淺からぬ因緣ありければ、安延三年の秋には高辻大納言家長卿はる〴〵と東路へ下向し しばらくの間この寺に宿りて、旅のこゝろを養ひ給ひきとぞ。

龍眼寺の和尚萩をすきて數莖をうゑ手に詠ぜよといふ　家長

きゝしより見るめぞまさるこの寺のにはにおりしく萩のにしきは

豐太閤の北の政所が植ゑたりけりと傳ふる、かの京都高臺寺よりもてこし種なりといふ、さるを此寺、安政の震災以來いたくさびれて、維新の際には一時無住とさへ成にき。されば境內は荒れに荒れて野原の樣に成にけるを、明治の代に至りて新川なる酒問屋廣岡某といへる者、茶事を好みて閑雅なることを愛でしかば、庭ををさめ萩を植ゑて、ふたゝび古の風雅を復するに至りぬ。元珍和尚の折には僅に數莖に過ぎざりけんを、今は三千坪に餘る境內に、三千餘株を植ゑこみたれば、枝もたわゝに咲滿ちたる頃は、露にふし風に靡くさまの得もいはれずてなん。

萩の中に亭あり。時雨の亭と名づけぬ。こは元珍和尚が高臺寺なる時雨の亭をうつしたるものなりとぞ。九尺二間の茅葺にて何となく奧ゆかしう見ゆ。前には紅葉二つ三つ立てり。時雨の名殘をとめんとにや。

ぬれてゆく人もをかしや雨の萩　芭蕉

かゝる碑も立てり。青苔いと滑なり。弘化四年の八月なりき。津輕甲斐守こゝにものして幽興のあまりにや。一枝の萩を手折り其ちくを嚙みて、さら〳〵と記し給ひける。

いくむらの錦とや見むさきみちてにはにおりしく秋はぎのはな

明治十六年には、英照皇太后宮、かしこくも萩寺の名を

枝々憔悴傍池阿　傘影衣香夢一過
衰柳殘荷欲相弔　不堪月下露痕ニ

青萍迂謙

聞召させられ、西四辻侍從に仰せて、撿分せしめ給うける。この頃はまだ十分の手入も届かざりければにや。侍從の歌に、

名にきゝし昔のあとのそれとのみにほひのこれる秋はぎのはな

明治二十三年の十月十四五日の頃、其夕暮の露も亂さぬ萩の下枝おしわけて、この寺をおとづれしは青萍末松博士なりけり。住職にあひて一夜の宿を求めけるに、すげなくもことわられければ、博士はたちどころに二首の詩を賦して去りぬとぞ。さるを此程に至りて、この事はしなくも京童の謠ふ所となりにければ、去ぬる八月十九日博士は輕井澤の別業に在りて之を聞き、あるかたに向ひて一片の書翰を走らせられぬ。

（前略）今は早一昔、思へば舊遊を偲ばれ申候。時しも胡枝の花は盡くるに垂んとし、柳は枯れ荷は敗れ、殊に誰彼の頃合といひ、秋の名殘庭の面に滿ちて、何となう哀さもまさりぬ。是かの作ありし所以。然るに詩歌と申すものは御承知の如く、數字の差にて巧拙天淵と相成候、かの詩は初稿の分にも有之歟、生手許に殘り居る分は左の通に有之候、名所の逸話と相成るからには、正しきものにして相傳へ度、即錄呈致候、孰れか　　苦澁、此間の優劣御昧可被下候。敬具

月欲黃昏雲欲流　胡枝花落寺門幽
賞秋人去不看影　獨有騷人來送秋』

◉草合

おのれ先つ日百花園に遊びて、多くの秋草を見、試に草合といふものをつくりぬ。こは花の優劣を定むるにはあらで、只其名によりて戯れに合せおきたるまでなれば、なほあきたらぬふしも多かりぬべし。

鶏頭　鳥爪
よろひぐさ　矢羽根の薄
大和撫子　朝鮮朝顔
紫苑　白朮（をけら）

鐵形　胃菊
丁子草　麝香草
三國草　四時花
さらさ萩　しま薄

眞葛花　狐のびんざら
仙人草　髭人參
男郎花　ふぢ袴
高尾舞　醉芙蓉

からむし　螢ぐさ
野菊　澤桔梗
だんどく　曼陀羅草
夕化粧　姫はぎ

大手かぶり　ひめぎぼし
紅かりやす　白よもぎ
宮城野萩　花しのぶ
帆立ぐさ　千鳥刈萱

虎尾　鬼の薄
ほとゝぎす　かたみ草
おぢぎ草　水ひき
松虫草　つゆ草

秋海棠　櫻たて
芙蓉　柳草
紅蜀葵　金唐爪
風船草　釣鐘草

羽衣草　天人菊
野豌豆　鉸こふじ
夷地楡（えぞわれもこう）　筑波萩
熊谷草　敦盛草

黄蜀葵　紅蓼
龍膽（りんどう）　虎杖（いたどり）
姫日廻草　蠅つり草
刈萱　桔梗

（菊　千年艾）（孔雀草　鳳凰草）（女郎草　禾薄）（三七草　百日紅）
（木萩　雞鷄頭）（仙蓼萩　汐竈菊）（朝顔　夕蝶花）（雁來紅（はげいとう）　鷺草）
（おしろい草　香水木）（小車草　貴船菊）（地楡（われもこう）　めど萩）（河骨　野苧（みうはぎ））
（こん菊　藍の花）（唐松草　朝鮮菊）（木蒲公英（きたんぽ）　草橙）（地獄繭　ずゝこ）
（燈龍草　貝殻草）（おとぎり草　むべ）

夏よりかけて咲けるもあれど、大方は秋の花なり。この中に枯梗と苅萱、むべとおとぎり草など其外にも、ちなみなき名を合せたるは、他に然るべきものを得ざりければなり。

◉めづらしき草

熊谷草と敦盛草とを、あはひ近く植うれば、敦盛草のかた必ず枯るゝよしなるもをかしからずや。今百花園には熊谷草の種を絶えたれど、一對すべき草なれば掲げおきつ。

夜會草といへるありけり。色白くして夜さく花なり。夜會の飾花によろしきをもて、しか名づけたりともいひ、苔の束髪（夜會とか云へる）に似たるをもて斯く呼びつるともいへり。この花もと支那より渡來したるものにて原の名は何といひしものか知るによしなけれど好者の中には從來の夕顔に對して、新夕顔と名づけたる者もありき、おのれは之を夕化粧と名づけぬ。

梅鉢草といふものあり。深山幽谷に生ずる珍しき秋草にして、花の梅鉢（紋）に似たるより名づけたるなり。里地には不適當と見えて、大方は枯るゝなものり。日光の山奥などに多しとぞ（芝、苔香園）

水蓮といふは、水盤ものゝ中にても、極めてされたるものなり。團子坂の薰風園にあるは、花の形といひ、色合といひ、よほど風變りなるものにて、花は菊に似て色は藤色ともいふべきか。讃州高松なる丹波某、嘗て米國より此種を取りよせて試に育てしに、薰風園の主人の彼地に赴きける折、これを見て異とし、强ひて一株を貰ひうけて持歸りたるなりけり。

楊柳菜、花は薄紅にして菜花の如く、葉は柳に似て緩やかに暢びたり。十年以前までは日光の山奥まで、採集に赴きたれど、よく〳〵調べ見るに、里地にも數多ある

とわかりて、今は山路を尋ねわりく人もなくなりぬとぞ。團子坂に三浦道安とて漢法醫ありけり。ある日薫風園を音づれけるに、この花いとうるはしく咲出でたりければ、道安老打笑みつゝ、園主この花の名を知れりやと問ひかけゝり。其頃園主は只珍しと見て植ゑおきしのみなりければ、未だ知らずと答へぬ。道安老再び言葉をつがいて、老人はよく此花の名を知れり。もし之を老人に給はらば、其名を敎ふべしとて所望したりければ、園主は終に之を道安老に贈り其名を問ひけるに、彼は長き髭を撫でながら、楊柳菜とぞ答へける。

◉盆栽と培養

紅かりやす、薄に似て其葉細く長し。半より葉先は紅もゆるばかりに美し。維新以前巣鴨なる植木屋内山某といへるが、ある諸侯より拜領して根を別けしものなりとぞ。もと荷蘭陀より來りしものなるを、それとは知らずして始めのほどは、我も〳〵と遠き山路をあさりさりきけりとなん。

秋草の盆栽をつくらんとするには、まづ桔梗荊萱薄女郎花のたぐひを、一つにして鉢に植ゑ、二三寸がほど芽の出でたるを頃として、之を苅りこみ、再び芽ぶきたるを深さ三寸ばかりの鉢に植ゑ替ゆるなり。七種の中にても女花郎と萩との二種は、斯かる育て方にては花の咲くものにあらねば、此二種に限りて、後に他の花の着きし枝先を切取り、同し鉢に挿して眺をとりあはすものなり。されど此枝の生ひつくは極めて難くして、十本の中僅に一本ぐらゐなるべし。肥料は三日に一度の割合にて、油かすを水に浸して、根もとに培ふなり。水は一日に二度、午前十時と午後五時頃を宜しとす。さて見頃に至らば、午前は十時十二時午後は三時五時の四度を以て水を注ぐべきなり。

蟲入の七草といふもの近頃の流行なり。植込の鉢の内になる方の土を、鐵葉などにて程よくしきり、其所に虫籠を伏せ置くなり。表より打見れば千草の中に虫の聲して、嵯峨野の秋もかくやありけんと、そゞろに其おもかげの浮ひいてゝ、何となうなつかしき心地すべし。

また石附きものに至りては、盆景の道具たる陶器製の

茅屋、はた地藏堂めきたるもの丶中に虫を入るゝなり。僅か一尺ばかりの小鉢の中を廣野に見たてゝ虫を聞もまたおもしろからずや。

鉢植の楓を紅葉さするは、この道の秘傳なりとかや。今其あらましを記さば、まづ七月の初の頃より簀張の日よけをしつらへおきて、此下に移しかゆるなり。猶いはゞ半日蔭にするが即ち時雨を欺く方法なりとす。水は一日に四度、午前は九時と十一時、午後は二時と五時とに於て根もとに注ぐなり。斯くて凡五日六日ごとには、積れる塵を洗はんがために、葉の上より水を注ぎかくるを宜しとす。讀者試みに小さき楓をとり來りて此秘傳を行はば、立田山のからくれなゐも、机の上に思ひやることを得べけんかし。

なほこの外、しるさまほしきこと數多あれど、あまりに煩はしき却りてなきにしかずと思へば。

秋のすさび

山崎よね子

夢

まろき浴衣にむらさきの帶大きく結びたる高島田の女あかき廣袖こぼれて風車めぐる乳母車を押しつゝ入りしいかめしき門には某別邸の札ありむかひ側は米屋團子屋あらものやと二十あまりも軒をならべたる間をはる〳〵打かこひたる板塀のはづれ小溝のそばにさゝやかなる飴賣の荷は置かれたり空をおほひて日かげも見せぬ雲まはゆく風またく絶えたるまひる時喇叭に來つとふ客人もなきに今の間とやねふるらむ靜まりかへれる紙の小旗がかけに麥藁の古帽子うつふけてさも心地よげなる飴賣が翁よ夢やいかならむ昔の夢か未來のゆめかいづれとは知らぬともあわれ道端の床よ飴箱の枕よさめてのおもひいかならむとこそ

すもゝの實

うしろむきなるかやゝがあら壁をゐとほすやうに照したる夕日のかげは消えはてゝ畑のすみのさゝ藪に風ふ

きいでゝ村の小道を母をよひ〳〵なきゆく子あり學びやにもまた通はぬ日の長さを蟬さしに暮したる歸さなるべし袖なしの衣きてくろ〳〵と日にやけたるが片手には折れたるもち竿片手には紙のふくろを大切にかゝへてはた〳〵とかけ足なりしがふと立止るや泣聲をのみつ小腰かゝめてぬきあしさし足のをかしさよ二あし三あしためらひては進みつ近よるは道端の石の上にあかき蜻蛉の羽をのしてゐたるなりけり又ためらひつつとめてひそかに音をたてじとそとさしおきつる竿のあやにくに折れゐたれば思ふやうならず音やしけん幸ある蜻蛉はまひたちぬ高く遠くかや屋を起えて晴れたる空にわかく小さくゆくへさたよなるを恨めしげに志ばし見やりしが思ひいでしやうに折竿とりあげつ更にもとの泣顔つくりて泣聲に母をよび〳〵歩みいでたるかなたに人影見えたり水の志たゝるまくは瓜の籠さげたる女の手束ねの髮かきあげながら道横ぎらんとしてこなたふりむきたる母なりけん名をよひてさしまねくに子はまた聲高く泣きながら懐より何かほろ〳〵落つるも知らずかけよりさま母の顏みあげつ後ふりむきつして何ならむ訴ふる樣なるを女は打うなづきつゝ籠もちかへて折竿もちたへて子の手ひきつゝ行過ぎぬ夕暮の色をさそう風さとふきて空のいろ森の色小草の色も黒すみ渡る村の小道、つめたくなりし道端の石のあたりに二つ三つ三つ四つまろへるはすもゝの實の熟したるよかの袖なしのふところをこぼれたるそれなりけり

すみの江の松を秋風ふくからに　聲うちそふるおきつしら浪

千鳥なくさほの川霧たちぬらし　山の木の葉も色まさりゆく

秋くれど色もかはらぬときは山　よその紅葉を風ぞかしける

白露を玉にぬくとやさゝがにの　花にも葉にも糸をみなへし

學藝

秋の夕

藤堂梅軒

姉「アラ、好いお月さま……露子さん、チョイト、居らつしやい、どうも圓々としたお月さまですョ、少し庭の方を歩いて見ましよう」

妹「お姉さん、どこか、好い虫の聲がしますことネ」

姉「ソー、秋の夜には、よく虫が鳴くものです、此のよーに草の茂つて居る所なんぞば、色々の鳴き音が聞こえるもので、ずいぶん昔から、風流な人はわざ〳〵野原へ出掛けて、秋の夜の鳴く虫を聞いたそーですョ、堀川院の御代には、虫撰といつて、殿上人が嵯峨野あたりへ出て、まつむし、すゞむしなどを捕へて、籠へ入れて、内裏へ奉つたといふことでしたョ、それから又明治御維新前までは、毎年加茂の神主より、八月の朔日に、内裏へ虫を奉る舊例があつたそーです、今でもまだ虫屋といふものが、緣日などには、必ず店を出して種々な虫を賣るから、これを買つて樂しむといふのは抑ゝ由來のあることですネ、

それて虫に付いて、詠まれた歌などが澤山にあります、その中で

琴の音にかよふは峯の松風を
なほ松虫の聲やそふらん

といふ歌がある、これはまつむしの好い聲を松風に喩へたものであります、又それに

きり〳〵す鳴くや霜夜のさむしろに
衣かたしきひとりかも寝ん

といふ歌は、露子さん、よく百人一首で記えて居らつしやるでしよう子、

マア、それは歌のことですが、これから、色々の面白い虫のことについて話してあげましよう、ソレ〳〵其處にリーン、リーンと鳴いてゐるのが居ましよう、それから、チロリン、チロリンと響くのもあるでしよう、それ

は露子さん何といふ虫ですか、言つて御覧ョ、」

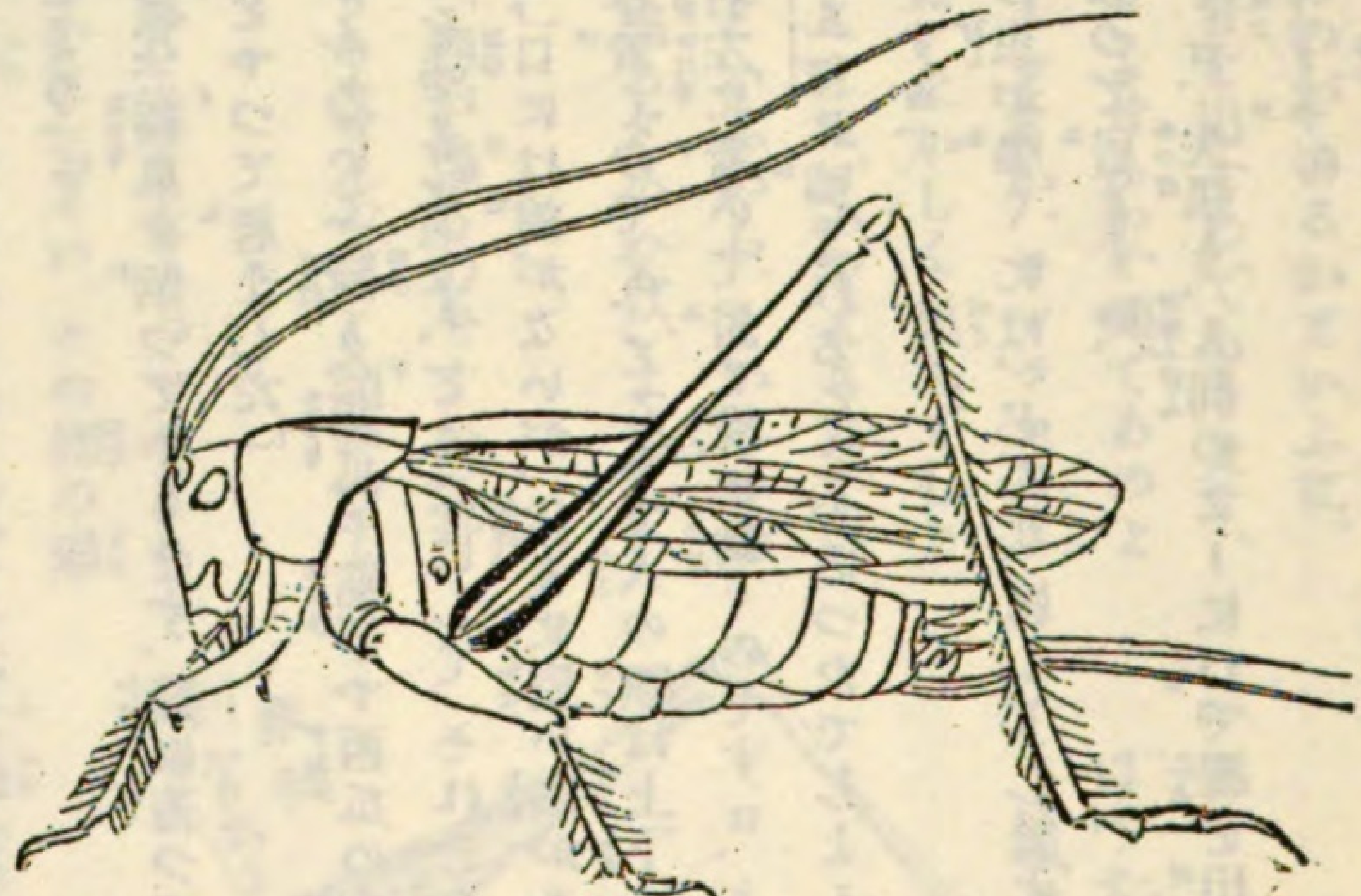
妹「それですか、何でも何ちらかすゞむしといふでしたらう、よつく記えて居ませんが」

姉「左樣、當りましたョ、すゞむしはリーン〳〵まつむしはチロリンといふのですそれから又スエン、スエンと小さな聲で活潑に鳴くのはかねたゝきといふ虫で、クチエ、クチエと鳴きますのは、えんまこほろぎで、コロコロジー、コロコロジーと鳴くのはこほろぎで、それから、ガチヤ、〳〵と續けさまに騷々しく鳴いて居るのはくつわむしであります、中できりぎりすといふのが、それあの、いなごばつたのような姿をして居ますが、ギース、チョンと鳴いてゐるのが、此のきりぎりすに能く似て少し瘠せた體をしてゐるものにうまおひといふものがある、まるで馬を追ふように、シー、シーと鳴いてゐますョ、面白いじやありませんか、こんなに秋になつて、賑はしく鳴く虫はどれも皆ばつたの類であります、その鳴き音は少しづゝは違つて居ますが姿はどれも大した違はありませんで、先づ似寄つたものであります、



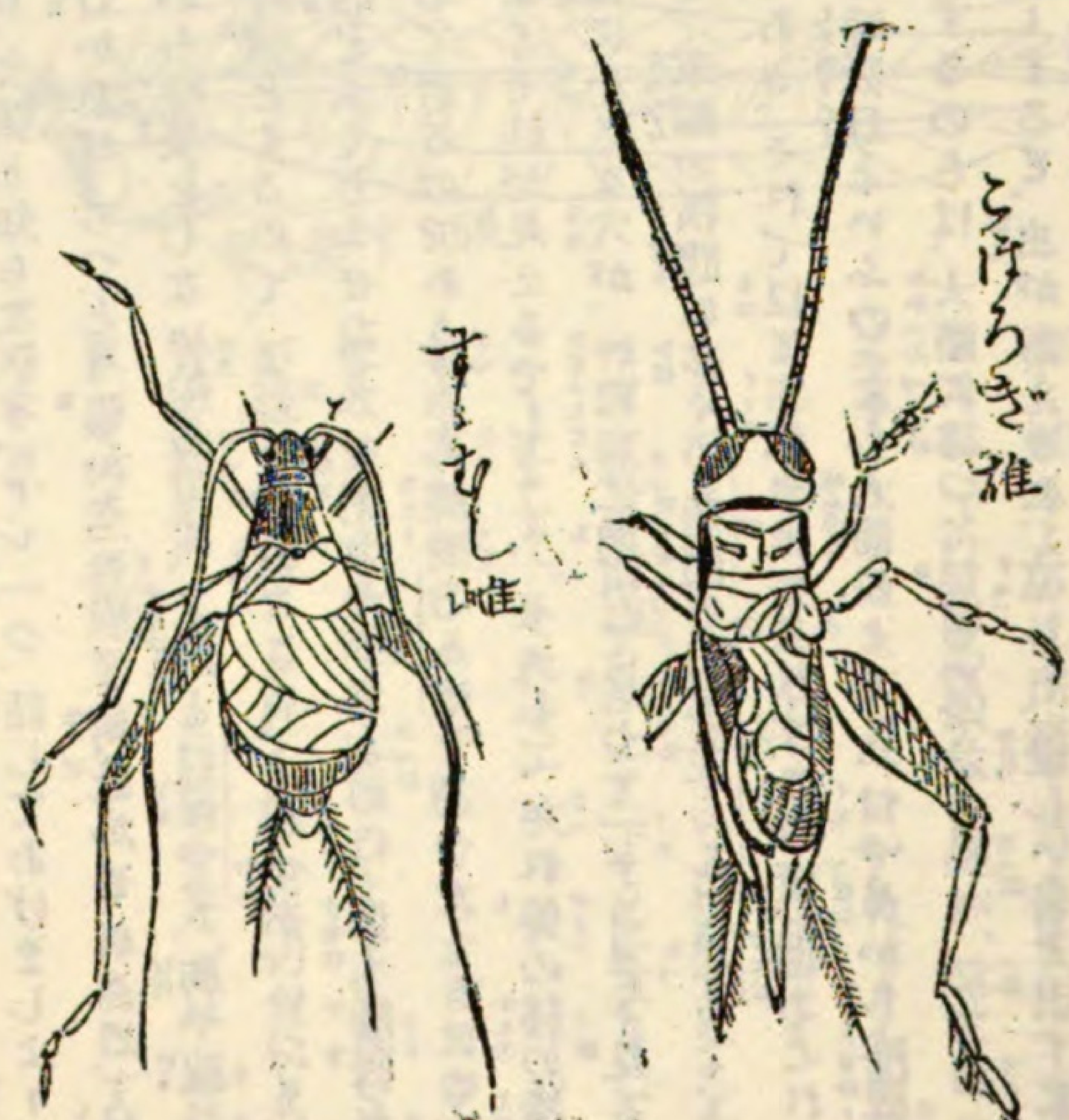
さて其の姿はどんなであるかといふと、チョイト人の體を四這ひにしたよーで、胸

と腹と、離れて居る、そーして其の腹部には幾線か節がありますそれから人は手と足とで四本ですが、この虫は皆で六本あります、その六本の中で手と足との區別がない、皆足のよーに働くのでそーして六本ともが胸にくつ付いてゐます、奇妙でしよー、人間に若しも足が胸にあつたらそれこそ大變で‥‥その次に頭の方に、長い絲のよーな角が、二本ある、何



きりぎりすの雌

ぜそんな角があるのでしよーか、その虫が歩いて行くときに、その角をどんなにするか、ビク〳〵と振せて、食物を探りてゐるのである、何分手が歩くばかりだから、代りに角が觸つて、そんな働をするのであるです



すると、食物はどんなものだか知つて居ますか、きりぎりすを畜つてゐると、どんなものを食べさせるか、見たことがあるでしよう、」

妹「ハイ、見ました、胡瓜を割つてやります、籠に畜つてゐる人が、それをやつて居ました」

姉「そー、露子さんのいふ通り、胡瓜や茄子や西瓜の食べさした皮などをやるンです、どんなにして、それを食べるかといふに、口には歯がないが、代りに堅い顋があつて、それで噛み着くのです、ところで人の顋は上下にあるが、虫のは右左に着いて居て横に動くのですョ、よツくばつたやとんぼに噛まれることがあつたでしよーネ、丁度そんなですョ、

そこで、それ等の虫が鳴くには、どんなにしてしますか、露子さんは知つて居ますか、

妹「知つて居ますョ、矢張り、人間のよーに口で聲を出すのでありましよーネ」

姉「イヽエ、まるで違つて」

妹「オヤ、だつて、口から鳴かないで、どこから鳴くでしよーか」

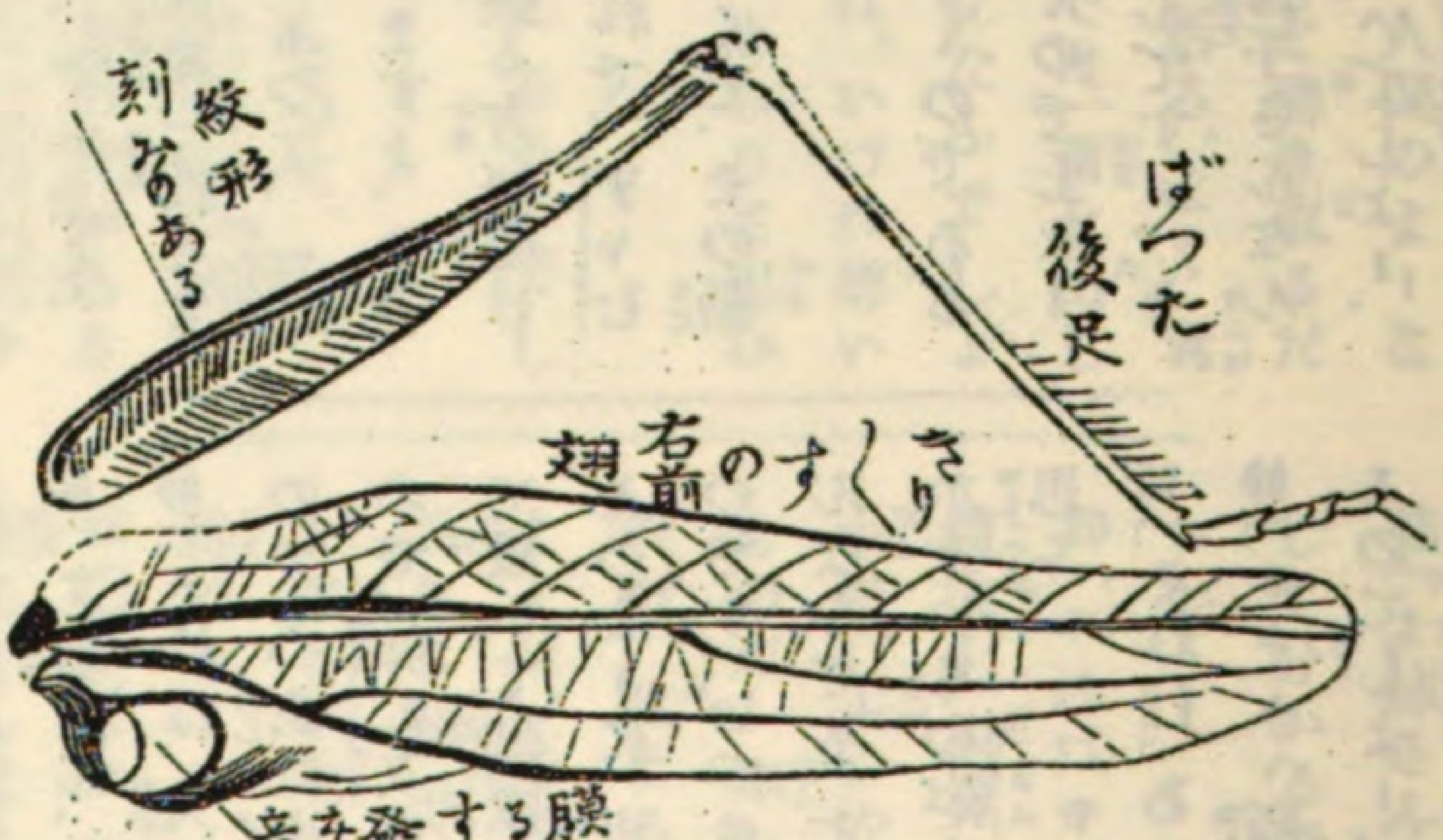
姉「ホヽ、露子さんは、よく知つてゐるだらうと思つたら、矢張り知らないネ、ドレ一つ、話してあげましよー、口からは、ちつとも鳴かないのョ、何故かといふと、口から呼吸をしないからです、人間とは違つて、胸や腹で呼吸をするので、よつく御覧なさい、その虫が、いつも腹をふくらませたり、又閉ぢたりするのは、即ち呼吸をして居るのであります、蝶やとんぼを捕つたときにも、よくそれが見えるでしよー、そーしてそれ等の躰の横側に小さな穴が、一節毎に明いて居つて、チョツト見ると、軍艦の横腹に多くの砲門の口が並らんで居るよーである、それで以て空氣を出し入れするので、即ちこれを呼吸口といふのです、人間のよーに、口や鼻から呼吸をするのとは、大變に違つて居るのですョ、

そーすると、虫があんなに、涼しい、優しい音を出すには、胸や腹でするかといふに、如何にもその理窟で、蟬なんかは其の呼吸口に膜があつて、それに強く空氣が觸れてあのよーに喧しく鳴くのである、しかしこゝに

いふ虫なんかは、全くそーではない、別に音を出す道具が具はつて居るンです、
何處にそんなものがあるかといふに、脊にある翅で音を出すのでわります、不思議ぢやありませんか、翅であのよーに、リーンリーンとか、チンチロターンとか鳴くとは、をかしく思ふでしよーが、をかしいことは、ちつともないのです、翅が鳴くといふから、をかしいので、それを翅が鳴るといへば、よろしいのであります、」

妹「どうすれば、翅が鳴るのですか、私ちつとも分かりません、早く聞かせて下さい」

姉「そんなに、氣を揉まなくつてもよろしいヨ、マア徐かになさい、その翅の脈に、チヤント、仕掛あがるからです、どんな仕掛かといふに、翅の表面に、龜甲形や鞘形のよーな、色々の線が



着いて居つて、それを擦り合はして、音を出すのでわります、全軆、此等の虫には胸部の背に二對の翅があつて、一對が前の方にあつて、後にある一對を被ふよーに出來て居ます、とんぼなんかでは此の四枚の翅が、常に開いて重さなることがないから、よく四枚ともを明かに見ることが出來ます、

そこできりぎりすやくつはむしなんかは、二枚の前翅を、上と下とに重さねるよーにして、それで一枚の表が外の一枚の裏に擦れるのでわります、この下になつてゐる翅に太鼓のよーに圓い膜が張つて居て、それを響かすのだから、音が高いのです、こほろぎなどは、奇妙に、その二枚翅を立てゝ、すれ合はすのですヨ、

序にいふてすがチ、ばつたなんかが、シユー〳〵と音を出すのは、後足の腿の内側に、細かな刻み紋があつて、

それを翅の脈とすれ合つせて、音させるのである、」

妹「何んですて、刻み齒のよーなものか、脈を擦ると、何うして音がするのでしよーかチ」

姉「そーですチ、露子さんの問は、有理です、ずいぶん、それは、をかしいよーだが、眞正の鋸と厚紙一枚とを持つて來なさい、そうして其の厚紙を手にもつて、鋸の刃に當てゝ、すり附けば、きつと、音がしますよ、その音は鋸齒の細いほど善く出る、又其の擦り方が速ければ速いほど、好い音がするものです、それで、すゞむしのよーなものは、翅の線目が餘ッ程細かくて、その動かし方が實に速いからであります、

それから、それ等の虫が、何故そんなに鳴くのであるか、悲しくて鳴くのだらうか、嬉しくて鳴くのでしよーか、悲しくてでもない、又嬉してでもないんですヨ、それは淋しいから、友を喚ぶのであります、露子さんなんぞも、一人よりも、連れのある方が、よろしいでしよー、その友といふのは雌のことで、即ち雄が雌を慕ふのであります、實に虫が友を慕ふことは、格別で、毎晩、夜を通して鳴きつゞけるのであります、

ところで、今籠の中へ、雄と雌とを、一番入れて置くと、決して鳴かないよ」

妹「オ姉さん、それは、何うしてゞしよーか」

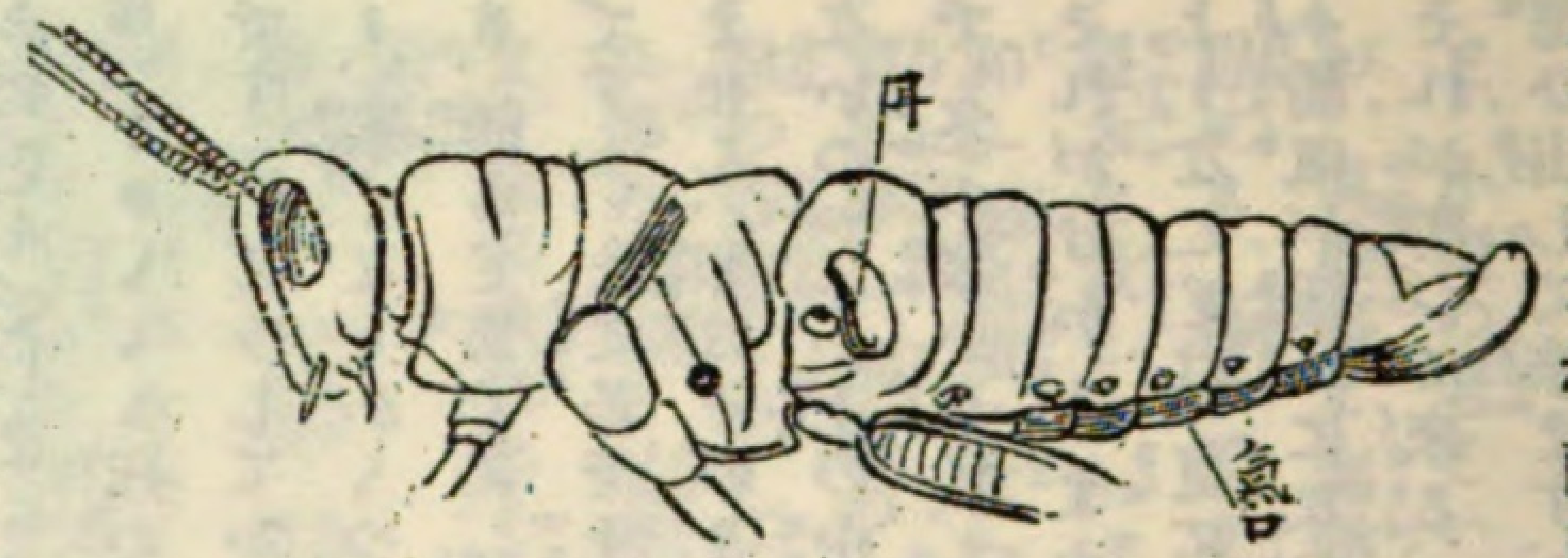
姉「それは、大抵いはなくても、分かるであらうと思ふのです、虫は夫婦ともに暮してゐれば、實に仲のよいもので、外に友を慕ふ要がないです、試しにそのよーにして置いて御覧、きつとその通りだらうと思ひますヨ、

そのよーに、虫が鳴くが、何れもこれも鳴くのじやないのです、いつも、雄ばかりが、鳴くのであります、露子さんなんぞも、よくきりぎりすなどを捕つて、ちつとも鳴かないものがあつたを知つて、居らつしやるだらうと思ふ、

妹「それは、あの、啞といふのですか」

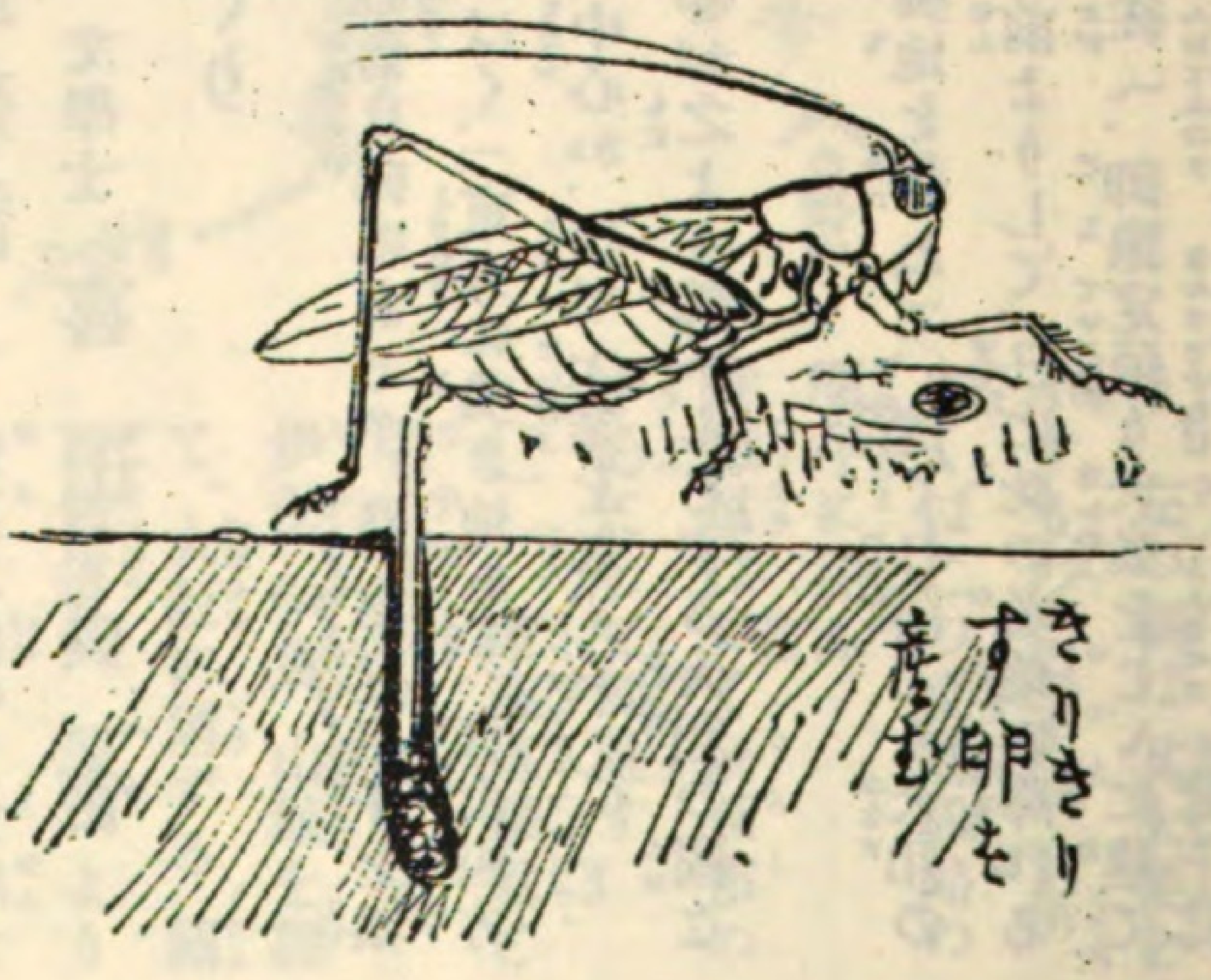
姉「オホヽ、啞なんて、聲を出さないから、啞といはれるのでしよーが、此の啞といふのは、みな雌でありますのヨ、啞といふことで、思ひ出すが、こんな虫に耳があるでしよーかチ」

妹「アラ、耳なんて、こんな虫に、そんなものは、ありやしませんヨ、」
姉「ところが、面白いのです、耳といふて、人間のよーな



ばつたの翅を切り去つた圖

耳ではないが、音を聴き取るだけの道具は持つて居る、よく考へて御覧、聾同士では、音を出したからとて、役に立たんでしよーネ、聲を出すのは、いづれ聴いてもらひたい爲であらうと思ひます、
妹「其の耳は何處にあるンでしよーか」
姉「それはネ、虫によつて、違つて居ますが、先づばつたの類は腹の根本の兩側に耳の穴があるのですヨ、それから、こほろぎの類では、前足の一節目に持つて居るです、人間なれば、首をかたぶけて聞くといふが、虫では横腹をかたぶけて聞くか、又足を突き出して、聞くといふよーなものですワ、アハヽヽヽ、
妹「オ姉さん、虫の雌といふのはどんなでしよーか、どうして分かるでしよーか」
姉「それはネ、その體末を御覧、虫の中に、尖つた長いものが一本あるものが、見えるでしよーヨ、そのが雌である印です、きりぎりすなんぞは殊にそーヨ、」



妹「だつて、なぜ、雌にそんなものがあるンでしよーか」
姉「サア、それは雌が兒を産む道具です、その刺のよーなものが、管になつて居るので、それを土の中へさし込

んで、卵を産み落すのであります、」
嫁「アラ、子を土の中へ、……可愛そーなことネー、直きに死んでしまふワ、」
姉「オホヽヽヽ死ぬどころか、そのお蔭で子が助かるのですヨ、どうしてかといへば、卵を産む頃は、秋の末で、もー、寒くなりかゝつてあります、だから折角産んだ卵も、孵ると直ぐに、死んでしまはなくッちやならないのですヨ、ところで土の中に産んだものであるから、死にません、卵はそのまゝで土の中にあるから、どうもならないのです、土の中といふものは、ずいぶん温かなもので、冬の寒い日に、井から湯氣が上るところを見ると、それが分かります、だから、冬の中は卵のこゞえるよーなことは、更にないのです、それで春になると、段々陽氣が暖かになつて來るから、その陽氣で、ひとりでそれが孵つて來る、そーするとそろ〳〵と土の中から、這ひ出して來ます、
そのよーにして、始めて出て來たものは、小さいもので、まだ翅がありません、たゞ長い角を振り動かして、跳ねて居るばかりです、その中に段々翅が生へて、親の姿となるのであります、

（次號完結）

日本名蹟雜話（口繪參照）

文學士　喜田貞吉

大和めぐり

◉むかし神武天皇の尙日向にあるや、諸皇兄皇子を集めて、議してのたまはく、「東方に美き地あり、青山四方に繞る、思ふに國の中心か、以て大業を起すべし」と、此の美地は即ち我等が之より說かんとする大和の國なり。

◉神武天皇はこの美地を尋ねて、遠く日向より大和の國に移り給ひ、其以前よりして、已に此の美地に降れる饒速日の命等をも從へ、御豫定通り大業をこゝに建て給ひしが、之より桓武天皇が京都即ち平安京へ、都を遷し給ふまで、五十代の間の帝王は、大抵この大和國内に都を定め給ひ、殊に最後の七代七十餘年の間、即ち所

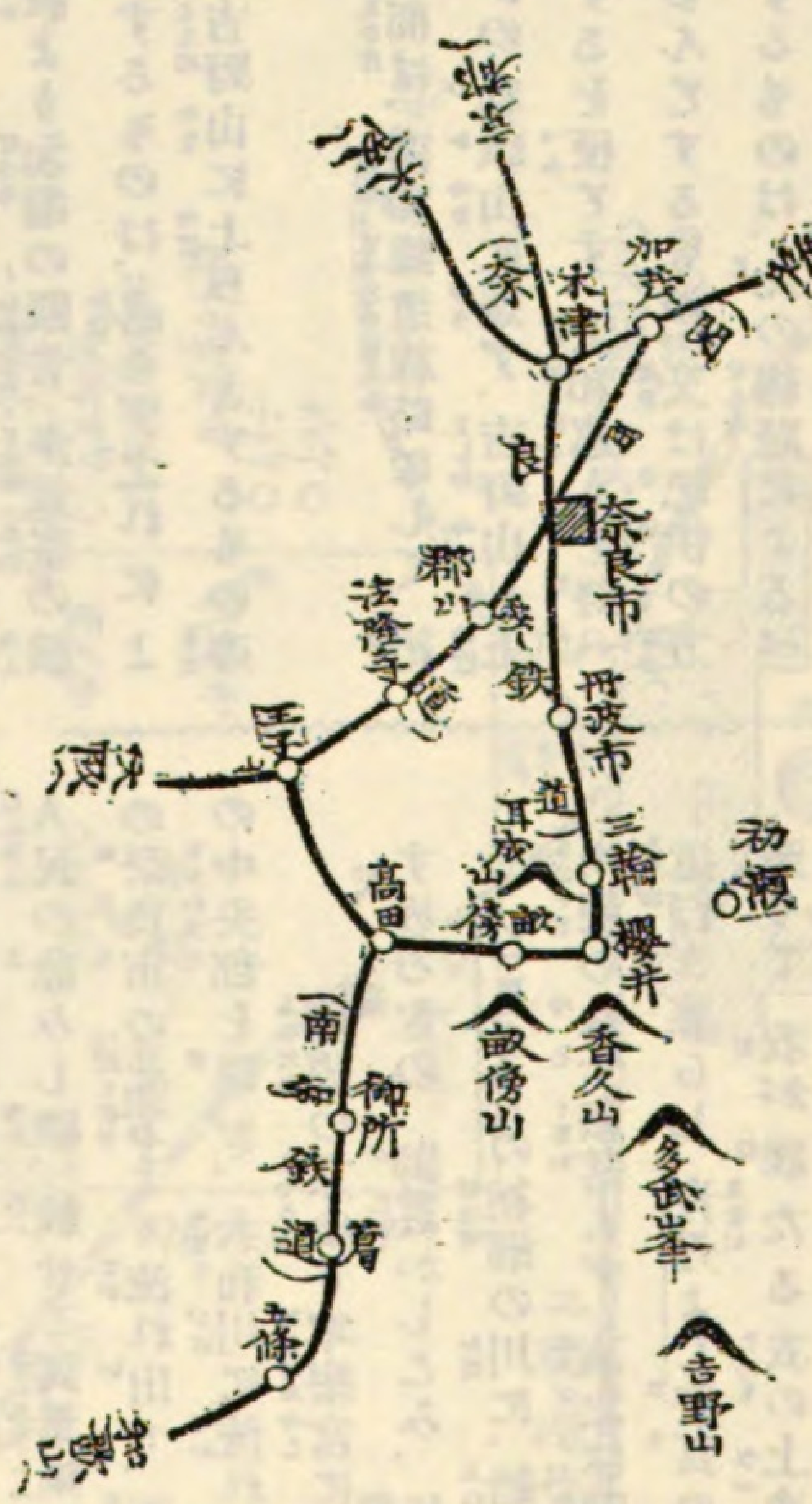
謂奈良朝時代は、

　　青丹よし奈良の都は咲く花の
　　　匂ふがごとく今さかりなり

と、小野の老といふ人が、其盛事を謳歌せし程にも、極めて文物の盛大を致しゝかば、大和一國名蹟に富む事、實に夥し、都鄙の人、春秋の好時を卜して、これ等の名跡を巡覧するを、世に大和めぐりと云ふ、

◉大和の名跡、其數極めて多けれども、殊に多きは大和の西北隅なる大和地方なり、此地方は實に大和中の大和とも云ふべきものにて、地方の人は之を「くになか」と云ふ、神武天皇の嘗てのたまはれたる、

大和平野鐵道略圖



「國の中心」の義なり、

◉國中地方には、奈良鐵道、關西鐵道、南和鐵道なその線路縱横に通じて、名跡を探るにも、頗る便利と成れり、左の圖は其大要を示すもの、以下説く所、多くはこの交通線路の順序に從ふ、

◉鐵道は多く奈良市の中心として開通す、

（一）東海道鐵道と名古屋驛に分れて、伊勢、伊賀、山城を經て、大阪に通ずる關西鐵道は、加茂より奈良に向つて支線を出だし、奈良より、更に西南の方、郡山、法隆寺、王子等を經て、大阪に至る、東國の人、または大阪などより大和めぐりするには、必ず此線路によるべし、

（二）奈良鐵道は前にも述べたる如く、京都より木津を經て奈良に至り、更に南の方櫻井に至る、京都より大和めぐりするものは、無論之によるべし、

（三）王子と櫻井との間は、關西鐵道の支線にして、平野の南方に通じ、大阪より初瀬の觀音、多武峯の談山神社などへ詣でんとするものは、必らず之れによるべし、多武峯を經て吉野山に上らんとするもの亦然り、

（四）高田と五條との間は、南和鐵道線路にして、紀和鐵道と連絡して紀伊の和歌山に通ず、吉野山へ上るには、この葛驛よりするを便とす、大和巡りを終へて、紀州の高野山へ上らんとするもの、又は紀伊の方より、大和巡りせんとするものは、此の線路によるべし、

奈良名所

◉元明天皇が都を平城へ移し給ひしは、今より凡そ一千二百年前にて、即ち和銅元年に都城の經營をはじめ給ひ、和銅三年に成就し、遷都し給ひしなり、これより以前は、藤原の宮とて、南方櫻井の邊にありしなれば、遷都に就て、人民は、初瀬川即ち大和川の上流に船を浮かべ、更に其支流なる佐保川を遡りしものにて、當時人民の詠みし歌、萬葉集にあり、佐保川とは、今の奈良市の北方より流れ出で、西南流して、古の平城京の中央部を過ぎ、大和川に流れ入れる川なり、

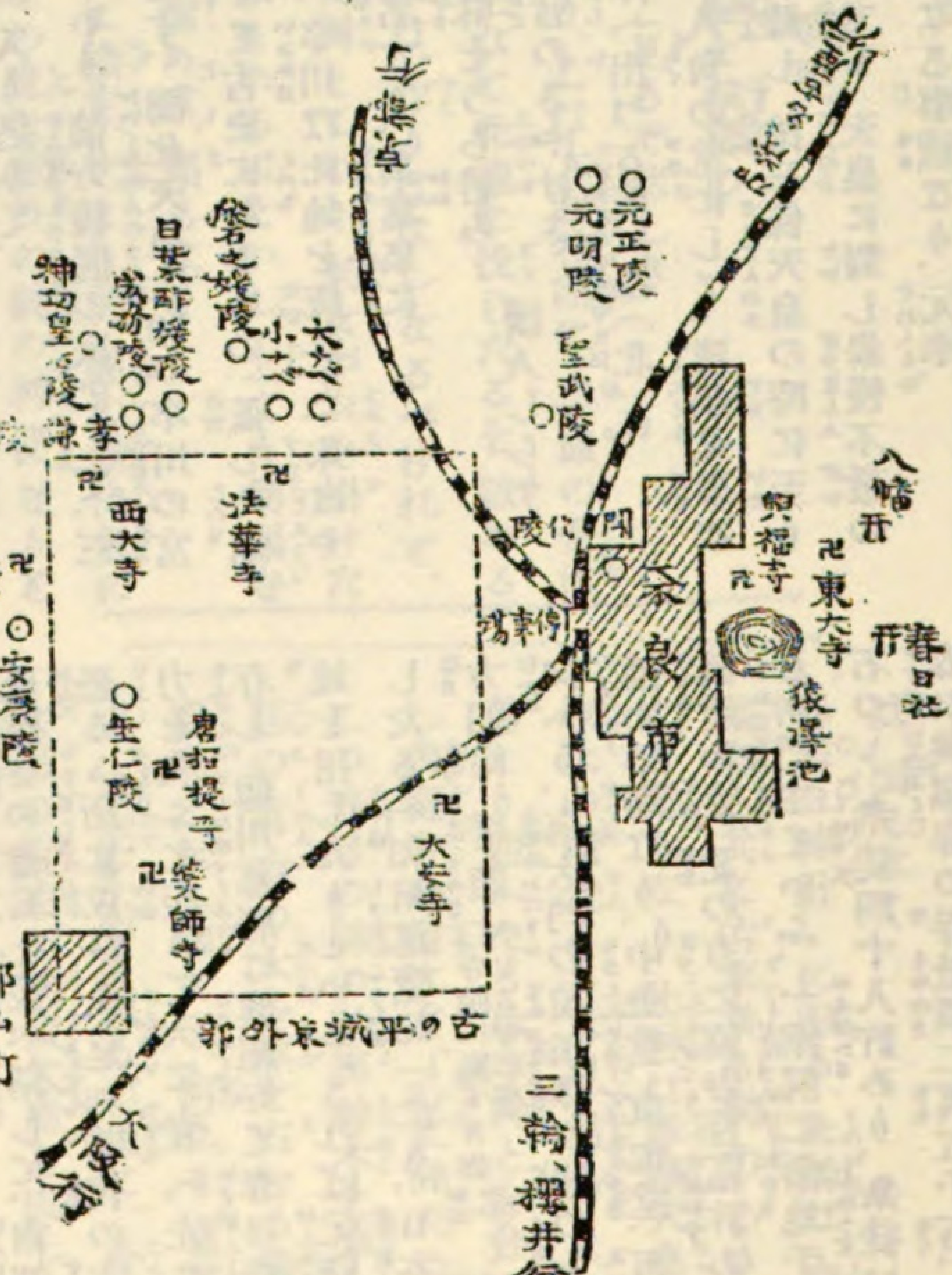
　藤原の京より寧樂宮に遷れる時の歌

天皇　調和

すめろぎの、御言かしこみ、にぎびにし家をさかりて、こもりくの初瀬の川に、船うけて、我が行く川の、川隈の八十隈落ちず、萬たび顧みしつゝ、たまぼこの道行き暮らし、青丹よし奈良の都の、佐保川に、い行き至りて、我が寢たる衣の上ゆ、朝月夜さやに見れば、拷の穗に夜の霜降り、磐床に川の氷こゞり、冷ゆる夜を息ふ事なく、通ひつゝ作れる家に、千代までに居まさん君も我も通はん、

青丹よし奈良の家には萬代に
　我も通はん忘ると思ふな、

◉千代までに居まさん君と祝ひ、萬代に我も通はんと契りし奈良の都も、咲く花の匂ふが如き盛時長久ならず、七代七十餘年の間にも、淳仁天皇の近江の保良の宮、聖武天皇の山城の恭仁宮等の暫時の遷都もありて、桓武天皇延暦遷都の後は永く舊都となり、市街も荒廢し、道路も田畝と化したる趣に見ゆ、◉然るに奈良朝の盛時に當つて、勸請し、建立したる春日神社東大寺、興福寺等の如き大社、巨刹は、其後と雖も朝廷並に藤原氏等の尊崇あつく、益盛大に赴



きて、無數の僧兵之に住し、僧房堂宇多く建ち連りて、門前また爲に市を爲し、遂に今日の奈良市の基をなせり、◉されば今日の奈良市は、昔日の平城京とは其位置を異にし平城京の址は、今は田地となりて其間に僅かに街衢の面影を殘し、奈良市は平城京の東方郭外なる興福寺、東大寺、春日神社等の所在は、別に起こりたる市街なり、◉汽車にて奈良へ行くものは、京都よりするも、大阪よりするも、はた名古屋よりするも、皆一

樣に市西の停車塲につく、停車塲より西、田圃の間に一直線の道路あり、之れ大阪街道にして、古の平城京の

◉三條通　の殘れるものなり、此道を東に向つて、市中に進まば、少し左方(北)へ入り込みて、

◉開化天皇の卒川山陵　あり、前方後圓の塚にして、三方は繞らすに溝渠を以てす、開化天皇大和の卒川の宮にありて、天下を治しめすと古史にあるもの、蓋し此地方に居給ひしものならん、卒川は此地を流れて、末はやがて佐保川に入る細流の名なり、萬葉集に、

讀人しらず

はねかつらいまする妹をうら若み
いさ卒川の音のさやけさ

更に東に進みて、市街を東へ出づる所、左(北)に

◉興福寺の南圓堂　あり、八角の堂にして、建築見事なり、むかし藤原冬嗣之を創建し、後三條天皇の時に至りて、藤原敎通之が再建を企て、天皇に對し暴慢不敬の擧動ありしは、歷史上著名なる事蹟なり、元來、

◉興福寺　は藤原氏の氏寺にて、もと山城の山科にあり、よりて或は山階寺ともいふ、平城遷都と共に、藤原不比等即ち淡海公、之を此地に移し、次で春日神社を管して、勢力極めて强く、無數の僧兵之に住して、朝廷に於ける藤原氏の權力を笠に着、頗る暴慢の行ひあり、延曆寺の僧兵と並べ稱して、南都北嶺と云ひ、尤も世の恐るゝ所に成れり、足利時代の末に至り、藤原氏全く勢力を失ふに至りて大に衰へたれども、尙昔時の面影を存し、德川幕府は興福寺と春日社とに、二萬五千石の領地を附したりといふ、されば元祿の頃に、貝原益軒の著したる「和州巡覽記」にも、日本一の大伽藍なり、境內方四町、塔頭○寺院に屬する他小なる寺の事多く境外にあり、寺は南に向へり、南大門の前猿澤の池の上の芝原は、猿樂の薪の能ある所なり、中金堂、東金堂、西金堂、南圓堂、北圓堂、講堂あり、北の方に脇寺百區許あり、大乘院、一乘院を兩門主といふ、一乘院に領地千五百石、大乘院に五百石つゝ、衆徒四十人許あり、衆徒は妻帶短刀をさす、凡春日興福寺の寺社領二萬五千石、樂人二十五家ばかりあり、此寺古へより八度炎上す、第八度は後醍醐帝嘉曆二年の春なり、其後小松院應永六年、足利義滿公建立、

元祿元年まで凡そ二百九十一年なりとあり、然るに其後享保のころにまた燒け、明治維新後更に衰へて、たゞ昔時の盛況を追懷せしむるあるのみ、興福寺の南、道を夾んで

◉猿澤池　あり、人丸の歌に、

　吾妹子がねくたれ髮を猿澤の
　　池の玉藻と見るぞ悲しき

と詠めるは此池の事なり、こは大和物語に、平城の帝に仕へける采女の、戀に侘びて此池に投じたるを詠めるにて、もとより采女の事は、作りばなしなるべけれど、今も池のほとりに、采女祠とてあり、采女が衣を掛けたりといふ衣掛柳といふもあるはをかし、之より興福寺の五重塔を左に見つゝ進めば、間もなく

◉春日神社の大鳥居　に達す、之より奥、鹿の愉快氣に遊ぶもの極めて多し、この鹿は春日の神の神使なりとて、古より特に之を重んじ、食を與へて飼養し、決して害を加ふる事なく、鹿を殺すものは人を殺すと同じ樣に刑したりきといふ、今は左に事はなけれども、尚決して之を害せざるが故に、決して人を恐れず、群を成して後ろより從ひ來るなど、極めて愛らし、鹿の遊ぶと、燈籠の多きとを見つゝ、春日野の木立の間をわけ行けば、間もなく

◉春日神社　に至る、此神は、藤原氏の氏神として、興福寺と共に古來最も勢力ありし事は、前にまでに述べたる通りなり、此神は孝謙天皇の御代の勸請にて、藤原氏の祖先なる天兒屋命と、鹿島神、香取神、及び伊勢より迎へたる比咩神とを合せ祀れるなり、されば若し興福寺の僧など、心に滿たぬ事ある場合には、直ちにこの春日の神の神輿神木を奉じて僧兵を繰り出し、朝廷の官吏の大多數を占むる藤原氏の一統は、氏神の御動座と云ふ譯にて、何れも謹愼を表し、朝廷へも出でず、自宅に引き籠るが故に、今日の言葉を以て言はゞ、多數の官吏が同盟欠席を成したる有樣にて、政務全く荒廢し、また如何ともすべからざる次第なれば、大抵の無理も、皆押し通すを得るなり、

春日神社の燈籠の多きは著名なるものにて、金屬製の

もの凡そ一千、石造のもの一千八百に近しとか、
春日神社の東に聳ゆるを春日山といふ、或は
◉三笠山 なりともいふ、阿部仲丸が故郷なる平城の都にありし時は、常に此の三笠山頭に登る月を見馴れしかば、支那の海濱にありて東海に上る月を見、忽ちこの故郷の事を思ひ出でゝ、

青海原ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に出でし月かも

と詠みて、支那人をまで感動せしめなば、何人と知れる所なり、三笠山より北へつゞきて、
◉若草山 あり、滿山芝生にて、例へば毛氈を敷きたらんが如く、極めて優美なり、されば春の比には近山の人群集し、學校生徒の運動會なども、よく此邊にて開かるゝなり、若草山の名は、

春日野は今日はな燒きて若草の
つまもこもれり我れもこもれり

といふ歌より出でしか、此歌は本歌として詠める歌に、

今も尚、つまや籠れる春日野の
若くさやまに、うぐひすぞ啼く

といふがあり、
若草山の麓に、
◉手向山の八幡宮 あり、もと東大寺に屬す、聖武天皇大誓願を起して、大佛を鑄造せらるゝに際し、八幡大神は大に之を贊成し給ひ、神官は神輿を奉じて、態々九州宇佐より此地まで來りし事、當時の正史に明文あり、それよりこゝに鎭座し給ひしなりといふ、境内に楓樹多し、菅原道實嘗て歌あり、

此度は、幣も取りあへず手向山
紅葉のにしき神のまに〱

この歌は、この度は神に手向けるべき幣の用意もなければ、この手向山に幣懸けたらんが如く、奇麗に見ゆる紅葉の錦をば、神の御心のまに〱幣とも見そなはせとの意なり、
八幡の北に法華堂あり、
◉三月堂 といふ、其北に
◉二月堂 あり、八幡と共にもとみな東大寺の境内た

り、二月堂の眺望極めてよし、之より西、最も名高き東大寺の

◉大佛殿 あり、中に大佛の尊像を安置す、佛像高さ五丈三尺五寸、聖武天皇の勅願に成る、費す所 熟銅七十三萬九千五百六十斤、白鑞一萬二千六百十八斤、錬金一萬四百三十六匁といふ、其後齊衡年間、大佛の首自ら地に落ちし事あり、治承四年平重衡火を東大寺に放つて大佛殿燒亡し、首また落ち、永祿十年再び松永久秀の兵火にかゝりて、首三度落つ、其後佛像の修補は出來しも佛殿はなくて、久しく露佛のまゝなりしに、元祿年間公慶上人之が再建を企て、遂に今日の偉大なる佛殿を成せり、佛殿高さ十六丈六尺、東西二十九丈 南北十七丈といふ、柱の貫穴よく人を通すべし、大佛殿の後方

◉正倉院 あり、もと東大寺の寶庫にして、聖武孝謙二帝の大佛に献納し給ひし種々の寶物、及び古文書等を藏むる 甚 多く、盡く御物に屬し、勅封にて、宮内省より之を保管す、寶物の中にて最も其名の高きは、蘭奢待の名香、鴨毛の御屛風等にして、其他何れも珍重ならざるなく、幸に此寶庫の、數度の火災を免れたるによりて、奈良朝當時の美術工藝の如何に發達したりしかを、千餘歳の後に目のあたり見るを得るなり、又其古文書が、歴史研究上最も貴重なるは言ふ迄も無き事なり、春日神社の南方に

◉新藥師寺 あり、天平時代の建築物にして、餘程破損したりしを、昨年盡く舊によりて修補したれば、今に於て千二百年前の新建築を見るを得べし、猿澤池の南方には

◉元興寺 あり、之はもと興福寺などゝ共に、南都七大寺の一とも云はるゝ大寺なりしも、後世衰へて、今僅に殘れり、所謂

◉南都七大寺 とは、興福寺、東大寺、元興寺、西大寺、藥師寺、大安寺、法隆寺なり、後の五箇寺は次回に述ぶべし、こゝに南都といふは、帝都が北方の京都に移りたれば、それに對して舊都を呼べるなり、今日帝都東京にうつりて、もとの京都を西京といふが如し

◉我等はこゝにほゞ奈良市の名所を見盡したれば、次

回には奈良の効外、即ち古への平城京のありし地方を巡回すべし、さればこゝに奈良を去るに臨みて、奈良土産としては、如何なる品物ありやを見ん、

◉奈良の產物としては、奈良晒布、大和木綿、これ等は日常の實用品なり、漆器根來塗は硯箱、手筥などに作りて、古色を帶び頗る雅致あり、奈良人形は極めて簡單なる木彫なれども極めて愛らしく、鹿角細工は簪などに作りて、春日の鹿といふを當て込みたるならんも、多くは牛の骨あり、飲食物には、霰酒も風味よく、奈良漬は其名の如く本場なれば、言ふ迄もなし、文筆を弄するものに向つては、墨筆またよし、殊に古梅園の墨は其名全國に高し、

(奈良名所終)

心の說明

長谷川天溪

◉心の字義

多くの文字には、第一義、第二義等、種々の意味ありと雖も、心と云へる文字ほど、多義なるは莫かるべく、亦其解釋の困難なるも尠かるべし。試に『言海』によりて、其意味を區別すれば、左の如し。

(一)心ノ臟(二)動物ノ物ヲ思ヒ事ヲ行フ主宰。精神(三)情、ナサケ(四)オモヒ、コヽロバセ、意(五)オモンハカリ、カンガヘ、思慮(六)コトワケ、意義 (例略ス)

更にウエブスターの大辭書を取りて、心(Mind)の條を見るに、左の如き釋義あり。

(イ)智識のはたらき、理解力、智力、推理し判斷し思念する力、肉躰に對する意味にて靈魂(ロ)考へ欲し或は選ぶはたらきの狀態――說、判斷、信仰、撰擇、好み、勇氣等、精神――(ハ)記憶、回想 (例略す)

倘英語にては『心』は、動詞として用ひられ、而も其調は、自動としても、亦他動としても成立す。

今此等の釋義を檢するに、均しく『心』の總括する所なれど、『心ノ臟』といひ、『精神』と云ひ、『靈魂』と云ひ、共に特殊の場合にのみ限りて、使用せらるゝもの

なれば、暫く之等を度外に措くも、尚數多の意義ありて、若しも『心とは何ぞや』との問を受けたりとせば、明瞭なる解答を與ふると、甚だ困難なるべし。否、心に關する明瞭なる觀念なきが故に、種々の迷妄を懷きて、遂には吾等が肉躰内には、一種靈妙なる物の存在するありと信ずるに至る。即ち所謂タマシヒ、或は靈魂の存在を確信ずる者にして、洋の東西に通じて『心』なる語に、靈魂の意味を含めるは、能く此迷信の、いづく、いかなる時代にも、生起したるを證するなり。去れど心理學を研究する者は、斯る質問に對しては、敢て困難を感ぜざるべし。

◉俗説の心

暫らく俗見に從つて『心』の解釋を下さむか。心とは吾が内にありて、思考し、想像し、記憶し、感應する者なり。石は心なきが故に、碎かれて悲まず、樹は心なきが故に、裂かれて憂へず。去れど人間にありては、心あるが故に、父母死せば悲み、未知の山野を能く想像す。吾が肉躰は、喰ひ、飲み、歩み、眠るが如く、吾が心亦考へ、感じ、記憶し、想像す。すべて思考といひ、想像といひ、感情といひ、皆吾が内に在りて、心に依りて生ずるものなり。されど斯の如く説明せば、これ心の本躰を別に措きて、其働きの產物を羅列する者にして、猶ほ桃の木を示さずして、桃の實を數ふるが如し。故に一歩を進めて、心其物は何ぞやとの問題を、解釋せざるべからず。

玆に至つて靈魂の假定説現る。吾が考へ、我が感じ我が欲するにて、其『我』と云へる代名詞に對する一物の、我が躰内に存在するあり。其物は、物質より成るものに非ずして、即ち非物質也。吾が肉躰は、骨肉液躰等より成ると雖も、心は斯の如き見得べく、聞き得べく、或は理化學の試驗に上り得べき物より成立する者に非ずして、猶ほ空氣の如し。これ靈魂の名ある者にして、印度の波羅門敎の語を借用すれば『大我』即ち是なり。而して此大我が思考し、想像し、記憶するなり。去れど靈魂の存在を說かむと欲すれば、先づ其生起由來を說明するの必要あるべく、亦由來を說明せむには、

宗教上の神の存在を假定せざるべからず。既に神の存在を假定せば、茲に神に關する新問題陸續として生じ、其等總ての疑問が、矛盾衝突なく、明白に證明せらるゝに非ずんば、到底靈魂の存在を、語ると能はざらむ。然るに、神の存在の證據は、各自の信仰のみにして、是を離れて、純粹に知識的研究を試みなば、遂に得る所なかるべく、爾も神てふ觀念を架空のものと、擯斥せざるを得ざるべし。これ『心』を『靈魂』或は『大我』と解する說の弱點なり。

◎眞正の心の說明

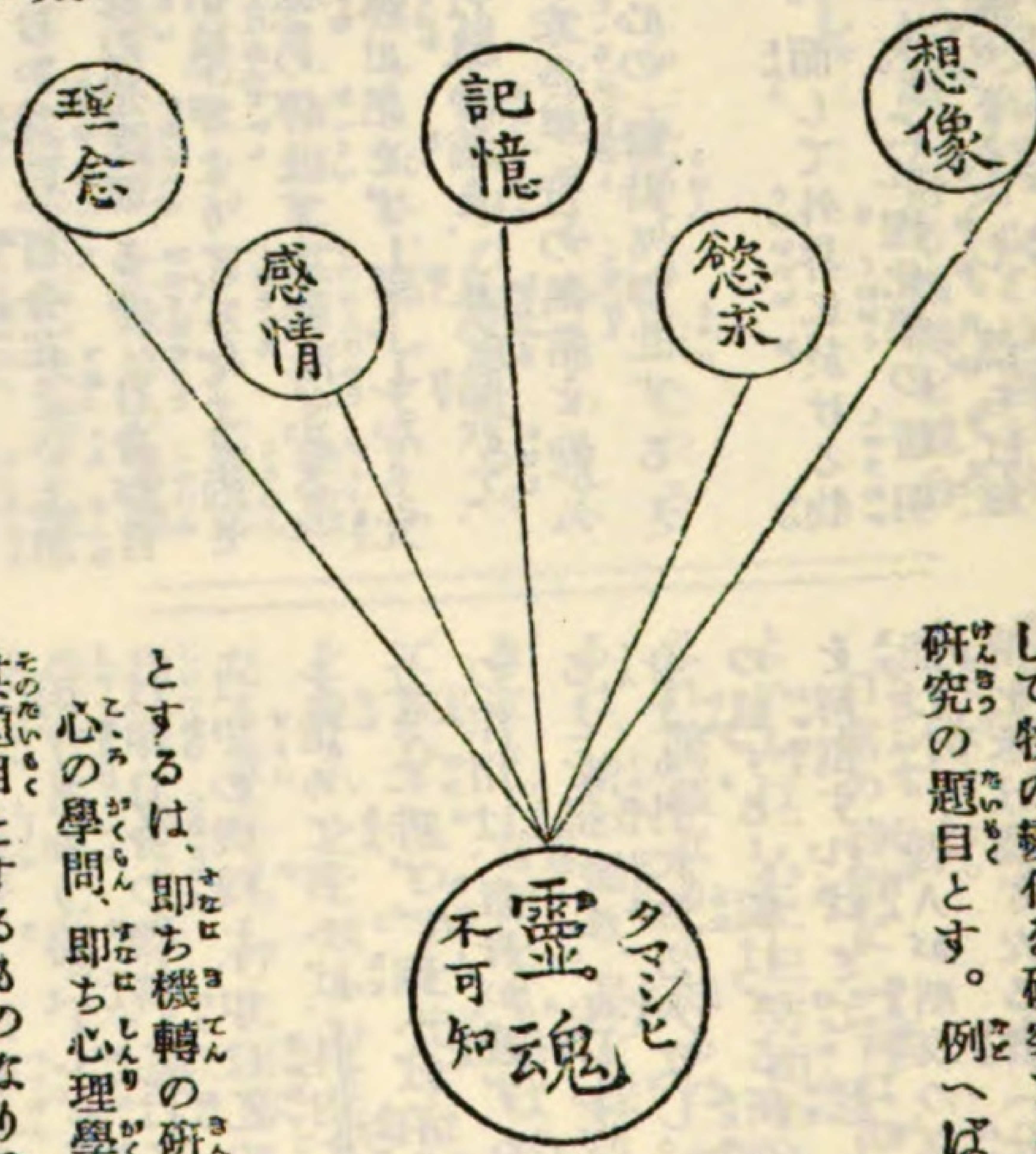
然らば上記の說明外に立ちて、『心』を說明する方法あらざるか。今日の心理學の解釋は、即ち此點より出發したる者にして、其說明は次の如し。

思想、感情が、吾が内に生起するは事實なり。去れど此等が、心と異りたる者なりといふは誤れり。換言すれは、『心』といふ靈妙不可思議の神躰ありて、想像、思想、或は喜怒哀樂の情を起さしむと說明するは獨斷說なり。此等の想像其他が、即ち心なり。心を離れて想像なく、思想なく、其等のすべてを總括したる名稱が、即ち『心』なり。故に『心』なる文字は、すべての想念感情（吾が躰内に起る一切の心）を言ひ表すものと見て可なり。



嚋昔釋迦牟尼佛が、波羅門敎徒に反對したる最要點は、即ち茲に在り。曩にも云ひしが如く、波羅門敎徒は『大我』を說けりと雖も、佛陀は是に反對して、靈魂なる者は、吾等がすべての心（思想感情慾念等）其物の名にして、此等の以外に、不可思議なる靈物の存在なるとなしと斷言しぬ。これ近世の心理學に恊へる者なり。例を取りて言はヾ、身躰といふは、手足其他頭胸腹等を總括したる名にして、身躰が四肢を有すとは立言すると難からむ。頭より足に至るまでの骨組が揃ひたる上にて、身躰なるものあり。心亦斯の如く、吾が想像、思

想、感情を集合したる者の名なり。圖解すれば左の如し。但し想像、感情、知覺等は、心の材料とも云ふべきものにして、圖中に掲げたる者の外、種々の材料ありと知るべし。



故に、心の定義を下せば、心とは吾等が想像といひ、感情といひ、其他百般の無形の内部出來事の總稱なり、と謂ふべきなり。之に反して靈魂説は、精神或は靈魂の存在を假定したる者にして、圖表せば左の如し。

◉心の性質

既に心の何物たるかを説明し終りたれば、是より心の性質に就きて、數言を費さむと欲す。

科學と稱せらるゝ學問の研究する所は、多端なるべしと雖も、之を大別すれば、物と變化との二つなり。物の研究といふは、不動體の研究にして、大理石の成分を檢べ、地層を考察する等は、即ち此類なり。是に反して物の變化を研究するは、物の變化する所（機轉）を研究の題目とす。例へば化學に於いて、酸素と水素との化合して水を成す所を究むるは、物の機轉を研究するものなり。人體の組織を研究するは、人體を不動の者として、肉、骨等の成分を知らむとするものにして、胃の活動するさま、血液の循環、毛の發生等を主題とするは、即ち機轉の研究なり。

心の學問、即ち心理學の研究は、兩者の中、いづれを其題目とするものなりや。心理學は、全く機轉の研鑽なりとす。何となれば心其物は、決して不動の姿を呈することなく、須臾も轉々變化して擺まざる者なり。試

に一の心、例へば花といふ想念をとりて、其想念が不變化、固定の姿樣を呈するや否やを顧みよ。單に花といふも、或は漠然として、明晰なる心象浮び出でざらむ。去らば心象の明瞭ならむか爲に、百合花といふ想念を例とせむ。一たび百合花の想念起るや自身が百合花に就きて經驗したる事柄は、甲より乙、乙より丙と聯り起りて、百合花其物の觀念の停止する所なかるべし。鴨長明か『行く川の流は絶えずして、しかも元の水にあらず、流に浮ぶ泡沫は且つ消え、且つ結びて、暫くも止まるとなし』と言ひたるは、世の無常を悲みたる語なれど、亦以て、吾等が心の、瞬時も靜止するとなきを、形容するに足れり。

心は變轉極りなきものなり。而して外界に於ける物も亦秒時と雖も、靜止すると無し。これ理化學の證明する所にして、吾輩の贅言を要せざるべし。然らば玆に、躰内の機轉と、躰外の機轉(主觀的と客觀的との變轉)との差別ありや、若し差別ありとせば、如何にして是を言ひ表すべきかの疑問生ずべし。

心的機轉は躰内に在りて、外界の機轉は、誰人も之を看取するとを得べしと答へなば、兩者の差別明白なり。草木の成長し、水の蒸發するさきは、甲も感ずべく、乙丙丁も知り得べし。されど躰内の機轉に至りては、甲は甲自身の機轉、乙は乙自身の變化を知るのみにて、乙は甲の機轉を、甲は乙の機轉を知り難し。去れど一歩を進めて言へば、躰内にも亦、他人の見知し得べき機轉なきに非ず。例へば消化作用、血液循環、心臟或は肺の作用は、自身が感ずるのみならず、他人も亦之を感ずるとを得べし。去れど心的機轉に至りては、全く我自身より外に知る人なし。吾自身の悲みは、我以外の人の感ずると能はざる所なり。人若し悲泣する人の腦髓を解剖すればとて、悲しみと云ふ變化の存在を見ると能はじ。吾人が朋友の喜怒憂愁に同情するは、他人の情を承け繼ぎたる者(分ち受けたる者)に非ずして、自ら他人と同一の境遇を想像し、自ら同種の情緒を生起せるものなり。故に他人の情と、吾が情とは、種類こそ同じけれ、全く緣なき者にして而も度に於いて差異

あり。落第せる塲合の我が苦痛は、吾以外の人の、知り能はざる所なり。而して他人には亦他人の落第感ありて、兩者は相通ずるとなし。

是に至つて、再び心の定義を立つれば、心とは吾が躰內に在りて、絕對的に吾自身の經驗し得る機轉を總合したる物の名なりと謂ひ得べし。

◉心の區分

吾等には、無數の心的機轉あり。五官より生じたる種々の感想の外に、腦其物の中に生起する心もありて是等を悉く列記せむと欲するは、難事中の難事なるべし。遮莫、吾等が悲しと云ひ、嬉しと云ひ、惡しといふは、甚だ簡單なる心の如しと雖も、精細に其感情を檢覈すれば、幾多の心より成立する者なり。月といふ想念は、簡單なるが如しと雖も、實際は、圓形、光球等の諸種の心的機轉より成立する者にして、猶ほ水が、水素と酸素との化合より成るが如し。さて其等の諸成分を分拆しつゝ進みなば、遂には簡單なる心的機轉に到着せむ。喩へば水を分拆して水素と酸素とを得るが如し。而して心の諸々の元素（簡單なる心的機轉を云ふ）を數ふれば、殆んど五萬餘種ありと雖ども、同類の性質に據つて類別すれば、三種あり。智の元素、情の元素、意の元素是なり。即ち心には智、情、意の三性方面ありと云ふを得べし。

日常の言語に『吾は知る』『吾は感ず』『吾は爲す』といふは、心に三方面あるを示すものなり。花を見て、これ薔薇なりと知るは、智の働き、其色の美しきを感ずるは、情の働き、是を採りて、簪にせむとするは意の働きなり。言語をも學ばざる赤兒が、燈の方に顏を向けて笑ひ、且つ手を出すは、光あるを知り、其光明に快感を覺え、之を取らむと欲する心の三方面の働きを現したる者なり。げに吾等人類の心は、千狀萬態、變化出沒、極りなしと雖も、いづれも此三方面を基として生起せざるはなし。去れど此三方面が、各個立して生起すと思惟するは謬見なり。人の心は複雜にして、決して簡單なる心的機轉の生起するとなし。こは人々反省せば、自から明かなるべし。

心象の性質上より區別すれば、上記の三方面を分ち得べし。更に一生の心を、時代に據つて區分せば、幼年時代、成熟時代、及び老年時代の三部あり。此等三期は、連續するものなるは、更にも言はず。されど其區別は瞭然として、毫も爭ふべからず。而して皆『意識』の連續なり。意識とは、『今の心』『此場の心』のとにして、諸心象の總名たる『心』に對して、刹那の心の代名詞なり。月を賞し、花を愛づる其刹那の心の狀態を意識と云ひ、意識の連續したる一團を、心とは云ふなり。川流に臨みて、かしこの水、此方の水を取りて、檢すればとて、遂に川の名は存せざるべし。隅田川の名は、川流一躰の名にして、一滴の水には、其名なく、一滴の流るゝ水は、隅田川を成す分子にして、刹那々々の水の流れには諸相あり。心亦斯の如く、全躰の川は即ち心、流れて止まらざる水の流れは意識なり。水を離れて波なく、波を離れて水なきが如く、心を離れて意識なく、意識を離れて心なし。これ精靈説を棄てたる心の解釋なり。　（完）

砂糖の話

宮田修

是は先頃成女學校のこの花會と申す同窓會の席上で話しました材料です。であるから之より專門的のお話ではないので、たゞほんの日用の智識を知るに過ぎないものですから、本誌の讀者も亦其のおつもりでお讀み下されまし。

（一）砂糖と文明人

一體砂糖と申すものは、世の中がだん／＼文明に押進めば進むほど澤山に使用されるもので、人間の食物中必須の原料であります。だから試に文明人と野蠻人との食料品を比較して御覧なさい、野蠻人は多く鹽分のものを好み、文明人は多く砂糖性のものを好むことがわかりませう。尚ほ早い例をとれば田舍の人と都會の人との好賞を較べて見ると前者は鹽辛い物を賞美し、後者は甘いものを喜ぶことがわかりませう。尤も田舍の人は即ち野蠻人だと云ふ意味ではないのだから怒つてはいけませんよ。然し田舍の人は野蠻人と云ふではないか、其の好尚は確に都會人に一歩を輸して居るこ

とは別に證明しなくつてもよろしからう。兎に角砂糖と文明人との關係は理論上密接のものだと申すことも證明し得るのだが、夫はしばらくさうとして事實上にも疑ふべからざる事です。

(二) 砂糖の種類

一概に砂糖と申しますが、其の種類を申しますと、決して一通りや二通りではありません。即ち我々が日用養物や何かに使う

白砂糖(英語でMhite Sugar)
赤砂糖(英語でBrown Sugar)
黒砂糖(英語でBrown Suger)

を始めとして間食に用ゐる氷砂糖(Rock Candy)乃至紅茶や、「カフヰー」や、「コ、オ」などに使う棒砂糖(Loaf Sugar)は何れも所謂砂糖の内であります。尤も是は普通のわけ方であつて、專門的にわければ或は同じ白砂糖でも三盃白とか、白下とかに分けるさうですが、爰には略して置きませう。そこで是等のものが普通にわける砂糖の種類ですが、尚ほ此の外砂糖を入れた袋を煮つめて造る糖蜜(Molasses)及び蜜蜂が作る蜂蜜(Hovey)をも數へ込みます。



(三) 原料と產地

糖蜜と蜂蜜とはしばらく置いて、純粹なる砂糖の原料は何かと申しますと、是にも色々有りますが、その重なる原料は甘蔗と云ふ植物と甜菜と云ふ植物との二つであります。

甘蔗(Cane)は植物學上から申すと玉蜀黍など丶共に禾木科に屬する植物でして、其の形は上圖の樣に殆ど玉蜀黍と違はない程よく似て居ます。產地は亞細亞乃至亞米利加の熱帶または半熱帶地方に多く出來ますが、我國でも臺灣、琉球、薩摩、阿波、讃岐などで出來ます。そして此の植物は其の幹が恰も玉蜀黍の幹と同じやうに心が何本も筋が有つて强くつて固くつて節が深山ありまして、此の莖に砂糖の原料にな

る糖分を澤山含んで居るのでありますが、其の丈は一丈から一丈四五尺までものびます。また亞米利加などでは中には二丈有餘に及ぶのもあるさうです。

それで此の植物の栽培法は如何云ふ方法かと云ふに、他の農作物の樣に種を捲いて作るのではなくて、一本の親木から出る若い枝を切つて是を地面にさすと、丁度柳のさし木をすると忽ち根のつく樣に、直ぐ芽を出して十二月乃至十五月を經由すると、もう充分發達して莖の心には甘い汁を含むでおるのです。此の時の樣子を一寸申しますと既に熟しておりますから一躰が淺黄色で、幾條の筋が入つて居て、莖には紫色の斑點を帶びて居て、房々した薄紫や白や淡紅色の花の房が咲きほこりますから、其の時の甘蔗畑は、まるで我々が此の近處で見る桒の畑の樣に夫は〳〵うつくしくつて確に詩歌の題になるさうです。



次に甜菜(Beet-root)は植物學上から申しますと、我國ではさとう大根など丶申しまして、普通の大根や人參と同じ樣に藜科と云ふ部類に屬する植物です。是は上圖に示しました樣に、其の葉は大根の如く其の根は人參の樣ですが、此の根に砂糖の原料となる糖分を含くんで居るのであります。夫て此の植物は甘蔗と違つて温帶地方に出來るのでありますから、歐羅巴などでは諸方につくられて居るさうですが殊に佛蘭西、白耳義、露西亞、獨乙などて澤山栽培して居るのです。それ故是から取られた砂糖を歐羅巴砂糖(European Sugar)など丶申して彼の國々には用ゐられて居ますが、一種の臭味があるので我が國の人々には適しません。是に就て昔甲越戰爭の時越後の謙信が甲斐の信玄に鹽を送つた話と較べて彼我の人情の異う點を知ることの出來る面白い話があります。と申しますのは皆さんも萬國史をおよみなさつた時既に御承知でありましたでせうが、十九世紀のはじめつ方ナポレオンが其の怪力を

振つて居つた頃、佛蘭西と英吉利とが角逐致しました。此の時英國は佛蘭西を困らす考へで、從來輸入して居つた自國の各植民地で出來て來る砂糖を一切佛蘭西へ賣渡さないことに致しました。そこで佛蘭西國民は矢張り砂糖を食べる國民ですから大變困りましてさすがのナポレオンも大に閉口しましたが、そこは智略の英傑ですから、どこをどう研究したかとう〱此の甜菜から砂糖を得とことを知つて、大に此の植物の栽培を勸誘しました。それで國民も其の勸誘に從つて危みながらも培つて見ると成程容易に出來て價格も低廉ですから、どし〱造りはじめました。すると元來甘庶が出來ない歐羅巴の事で、且つは此の當時稍もすれば兵亂の起る時代で、佛國の樣なひどいめに逢はないと限らないのですから、隣國から隣國に傳はつて甜菜糖の製造が盛になつたのです。



偖て砂糖の原料は重に以上の二つでありますが、尙ほ此の外玉蜀黍、蘆粟、棕櫚、柿其の他の果物、槭樹などからもとれます。其の內蘆粟からとれる砂糖ははじめ支那の北部で製造し、玉蜀黍からとれる砂糖は中央亞米利加で製造し、棕櫚からとれる砂糖は東印度地方で製造し柿其の他の果物からとれる砂糖は我國の上代に於て製造したのですが今では甘庶糖の供給が多くなつたので殆んど廢止された姿で居るのです。然し槭樹からとる砂糖は未だに北米亞利加で行なはれて居ます。是は北亞米利加でも多く加奈陀及び合衆國の北部の槭樹林でとれるのですが、此の木からとれる砂糖液は甜菜と較べると遙に上等な、殆んど甘庶と同樣な砂糖がとれるのです。ところで此の

液は毎年二月頃から流れ出すのですから、砂糖の製業者は其の尤も澤山出る三月頃から四月頃までを目懸けて、此の林の中へテントをしつらへ、移住して製造にかゝるのです。そして其の製造法は圖に示す樣に樹の株の處へ切口をはめて そこから自然に液が流れ出るのを其の下へ小さい手桶を置いて受けるのです。それで一日に一本の樹から出る液の分量は大抵バケツに二杯ださうですが、是を直ぐ一方では大きな鑵に入れて煮つめます、すると二三人で組合つて行くと、此の時期の間にとれる砂糖の總量は實に四五千磅ほどになると申します。

（四）砂糖の製法

甘蔗の製法は最早充分熟した時分、その莖を根元から切つて、そこで直ぐ頭の枝や花をおとし、來年さし木に使うべき部分を別にして、後を適宜の寸法に切り、夫を重い鐵の棒で造つた壓搾器でつぶしまして汁をとるのです。壓搾器は普通護麻の油などを搾ぼる器械と同じ樣な造り方でして二本の相並べた太い鐵の棒を廻轉させてあるのです。それはしばらくおいて、偖て搾り出された液汁は未だ純粹の砂糖ではなくつて、其の内には窒素性膠質と云ふ樣な含有物がまざつて居ますから是に石灰の如き他の化學的藥品を入れまして更に煮詰め、其の化學的の變化によつて他の複合物をとり去り、初めて粗製の砂糖を作るのです。尤も此の砂糖は粗製糖と申しまして色も赤つぽく品も佳良ではありませんから、我々の日常使う白砂糖にするには、是を一度煮つめて作るのであります。

夫から甜菜の方は、根を摺り下して液を絞ぼりますが、または薄く截つて湯の中へ浸して糖分を溶きますが、此の二つの方法のどつちかによつて得ました糖液を煮詰めて、前の甘蔗と略ぼ同樣な方法で製造するのであります。

以上はあまりざつとした說き方ですから充分おわかりにはなりますまいが、兎に角原料から白砂糖になるまてには、餘程の手數がかゝることがわかりませう。實は猶ほ悉しくお話し致したいのですが、お話しかける

と餘り專門的にならざるを得ませんから略しておきます。

（五）　砂糖の由來歷史

砂糖は文明の人の必須なる食料だと初めに申しましたが、さうすると我國の文明を顧みて何時の時代頃に渡來したかと云ふ事は、誰も知りたいことゝ思ひます。それですから段々調べて見ましたが、我國の歷史には產業の事などは、とんと記錄も殘つて居りません爲め手がゝりがつきません。けれどもそれこれを思ひ合すと澤山に來たわけでもなからうが、兎に角早く支那から渡來したとは疑ない樣です。殊に室町時代から多く渡來したことは明です。けれども價は極く高いから上流の都人士の口に入つたのみのことゝ思ひます。以上はたゞ商品となつて來た歷史ですが、是を我國に於て初めて製造したのは、慶長元和の頃に、沖繩の人が支那から苗をとつて來て培養し製造したのに初まり、後元祿の頃夫を薩摩に移して栽培したのです。然し是とて僅に試作と云ふ位で未だ公に聞へたわけてはないですが、享保十一年、時の將軍（八代）德川吉宗公の代に、將軍の命で當時長崎に居た清國の船頭李大衡と云ふものに、製糖の法を書き記させ、翌十二年薩摩の人落合孫右衛門と云ふ豫て斯道に經驗のある人をお召しになつて、苗を琉球から取寄せ、是を吹上の御庭と濱御殿の御庭に試作させました。ところが此の時十四貫五百目ほどとれて、試作としては好成蹟であつたものですから、御實家なる紀伊國などへもおわけになりました。

尤も此の以前廿年あまり前に。德川時代で有名な勸農家であつた宮崎安貞と云ふ先生が、だん〳〵砂糖の需要の多くなるのを考へて、國家の經濟上から國人が振つて栽培しなければならないと頻りに說いて廻つたのですが、聞く方の人は夫程に感じなかつたと見えて聲に應ずる人もなかつたのです。

夫はともかくもとして、一國の重要な人であつた將軍が其の志を繼いで獎勵されたものですから、國々でも甘蔗を植えることが行はれて參りましたが、何と云

つては栽培法の知識も淺いし準備も整うて居ませんから「さたう作るなら蔦から作れ」などゝ云ふ地口もあつた通り、夫程盛ではなかつたのです。けれども世の中が段々進んで文明になればなるほど需要も增加して來ましたものですから、彼の文學者を以て有名なる平賀源内、儒者として著明なる永富獨嘯庵兄弟の樣な達眼の士がやい〳〵論ずる樣になつて、とう〳〵外國の品より優れた品を作る樣になりました。

（六）　砂糖の効能

最後に一寸砂糖の効能を述べて置きませう。砂糖は餘りなめると齒の爲めによくない、胃腸をこわすと申しますが、夫は生砂糖をやるから惡いので、若し他のものと調理してやりますれば、躰力を養う効能は、殆んど肉食の六倍に相當すると云ふことです。夫れかあらぬか今から卅年程前に。獨乙の人でフォルシエル、フイツーク と云ふ人と、ミスリツエチスと云ふ人とが殆んど三十一時間少しも休まずに山登りをした事があるが、是は銘々が自躰健康な人であつたには違いないが、其の間始終砂糖を喫して居たから續いたと云つて居ます。もつて近い例は此の間友人江見水蔭君が、戸隱探險から歸つて來ての話に、「山登りには必ず砂糖は必要品だよ、不思議だねへ、これをかぢつて居ると疲勞を覺へないからねへ」と云つたが、是は確に砂糖が人の躰力に効能のある事を示して居ます。猶ほ英國のドクトル、ハーレー氏があげた試驗の結果を御紹介すると

一、若し一日の間に他の食を求めずして五百グラムの砂糖を喫すれば、其の勞作の程度約六十一乃至七十六位に高まるべし。

一、一日五時三十分間勞働する爲めに多少の疲勞を生ずるを砂糖を喫食して其の疲勞を防ぐとを得べし、しかのみならず勞働總額を增加すること頗る大なり。

と云ふことです。砂糖が躰力を强健にすることは獨り此のドクトルばかりではなくつて、此の頃獨乙で有名なフイルショー、ミユンクなどと云ふ大家も皆な同意して居ます。ですから皆さんも生砂糖を喫べるといけ

ませんが、他の方法即ち「カフヰー」、紅茶などに入れて飲むか、乃至砂糖湯などにしておのみなさるが宜しいです。殊に砂糖湯を毎日二三回規則たゞしく飲みますと、皮膚を滑にし、白くし、細かにし、且つ肥つて來ますから、御婦人方は今後おしろい、、、を廢めて、其のかはりに是をお用ひなされたらばよいと思ひます。（完）

裁縫科

女子職業學校教員　金子銅子述

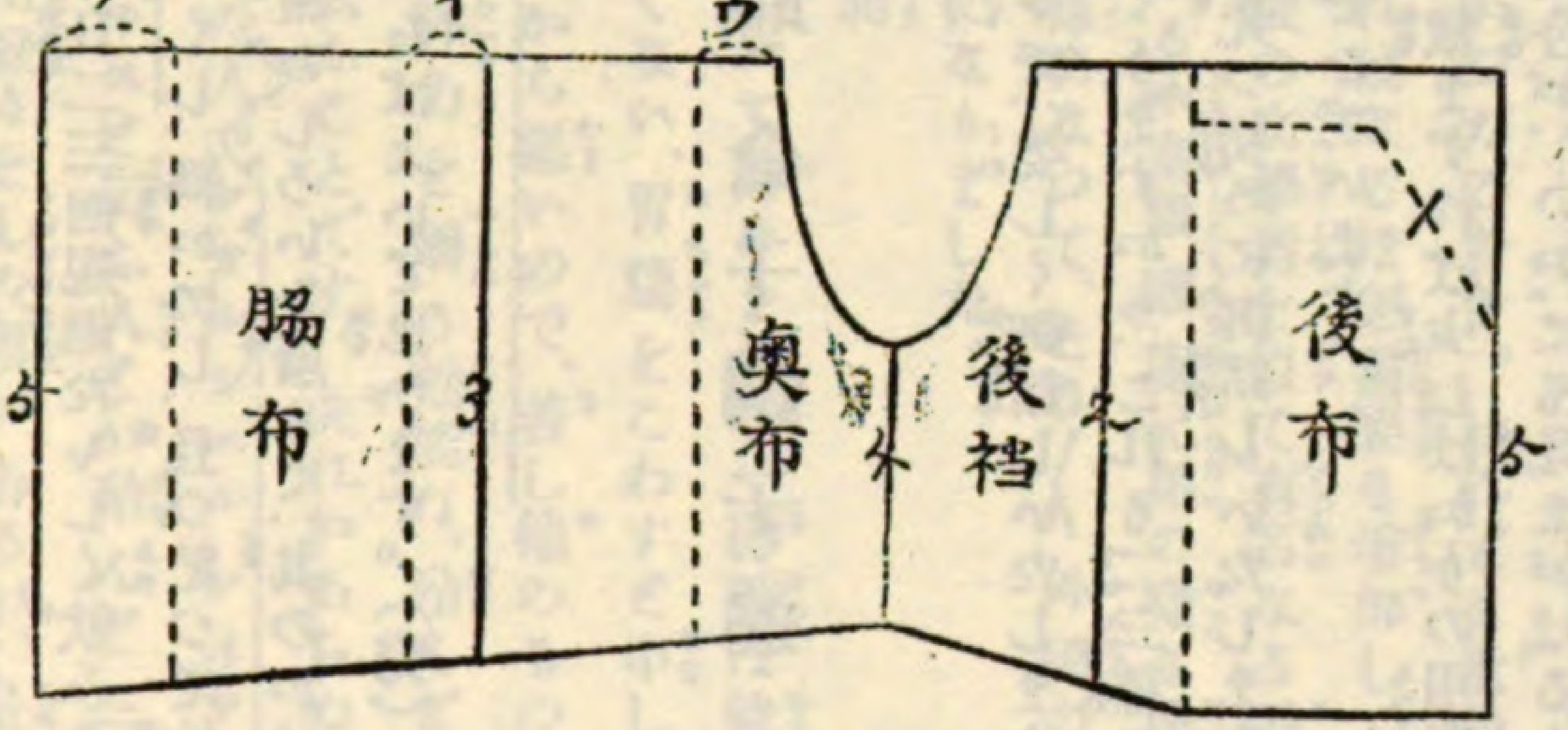
袴（小供物）

この小供物袴も種々樣々で、委しく御話しいたしますれば、なかなか時日もかゝりますから、これも二三種の所を申して置きませう、先つ初めに御話しいたしますのは、五六歳位の小供物でございます。

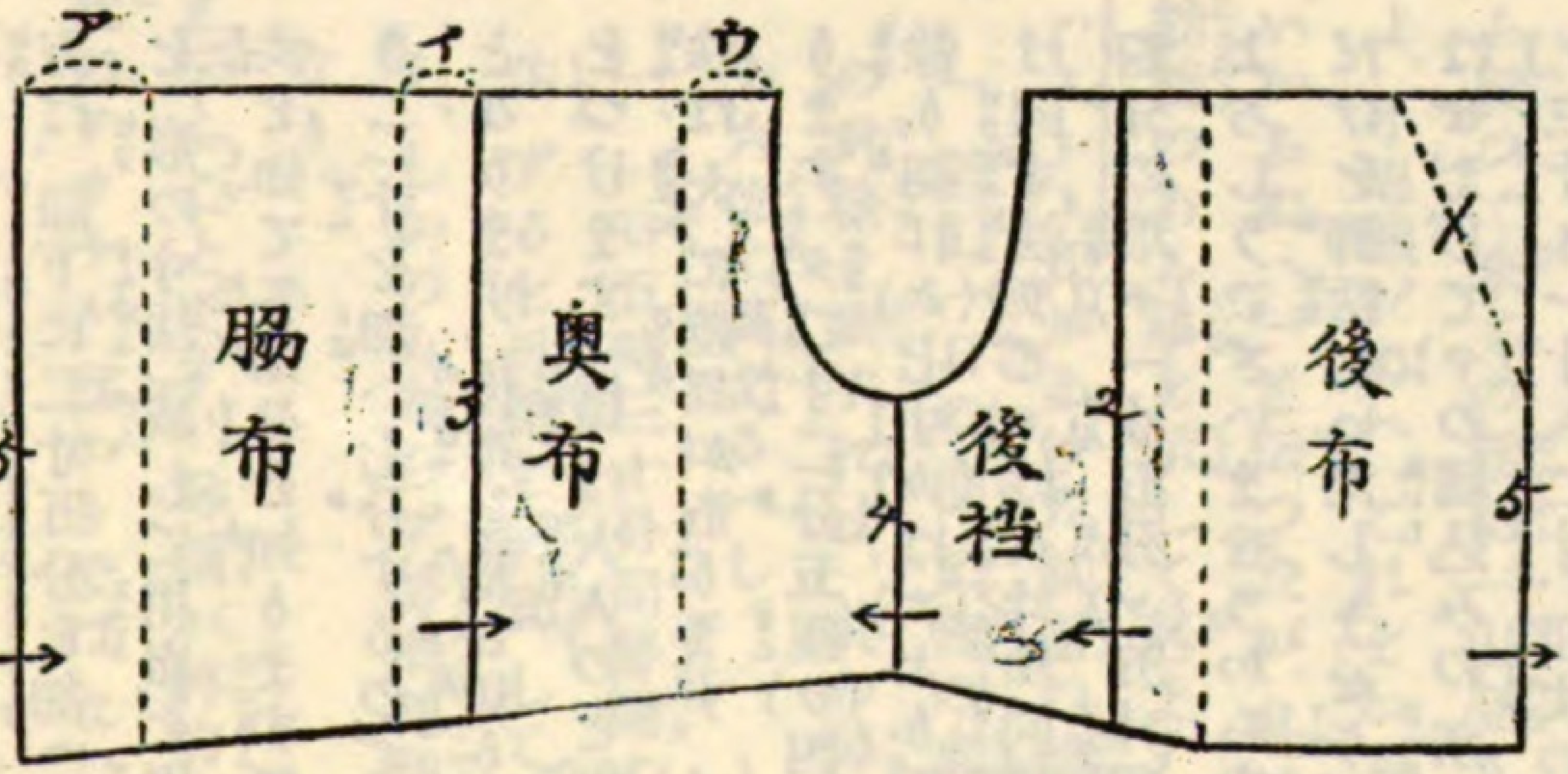
扨これは切をごくつめて裁ますれば少しばかりの用布で出來ますが穿ました工合が、いかにも見えがはるくあります、それ故この第四十九圖に示しましたものは切をつめたのでもなく、さればとてあまり充分にとるといふのでもなく、つまりなみの所でございます、積り方は、紐下に二寸五分を加へ、七倍し、腰切を加へ二寸を（形の寸法）減して用布を得るのでございます、又總丈を知て各部分を知りますには、腰切丈を總尺より引き、二寸を加へ七分するので、この出たものが後布の丈となります、後布を裁ち切りましたらばこれも矢張標をつけます、標は大人のと別にちがひませんがたゞ寸法は大に差異があります、（イ）五寸三分これが後巾になります、（タ）二寸二分五厘（ウ）四分つゝの形（コ）四分の斜の餘り切れ（ク）七寸（カ）は（ア）より四分つまる（キ）七寸（カ）と（コ）とは同寸法（サ）と（ア）は又寸法同樣（シ）（オ）とも同寸法（セ）七寸（ス）四分の形（チ）一寸五分（ソ）五寸縫ひ方は別に申さなくともよろしうございませうからたゞ大人のものと異なる點だけを御話しいたしませう、第五十圖の通りに縫ひ合はせまして（チ）の縫込みの所は隱躾をかけます、襞積は（ア）三寸（イ）一寸（ム）二寸、紐丈の出來上りは、後一尺五六寸前六尺内外といたします、腰板は、大人のものと同樣

にイタメガミを第四十圖（前號にあり）の（ホ）（ヘ）四寸五分（ニ）（ヘ）（ハ）（ホ）の斜線が四寸一分高さが一寸六分として切り取ります、腰のつくり方は大人物と同様た丶つけかたは第五十一圖の通り數字の順序にしたがひまして、つけるので其他すべて大人物と同様に致せば、よろしいのでございます。次には八九才位の小供用ので、第五十二圖の通りに裁ちます、積り方は、紐下に三寸五分を加へ七倍して紐丈と腰切を加へて、二寸（形の寸法）を引きて總尺と致します、又總

第五十圖

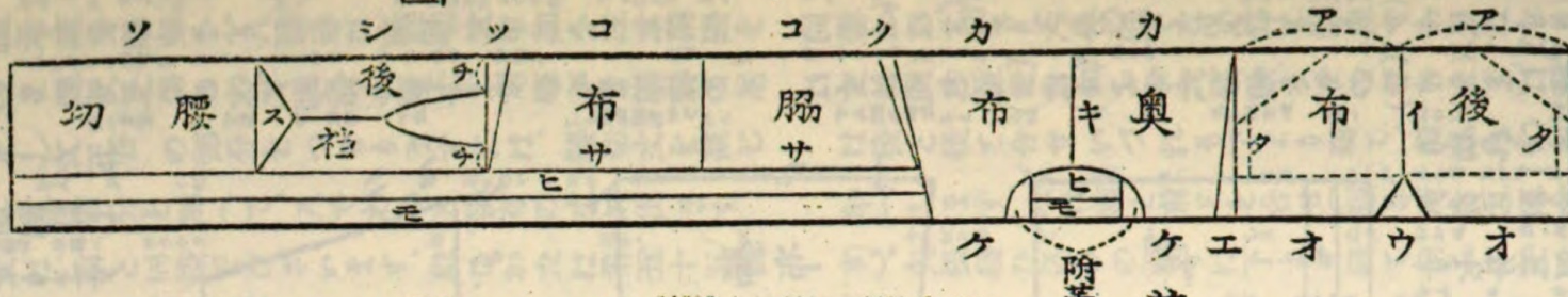


第五十三圖

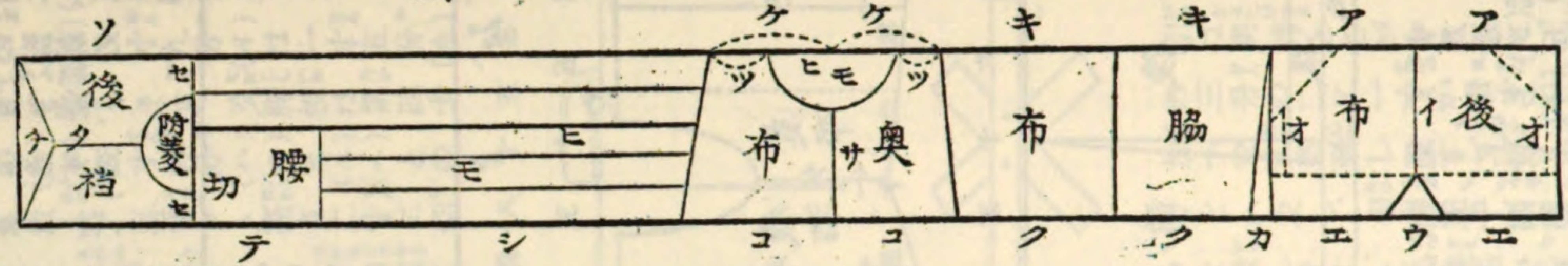


尺を知て部分を出しますには、腰切丈と紐丈とを總尺のうちまり引まして、二寸を加へて七にわりますのでございます、各部の寸法を申せば（イ）六寸三分（ウ）四分ッ、の形（オ）二寸五分（カ）四分の斜の餘り切（キ）は（ア）と同寸法（ア）は後布の丈巾へ紐下に三寸五分を加へたものでございます）（ク）は（キ）より四分つまり（ホ）と同寸法（コ）は（ク）と同様（ケ）は（コ）より四分短きもの（サ）は六寸五分（ツ）八寸（シ）一尺六寸（テ）腰切五寸五分（ソ）は（ア）より（タ）は（ツ）四分つまりましたもので（エ）と同様になります、

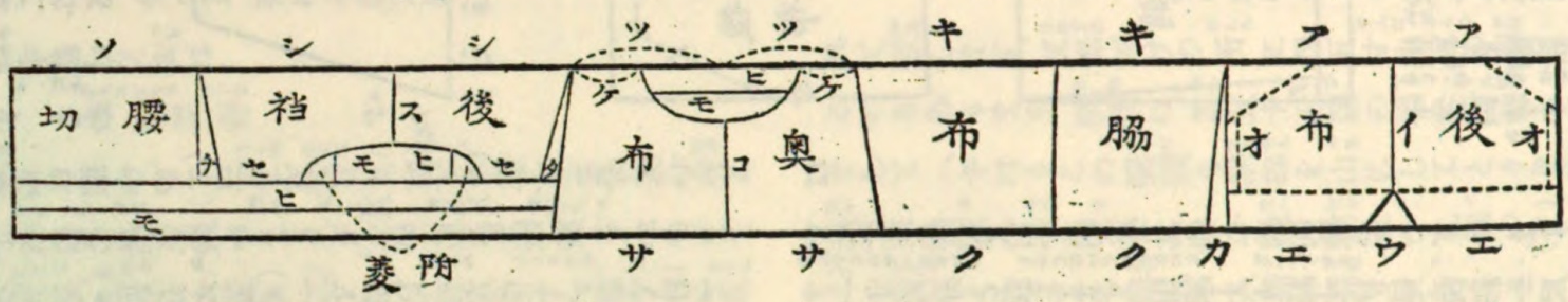
第四十九圖



第五十二圖

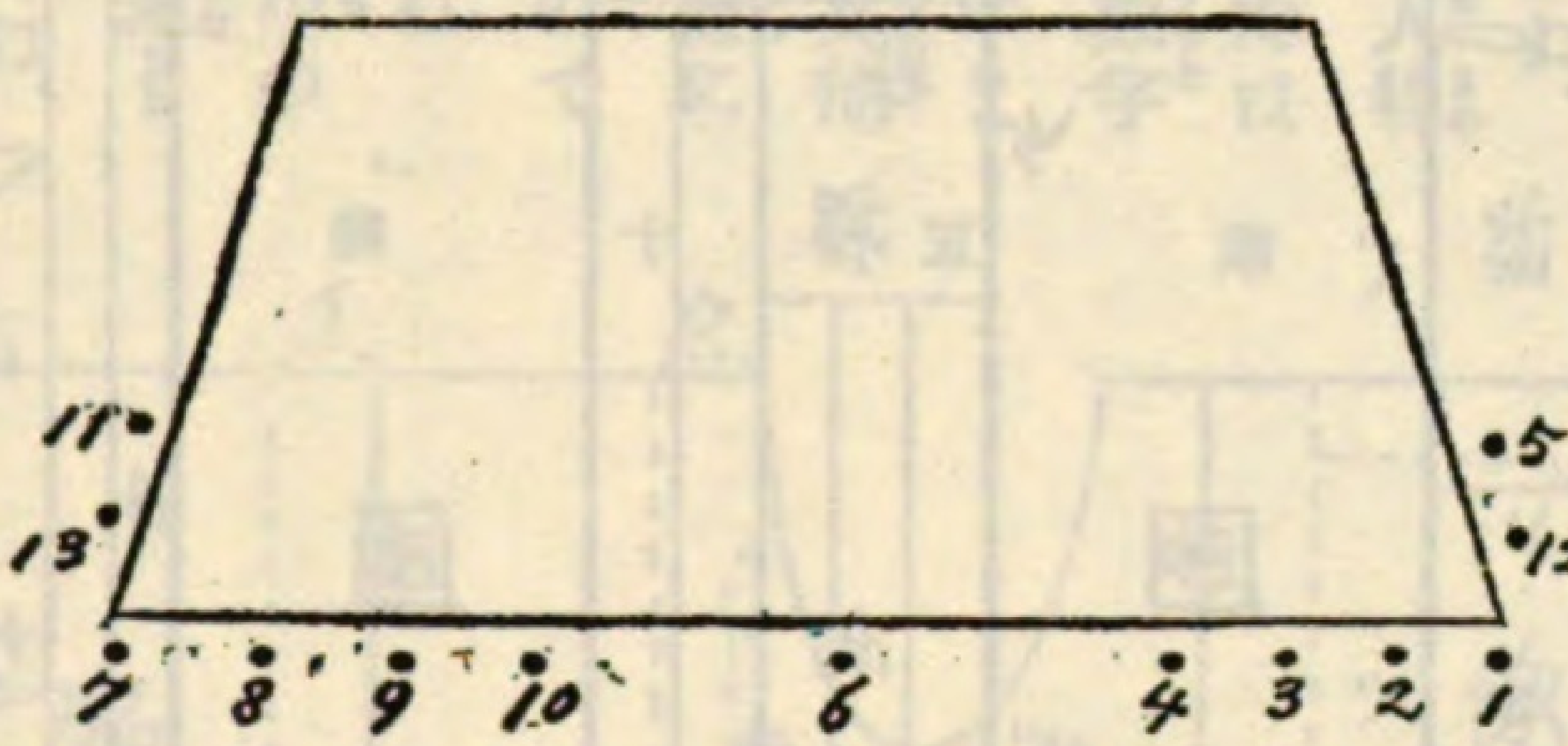


第五十四圖

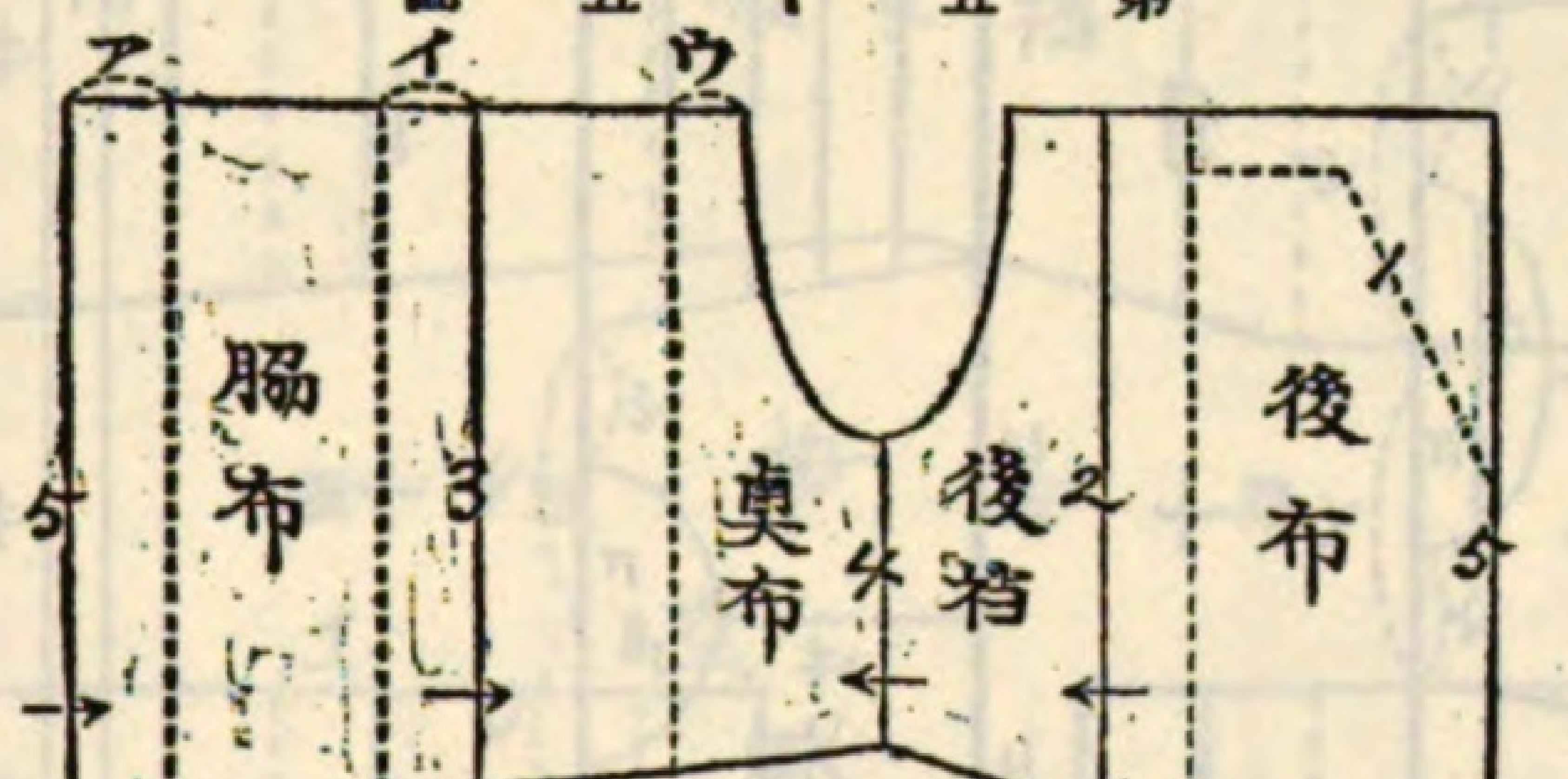


と同樣八寸(チ)四分の形(セ)一寸縫ひかたは、ナゲをくけて第五十三圖の樣に縫ひまして(チ)の所に隱糸をかけます、襞積は圖中の(ア)三寸五分(イ)一寸(ウ)二寸五分といたします、この襞積の寸法は前のもこれも皆縫ひこみをのぞきましてはかりますのであります、(この點線の所を山にしてヽ、ヒダをりますので前御話し致しました五六才のものも又この次に御話し致しますのも皆同樣のとと御承知を願ひます、腰板は前回に申しました第四十圖の(ホ)(ヘ)五寸(ホ)(ハ)に(ニ)(ヘ)との斜線が各四寸五分高(サ)一寸八分と致します、出來上り紐丈けは、後紐一尺七寸位前紐丈八尺内外其他は前同樣でございます次は十三四才の小供物を御話し致しませう、其裁ち方は、第五十四圖の通りに致します、即ち(イ)六寸八分(ウ)五分ツ、の形(オ)二寸七分五厘(カ)六分の斜の餘り切れ(キ)と(ア)は寸法同じく(ク)は(キ)より六分短きもの(サ)と(ク)とは寸法同樣(ツ)は(サ)より六分短くいたします、(ケ)一尺二寸(コ)六寸五分(タ)七分(シ)(エ)はいづれも同寸法(セ)一尺二寸(ソ)五寸

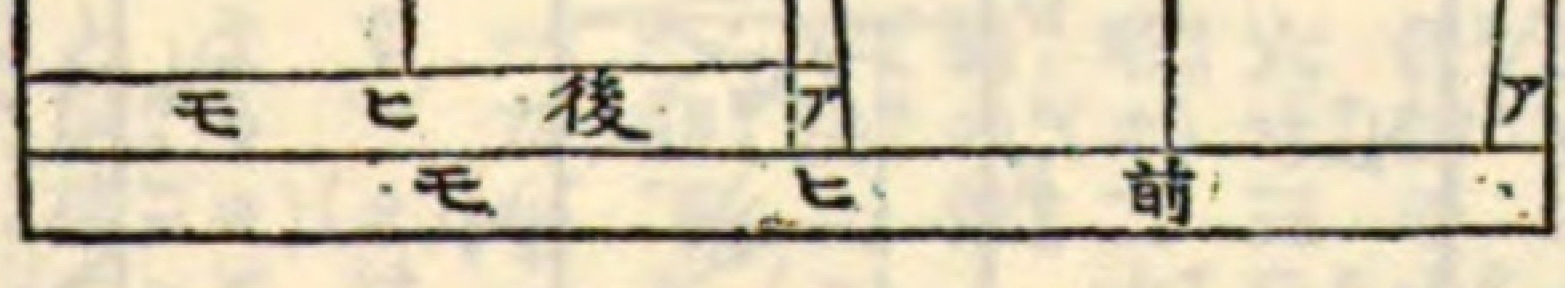
第五十一圖



第五十五圖



第五十六圖

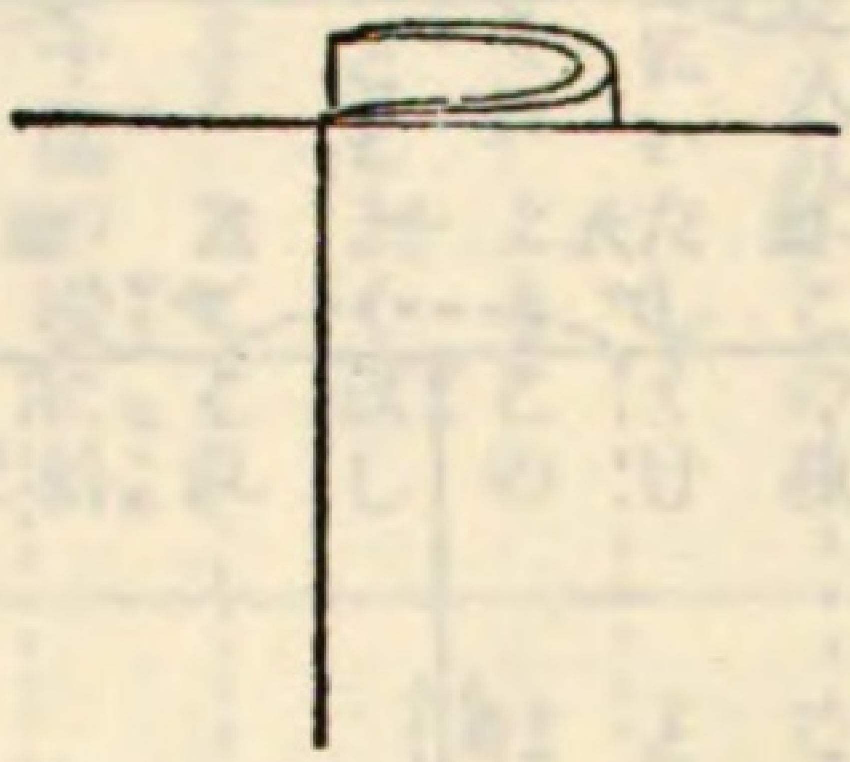


五分(チ)七分(ス)三寸といたします、積り方は、紐下に三寸か三寸五分を加へ、八倍して、腰切丈を加へ三寸四分を減じて總尺を得るのでございます、用布がきまつて居りまして各の部分をつもりますには、腰切丈を減じて、三寸四分を加へて、八でわると後布の丈が出ます紐丈は、前と同樣でございます、縫ひかたは第五十五圖の通り(チ)(チ)の所に隱躾をかけます、ヽヒダは(ア)三寸九分(イ)は一寸五分(ウ)二寸と致します又腰板は第四十圖の(ホ)(ヘ)五寸五分(ハ)(ホ)と(ニ)(ヘ)との長さは各五寸ツヽ、高さ二寸に切ります、此他は皆ほかの袴同樣に仕立てます、先づ男袴はこれだけに致しまして次は

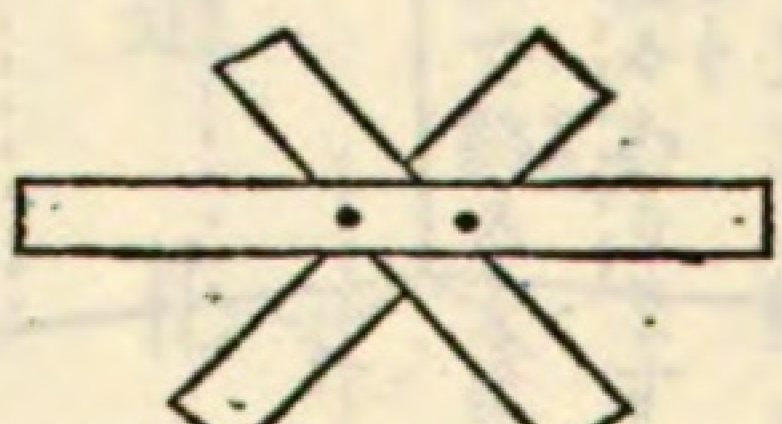
女襠無袴

に致しませう、この女の袴にも種々ございますが、今こゝで申しますのは、十七八才位の女子の用ゆるもので裁ち方は、第五十六圖の通りにいたします、圖中(ア)の所

第五十八圖



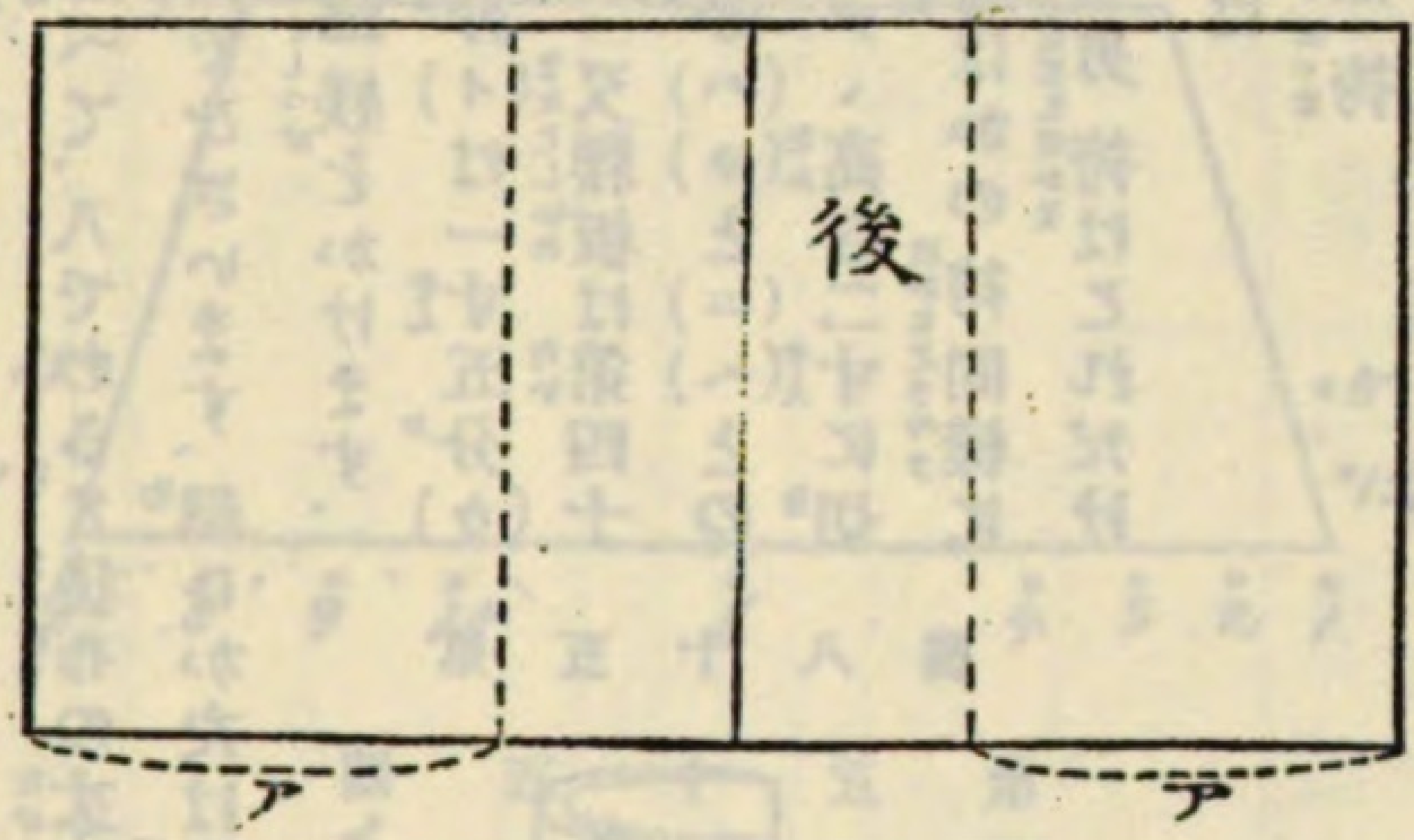
第六十圖



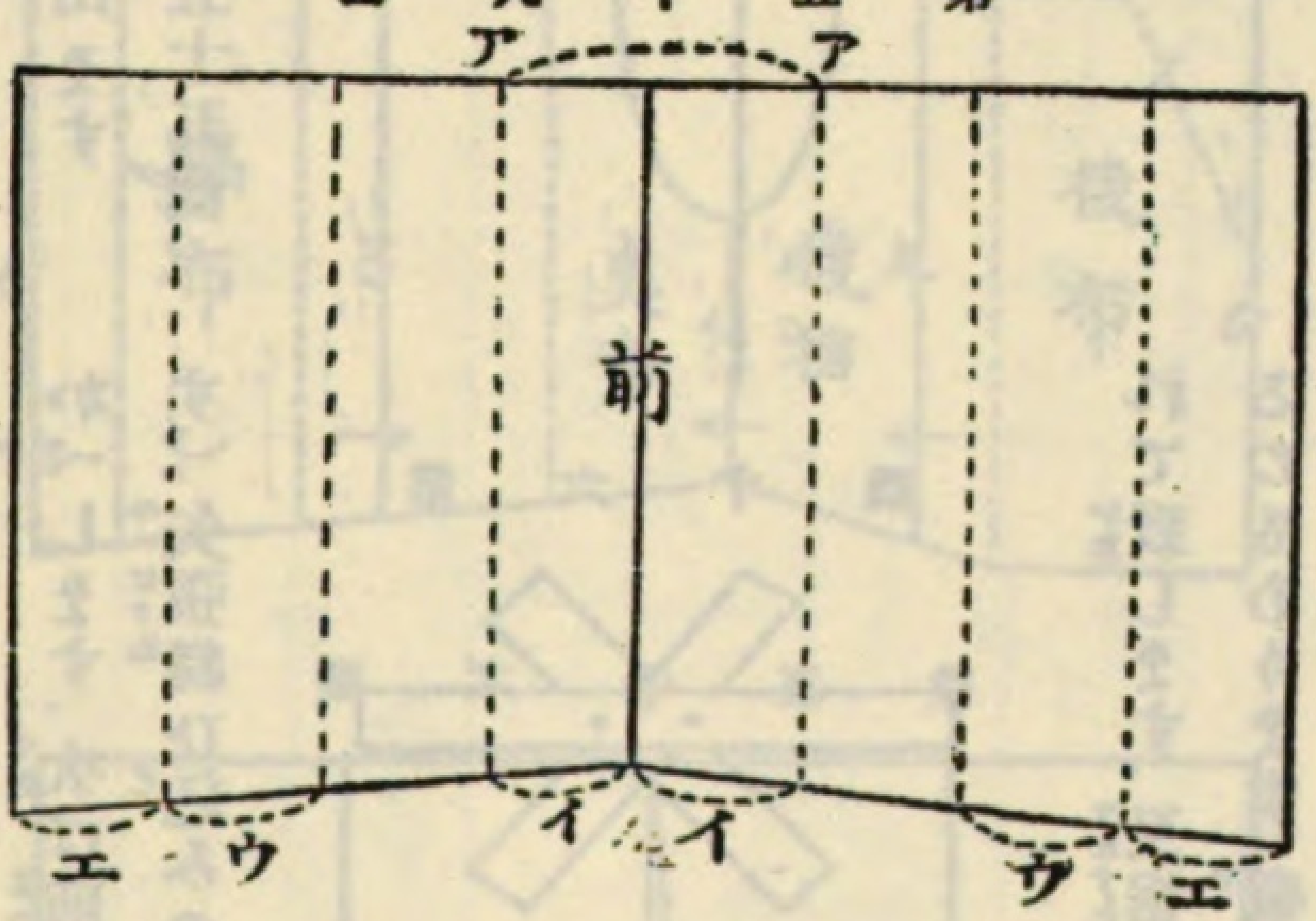
は、一寸の形になります、(イ)の所は紐になる切でありますから、切りとるのでない爲に點線であらはしましてたゞ(ア)の位置を知らせたばかりでございます)縫ひ方は後と後と合せいづれも下より縫て、縫込みを向ふにかへします、次は前と前とを合せ(短き所を互に合せます)、矢張縫ひ込みの返りは下より縫て向ふにかへします、次に相引を合せます(この相引は男袴とちがひまして、紐下の三分の二に一寸か一寸五分を加へた丈に致します、次に裾がけをいたし、相引にカンヌキドメを致します、この裾がけは、男袴の絹物のときの樣に、紙を入れて致します、又裾がけの所に四五寸巾位の切をつけるのもあります、襞積は、第五十七圖の樣に寸法をとりまして(やはりこの襞積も點線を山にしてとります)第五十八圖の樣に折ります、前は第五十九圖の(ア)より(ア)の所をとりまして第五十八圖の通りに折ります、ゐ

とは其標通りに折てまゐります、其襞積の寸法は、第五十七圖の(ア)の間八寸第五十九圖の(イ)の所四寸五分、(ウ)五寸五分(エ)四寸八分と致します、襀袴がとれましたらは、男袴の樣に躾にてとめます、次に前の笹ヒダ(これも男物の樣に)とりまして、次に後も笹ヒダをとります)後の襞積の一つのものは大紋腰と申しましてこゝの笹ヒダは並の通りでございますが、たゞ巾をひろくして丁度一寸七八分位にとりてくけます、次に前紐をとりまして男物と同樣に中央をのこしてくけます、

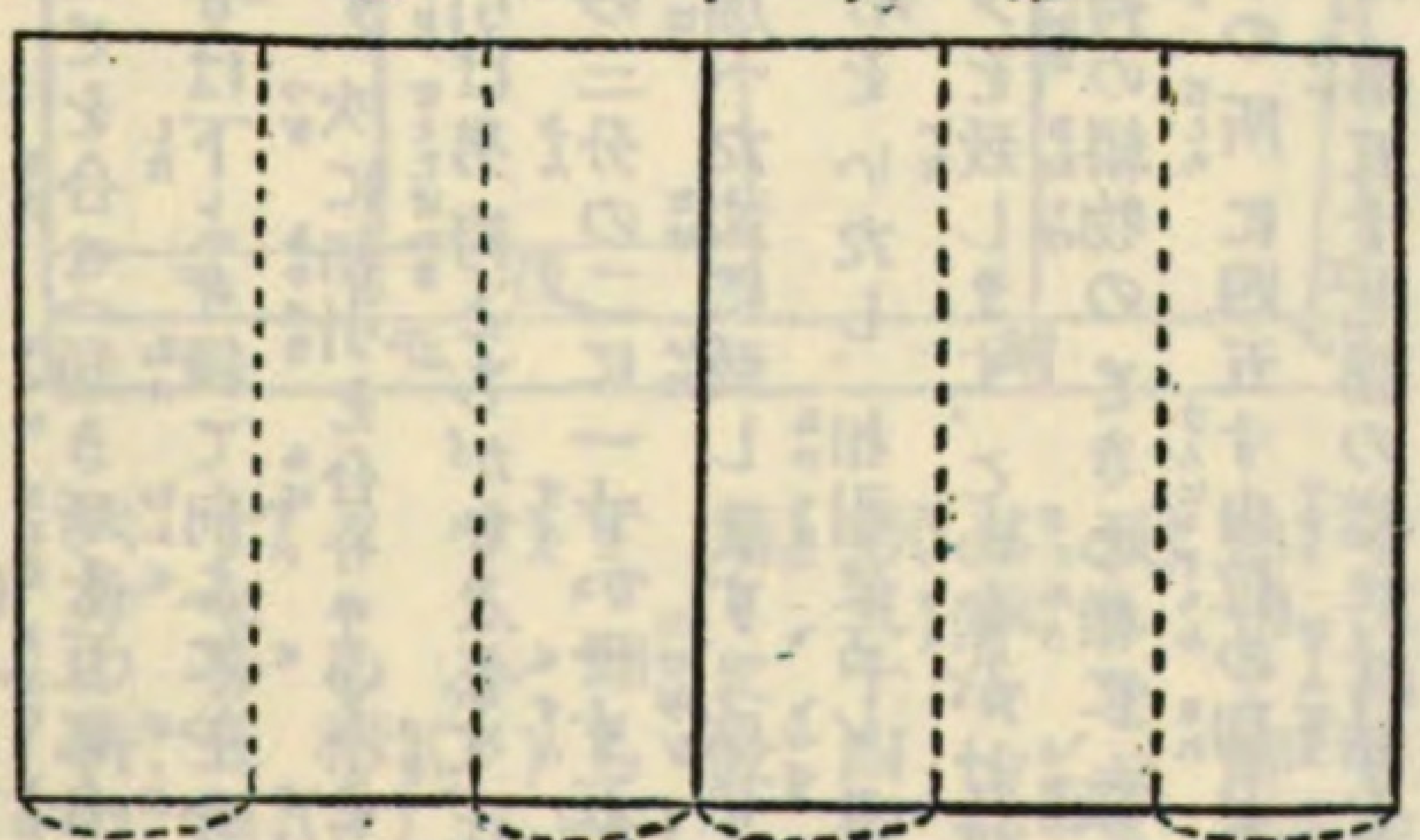
第五十七圖



第五十九圖



第六十一圖



次に後紐これも前紐と同樣にくけます、心の入れかたは男物の向きと同樣でございます、巾は、前紐八分より一寸位、後紐は、一寸七八分より二寸と致します、次に前紐をとりまして、男物の通りにつけます、次には後紐をとりまして中央に一寸標をつけて心と共に下よりおよそ二分位上の所に小針二針を八分の巾にし大針が一

寸六分とこう云ふ様にして、小針の數四つ大針の數三つ位大針を中央にまゐる様にするのでございます、場合によりましては、大針五個小針六個といふ様にするともあります、つまり大針が奇數になる様になればよいのでございます、この目數に白のタイハク、、、糸にて縫ひを致します、次に厚紙をとりまして、腰の巾より兩端を少しく長く切りまして、後紐の中央に入れ(この紙の巾は紐の縫ひつける方は、紐切と同様にいたしくける方は、縫ひ込みたけを切りとります)、それよりこの後紐を腰につけ、終りと、始めと襞積の所とをよく返して、とめてつけます、其裏は小針にくけます、さてこれで出來ましたから後紐は二つに折り第六十圖の様に斜に置き、其上に前紐を男袴の様に折りまして、その上にのせ、點より點まで糸を通して、とめ左右に紙を五分程の巾にきりまして、巻てとめます、

この袴は並のでございますが、極切を充分にとりますれば大巾一巾より紐をとらずに、前後の各二枚ッヽの切をとりまして、紐は別にとりますのでございます、この様に裁ちましたのは、後を二ッ襞積にとります、即ち第六十一圖の通りいたします寸法は、(ア)五寸(イ)六寸點線を山に折ります、つまり後巾が八寸になる様にするのでございます、從ヒダは前後とも同し様に致します、小供物は大概これにならひまして裁縫すれば、よろしいのでございます(後の一ッ、、、ヒダの様に裁ちますのでござります(猶男袴女袴につきましては申したいともも種々ありますが、あまりながくもなりますから、袴はこれで終ることに致しませう。

造花科

女子職業學校職員　三好幸子述

亂菊の作り方

亂菊の花を作りますには、初め寒冷紗に淡糊をしきまして、第一圖のやうな形に四通りの瓣を切ります、其數は、花一輪に付き(ア)(イ)(ウの瓣は各三十枚、(エ)は二十枚の割合に致します。

亂菊の色は、黄、白或は桃色など色々御座りますが、先桃色に染めますのを申上げます、「ローダミン」を濃く、「チウラミン」を淡く解かし置きまして、最初に瓣を水に浸け指先でよくしぼり、瓣の先から凡三分の一位迄其「ローダミン」て染め、下の白い所を「チウラミン」の液に入れまして模糊し染に致します、又白に染めますには、瓣の上の方を殘し、下の方を「グリーン」「チウラミン」を薄く解かしました液でぼかします、黄色に致しますには、先づ全体を「チウラミン」で染めて置きました上、尚下の方を「グリーン」、「チウラミン」てぼかします。

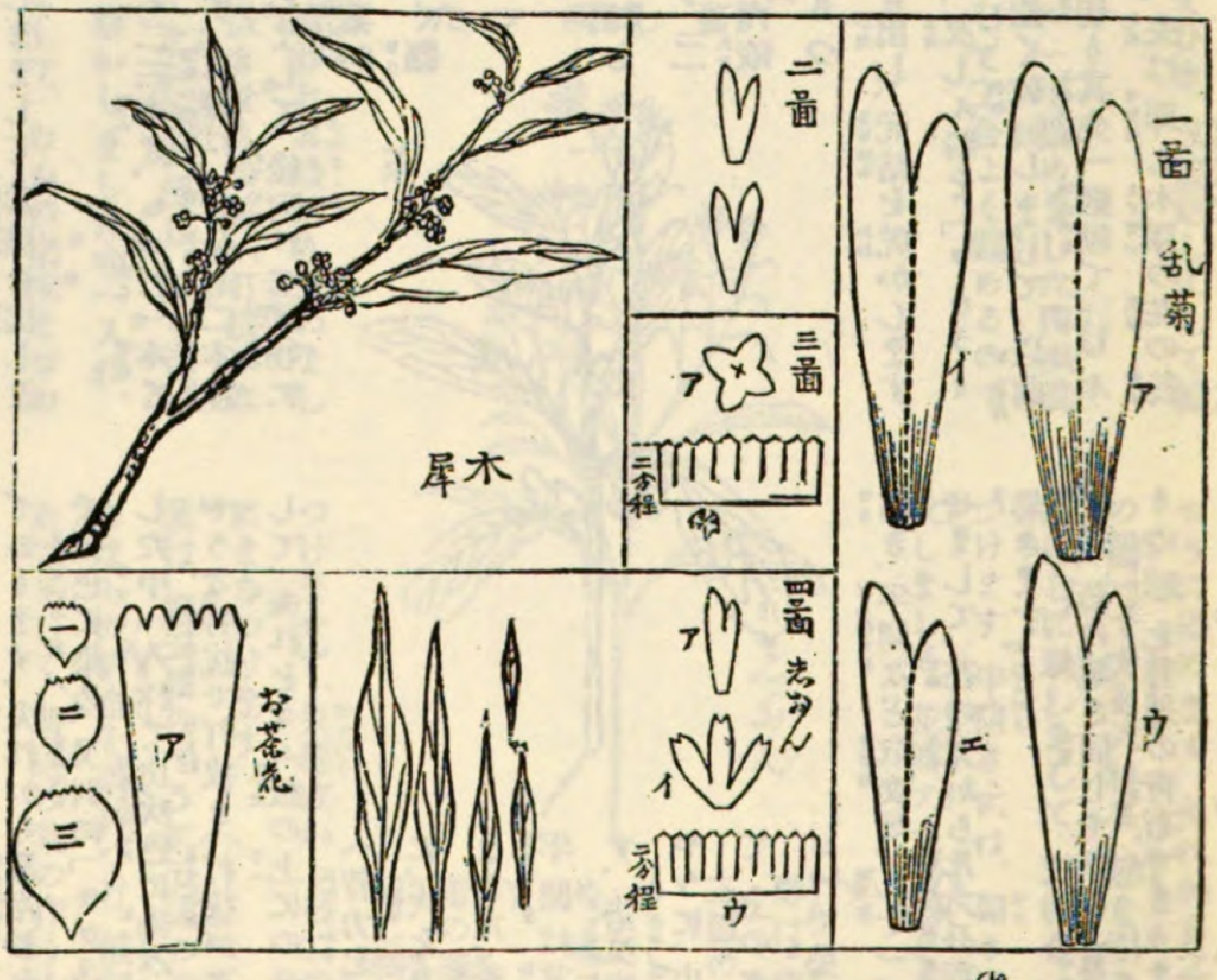
亂菊の蕊を作りますには、蒲公英の香と同じやうに、黄色の木綿糸を鐵の針金で結びまして、其先へ丸みをつけて鋏み、尚「チウラミン」に「グリーン」を合せました液で其上を染めて置きます。

染上りました瓣に鏝をあてますには、其乾きました瓣に切り込みを入れ、ゴム板の上にのせまして、先づ(エ)の瓣へ「一筋鏝」で先の方から下迄丸くなりますやう兩方とも同じやうにあてます、次に「二筋鏝」で(ウ)の瓣を前と同じやうに、又次に(イ)の瓣を「三筋の鏝」て餘り丸くなりませんやうにあてます、次に(ア)の瓣は矢張「三筋の鏝」で一度あて、後裏返しに致しまして、先を輕くおさへます、かやうに致しましたものを、前にも申しました通り、開きの花一輪に付き小が二十枚其他は皆三通りつゝ、(エ)、(ウ)、(イ)、(ア)と順次に貫物にならひ形よく蕊を中心として付けます、又半開の花を作りますには、(ア)の瓣を省き、尚又其他の瓣數を少しつゝ減らします、そして瓣へ鏝をあてますのに、開きの分よりは鏝をよくきかせまして丸みをもたせますのであります。

蕾を作りますには、黄色の木綿糸を極小さく結び、夫れを青く染めまして其周圍に綿をまきつけ、淡糊を付けて平らな形に致して乾かします。

萼は、白の寒冷紗を第二圖のやうな形に切りまして「チウラミン」「グリーン」「マゼンタ」の此三通りを合せました染液て、先の方三分の一程殘しまして、其餘りを模糊し染めに致します（模糊しますには前にも度々申し

ました通り、初め水に好く浸し、又其水を切り、そして後、染めるので御座ります）そして其先の所は、「ブロウン」の染液に一寸入れます、（白の所が少し殘ります加減に致しまして）之れが乾きましたら、鏝を餘り丸くなりませぬやう、あてまして、大の方から先に、花の許の所へ一廻り、次に小を一廻り、糊を先の方へ付けませぬやう、又あてました鏝あとの、きえませぬやう、注意して付けるので御座ります、又之を蕾に付けますには、蕾の



(木)

先の青く染めてあります所丈を殘し置きまして、綿をまきました上へ、大から先に二廻り、段々に下へ下げて付けまして（綿が見へませぬやう）次に又小を付け、後臘をしきまして光澤を出します。

葉は、普通の「グリーン」、「マゼンタ」、「チウラミン」の三色で染めました布で、實物の葉大小取交ぜ、凡五通り計り形をとりまして、裏から青紙をまきました針金を付け、表から「ピンセット」で筋をとり、「筋鏝」、「中の瓣鏝」を使ひまして、筋を

つけ、形をこしらへ、後蠟をしきまして光澤を出します。

纏め方は、先づ花の軸に針金を二三本と、ヒゴ竹一本とを入れ、青紙で下巻を致します、又蕾は、針金を二本程入れて、矢張青紙で下巻を致しまして、後何れも實物にならひ、蕾にも花にも、小さき葉かち順次に、大の葉を付け、形よく纏めるので御座ります。

木犀の造り方

先づ五十番位の太さのカタン絲を「チウラミン」八分、「グリーン」二八厘の分量を極淡く解しました液て淡糊を解かしました中へ、もつれませぬやう入れまして、引き出し、元結を乾かしますやうにピント致して置きます、又しん粉を「チウラミン」の濃い液で染め、そして、能く乾かしまして、以前の「カタン」絲を凡一寸位に切り其先へ姫糊て、しん粉を一本つヽ付けて置きます、夫は即ち木犀の花の蕊てわります、夫れから寒冷紗を先づ「ヨーシン」の染液で櫻色に染め、又別に「チウラミン」を極濃く解かしました中へ入れて山吹色に染み、乾きました上第三圖のやうな打拔で打拔き（打拔がなければ鐵て切ります）まして、夫れをゴム板の上にのせ、「小の瓣鏝」で四瓣ともへ皆力を入れて、丸くあて、又眞中に、穴をあけまして、前に造りおきました、蕊に糊をつけて通します。



茶

半開は其瓣に多く丸みを付けます、倚又青紙を細く第三圖の(イ)のやうに、巾二分位に長く切りまして、上のギザ〳〵の所丈「ブローン」で染め、前に造りました花の、開き、半開など取交ぜ、凡十一、又は九ッ位丸い形によせまして、花の元から凡六分程下りました所を、此紙で卷きます。

葉は、菊の葉と同じやうに、實物の形を大、中、小三四通りの形を普通の青布できりまして、裏から青紙をまき

ました針金を付け、初め筋鏝でひき、又裏返しにして瓣鏝をあて、後臘をしきます。

右終りましたら、「カシドラベル」で染めました薄美濃を細くきり、實物にならひまして工合よく纏めるので御座ります。

しをんの作り方

しをんの花の蕊を作りますに先づ黄色の木綿糸で亂菊の蕾位の大さに細い針金で結びまして、先を二分位殘して切り、其所を「グリーン」、「マゼンタ」、「ヲウラミン」の三色を合せました液で染め置きます。

花瓣を作りますには、白の寒冷紗を其儘折り重ねまして、第四圖の(ア)、(イ)の形にうち抜き置きます、(打抜がなければ、鋏で切ります) そして之を水に浸し、絞りまして、「ピチレット」を淡く湯で解かしました中へ入れ、下の方凡三分の一程を殘しまして、むらの出來ませぬやうに染めます、夫れから之れが乾きましたら、「一筋の鏝」で力を入れて、筋を引きます、此瓣を、開きには裏返しに致しまして、五枚を一側に、片よりませぬやうつけます、半開きには、開きに準じ、蕊も少しは小さく致しまして、花瓣(ア)へ筋鏝をあて、五枚程一側につけます。



萼は、青紙を櫛の歯のやうに(第三圖の(イ)の通り)巾三分位にきりまして、上を「ブローン」で染め、花の許に二回程まきつけます。

蕾の蕊は、極小さく、小菊の香と同じ細さに結びまして、花瓣につけませず、只萼ばかりを二卷程、絲の見へませぬやうにまきつけます。

葉は、第五圖のやうに五通の形をきりまして、青紙をまきました針金を裏につけ、筋鏝を表から、瓣鏝を裏からあてまして、普通の葉の作り方と同じやうに致します。

是等のものが悉皆出來上りましたら、矢張實物に倣ひまして適宜に形よくまとめるので御座ります。

茶の造り方

先づ花の萼を作ります、それは美濃紙を「マゼンタ」、「グリーン」、「チウラミン」の三色で普通のよりは少し青味を勝たせまして染上げ、第六圖の(ア)のやうな形に紙目の横になりませぬやう切りまして、桃の萼と同じより方に成丈よく糊をつけ、ピントなりますやう、よじり置きます。

蕊には「四分の香」を使ひまして、其先へ、「レモンエルロー」を粉のまゝ糊でよくつけ置きます。

花瓣を作りますには、寒冷紗を白の儘八枚程重ねまして、第六圖の一、二、三のやうに打拔で打拔きます、(打拔がなければ鋏で一々きります)そして、「グリーン」、「チウラミン」とを一所に淡く解かしおきまして、最初には此瓣を水に浸し、指先で水を切り、下の方を以前の染液で染めます、是れが乾きましたら、第一、第二の瓣へは(皆二枚程重ねまして)「中の瓣饅を上から丸くなりますやうにあて、第三の瓣へは、「大の瓣饅」を花瓣の上を少し殘してあとを丸くなるやうにあてます。かやうに饅をあてましたものをまとめますに、開きには第二の瓣を三方につけ次に第三の瓣を四方に都合七枚ツケ後蕊を入れます、半開には第一の瓣を先に三枚、次に第二の瓣を三枚位付けます、又小の半開には、第一の瓣を初め二枚次に同じく三枚程、何れも口の開きませぬやう作ります。

蕾は、竹紙で作ります、中に綿を入れ、梅の蕾よりは少し大きく作りまして、萼へ入れ、花と同じ染液で下の方をぼかします。

葉は實物を三通り程とり、普通の青布で其形を切ります、そして押形に入れて、葉筋をつけます、(押形なき節には筋饅と、瓣饅を用ひまして、葉筋をつけます)そして裏から青紙でまきました針金を付け、臘をしきます。

枝にまとめますには、「カシドラペル」で染めました紙で、最初小の葉二枚程を付け、次に蕾、次は中の葉、次

は半開と云ふやうに、實物に見倣ひまして形よくまとめるので御座ります。

畫法指南

野口小蘋

こゝに畫き出せし石は折帶皴なり、石の皴法數多あり唐、宋、元、明、の諸大家得意として各皴法を畫き出せり、前號に石を畫きたる時、あらかじめ掲げ置たり、石は運筆むつかしく、練磨の効をつまざれば、自在におもしろく石を畫くこと能はず、こは只二三の石を作りて概畧をしめすのみ石に添たる野菊は、先づ花よりはじめ、而後莖を作りまた葉を畫くべし。

芙蓉これは木芙蓉なり、一名拒霜とも云ふ、此圖を作るには、前にある二葉を作り、花を畫き、枝を作り、他の葉は後に畫く、蕾は花を畫きたる次に作るも、又最終にするも、其は隨意にして妨なし、うてなと葉すしは乾くを待ちて作る方よろし。

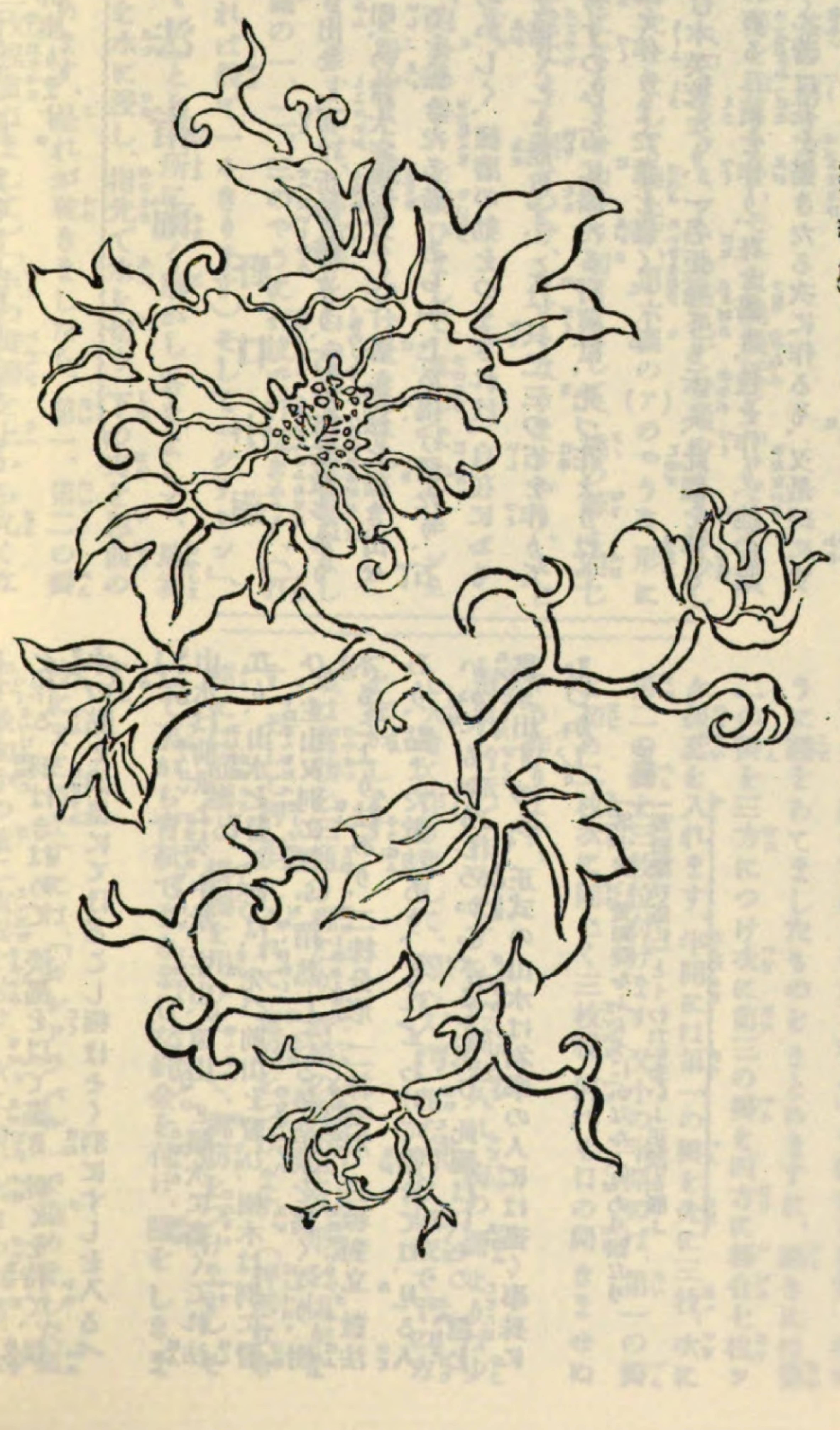
蜻蜓は頭より畫きはじめ、背のところを作り、四つの羽を作る、羽はきはめて、淡墨を以て畫き、乾くを待て、眼中の點を濃墨にてほどこし極ほそく羽にすしを入るべし。

山水は前景より、中景、主山、遠山、と順次に畫くこれ法なり、山水を習ふには、先づ前山を習ひ、樹木は別に習ひ、主山又別に習ふ、稍熟したる後全景を畫くなり、樹木もとより法あり、二株分形、二株交形、三株對立、數法あり、點また數法あり、されどわけて畫きては、見る人いかにもおもしろからざるを思ひ、此圖は只その趣を畫き出すのみ、正式の山水は初學の人には畫く事殊にむつかし。

正誤
第十號に黄蜀葵をふようにかなをふりあり誤なり
黄蜀葵は俗に「とうわた」といふ正誤を願ふ

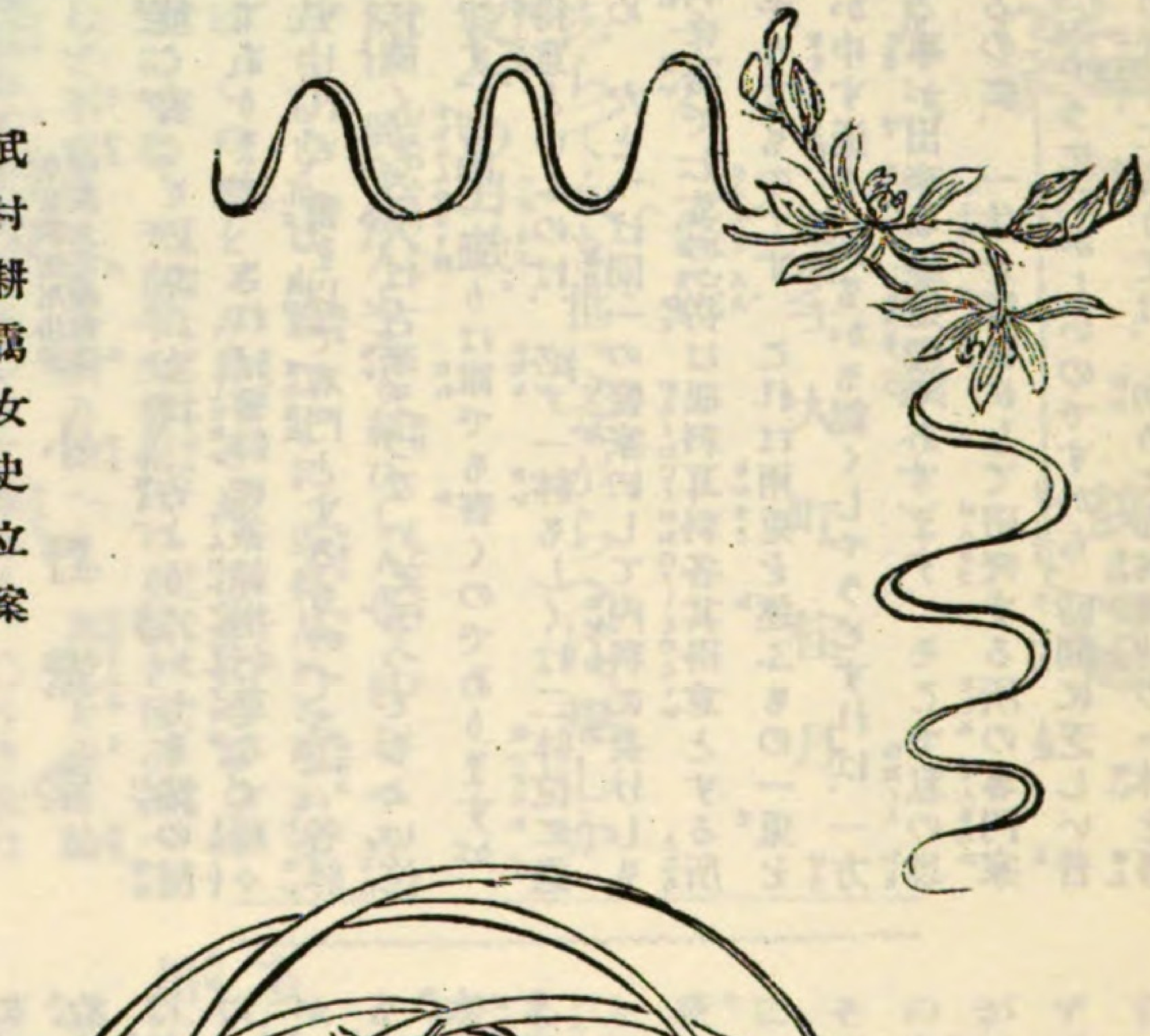
圖案（刺繍用）

芙蓉



武村耕靄女史考案

秋蘭



武村耕靄女史立案

習字法心得

東宮職御用掛兼華族女學校教師　小野鵞堂

文字を能く書くといふことは、古より六かしき業の隨一としてあります、されば書躰に篆隷楷行草など種々ありますけれど、書を以て專門とするものでさへ、各躰を平均に能くする人は古來まづないと云つてもよい位のものです、勿論一通りは誰でも書くのでありますが、其内に得意といふのは、必ず一躰もしくは二躰位に過ぎませぬ、たとへば同一の醫家にして內科に長けしもの、外科に秀でしもの、扨は眼科耳科各其得意とする所があるやうなものです、これは兩兎を逐ふもの一兎を得ずとか申す通り、何もかも能くしやうとすれば、一方に秀でる事が出來ない道理であります、そこで私の思ひまするのに、一生を犧牲にして研究する所の專門家でさへ、かやうに六かしいのですから、時間に乏しい普通習字の人々に在りては、初めより其目的の一躰を專修すべきであろうと考へます、但し女子にありては、其用ふる所おもに色紙短冊手紙などですから行草交りかなが目的でしやう、此行草交りかなを習ふにも、私の持論としては楷書から習ふのが順序でありますが、これは目的を達する手段ですから少しも損には成りませぬ、茲に行草交りかなと申しますと、三躰になりますが、之は運筆が似よりて居りますから一躰と見なしても宜しかろうと信じます、尤も行と草と區別する時は大分八かましくなりますが、これには少し考へがありますから、それは次に申し述ぶる事と致しましやう



講義

百人一首講義（十）

文學士 大町桂月

六十八、三條院

心にもあらでうき世にながらへば、戀しかるべき夜半の月哉。

○三條院は、晩年盲人となり給ひし人也。目をやみて位を去らむとおぼし給ひしに、或夜月いと明かなりければ、この歌をよみ給へる也。○心にもあらでは不本意にて也。天皇平生藤原氏の專橫を憎み玉へり。而して不幸にも目を病み給へり。其位を去り給ふや、滿腔の不平、推しまつるに餘あり。○うき世は苦しき世の中也。○ながらへばは生きて居らば也。

○嗚呼美なる明月よ、汝の光に對すれば、心地いとすが〳〵しきを覺ゆ。されど、中に無量の悲哀を感ず。われ今夜九重の上に斯る明月を賞し居れど、やがて位を去らむ身也。袞龍の衣をぬぎすてゝ墨染の衣をまとはむ身也。終には明を失はむずらむ身也。その時には、今夜の事を懷ひ出し、榮枯、休戚、處を異にせるを慨き、今夜の月を戀しく思ふなるべし。今夜の月は徒らに後日の思ひ出となりて、我はこれより轗軻寂寞なる生活を送らさるを得ず。○天皇の御心中思ひやられて、痛切哀切、千載の下、讀者をして覺えず涕涙縱橫たらしむ、絶代の傑作也。

六十九、能因法師

あらしふく三室の山のもみぢ葉は、立田の川の錦なりけり。

○三室山の紅葉、風にちりて、立田川におちて流るゝを錦と見たてゝ、よめる歌也。○暴風吹いて散亂する三室の山の紅葉は、やがて立田川に流れて錦とな

る哉。○可もなく、不可もなし。

七十、良暹法師

さびしさに宿をたちいで眺むれば、いづくもおなじ、秋の夕暮。

○この眺むは、眺望の意也。○何となく寂しく獨り座するに堪へず、どこか寂しさを紛らす處もがなと、宿を立ち出てゝ見渡せば、どこも同じく悲哀の色天地に滿ちわたりて、我愁悶を遣らむ處なし。○孤僧獨捿のわびしさ思ひやられて、悲しき秋夕の情景、言外に躍動す。

七十一、大納言經信

夕されば門田の稻葉おとづれて あしのまろやに秋風ぞ吹く。

○夕さればは、夕になれば也。○あしのまろやは蘆にて葺きたる假小屋也。○門田は、門前の田也。○夕方になれば、秋風がそよ〳〵と稻葉の上をわたり來て、蘆の假小屋を吹き、がさ〳〵と音たてゝ、さても寂しきと哉。○ひと通りの歌也。

七十二、祐子内親王家紀伊

音に聞く高師の濱のあだ波は、かけじや、袖の濡れもこそすれ。

○音に聞くは、評判が高い也。○あだ波は、浮薄なる心の人に譬へていふ也。あだは、脆く果敢なきといふ。あだ波は、ふは〳〵して定まらぬ浪也。○かけじや、注けじよ也、注けまいよ也。○高師の濱といふ處は、ふは〳〵したあだ波が立つと、評判が高きが、そのやうなあだ波は袖に注けますまいよ、注ければ袖が濡れるから。これ正面の意なるが、裏面には、『あだ波のやうなふは〳〵した浮氣男とて、評判高き人とは、契を結びますまいよ。若し契を結はゞ、心配事が絶えずして、涙に袖の乾くひまがあらざるべければ』との意をふくめり。○この歌は、堀河院の艶書合せの時、中納言俊忠が『人知れぬ思ひありその浦風

に波のよるこそ行かなしけれ』とよめる歌の返歌によみたるもの也。例の贈答の際に、多少味あるものにて、格別な歌にもあらず。

七十三、權中納言匡房

高砂の尾の上の櫻さきにけり、外山の霞たゝずもあらなむ。

○高砂は高き山也。○尾の上は山の頂也。○外山は端山に同じ。高山の麓の小山也。○なむは願ふ意也。立ずもあらなむは、立ずに有つてほしいとの意也。○高山の頂の櫻さきたり。こゝから遠く見ばやさむに、麓の山々に霞立つな、霞立たば、折角の頂上の櫻が隱れて見えざるべければ也。○この歌は、遙望二山櫻一』といふ題にて、即席の作也。即席の題詠の作として少しは作者の伎倆あらはるれど、單に歌として佳なるものに非ず。

七十四、源俊頼朝臣

憂かりける人を初瀨の山おろし烈しかれとは祈らぬものを。

○うかりける人は、我につらき人也。○初瀨は大和の地名、有名なる觀音のある山也。○山おろしは、山より吹きおろす風也。○「初瀨の山おろし烈しかれとは、うかりける人を祈らぬものを」として解すべし初瀨は、有名なる觀音さまありて、よく人が戀を祈る處也。われもつれなき人を我に靡かせやうと思つてその觀音樣に祈りしに、少しも御利益なきのみならず、却て益つれなく、烈しく我に當るやうになれり。かく烈しくなれとは祈らなかつたに。さても聞えませぬ觀音樣よと也。初瀨山の山おろしは、烈しいの序也。○これも、祈不レ逢戀といふ題よりよみたる歌にて、題をはなれては、別に味ある歌に非ず。

七十五、藤原基俊

ちぎりおきしさせもが露を命にて、あはれことしの秋も去ぬめり。

○基俊の子、光覺僧都、維摩會の講師とならむことを

請へども、たび〱洩れければ、藤原忠通に恨み云ひけるに、忠通は之に答へて、「しめぢが原の」と云へり然るに、翌年も又洩らされはければ、基俊、この歌をよみて、忠通に贈りける也。忠通が「しのぢが原」の云ひしは、(2)清水の觀音の作「唯賴めしめぢが原のさしも草、われ世の中に有らむ限りは」の歌の心也。この歌の「さしも草」に、六帖の歌「下野やしめぢが原のさしも草、おのが思ひに身をや燒くらむ」より出でたりさしも草のおしが思ひに身を燒くを、三界の火宅に苦む衆生にたとへたり。即ちさしも草とは衆民の事也。○させも草は、さしも草に同じ。今の艾也。させも草は別に契るには緣もなけれど、忠通が「唯賴めさせも草」といひし語をそのまゝ取りし也。○契り置きしは、約束して置きし也。「露置く」と普通によく言ふ故、契り置きしの置きしは、露にかゝる緣語也○唯賴めさしも草よと言はれたる言葉を賴みて、即ち約束して置いたさしも草のはかなき露が命にて、即ちはかなき事をあてにするのみにて、毎年秋維摩會があるに、ことしの秋も、其選にもれて、あはれ今年の秋も空しく過ぎ去りぬ。さて〱情けなきを哉と也。○歌にて歎願せしまでにて、たゞ言也、歌の想に非ず。

七十六、法性寺入道前關白太政大臣

わだの原こぎいでてみれは、久方の雲居にまがふ沖つ白浪。

○わだの原、海也、○久方、雲の枕詞也。○雲居、空也。○海の中へ漕ぎ出でゝ見れば、水天一碧、これ海、これ天、差別つかず、げにはてもなき、ひろ〱としたゞ眺め哉と也。沖つ白波は、たゞ大海の意に解すべし。大海が空にまがふとは、大海と海との區別つかぬとの意也。○平凡なる形容也。又平凡なる歌也。

七十七、崇德院

瀨を早み岩にせかるゝ瀧川の、われても末に逢はむとぞ思ふ。

○瀬を早みは、瀬が早さに也。○上の句は「われても末に逢ふ」と言はむ爲めの序也。○瀬急なる瀧川の中に岩あり、水之にせかれて、左右にわかれて流るれど、やがてまた一所になりて流るゝものなるが、今我れ人の爲めに妨げられて、戀人と別れ居れど、永遠に別れ居るべくもあらず、必ずまた相逢はむと也。○序の思ひ付きが、一寸面白きのみにて、まづ平凡なる戀歌といふべし。

七十八、源兼昌

淡路島通ふ千鳥の啼く聲に、幾夜寢めぬ、
須磨の關守。

○淡路島へ通うてゆく千鳥のなく聲の憐れなるに、幾夜か寢覺めて聞いたであらうか、須磨の關守は、との意也。○風光明媚なる須磨の關所の番人となりて夜々千鳥の聲を聞く。詩情、詩景、ひと通りは面白き歌也。

七十九、左京大夫顯輔

秋風にたなびく雲の絶間より洩れ出づる
月の影のすやけさ。

○たなびくは、なびくに同じ。橫さまにたわむこと也。○一首の意は自から明らかなるが、一言すれば、秋風嫋々、雲破れ、その雲の隙間より一痕の月あらはれ、その月の光り、いかにも明かなりと也。○秋の月は、さらでも明かなるに、今迄浮雲滿ち居りて、うすぐらかりし反動にて、一層明かに見ゆ。秋の月を形容して、ひとわたりは聞えたる歌也。

八十、待賢門院堀河

長からむ心も知らず黑髮の亂れて今朝は
物をこそ思へ。

○長からむ心も知らずは、昨夜はじめて男と相逢ひたれど、男の心と秋の空とやら、長持ちせむとする心が男にあるやらなきやら、太だ覺束なしとの意也。○黑髮は、亂ると云はむ爲めの序なるが、黑髮の亂るゝに、後朝の意もこもれり。○亂れては、こゝろがと

りみだれて也。〇うれしき逢瀬も一夜の夢、啼く雞の聲に、夜早く明け、結ひたての髪の、今朝はだいなしにほつれたるを、つくろひも敢へず。花散る窓に、思に沈める身をもたせて、思へは思ふほど愁多き身の上哉。〇後朝戀を歌へるものにて、取越苦勞が常なる女性の眞情あらはれて、婉切人を動かす。一代の秀吟也。

八十一、後徳大寺左大臣

ほとゝぎす鳴きつる方をながむれば、たゞ有明の月ぞ殘れる。

〇杜宇一聲に、曉の夢破れ、さてもなつかしやと窓を推して、聲せし空を眺むれば、杜宇はいづちへか飛び去りて、其影だに見えず。唯一痕の殘月の西天にかゝれるのみ。〇情景言外に躍動す。名歌と云ふへし。

八十二、道因法師

思ひわびさても命はあるものを、憂に堪へぬは涙なりけり。

〇思ひわびは、思に苦しみ、こまりて也。〇さてもはそれでもまア也。〇戀にもだえ、苦しみても、それでもまあ命は絶えずにあるのに、涙ばかりは、もろきものにて、憂に堪ふると能はず、制せむとすれど、ほろ〳〵と自から落つるを哉。〇戀にもだえ、悲めるさま思ひやられざるにあらねど、さまで妙なる歌にはあらず。

八十三、皇太后宮大夫俊成

世の中よ道こそ無けれ思ひいる、山のおくにも鹿ぞなくなる

〇此うき世の中よ、どこへ行きても、憂き苦しみを逃がるゝ處なし。せめて山へ行かば、憂苦を忘るゝともやとて思つて山へ入つて見れど、山にもやはり苦しみがありと見えて、鹿のなくと哉。これ一首の意也。道なしは、憂苦をのがるゝ道なしと解すべし。道徳の意味の無道の世と解すべからず。〇厭世の情

を歌ひて、いと切なる歌といふべし。

八十四、藤原清輔朝臣

ながらへば又此頃や忍ばれむ、憂しと見し世ぞ今は戀しき。

○苦し、つらし、憂しと思うて居りし昔も、今となりて回顧すれば、なつかしく、戀ひしき心地す。されば、今は苦しみ居れども、生きながらへて居つたなら、又今日も忍ばれて、うれしく感ずるならむとの意也。○ながらへばは、生きて居つたなら也。○忍ぶは、心に深く思ふと也。○淺薄なる厭世家は苦しめば、直に世を捨てむと思へど、苦しきが故に、また樂しみある也。この歌別に理窟を言はずして、自から至理あり。感誦すべき名歌といふべし。

漢文評釋

文學士　久保天隨

記那須與一宗高事　柴野栗山

今度も亦た、一寸目先を變へて、國漢二文の對照といふのを載せて見よう。標題は上に揭げた通り、誰でも御承知の那須與一扇の的の話。原文は平家物語、譯文は柴野栗山である。こゝで一寸、栗山の略傳を述べると、名は邦彥、通稱は彥輔、栗山は其號で、又外に古愚軒ともいつた。讃岐高松の人で、幕府に召されて、聖堂の敎官となり、尾藤二州、古賀精里とゝもに、寬永の三博士といはれ、文化四年に七十四歲で病死した。そも〳〵、漢學が日本に傳はつてから、千年餘にもなるが、其間これぞといふべき詩文はない。文は柴野栗山にはじまり、詩は梁川星巖に至つて漸く見るべしといふのは、僕一己の考であるが、決して誤つた者でないと自ら許すところである。さて、此文は、善く原文を轉譯し、一字一句の末までも、精細な

る注意を以て之を爲し、すこしも增損した跡が無いといふので、むかしから有名なものである。齋藤拙堂なども、全文を、その自ら著した文話の中に轉載して盛に賞めそやして居る。そこで、此處には譯文を分載して揭げ、其下に原文を付記し、意味は別に解釋する迄もないからして、直に多少の批評を試みようと思ふ。そうすれば、一目瞭然、なか〳〵に面白い節もあるだろう。

既而阿波讃岐叛ニ平氏一而待ニ源氏一者、所在山洞、徃徃十騎二十騎相將而來歸、判官兵及ニ三百餘一、當日日向レ暮、不レ可レ決レ勝、源平交收レ兵而退、海上艶ニ裝一小舟一、望レ岸搖來、距レ岸七八段、轉而横レ舳而止、源軍疑而覗焉、舟中出ニ宮娃一、年可ニ十八九一、緑衣紅袴、開下純紅扇書ニ旭曦一者上挿レ竿樹ニ之船頭一、向レ岸而招、

●●(原文)さる程に、阿波讃岐に平家を背きて源氏を待ちける兵ども、あそこの峰こゝの洞より、十騎二十騎打ち連れ〳〵馳せ來る程に、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。今日は暮れぬ、勝負を決すべからずとて、源平互に引き退く所に、沖より尋常に飾りたる小船一艘、汀に向ひて漕ぎ寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、船を横ざまになす。あれは如何にと見る所に、船の中より年の齡十八九ばかりなる女房の、柳の五衣の紅の袴きたるが、眞紅の扇に日の丸のうち出したるを、船のせがいに挾みて、陸に向きてぞ招きける。

●●(評論)劈頭第一「既而」の二字を提醒して來た。これは「さる程」といふを譯したるもので、最も適切であつて、外に換へることが出來ない。その下の數句は、特に言ふべきこともないが、「往々」といふ字を加へた處など、頗る巧である。「海上艶ニ裝一小舟一、岸レ搖來」の一段は、原文が妙であるからではあるが、譯文も亦た光彩奕々として、その上少しも、和習がない。かくの如く、全く漢文化したのは、作者手腕の大なる爲てあらう。

判官召ニ後藤實基一問曰、彼欲ニ何爲一、曰是應レ使ニ我射一也臣意、或者將軍進當ニ箭道一而觀ニ翫姫妓一、則欲ニ巧狙而射

落㆒也、但扇則似㆓可㆑使㆑射者㆒焉、判官曰、我軍可㆓能射㆒者爲㆑誰、對曰、巧射固多、就㆑中下野國人那須太郎資高之子與一宗高者、雖㆓力稍劣㆒、而手則巧利矣、判官曰、有㆑徵乎、曰諾、其賭㆓射禽鳥㆒、三必二得矣、乃命召之、

(原文)判官、後藤兵衛實基を召して、あれは如何にと宣へば、射よとこそ候ふらめ、但し大將軍の矢面に進みて傾城を御覽ぜられむ所を、手垂にねらひて射落せての謀にこそ存し候へ。さりながら、扇をば射させらるべくもや候ふらむと申しければ、判官、味方に射つべき仁は誰かあると問ひ給へば、手垂ども多く候ふ中に、下野の國の住人那須太郎資高が子は與一宗高こそ、小兵にては候へども、手はきゝて候ふと申す。判官、證據があるか。さん候ふ、かけ鳥などを爭ひて、三つに二つは必ず射落し候ふと申しければ、判官、さらば與一呼べとて召されけり。

(評論)一問一答、極めて文字を少くして、意義の通ずるやうにするには、一通の苦心ではない。箭道とか、巧將とかいふ、新しい字の出て來たのも、止むを得ない事であろう。「臣意、或者將軍進當箭道而觀翫姬妓則欲巧狙而射落也」といふ所など、さばかりの處でない樣だけれども、善く原文に密着して、痒い所へ手の屆く樣に出來て居る。素養の乏しい文人などは、とても〳〵及びないことであろう。「但扇則似使射者」といふのは、原文にもあるが、こゝでは非常に重要な一句であつて、之が爲に、波瀾橫生して、平板の弊がない、注意の細密はこゝらで最も能く分る。之に次いで、「判官曰有徵乎」といひ、「曰諾」と書いた處など、一字を誤れば、原文の周密は譯文の重複とある者であるが、用字の練と轉化の妙とを以て、すべてが活きて居る。「曰諾」といふ中に、實基は勿體ぶつて首を傾けて居る樣があり〳〵と見える樣だ。

與一倘二十左右之男也、披㆓茶褐戰袍㆒、紅錦飾㆓襟袂㆒、擇㆓青縚甲㆒、佩㆓白帶刀㆒、背負㆓一箙二十四枚斑羽箭㆒、加㆓揷鷹羽鳴鏑㆒、腋㆓繳纏漆弓㆒、脫㆑鍪結㆓鐙紐㆒、進面跪馬前、判官曰、宗高、汝射㆓扇正中㆒、令㆓敵軍寓目㆒則如何、辭曰、臣自料不㆑知㆓其可㆑能也、若誤射則永爲㆓我軍弓矢之辱㆒、請更

命ニ定能者一、判官大怒曰、此行發ニ鎌倉一赴ニ西國一者、其豈可レ違ニ義經之令一、若毫存ニ枝梧一者、須ニ速歸ニ鎌倉一也、與一私謂、若再辭恐成ニ惡意一、乃曰、然則其逸則臣不ニ敢知一也、既有レ命矣、請嘗ニ試之一、乃起ニ鐵漉肥健一、駕ニ金稜鞍一以跨レ之、整ニ頓弓一任レ手、促レ轡向レ汀而歩、我兵目送久レ之、言曰、此壯夫定能者、判官亦覗似ニ以爲ニ委得ㇾ人焉、既的道較遠、驅馬入レ海一段許、距、扇猶有ニ七段遠近一、

●●（原文）與一、その頃は未だ二十ばかりの男なり。褐に赤地の錦を以て、多くひ　はだそでのいろひたる直垂に、萠黄縅の鎧きて、あししろの太刀を佩き、二十四さしたるきりふの矢負ひ、うすぎりふに鷹の羽割り合せてはいたりけるぬための　鏑なぞ添へたる滋籐の弓、脇に挾み、甲をば脱ぎて、高紐にかけ、判官の御前に畏る。判官、いかに與一、あの扇の眞中射て、敵に見物せさせよかしと宣へば、與一、仕るとも存じ候はず、是を射損ずるものならば、長く味方の御弓矢の疵にて候ふべし。一定仕らむとする仁に仰けつけらるべくもや候ふらむと申しければ、判官大に怒りて、今度鎌倉を立ちて西國に向はむずる者どもは、義經が下知を背くべからず、それに少しも仔細を存ぜむ人々は、是より疾く〳〵鎌倉へかへらるべしとぞ宣ひける。與一重ねて辭せば惡しかりけんとや思ひけむ、左候はゞ外れむをば存じ候はず、御諚にて候へば、仕りてこそ見候はめとて、御前を罷り立ち、黑き馬の太く逞しきに、まろほやするたる金覆輪の鞍置きて乘りたりけるが、弓取りなほし、手綱かきくりて、汀へ向ひてぞ歩ませける。味方の兵ども、與一が後を遙かに見送りて、この若者一定仕らむずると覺え候ふと申しければ、判官も頼もしげにぞ見給ひける。矢比少し遠かりければ、海の中一段ばかり打入りたりけれども、猶ほ扇のあはひは七段ばかりもあらむとぞ見えたりけれ。

●●（評論）與一が服装を形容した十數句は、殊に精彩あるところだけれども、故實を知らないから、譯文が果して當つて居るかどうだか、批評も出來ない。これよ

り以下、判官と與一と二問二答、一層は一層より深い「恐成惡意」とやつたのは、少し深きに失したものでは無かろうか。「然則其逸則臣不敢知也、既有命矣、諸嘗試之」といふは、文勢頗る雋妙である。嘗試は、之を熟字と見るが便利だ。與一の態度を寫した所も、中々うまい。驪は黑駒て、鐵の字を添へたのは、唯だ字面を莊ならしむる爲て、深い意味は無い。轡は日本でくつわと訓ずるけれど、實は大した誤で、手綱である。詩經にも六轡左手といふ句がある。栗山の此處の用ひ方は、流石に正確である。これから傍觀者の言を擧げて、表裏から與一の勇ましい姿を寫したのは、文家慣用の手段で、東西の文その揆を一にした者である。「判官亦視似以爲委得人焉」といふは、ちと冗漫らしい、的道も至極怪しい新語て、要するに、白壁の微瑕であらう。「距扇猶有七段遠近」といつて、一小段落をこしらへて、これからが面白いので、先づ一ぷくと云つた樣な處である。

時二月十有八日、日已加レ酉、會北風頗烈、高浪打レ岸、船乍湧乍陷而漂泛、扇亦不レ安レ竿而閃曜、海面則平軍一行列レ舳而注目、岸上則源軍並レ轡而凝視、極爲二顯塲盛事一矣、與一閉レ目默禱曰、南無八幡大菩薩、殊我國日光權現宇都宮那須温泉大明神、請令レ射二夫扇正中一也、若誤レ事者、折レ弓自裁、面不レ可二再向一レ人也、神欲レ使三一歸二本國一者、此矢勿レ使レ逸焉、既開レ目、風粗恬、扇如レ容レ射者、乃取二鳴鏑一架上、引滿而發、

（原文）此は、二月十八日、酉の刻ばかりのことなるに、折節北風烈しく吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。船はゆり上げ、ゆりすゑ漂へば、扇もくれに定らずひらめきたり。沖には平家船を一面に並べて見物す、陸には源氏くつばみを並べて是を見る、何れも〳〵はれならずいふことなし。與一目を塞ぎて、南無八幡大菩薩、別しては我國の神明、日光の權現、宇都宮、那須のゆせん大明神、願くはあの扇の眞中射させ給はせたまへ、是を射損するものならば、弓切り折り、自害して、人に再び面を向ふべからず。今一度、本國へ歸さむと思し召さば、此矢はづさせ給ふな

と、心の中に祈念して、目を開きたれば、風少し吹き弱りて、扇も射よけにこそなりたりけれ。與一鏑を取りて番ひ、能くひきて、ひやうと放つ。

(評論)輕々筆を轉じて、「時二月十有八日、巳加酉」といつて、以下四邊の光景を舖叙する處、譯文に於ては得意な所であらう。酉といへば、今の午後六時近くである。並轡とあるは惡るい、鑣でなくては成らない。原文「いづれも〳〵晴ならずといふことなし」といへるを、蹂譯して「極爲顯塲盛事矣」とやらかして、記者の辭意を以て一たび收束をしたのは、史筆の正格では無いが、今さら仕方がない。與一が默禱の一段は、一體なら和臭紛々たるべきであるが、さまで耳障で無いのは、神の名を擧げた次の文句が雋壯高遠の趣を曲盡して居るからであろう。夫は彼とよむべく、自裁は自殺のことである。「既開目」より以下、引滿而發にいたるまで、襯染が追々と鮮になつて來た。風粗恬は、「風やゝ恬なり」と訓すべきてある。」

雖二然劣力一、而十二拳飛鏑、響レ浦長鳴、射二斷扇眼上寸許
餘力遠去入レ海、扇則揚而舞レ空、波二春風蹂弄一一再、颯
然散二落海中一、純江之扇、夕日映發、委二白波一浮沈泛泛、
舟師擊レ舷而賞贊、陸軍鼓レ箙而驩呼、

(原文)小兵といふ條、十二そく三ぶせ、弓はつよし、鏑は浦響くほどに長鳴して、過たず扇の要ぎは一寸ばかり置きて、ひいふつとぞ射切りたる。鏑は海に入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一もみ二もみ操まれて、海へさつとぞ散りたりける。皆紅の扇の、夕日の輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ、沈みぬ、ゆられけるを、沖には平家舷を敲きて感したり、陸には源氏箙をたゝきてどよめきけり。

(評論)雖然劣力は、「然かく劣力なりと雖も」と讀むべし。註解的の字句、元來漢文の格に這入り惡くいものであるが、箇切に出來た處が見ものば。「扇則舞空、波春風翻弄一再、颯然散落海中」の三句、原文に比較して、すこしも違はない、精微こゝに極まるといふべしだ。「純紅之扇、夕日映發、委白波浮沈泛泛、舟師

擊柝而堂替、陸軍皷旆勿驩呼」といふ一段、文が漢なるだけに、用字の精錬、光彩の燦然たるもの、原文よりも一層明瞭に認められて、一頭地を抽きたる如くに思はれる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

(總評)そも〲、譯文といふものは、原文に對照して獨り意義のみならず、語調までも傳へてほしい所の者であつて、之を增すも可ならず、之を減するも可ならず、誠に至難の事であつて、大抵の者は、原文玉の如く譯文泥の如しといふ惡口評を免れない。こゝに揭げた一篇は、原文が平家物語で、すでに國文の珍と相場の極まつて居るだけに、之を譯して同一の價値あるやうにするのは、言はずと知れた御太儀至極の事である。しかし、粟山の大手筆を以てして、善く漢文の氣格を運用し、その適するものは益す之を進め、適せざるものは巧に轉化して、完璧とすることが出來た。仔細に觀るといふと、一字を漏らさずに、詞華絢爛、筆力飛動、寫し得て活畫眞に逼つて、堂々、大家、一も備はらない者は無いと言つて宜しい。その幾分か、小說體に近いところのあるのは、原文の爲に然るものであつて、すこしも瑕となすに足らない。良工苦心の跡は、此に見るべく、こんな樣な處からして、漢文の搆成を呑み込むといふと、頗る便利だと思はれる。

土佐日記講義（十）

文學士　鹽井雨江

廿七日。風吹き、浪荒ければ、舟出ださず。これかれ畏く歎く。男たちの心なぐさめに、唐歌に、日を望めば都遠しなどいふなることの樣を聞きて、ある女のよめる歌、

　日をだにも天雲近く見るものを、
　　都へと思ふ道のはるけさ。

また、ある人のよめる、

吹く風の絶えぬ限りし立ちくれば、
浪路はいとど遙けかりけり。

日一日、風やまず。つまはじきして寢ぬ。

○これかれ。誰れ彼れ幾人の人をいふ。○畏くなげく。甚しく歎くといふに仝じ。○男だちの、云々。舟中の男たちが、思ひむすぼるる心を慰めん爲めに、唐詩など詠みて、「日を望めば都遠し」などと吟ずるをきゝて、ある女子か、歌をよみたりとなり。「日を望めば都遠し」とは、「天日を望めば、天日は見ゆる。されど、都は見えず。都は遠し」といふ意なり。これは、東晉の肅宗明皇帝、未だ幼かりし時、その父元帝の、長安近きか日近きかと問はせたまへるに、明帝は、「擧レ頭見レ日、不レ見ニ長安一」とて、日の近きよしを答へたまへりといふ談あり。それによりて吟ぜし詩句なるべし。

○歌の意は、遠き天上の日をも、天雲近く見るを得るに、都は更に見えぬ。さても、都へと志して行く道の遠き事よといへるにて、前の詩句の意によりて作れるなり。

○次の歌の意は、風の吹きやまぬ限りは、波も絶えず立ちて海は荒れれば、舟は出し難ぬる故に、都への海路は甚だ遠いよといふことなり。限りしのしは、語勢を強むる助詞にて、意はなし。なみぢとは海上なり。

○日一日。終日なり。○つまはじき。惡しき天氣を憎み嫌ひて、寐てしまつたといふ事なり。「つまはじきして」の文、面白し。

廿八日。よもすがら雨やまず。今朝も。

○よもすがら。終夜なり。夜を通して雨が降りたりとなり。今朝も。廿八日の朝も、なほ雨は降りやまずといふを、かく略して、今朝ものみいへるなり。輕妙なる筆づかひ、妙といふべし。

廿九日。舟出だして行くに、日うら〳〵と照りて、漕ぎ行く。

○廿九日は舟を出だして漕ぎ行くに、日はうららか

に照りて、今日は天氣いと靜かな日となり。此の文句、いと拙き筆づかひなり。行くにといひ、「うららかにてりて漕ぎ行く」といへる、文整はずといふべし。

爪のいと長くなりにたるを見て、日を數ふれば、今日は子の日なりければ、切らず。むつきなれば、京の子の日のといひ出でて、小松もがなといへど、海中なれば、難しかし。

○今日は子の日なりければ。云々。指の爪が甚だ長くのびたる故に、爪を切り取らむと思ひたれど、今日は子の日にて、爪を取ることを忌むべき故に、今日にとらずしてやみたりとなり。

○むつきなれば、云々。今日は正月の子の日なれば、都にては、松の長壽にあやからむ爲めに、野べ岡べに出でて小松を引きて遊ぶなり。その子の日の遊びの事を言ひ出だして、小松の欲しやと希望すれど、海上の事なれば、小松は到底得難し、誠にくちをしく悲しとなり。かくは、強く言ひとゞむる助詞にて、別の意はなし。

ある女、書きて出だせる歌、

おぼつかな今日は子の日か海士ならば、海松をだに引かましものを。

とぞいへる。海にて子の日の歌にては、いかゞあらん。

○歌の意は、さて〳〵、今日は正月の子の日なるが、さては、野べの小松は引くこと出來ずとも、若し我が身が海士であつたならば、せめて海松にても、子の日のしるしに引かむものを、それもかなはず。さても〳〵心細いことよといふ意なり。おぼつかなしは心細き意なり。

○いかゞあらん。此の歌上手にはあらねども、海上の子の日の歌とすれば、少しは見どころもあらん、全く面白からずと捨つべきものにもあらざらむといふ

貫之の評なり。

また、ある人の讀めるうた、

　今日なれど、若菜も摘まず、春日野の

　　我が漕ぎわたる浦になければ。

○歌の意は、今我が漕ぎてわたり行く此の浦には、春日野はあらざる故に、正月の子の日の今日にはあれども、若菜も摘まず。さてもせんかたなしといふ意なり。春日野とは、大和の名所にて、其の昔、都人のよく若菜つみに行きたる名所なれば、かくいへるなり。これも、それだけの歌にて見所ある歌にはあらず。

かく言ひつゝ、漕ぎ行く。面白き所に舟を寄せて、此處や何處と問ひければ、土佐の泊りとぞいひける。昔、土佐といひける所に住みける女、此の舟にまじれりけり。それがいひけらく、むかし暫時ありし所の名たぐひにぞあなる。あはれといひて、よめる歌、

　年來を住みし所の名にし負へば、

　　來よる波をも、あはれとぞ見る。

とぞいへる。

○かく言ひつゝ。かく正月の子の日なれど、小松も引く能はず、若菜も摘みかねたる恨みなど語りて詠みつして行くとなり。○面白き所、景色の面白き所なり。○土佐の泊り。何處の港にや、定かならず。阿波の國にて鳴門に近き所なりともいふ。○昔、土佐といふ所に住みける女、假りに此の日記の筆者となる女にて、貫之自身の事なり。此の土佐は、即ち、土佐の國なり。○まじれりけり。舟の中に一所になつて居つたといふ事なり。○それがいひけらく、云々。其の女の言ふやう、土佐と言へば、我が昔暫時の間住みて居りたる所の名に類似したり嗚呼なつかしやといひて歌をよみたりとなり。

あはれといひては

嗚呼なつかしやといひて歌をよみたりとなり。あはれといひては嗚呼なつかしといふ事なり。名たくひとは名の類似せりといふ事なり。

○歌の意は、幾年月の間、もと我が住みたる事ありし所と全じ名をもてる所故に、此の海岸にうち寄する波をも、誠になんとなう懐かしく思ふといふ意なり。

卅日。雨風吹かず。海賊夜ありきせざなりと聞きて、夜半ばかりに舟を出だして、阿波の水門を渡る。夜半なれば、西東も見えず。男女辛く神佛を祈りて、此の水門を渡りぬ。

○雨風吹かず。雨も降らず風も吹かずといふべきをかく略して言へるなり。○海賊云々。海賊は夜は歩かぬものなりと聞きてといふ事なり。○阿波の水門阿波の鳴門のことなり。水門とて、總べて、海の狹くなりたる所をいふ。海峽なり。○辛く。一心に神佛を祈るとなり。

寅卯の時ばかりに、野島といふ所を過ぎて、田無川といふ所を渡る。辛く急ぎて、和泉の灘といふ所に到りぬ

○寅卯の時。寅の時は、今の午前四時、卯は今の午前六時にて、夜のあけがたなり。○野島。淡路にあり。田無川は定かならぬ。和泉の國の田川の事ならむかとも古人いへり。

今日、海に波に似たる物なし。神佛の惠蒙れるに似たり。今日、舟に乘りて日より數ふれば、三十日あまり九日になりにけり。今は和泉の國に來ぬれば、海賊ものならず。

○今日、海に云々。今日は海上極めて靜にして少しの波も無し。神佛の恩惠をうけたるやうなりとなり。○今は和泉の國に云々。今は既に和泉の國に來たりたる故に、最早都も近きわたりに來たりたる故に、今

まで恐れたる海賊も、最早ものゝ數ならず、恐るゝに足らずと安心したる事なり。

二月朔日。朝の間、雨降る。午の時ばかりにやみぬれば、和泉の灘といふ所より出てて漕ぎ行く。海の上、昨日の如くに、風浪見えず。黑崎の松原を經て行く。所の名は黑く、松の色は青く、磯の浪は雪の如くに白く、貝の色は蘇枋にて、五色に今一色ぞ足らぬ。

○午の時。今の十二時頃なり。○海の上云々。今日も風靜にして、波は立たず、海上は極めて靜かなりとなり。○黑崎の松原云々。黑崎といふ所の松原ちかき海邊を過ぎ行くとなり。○所の名は云々。こゝは、松青々とつゞき、磯に　だくる白波は雪と散り、磯の白沙にまじる貝などの蘇枋色にあざやかに見ゆる黑崎の美しき岸の景色を、黑崎といふ所の名に合はせて、黑、青、白、蘇枋と並べて面白く言へる　。此の末に、「誠に面白き景色よ」といふ意を添へて見るべし。面白くも書きたりといふべし。五色とは白青黃黑紅なり。蘇枋色は、紅くしてやゝ黑みある色なり。これを紅に見たてたるなり。

此の間に、今日は、箱の浦といふ所より綱手引きて行く。かく行く間に、或人のよめる歌、

　玉くしげ箱の浦なみ立たぬ日は、
　　海を鏡と誰れが見ざらむ。

○この間に、云々。かく漕ぎ行く間に、今日は、箱の浦といふ所より、船に綱をかけて、綱にて舟を引き行きたりとなり。箱の浦は和泉の日根郡にあり。○かく行く間に。斯く綱にて舟を引かれ行く間に、舟中の人が歌をよみたりとなり。○歌の意は、箱の浦の波の立たざる日は、誰れか海を鏡と見ざらむ、誰れも皆海を鏡と見るべしといふ意なり。玉くしげは、玉

櫛笥にて、美しき櫛笥の意なり。櫛笥とは、女の化粧道具を入るゝ箱なり。鏡も、その中に入るゝものなれば、かく取り合はせて、しやれて言へるなり。玉くしけは、箱の枕詞なり。

また、船君の曰く、この月までなりぬることとて、歎きて苦しきに堪へずして、人もいふ事とて、こゝろやりにいへる歌、

　引く舟の綱手の長ふ春の日を、
　四十日五十日まで、我れは經にけり、

○此の段の意は、船君のいふやう、遲くも正月の末までには都へ歸へらるゝ事と思ひたるに、思ひの外に、舟路のはかどらず、既に二月にも成りたる事よ、と言ひて、船君は、深くなげき、いとど憂き思ひに堪へかねつ。昔より、誰れも、かゝる時に詠むものなれば、せめて、我れも歌でもよみて、心を慰めむとて歌をよみたりとなり。其の歌の意は、長き春日を、早や四五十日も、我れは海上に經過したりといふ事なり

「ひく舟の綱手の」といふ詞は、綱は長き物なれば、長き春日と言ひ出でん序に用ひたるにて、一首の意味の上には、關係なきなり。折りから綱にて船を引かれゆくなれば、面白くも言ひ得たる序といふべし。船君は例の貫之の事なり。

聞く人の思へるやう、なぞ、たゞ言なると、密に言ふべし。船君の辛くしてひねり、出だして、善しと思へることを、得しもこそ強ひへとて、とゞめきて止みぬ。俄に風波高ければ、とゞまりぬ。

○此の貫之の歌を聞きて人々の心には、何にとして、マアー、かゝるつまらなき平語の歌をよむものかな、何んの奇も妙もなき歌よと思ひて、密に惡評するならむ。されど、我が苦心して、やつとの事で詠み出だして、自身は、よき歌なりと思へるを、よくもさやうに強ひて無理に平凡なりなどといふ、言はば言へとて、小聲に言ひて、そのまゝにしたりとなり。強ひ

へとは強ひ言へのいを略したるなり。強ひて言ふ。無理にいふ事にて、さは無き事を、無理にまげていふ意なり。○俄に云々。俄に風が吹き出て、浪が荒くなりたる故に、舟をとゞめて泊りたりとなり。

二日。雨風やまず。一日、夜すがら、神佛を祈る。

○今日も雨なり風吹き、天氣あしければ、舟を出ださず。終日終夜、心の中に神佛を念じて、天氣の好くなるやうにと思ひ願ひてのみ暮らしたりとなり。

三日。海の上、昨日のやうなれば、舟出ださず。風の吹く事止まねば、岸の浪立ちかへる。これにつけて讀める歌、

緒をよりて、かひなきものは、落ちつもる　涙の玉をぬかぬなりけり。

○岸の浪立ちかへる。此の詞は、伊勢物語に、業平朝臣が東國へ下り給ふ途にて、伊勢尾張の海岸を行く折りから、波のいと白く岸にうちよせては、また、あとへかへりゆく有様を見て、「いとゞしく過ぎこし方の戀しきにうらやましくもかへる浪かな」と詠まれて、都の戀しき心をいはれたることあり。その歌の意にて、貫之は此の詞を書きたり。されば、風あらき故に浪は岸に高くうちよせては、またやがて後へ立ちかへりゆく、さても、立ちかへると言へば、うらやましき浪よ、いよ〳〵都の戀しく、早く歸へりたしといふ意なり。○これにつけて都の頻りに戀しきに、かく舟路のはかどらぬ悲しさにつけて、左の歌をよみたりとなり。

○歌の意は、糸をよりも、つなぎとゞむることの出來ぬものは、かくはかどらぬ船路の悲しみに毎日毎夜泣く此の涙の玉であるよ。誠に此の涙のとゞめがたしといふ意にて、玉は糸に貫きとゞむることを得れど、我が涙の玉はつなぎとめがたしといひて、つまりは、我が涙のこぼれ〳〵てとゞめがたき意なり。○纖巧なる歌のみ、小細工の歌のみ。彼の古今集に、貫之の「糸によるものならなくに別れ路の心細くもおもほゆるかな」といへる歌の類のみ。小細工、見るに足らず。由來、土佐日記には見るべき歌、いと少し。○かくて今日もくれぬ。かやうの事にて、今日も空しく暮れたりしなり。

小説

秋の夜がたり

二十三階堂

（一）

世は剣の刄を渡るがごとく險しく、家に平和の慰樂もなく、人に慈悲のこゝろなかりしとさいふ戰國殺伐の世の辛ふじて治まりたる、元和の頃、安房上總兩國の大守里見守房の守が家臣に進藤伊織といふあり、千二百石を取りて番頭を勤め、大守の御覺へもいと芽出度かりし、其の頃伊織は二十二歳、先年父歿りて家督を嗣ぎ、主君大事と仕へけるが、生得美男なるが上、器量すぐれて一家中、人々の譽れものとなりけり、妻は同僚山名主計とて是れも八百石を取る人の娘子、名を嘉根と呼びて家中第一の美女にて歌道風雅の心かけ淺からず、才藝並び備へて世に好もしき女、此の夫にしてこの婦あり、實にや鳳鸞の相交はりと人々讃め美へける。

凡そ女子の身に起る禍災の多くは其の身の淫心なるにあり、然らずんば他の邪まなる情事を避くるの道なきに由るとぞ、伊織夫婦は鸞鳳の契いと濃やかにして偕老の交り知る人の羨む所となり、一家の和氣圓滿なるが上に、又一つの子寶をぞ儲け、名を金次郎と呼び、夫婦が掌の珠と鍾愛涯りなかりき、然るに或日の事同じ家中より火を失しけるに、災禍は延いてこれが爲め隣家なる矢部半太夫なる者の家を燒き盡しぬ。抑もこの半太夫は一刀流の達人にて劍術の師範を爲す者、一家中の壯少過半は此の人の門人にて頗る名聲あるのみならず、伊織も以前此人の指南受けし事とて日頃格別の昵懇にて。且つ、通家のよしみあるものから、此の度の類燒を一しほ氣の毒におもひ、長屋の出來するまでは見苦しくとも拙者宅に御越しあるべしと鄭寧に申し遣

はせしに、半太夫も其の好意を謝し、即刻進藤家の一室を借る事になり、表座敷の二階を居間として暫らくの不自由を忍びぬ。

半太夫は茲年二十六歳、其の時代に於ける武士として、一と廉の男なれども、未だ世に定まれる妻はあらざりけり、二百石取にて兩親共に先年歿りて後は下男に薪水勞らせ、世を獨り棲の身の上なれば、類燒の後は一倍身の不自由なるを感じぬ、主人伊織は日頃御殿へ出仕して暇なけれど、退出の後は必らず二階を訪づれ、四方山の話をなして師なり友人なりの無聊を慰めければ、妻のおかねもそれに伴れ添ふて萬事に意を注け、朝夕侍婢に命じて含嗽水など拿らせ、寐床の上下より食事の給仕など親切を旨となしけるが、半太夫も初めの程は兎角遠慮勝ちにて、蔭日向なく身の廻りにこゝろ附らるゝ事一しほ迷惑におもひ、其の都度辭退しけるを、おかねは何時もやさしく取做し、偶然の御災難にて嘸かし御不自由に思召さるべし、伊織事は貴所樣の御丹誠にて武士の嗜みこれ第一の指南に預り、數ならぬ妾風情も忝なく存じ、責ては御恩報の爲めとおもひ候へは、御心盡の程は御無用に候ぞと應へける、其の口上といひ、立振舞、縹緻は家中第一と噂のあるも眞實無理ならぬ面影、倩〱と見惚れて居たる半太夫、いつしか、恍惚となり、嬝やかなる姿を見ては胸とゞろき、日のたつほどに其の後は、唯面を仰ぎ見るさい、日光に射らるゝばかり眩ゆく、甲斐なく後ろ姿を見送りて、茫然たるばかりなり。

(二)

他人の婦に戀慕しかくるは眞劒命を賭けての仕事と覺悟までは叶ふまじ、苟そめなる心を動かして其の爲め生命はおろか、身の榮辱までもなきものにすることの癡氣たる、是れや聰明なる半太夫の心附かぬにはあらねど、猶且つ脆きは人の情なり、一と度び迷ひの雲の胸の鏡にかゝりし上からは、身の榮辱も何のその、一度の情け、五十年の生命にかへて倩〱惜からず、とおもへば一日も早く心のたけを知らせたしと竹刀握たせては分別あまるほどの男も、此の道ばかりは、修業の効もな

く眼晦らみて唯氣を焦せるばかり、矢竹心になりて急ぎ一封を認め、それを內懷ろに納め、よき機會もあらばとおもひつゝ日を暮らしける。

頃しも夏は三伏の、其の日は殊に朝より蒸暑かりしが、午過ぐる頃より空合變り俄かに夕立雨劇しく天蓋の破るゝほど雷鳴して家も震ふばかりなりしが、小侍來りて、扨ても凄まじき大嵐しと相成候、二階は一しを響も強く候はん、まだ主人も歸宅いたさねど、下には女子ながらも大勢をり候、御紛れにも相成候はん程に、心置なく奧坐敷へ御通下さるべしと、奧樣よりの言傳に候と言ひける、半太夫も望むところ、直樣袴を着して二階を降り奧の間へと通り、一坐見渡して扨ていふやう近頃失禮ながらわまりの大鳴故、仰に任せて罷り通り候と一禮のべて坐に就けば、おかねは左程遠慮のあるべき程の人ともおもはねば、側近く座りて、侍婢に吩附け、茶、菸盆を運ばせ、干菓子など取り出して何くれとなくもてなしけるを、半太夫は天の與への好機會とおもひ、豫ねて用意の一封を取り出して狂ふ手元を危ふく靜め、密とおかねが手筐の中へ擲げ込みつ、素知らぬ顏して空嘯き居たりけるを、相手はちらりと見て、底事とおもひながらも其の塲は粗匆なくも物言ひ兼ね、是れも又知らぬ顏にてありけるが。半太夫今は度胸も据りしと見え、庭の風景のよき處を讃め、蕣花のうつくしきを眺めて追從らしく物言ふを、おかねはさらぬ躰にもてなし、妾は蕣花を殊の外好み候ゆえ、每朝早起して莟の內より眺め候を樂しみに致し居り候など、他愛なき事共言ひ紛らしける、其の內雷も鳴り歇みければ半太夫も匆々に辭義して坐を退り立ちける。

(三)

艶書を贈りし半太夫の胸の中は元よりの事ながら、贈られし女の愕ろきは如何なりけん、斯くと知りては其の書に手を觸るゝさい恐ろしきものゝ如くにおもはれ、現〳〵と認められし艶書の文字を見るからに、さながら腦天へ冷水浴せかけられたらんやうに一時は何の分別もなく唯途方に呉れてゐたりけるが、扨て心を落着けて見るに、何樣相手は嚴格なる人物なり、且は日頃

此の方との間柄といひ、如何にしても這は容易ならぬ事共なり、されど膠なく言ひ切りて恥掻さんは本意にあらねど、今此の場に言ふべき程の事言はでは所詮後日の障りとなるを免がれ難しとおもへば、分別は水の流るゝ如く、即坐に決して、取敢えず一書を認め、贈られし艶書を其儘、一緒になし、表を緊しく封じていつもの通り下婢が蚊帳吊に上りし透を窺ひ、密かに寝床の上へ擲げ置きける、半太夫は半は嬉しく半は氣遣はしく、待兼ねて、胸とゞろきつ、披き見る其の文に曰く、

先刻の御一封何事とも辨へず、文讀むすべも知らざる妾、外ならぬ御事と存しが、豫々伊織申上候通り、御親父半右衛門様の蔭ながら我等親同然に存じ候、就ては御前様にも御兄弟同様に心得、日頃大切に存じ候所、唯今存じの外なる思召、御前様には大切なる御身の上、數ならぬ妾躰に御心被懸候御志淺からず候へ共、烏滸がましき事ながら貞女兩夫にまみえずとさい申候へば、已來はふつ〳〵思召切り被成、相變らず御てん意下され候やう偏に〳〵願上候、目出度かしく

とあり、半太夫讀み下して別段後悔の心地にもあらざりけり、斯くて其内長屋の假普請も成就したりければ、半太夫は軈て其れえ引移りしかば、おかねも二度無躰の事はあるまじと一まづ安堵のおもひをなしける、

（四）

半太夫が假の長屋に引移りて間もなく或日の事なりき、おかねは例もの通り、朝顔を眺めんとて早起して庭へ出づれば、牽牛花の繁みの中に長さ五寸ばかりの竹の頭突き出てたり、何氣なく取わけて見るに中程に接手あり引わけて見るに中より一封の書翰ぞ顯はれたり。疑ふ方なき半太夫の手蹟なり、またしても是非なき仕業かな、とおもひながらも良人に見つけられては一大事、と密と懐中へ押こめ、素知らぬ顔にてありけるも、心は容易く落つかず、元より此儘うけ取るべきにあらねど、さりとて下婢や、端女に持たせ遣はせては露顯の基と深く恐るゝものから其儘、一日無沙汰となし置きけるに翌日朝に至り又庭前を見れば昨日と同じ竹筒

ありて一封の艶書ぞ挾まりをりぬ、またしても〳〵詮なき事や、と、おかねは徐ろに心を苦しめつ、又以前のごとく密と懷中して其儘に置きけるに、三日目の朝に至りて又もや同じ竹筒を見ることゝ、おかねの身となりて何とせん、されどまだしも他人の見つけざりしだけを幸ひの事として密かに押隱さんとして取あぐれば、此の度は如何にしけん、封はなくして手に觸るゝと其儘、さら〳〵と繙けかゝりぬ、恐ろしもの見たき心となりて、それとなく讀み下せば、實に尋常ならぬ怨み言なり。

幾度文を差しあげても御返事なきは何故ぞ、人賴みは露顯と思召しての事ながら、去りとは曲がなし、一度位は何とか御返書のありて然るべき筈に候はずや云々

とてそれより恨みの數々骨にも入るほどの文句なり、返しを見れば、御雪隱の欞子窓の有候へば、此所へ御返事御認め御載せ置き被下候へば、夜の五ッ刻に請取に參り候。呉れ〳〵も御返事待入候とありける。無體とも理不盡とも申樣はなし、されど斯く心の迷い深くなりし上からは、最早返事をするにも及ばぬ事と此方も心を鬼になし三度の玉章を一緒に纒めて、別段添書もせず、其儘欞子窓の上に置き、戀の奴の取り來るに任せて知らず顏になしける。

然るに戀慕の執念深うなりたる半太夫の心の恐ろしさ、其の翌る朝見れば、同じ場所に一通の裸文の蕣花の葉がくれに置かれぬ。あなうたてしとはおもひながらも餘義なければ、取りあげて披き見るに、暮〳〵の御返事待ち入候處、一筆の御かへしもなく恨めしく存じ候不圖思ひ入り候此の方、片時も忘るゝ暇なく、おもひは遣る瀨なく候、伊織どのへの心中は御尤と申しながら斯く申す上からは譬へ此身は何となるとも御異見には隨ひまじく候、無理ながらおもひを遂げる覺悟極め候、よしや火に入り、水に入るとても一度の御情けは金輪奈落願はしく候、と手短かに心の底を打ち出したる文句の凄味も今更なり、おかねは篤と覽て眼を塞ぎ、暫時無言にてありけるが、扨てそ、いよ〳〵大事とはな

りけり、最早妾が身も覺悟せであるべきと、雄々しく決心したりける。

（五）

半太夫が一命拋ッての戀の念力、火水の中へ飛び入りても苦しからずとの一言は宛がら鐵槌もて身を打碎かれたらん如く、心狹き女の心を骨灰微塵となしける。彼女は一隨に家の禍を覺悟して妾身の斯くてあらん限りは良人の身に妖禍の降りかゝらんは必定、如かず身を亡きものにして家の安全を謀らんにはと、いにしえの貞烈も耻なんばかり、雄々しく決心なしけるが、心に係るは愛兒の身の上、よしや夫婦打ち揃ふて、我が圓やかなる家庭に樂しく養ひ育つ事叶はぬまでも、切ては我が膝元に置きたしとおもふはこれ、玆年三歲、悄しといふほどの可愛盛り、流石女の振棄かねしが。聊かなる恩愛にほだされて大事を損じなば悔ゐて歸らぬ過ちを見るべしと、心を鬼になして其の夜、良人に向ひ、さらぬ躰にもてなしつ、妾事も父上樣の御廟へ久しく御無沙汰に相成居り候まゝ、明日は保養かた〱觀音樣への參詣を兼ねて詣りたく候と、それとなく袂別を告げ、翌日伊織は常の如く御殿へ出仕しける其の跡にて仕度とゝのへ、官兵衛とて律義なる用人ありけるを喚び萬端留守中の事共申し置き、斷丁に乘駕籠を用意させ、侍婢お秀、お富の兩人に若黨の藤藏を先に立て、外に仲間二人引つれて淺草なる菩提寺誓願寺へと急がせける。

去るほどに菩提寺にては輕からぬ檀家の事なり進藤樣の御內儀の墓參とて住持も方丈の間を罷り立ちて玄關まで出迎ひ、書院に請じてくさ〱の茶菓を羞め、いと鄭重に待遇けるが、軈ておかねは下婢等に向ひ扨て今日は風さいありて殊の外凉しければ其方達も久々にて保養にもなるべし觀音樣へも參詣なし、いろ〱見物もして參るべしと腰元仲間ともを出し遣り、次に若黨を呼び、言ふやう其方御苦勞に候得共、急用の出來候程に、一と走り屋敷へ歸り吳れよ、これは昨日殿樣より下し置かれたる和歌の探題なり、今日午の刻までに詠みて奉るべきを、取り急ぎたる儘に忘れたり。とて、

手を拍ちて硯箱を呼び、筆探りあえず、さら〱と認めつ堅く封じて渡しければ、藤藏平に畏まりて懐中なし、屋敷をさして一散に歸りけり。機會こそよけれとおかねは雪隱の廊下を傳ひて裏手へ廻り豫ねて用意の短刀を懐ろより取り出し、墓場を繞らす、書院の裏の垣根の繩を截りほどきぬ。

（次號完結）

幼稚園（下）

柴田流星

水曜日

今日も兄さまと一所に起きて、顔を洗ふのも、御飯を喫べるのも、學校へゆくのも一所であつた。が、今日は幾許か心細さも薄らいで、さのみ辛らいとも思はなかつた、一つは馴れて來た所爲でもあらう！

朝往くと初めが唱歌で、それから遊戯、それが濟むとお話――孝子某の貧苦した話――で、仕まひの時間は智惠の板であつた。自分は何れも皆な面白く樂しく感じて――勿論一日々々に興味を覺えて來るのであるが――只遊歩の時に獨ぼつちで遊ぶのが少しく心淋しう思はれたばかり、最初の日に比べると、面白いと思ふやうになつただけでも、兎に角幼稚園の趣味と云ふことを知り得たのである。

それに先生が大層可愛がつて下すつて、まるで御自分の弟々子のやう、頭の先から足の先まで面倒を見て下さると云ふ風で、だから自分も姉さまか母さまのやうに思つて、じつと慕ふ考へて居ると、母さまを愛するのと先生を愛するのとがまるで合躰になつてしまつて、自分には何だか二人の母さまが居らつしやるやうに感じられる。

で、先生にお別れして家へ歸る時は、何となく嫌な氣持がして、いつまでも〱此處に居たいやうな……だけれどもお家の母さまのことを思ひ出しては、「左様なら……」と、わざ〱先生の前へ往つて、更らに禮をしなまして歸へつて來る。途々も、歸へつたち

今日先生から聞いたお話をして、父さまや母さまに譽められて、それから御褒美を頂いて…と、恁んなことをそれからそれへと考へて、いつともなく家の前へ來ると、最う母さまの笑顔が一刻も早く見たくなつて、突と走け込むと、

「母さま只今……」と、いきなり茶間へ這入つて往く。と、母さまも自分を待ち設けて居らしつて、御褒美のビスケットまでちやんと紙に包まれてあつた。

「今日は何して來たの？」

母さまは自分が歸つて來ると、先づ恁う云つてお尋ねなさるのが常で、自分はそれにお答へするのを、亦日課の一つにして居た。

で、今日も恁う仰しやるので、自分は教わつて來た唱歌を一々唄つてお聞かせ申したり、「蓮華の花」や、「子う取ろ子取ろ」の遊戯の眞似をしてお眼に掛けて」さて孝行な息子が、いろ／＼と苦勞をして、勞働いて設けたお金子で病氣して居る親を養つて、貧乏して居ながらもさまで不自由をさせなかつたと云ふ話をして、親孝行をしなけりや、烏にも劣ることなどを先生から伺つた通り申し上げて、智惠の板も出來るやうになつたつて、例の得意になつて御覽に入れると、母さまは初中終笑つて居らしつて、少しも飽きたやうな御樣子はなく、熱心に聞いて居て下さる。と、また父さまが歸つて居らしつて、同じやうにね尋ねなさるので、さらにこの事を繰りかへして申し上げると、母さまは矢張り聞耳立てゝ、初めてお聞き遊ばす父さまと一所に、わけもなく興がつて居らつしやるので。

恁んな風で自分は樂しい明日を豫想しては、いつも他愛なく眠入つて仕まふ。

木曜日

嬉しい懐かしい幼稚園の母さま——自分は先生のことを恁う云つて居るので——に御眼にかゝるのでからと思つて、例のやうに祖母さまや、父さま母さまに「往て參ります！」を申上げて、今日も快くお家を、出た。道々も兄さまから唱歌の面白いのを教えて頂戴し

て、それを繰かへし〲唄いながら、いつともなく幼稚園の御門まで來て居た。が、二日目の日のやうに、兄さまの後姿を見送つて、入り兼ねて躊躇つて居るのではなく、最う片時も早く幼稚園の母さまにお眼かゝり度く、急いで内へ這入ると、先生方も遊歩場へ出て、皆が遊んで居るのを如何にも樂しさうに見て居らしつた。て、自分は一々禮をして、受持の先生――自分が母さまのやうに思つて居る――のお側へ往つて、

「母さま……」と、つひ口をすべらして、さも失禮なことを申し上げたやうにはつと思つて、最早「お早う御座います。」も出ればこそ、顏を眞赤にして無言に頭を下げると、先生はあの優しいお聲でホヽと輕くお笑ひなすつて、

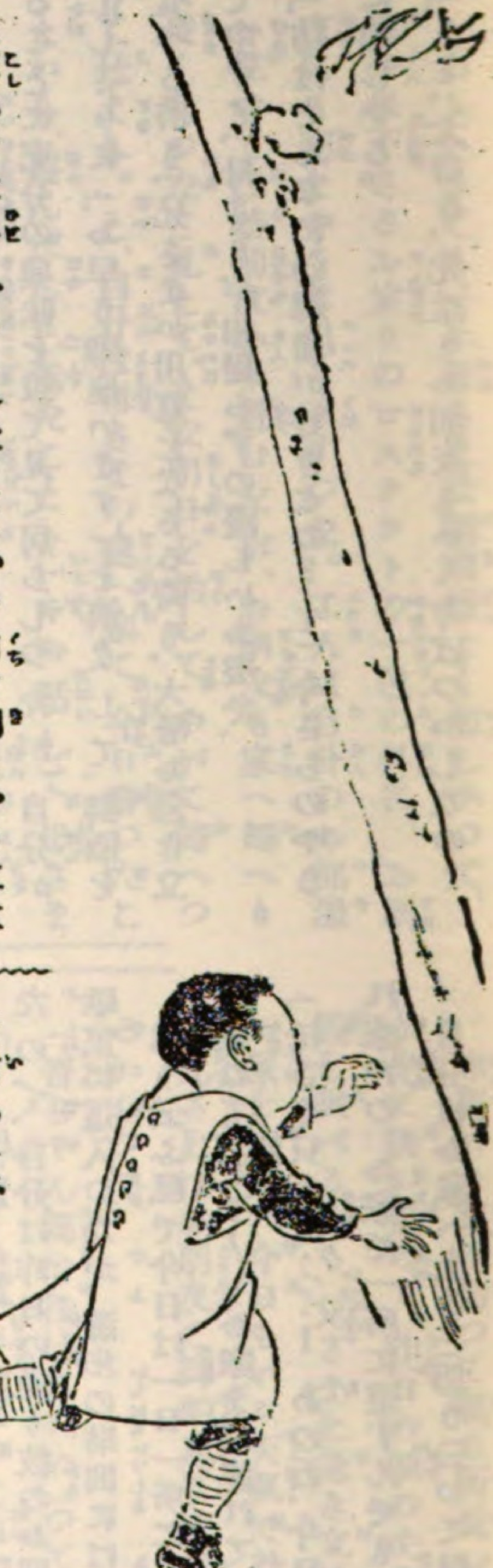
「母さまつて仰つても關いませんよ。ほんとに可愛らしいお兒だこと……」と、自分を抱つこして下さる。すると側に居た大勢の人達が、羨ましさうに眤と自分を眺めて居たので、自分は只まう嬉しくつて〲、抱かれたまゝ先生のお頸に手を掛けて、恰ど平生母さまにするやう、いつまでも〲離さなかつた。其うちに盤木が鳴る、と、皆が列を作るので、自分も先生の後からその列に加はつて、唱歌室へ這入つた。

先生方も大方來らしつて、一番お年の多い、やゝ太り肉の方がオーガンの前に腰をお掛けになつて、徐かに「君が代」をひき出された。樂の音は室内に滿ち〲て、皆の唄ふ聲はまるで天のお使が自然の音樂を奏べて居るかと思はれるばかり、唄つて居る自分までが醉つたやうな氣持ちになつて仕舞ふ。

今日の唱歌は毎朝必らず三度づゝは唄ふことになつて居る「君が代」の外に、「蝶々〲」と「桃太郎」てあつた、自分は何方も面白く感じたが、新しく習ふ所爲でもあらうか、「桃太郎」の方が一倍の興を催したやうに思ふ。

それから遊歩場へ出た。自分は今日初めて遊歩場に於ける樂を充分に味ふことが出來た、と云ふのは、昨日までは獨ぼつちで、うら淋しく隅の方に居て皆のすることを眺めて居たのであるが、先刻唱歌室で一つ椅子





に腰かけた人と、ふとしたことから口を利くやうになつて、遊歩場へ出たら一所に遊ばうと約束しあつて置いたからである。

だから今日初めて面白い遊歩の時間を得て、幼稚園、先生、お朋友と、それらに就いて考へて居たことを、殘らず會得することが出來た、樂しい幼稚園！　懷しい先生！　親しいお朋友！

自分はこれは大層嬉かつたので、歸ると直ぐ、母さまが平生のやうにお尋ねなさらない前に、

「母さま、今日お朋友が出來たの、ね、いゝてせう？　晋はお朋友と鬼ごつこして遊むだのよ、面白かつてよ。」

と言つて、ニコ〳〵して居ると、母さまもお喜びなすつて、

「さうかい、そりやよかつたね。仲よくするんだよ、喧嘩なんぞして、先生を困らすもんぢやありませんよ。」と、あの優しいお眼で睨と御覧なすつて、自分が首肯くと如何にも滿足らしい笑をお浮べなさる。

自分はその笑を見る度に心が蕩々になつて、何だか擽られるやうな氣がして、太う我慢しても、微笑まずに

は居られなかつた。ほんに一生恁んな氣分で居たら、健康で、平和で、世の中に敵と言ふものはあるまいて——

金曜日

昨日別れる時、彼のお朋友と約束したことがあるので、今朝は梅が天戸を開けないうちから眼を覺まして、お庭の先で雀が囀つて居るのを眤と考へて聞いて居ると、其うちに梅が戸を開けに來たので、今日ばかりは自分から兄さまを起して、先に立つて顏を洗つた。父さまも母さまも不思議さうなお顏をなすつて、自分のすることに充分の興味を以て見て居らしつたが、自分が忙しさうに「お早う御座います」を濟まして、御飯を喰べる時も、兄さまが用意をなさる時も、大層お急き立て申すと、母さまが相變らずの優しいお聲で、

「坊はそんなに幼稚園が好きなの？」と、今さらのやうに仰しやる。

「えゝ、大好き、先生もお朋友もいゝ方ばつかしなの：……」と、自分は飛んだ自慢さうに申し上げて、兄さまが用意を濟ましてお出なさると、また先に立つて「往つて參ります」を申し上げ、ちよこ／＼と小走りに足を刻むで、兄さまのお歩きなさるのを殆んど平らに幷むで往つた。

幼稚園へ來て見ると餘り早かつた所爲か、昨日のお朋友はまだ來て居なかつた。て、自分は曾に獨ぼつちの時、皆の遊ぶのを見て物淋しく笑つて居た彼の隅の處へ往つて、他の人達が鬼ごつこをして居るのを眺めて居ると、其うちに彼のお朋友も來て、今日は他のお朋友とも一所に、鬼ごつこを始めた。と、やがて時間が來たので、自分は昨日の通り彼のお朋友と手を組むで唱歌室に這入つたが、遊歩の時間にはまた二人して遊ぶ。

恁う云ふ風で今日は一日一所に居たが、歸る時も別れ兼ねて、とう／＼お家まで連れて來た。

「母さま只今……！　あのね、今日はお朋友の方を連れ來たの、お家で一所に遊すんでもいゝでせう、ね？」

自分はお家へ上ると恁う云つて母さまに伺ふと、

「わゝいゝとも」と、母さまは御機嫌よく仰しやつて、自分に下さるお定りのビスケットの一包の外に、お朋友にも同じやうな包を下すつた。二人は自分のお部屋へ往つて二時間ばかり遊むだが、お朋友も家へ歸へり度くなつたと見えて、また明日を約して、やがて歸へつて仕まふ。と、自分は母さまの處へ來て、今日習つたことから、遊んだこと、爲たことゝ一々お話して、母さまから例の微笑と譽言葉を頂戴して、さらに晩にも父さまから同じ賜を受けた。

自分は父さまや母さまに譽められると、何よりそれが嬉しくて、よしお菓子は頂戴せずとも、何の御褒美はなくとも、温かい愛の籠つた眼に浮ぶ微笑をさへ得れば、最うそれで滿足して、「晋は豪い」とか、「坊はいゝ子だと」とか仰しやつて下さると、無性に嬉しくなつて寢てまで微笑むで居た位だ、で、今日もその嬉しさに滿たされて眠に就いた。

土曜日

昨夜から樂み切つて眠る所爲だが、今朝も兄さまより先に眼が覺めて、昨日の朝のやうに顏を洗ふのも、御飯を喫べるのも、兄さまを急き立てゝ、兎も角も一所にお家を出た。今日もいゝ天氣である。

兄さをはお朋友と御約束なすつたとかで、寄道をするからつて、

「晋ちやん獨で往けるかい」つてお聞きなすつたので、

「えゝ、往けるの、昨日だつて梅に迎に來て貰らやしなくつてよ。あのお朋友と一所に歸つたの!」と、きつぱり申し上げると、

「さう、大丈夫?」と、念をお押しなすつて、自分が幾度か肯首くと、

「さう、ぢや獨でお出で‥‥そこまで見たげやうか」と、仰しやる。

「いゝのよ、最うぢつきだから‥‥」と、自分は最早さつさと歩いて往くと、兄さまも右に折れて往つてお仕舞ひなすつた。

途中で彼のお朋友に會つて、自分は打ち連れて幼稚

園へ往つたが、敎場でも遊步場でも二人が組になつて、先生方までもお譽めなさる位、それは〳〵仲よくして居た。

今日は土曜日である、授業はいつもより一時間少なかつた。例の唱歌が濟むと、次は遊戲で、その後は麥稈細工と、それでお仕まひである。

自分は入園てから今日がはじめての土曜日で、先生が敎えて下すつて自分で拵えた麥稈細工を持つて歸へるので、一しは嬉しく、得意になつて、いつもよりは一倍急ぎ足で歸つた。

「母さま只今……！」と、家へ這入ると、

「母さまこれ……」と、得意の色を作して、

「坊が拵えたの、上手でせう、ね、奇麗ね。」

と、柔かいお膝にもたれて、大事に持つて來た麥稈細工のそれをお目にかけると、

「おゝ奇麗だこと、大事にしてとつとくんだよ。父さまがお歸へりなすつたら、御目におるけ！」と、猶それを見て居らつしやる。

それから例の御褒美を頂いて、それを喫べて仕まふと、お座敷中を持ち步いて、獨で喜んで居た。と、やがて父さまもお歸んなすつて、やはり母さまのやうに譽めて下すつたので、自分は最う〳〵大の得意で、梅の處へまで持つて往つて自慢をする。

赤い紙の小片と、青、紫、黃、紅といろ〳〵に染めてある麥稈の五分ばかりのを糸で綴つたものと云へばそれだけなのだが、幼稚園へ往つてから初めての手細工で、それがまた皆に譽められるので、頑是ない自分にとつては、なんぼう嬉しいか知れないのである。

嬉しいと言へば翌日の日曜も、いつにない目立つて嬉しく待たれた。それもその筈であらう、今までは每日を日曜と變りなく暮らして居たのであるから、一週間に一度の安息日でもそれ程——否、別段に何とも思はなんだのだが、兎も角も幼稚園へ出てからと云ふものは、朝から續いて家に居たことに云つたら一度もないので、恁う殊さらに樂しく思はれるのも理であらう！

て、自分は樂しい明日を思ひ寢に、いつか夢から夢を辷つて、無何有の鄕にさまよつて居た。

日曜日

樂しい日曜日！

自分は眼が覺めると直ぐこの言葉を心に繰かへして、最う起きたらば恁うしてあゝしてと、わけもなく空想にふけつて居る。と、お隣に寢て居らしつた兄さんが……御方便なもんで、今日は日曜と云ふので最う早うからお眼覺めと見えて、

「晉ちやん、最う眼が醒めたの、起きしやう！」と、仰しやつて、ふいと飛び起きておしまひなすつたので、自分も續いて起きると、戸を開けに來た梅が。

「まア坊ちま方はお早いこと」と、饒山な顔付をするので、自分は可笑しくなつて、

「だつて夜が明ちやつたんだもの……」と、辯解らしく言つたが、兄さまに伺ふと、いつもよりは一時間足らずも早かつた。それも其筈であらう、今日は父さまが、二人を上野へ連れてつて下さるお約束だもの……ア、樂しい日曜日！

例の通り顔を洗つて御飯を喫べると、近所のお朋友が遣つて來た、けれども今日は上野へ往くんだからつて、兄さまも自分も外へは出ず、朝から二人して父さまにお要求した、そしてとう／＼出掛けることにした。

兄さまは半ズボンの背廣服、自分は同じズボンの海軍服を着て、

「祖母さま往つて參ります。母さま往つて參ります」を幾度となく繰りかへして、右左から父さまのお手にすがりながら、萬世橋へ來ると鐵道馬車に乘つて、

「兄さま動物園へ往くの、それからパノラマも見せて頂くの？」など、語らひながら上野へ來ると、馬車を下りるが早いか走けだして、恰ど睦れ合ふ胡蝶のやうに、二人は打ち戯れながら石段を上つて、彼の銅像のまへで西郷隆盛の豪いことを父さまから伺つて、

「僕も西郷見たいになるんだ！」

「兄さま晋にだつてなれますねぇ」と、二人て力み合つ

て、微笑む父さまを擁してパノラマ、動物園、博物館とそれ〳〵に見物して、廣小路で晝飯を濟ますと、まだ早いからつで、さらに馬車で淺草へ來た、さア面白い！鳩に豆を遣る、毬乘を見る、花屋敷へも這入るして、仲見世で玩具とお土産を買つて、家に歸へつたのは夕方であつた。

　それから母さまに今日見て來たものをあれこれとお話して、買つて頂いた玩具もお目にかけ、お土産も上げて、二時間ばかりは夢中でハシヤギ廻はつて、漸く疲勞て來ると、いつか慫う睡氣ざして來て、瞼が閉ぢ合ふ。が、じつと我慢して坐つて居ると、母さまと父さまのお話聲が、次第に遠く〳〵なつて往つて、やがて聞えなくなつて仕舞つた。

と、思ふと、彿と誰やらのやさしい聲て、

「お疲勞かい。おや最う寢ちまつて、晋や、さ、お寢間へ往つてお休みよ。」と、自分を呼ぶのがつひ耳元で聞える。誰だらう？母さまかしら……さうだ母さまだ、母さまのお聲だ……と思つて、寢ぼけた眼を僅かに開くと、母さまのお顏が――自分を見て笑つて居らつしやるのが――見えた。すると急に懷しさが泉のやうに湧いて來て、半ば夢心地でぢつと眺めて居ると、漸く小さく〳〵なつて往つて、はては……あのそれ、瞳に映る小坊子見たいな小さいお顏になつて、それも一時！最うなにも見ることが出來なくなつて仕まつた。併しまだ涼しいお聲だけはあり〳〵と耳に聞える。

「さ、あつちへ往かう、ね。」と、仰しやるかと思ふと、自分の身體は柔なお手に抱き上げられて、寢間へ配ばれた。

　それまでは薄々ながら知つて居た。けれど、寢間へ來てから母さまがいつ往つてお仕まいなすつたか、兄さまがいつ來らしつたか、一つも知らない――最う駄目だ、ゆすぶられても擽られても……。

　アヽ幼な時の樂しさ、無邪氣さ、この世に慾と云つたら罪無き快樂を飽かぬ愛！人は何故成長するとヽもに之を失つて仕まふのであらう、これを失つても更らに悔ないのであろう。自分は今以つて此問題を細かに解

釋することが出來ないのである、否、別に解釋しやうともしないので——。が只、今一度幼な時にかへつて、無邪氣な樂をくりかへしたらと、それぱかりは駄目と思ひながらも、いつも思ひ出すことで‥‥。（をはり）

露國の女子

在莫斯科府
法學士　森山吐虹

私は日本女子に對しては、滿腔の同情を提げて、之を稱贊するものである、勿論多少の贔負眼はあるであらうが、一から十迄善く見えてならない、そこで米國にあつた時も、よく日本女子を紹介したが、今露國に來て、新聞から日本の事情に就て、一筆を請ふと云はれた時も、同じく日本の女子と題して、先づ魁に姉妹の善美を唄ふた。そふして米國女子と對照して、其長短を論じ、遠慮なく眞向から、ビシリ〳〵と、斷案を下してやつた。

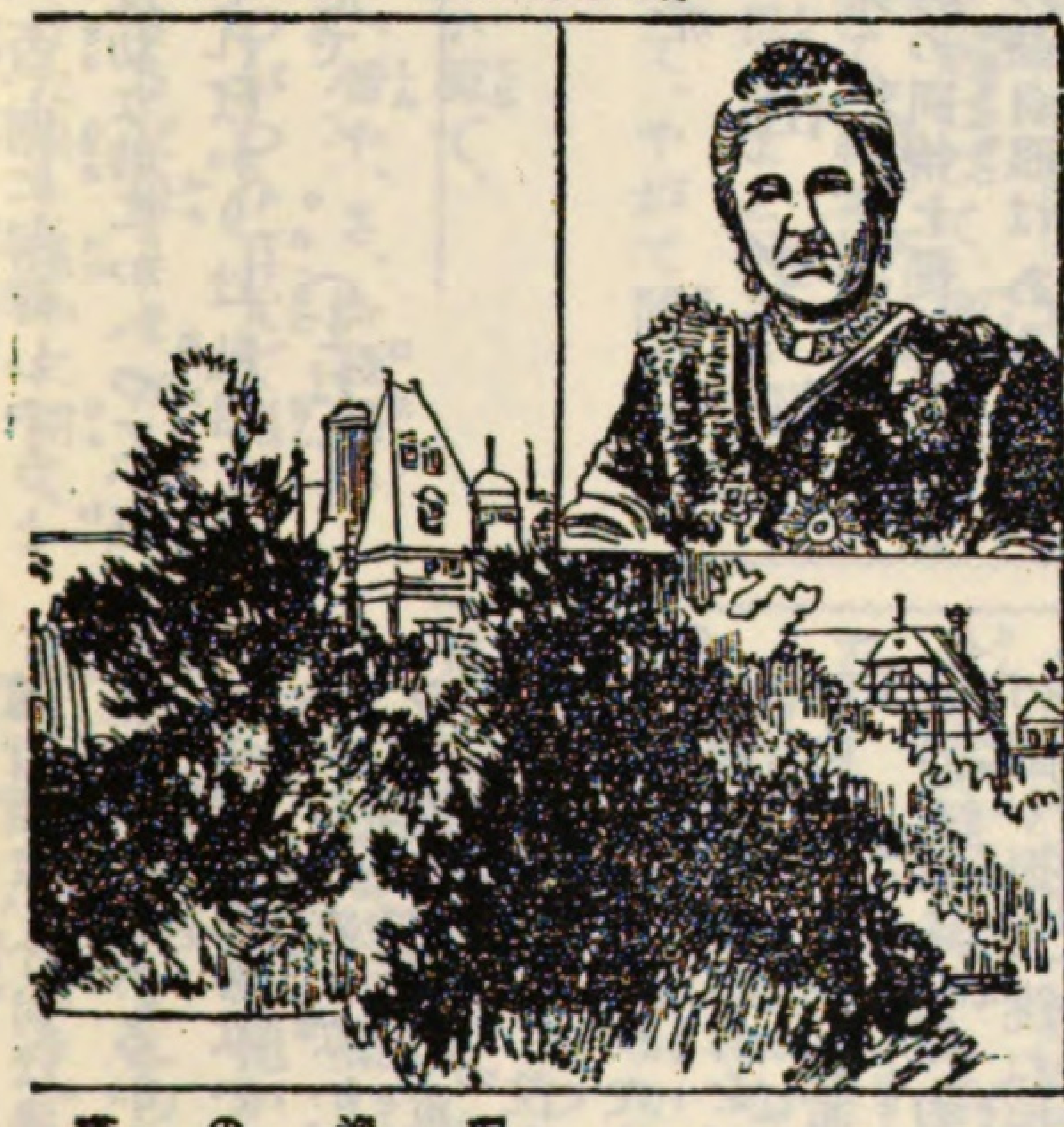
露西亞は、今尙ほ過渡の時代にあつて、東洋風と西歐風との中間にあるから、特別に書き立てゝ、皆さんを樂ませる程の事もないのは、殘念であるか、之は私の罪でないから致方がない、乍併佛英米等の女子に至ては、例の高襟先生輩が、專心一意に御研究せられたあとであつて、其笑い方、泣き方、怒り方乃至は、躍り方迄、丁寧に御紹介になつたものであるから、其眞相を素齒抜て、折角の守り本尊をだいなしにするのは、忍びない、依て面白くないが、露西亞女子と題して、皆さんに御話し申さうと思ふ。唯私は隨分忙しい人間であるから、例の躍り振や、跳ね振を說く事は止めて、露國女子は、東西兩風の中間にありと云ふ、一節を敷衍するに過ぎないとを、御心得被下たい。

何れの國でも、貴族平民か、又は富者貧民と云ふ、社會の階級があつて、其制度が公に定まるか、否かは偖て置き、兎角實際は其兩勢力が互に反目し疾視するのは免れ難い數である。一方は金に飽かせて榮華を盡し、一方は金に窮して慘苦を極むる有樣は、人をして滿身

綺羅の者が、蠶を養ふ人に非るの、歎を發せしむるが、殊に露國の如き、公の階級制度があり、且つ貧富懸隔の甚しいところでは、其幸なき貧民の爲に、一滴同情の涙を、下さゞるを得ない。

上等社會、即ち貴族と大金持との家族は、其衣服も、其食物も、悉く巴里の流行を追ふた結果、殆ど固有の、露西亞的風習を殘すなくなつた、奢侈に流れる、淫靡に陷る、如何にも輕薄で、如何にも浮華で、鼻持のならない有樣は、殆ど我國一流の貴女連中と、異なるところがない。私は日本に居た時から、夏の熱い日に、何の洒灑でうつ向けない樣な高襟を掛たり、しやがむ事の出來ぬ樣な、洋袴を穿たりするのであらうかと、生白い紳士を疑ひ、又風呂敷と云ふものがあるのに、殊更にリーダーを露き出しにし

故獨逸太后陛下の居城（宮城ハクロ

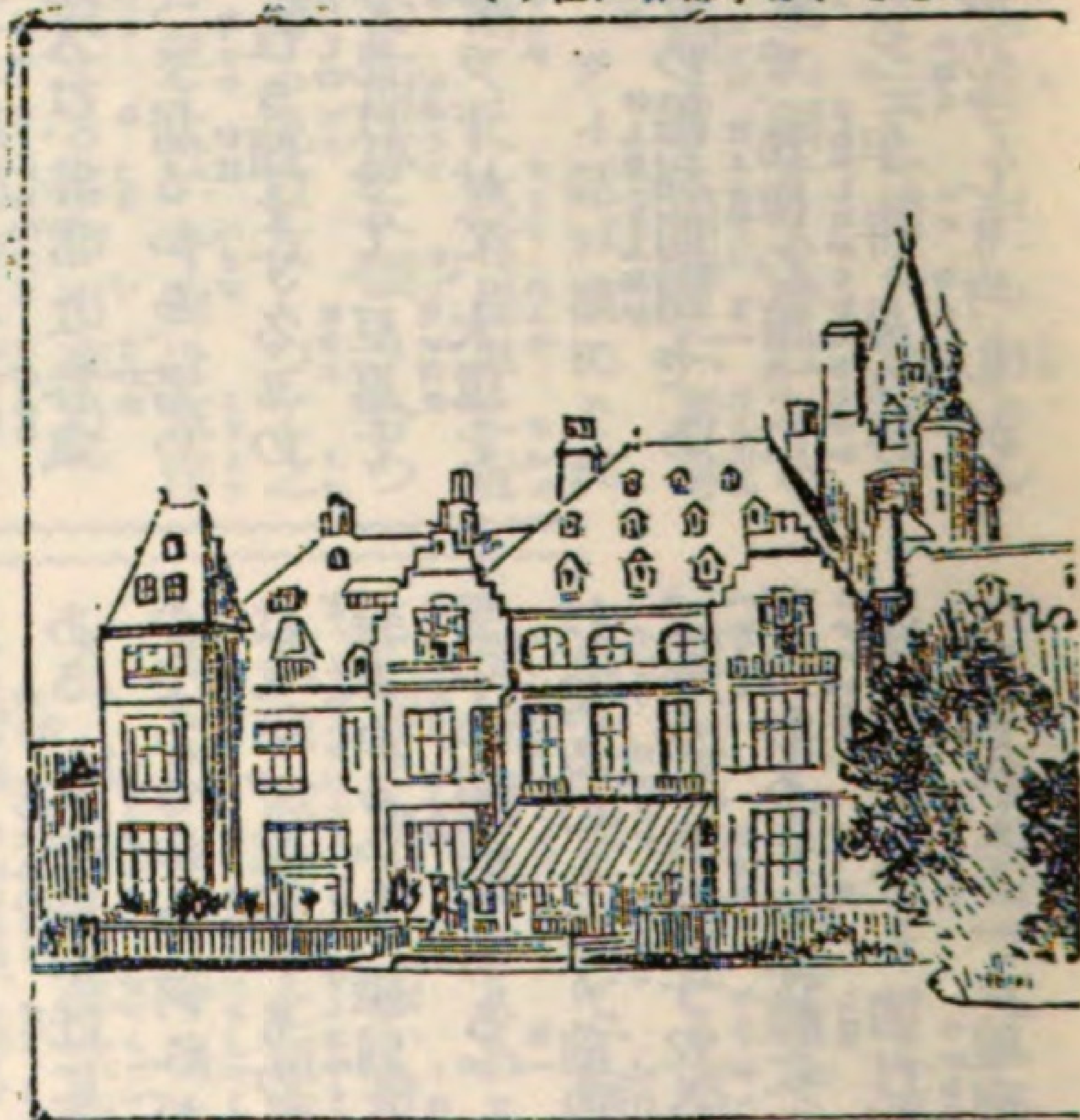


獨逸の薔

て、護謨の上靴をふみ鳴らし、鰈の如くに白眼、男を睨む令孃に、驚たが、一躰この半可通程、仕末に着かないものはない。露國の上流貴女連が、固來の美風を捨てゝ、頭の振り方、眼の睨み方迄、巴里其儘を擬ねるのは、頗る癪に觸る。乍併まだ〱、米國女子と比べる時は、其性格に大した相違があつて、一縷の命脈救ふ可きものを、發見する。それはいくら西歐的になつたとは云へ、根本に東洋風の、女らしいといふ、奧床敷くしとやかといふ、分子を殘して居る事である。其嗜好は、中々高尚であつて、音樂もやる、舞踏もやる、唱歌もやる、下手乍らに詩文もやるし、それから交際の、道具武器として、獨佛の語は必すあやつるが、其上固有な露國の家庭では、必ず娘に刺繡の業を授けるのは、感心した事である。嘗て夜會に招

待された時、立派な「イブニングドレッス」に、いとも細かく繡つめたものを見たが、それは自分で、樂みにしたものであるといふ事を、聽た。

露國では、不幸にも中等社會が多くない、併し少ない乍らも、其中等社會は、確かに立派なものであつて、よく東西兩洋の、美德を兼ねて居る、學問も相當にあり、理非の辨別もあつて、其上浮華には流れずに、眞面目に落付て暮らして居るが、殊に女子は、皆其天賦の才に從て、得意の藝能を仕込み、亭主を持たあとでは、立派に一家を整理して、内顧の憂なからしむるのみならず、ある場合には、亭主を助けて、共稼をする位の意氣があつて、米國の樣に、食はせてくれないから、おん出ると云ふ樣な條件で、離婚沙汰を、裁判所に持ち出すのは、恥辱となつて居る。又眞面目であると云ても、交際の道も心得、對遇の禮も承知して居るから疊の塵でも拈つて、赤い顔をする人形とも違ふ。よく東西兩洋の美しいところを、折衷して居るのは感ず可き事である。


(キガハンベルヒといふ小都會に在り)

私が、日本の女子は、自轉車に乘るよりは、針仕事をするし、男と手を執て踊るよりは、寧ろ老親の腰を撫でると云て書たが、此精神を失はない樣にして、また社交的の觀念を加味したらば、善からうと思ふ。そこで將來の日本女子は、此露國中流の女子の、更に一歩改良されたものを以て、標準として進まれんとを、希ふのである。

若夫、下等社會に至ては、殺風景なもので、教育もなければ禮義も心得ない、乍併頗る質朴勤倹なる風があつて、男子はいつも酒を呑で、管を捲くに反し、女子は一

生懸命になつて稼ぐのである、金がなくつて飾り度くつても、飾れないからではあるが、服裝に頓着する念は一般に西歐、米國に比しては少なく、田舍なぞに行て見ると、眞黑になつて、野良に出て、亭主と畑を耕して居る。其衣服は極めて質素で、頭には帽子を冠らずに、毛織、毛編、若くは更紗の頰冠をして居る。夏季は大躰の暮向のものは、悉く田舍の別莊に引籠て、都會に居るものは極めて稀であるから、往來に出ると女子の九分九厘迄は、頰冠りであるが、總躰露西亞人は、非常な呑氣な民族であつて、いつも太平樂を唱へて居るから、若い娘でも、ヤレ帽子がないからなど丶、泣き顏をするものは殆どない。破れた前掛の下に、笊を忍ばせて、豆腐を買ふ娘はなくつて、平氣で黑麵包をブラ下けて、大道を濶歩する。

爰に一言述べる必要のあるのは、男女の權利問題である。元來同權と云ふ事は、馬鹿なことで、法律の前では少なくとも、文明の民は皆同權である。乍併、男女躰格の相違性狀の不同により、其天職が必ずしも均しからざる事を察せず、他性の仕事の範圍内に飛び込んで、引ッ搔き廻して、權利さはぎをするのは、隨分悲む可き事である。ある權利は權利とは云ふもの丶、寧ろ過重なる義務であるのに、其事を辨へず、米國の女子連中は參政權を與へろと叫んで居る。何故一歩進んで、土方人足となるの權利を主張せぬのであるか、女が政治家となり、勞働者となつて外面に立騷き、男が小供を養育し針仕事をし、竈の前で火吹竹を頰張たら、結果はドーデある。其天職が既に異なつて、各々別れて働く可きものであるから、何れが尊くつて、何れが卑しいと云ふ事はない。唯弱いものを扶助するといふ事は、人道の本義であるから、繊弱なる躰格を有する女子を、勞るのは男子の德義である。それを何ぞや、米國の女子の如きは、勞るのを當り前の事と心得、女子は尊敬すべきものであるから、男子たるものは、悉く頭を下けて、我前に平伏しろといふ樣な擧動をするのは、大間違である。由來米國といふ國は、狂氣じみた眞似をするのが、大好であるから、一々追窮する必要はない。唯日本は、古來

義俠に富で居るなぞと、獨り力氣んで居るが、一向そんな事はない。第一女を窘める、弄ぶと云ふ樣な心掛でありながら、何が俠氣である、寧ろ狂氣に類するではないか。私は女尊男卑の、不見識なるを嘲ると同時に、男尊女卑の不道理なるを疾むのである。ツイ話が橫にそれましたが、露西亞の上流社會は、漸くに女尊男卑に近かんとしつゝあり、中流は男女共に同等に讓り合つて、諛ふる事はなくつて之を助け、誇る色はなくつて之に、謝する有樣である。若夫下流に至ては、今尙ほ東洋風の蠻習なる、男尊女卑の弊風を、脫する事が出來ぬ。露國では、希臘聖敎を以て國敎として、强制的に聖像を室每に揭けさせるが、上中流社會の婦女子と雖も、尙ほ宗敎を蔑視する風になつて來た。其信仰心は極めて薄弱で、祈禱や禮拜なぞは、進て爲る氣はないが、兎に角國敎となつて居るから仕方がない、且又躰裁上、宗敎を度外に置く事は出來ないのは一般歐米を通しての風をであるが、殊に露國では甚しい。其理由としては、別段云ふ程の事はないが、凡て人間の性質上、强制壓服といふ事を好まないから、少し學問でもやると、早速無意義なる國敎といふ事に對して、不愉快の念を生するのも、止むを得ぬ事である。唯下等社會に至ては、男女を問はず、非常なる迷信者であつて、寺院の前に行くと、必ず立止まつて、胸に十字の形を書く。

聖彼得堡にもあるが、此莫斯科府でも、皇帝の妹君に當る內親王が、會頭となつて、中等以上の女子を集め貧民救助會を組織せられて居るが、其勢力は大したもので、上中等社會の女子を糾合し、盡すの有樣である。乍併此等宗敎に關聯したる事業に、誠意誠心身を委ねる者は、極々小數で、多くは社會の、躰裁を繕ふ爲に、立働くものである、といふ事は確である。

露國には尼寺が頗る多く、又尼の數も夥しいが、彼等は槪ね下等社會の女子であつた。無論尼は絕對的に、結婚を許されてない。

男子と雖も、政治上に嘴を容るゝ事能はざる此國で、女子が政治上に、權利のないのは當然である。又文學的嗜好は、非常にあるが、未だ女子としての大家あるを聞

かない、先づ彼の「プースキン」の妻君の如きは、有數な方である。

學校制度は、一體露國は發達が幼稚であつて、米國などと比較する事は出來ぬが、倘重なる都市には。女子大學校もあり、高等女學校もある。之には上流及中等の金持連の、令孃が通學し、中の下よりは、重に手職を學ぶのである、女子職業學校の制は、較發達して居る。

爰に性質上露米兩女子を比較する時は、鼻つぱりの强いのは、米國女子を以て天下第一に置くが、露國女子は中に落付て居るとは云へ、イザと云ふ時は、度胸が据つて、堅忍不拔の精神を持て、男子も及ばぬ事業をやる。彼の虛無黨や、社會黨に女傑の出るのは、珍らしい事でなく、又今春大學校生徒の騷動の折も、釆配を把て之を煽動し男生徒を無氣力なりと罵て、自ら腕を振たのも、女學生であつた。併乍平素は極めて温厚くつて、輕躁でなく、愉快らしいが、彼のオキカレなるものとは異なつて居る。

先づ一般露國女子を御紹介申したから、之から時に、細目に涉て、御話し樣と思ふ。

瓜生岩女（五）

文學士　常盤大定

◉天災地變

◎洪水　明治二十一年以後福島地方連年の洪水あり、米價の騰貴甚しく細民の困窮いはんかたなかりしかば、岩女の事とて思ふ心ははやれども、多年の失費に資力も盡きて、如何ともせん術なければ、百方力を盡して、他より資を借り、粥を煮て施與すると數十日間に及べりといふ、當時細民の困窮は極度に達し、誰いふとなく檄を傳へて某所に集合、あはや席旗の擧動にも及ばんとしければ、岩女は之が急に赴きて慰撫せし事、偶々兇徒嘯集の嫌疑を被るの緣となり、迷惑せる事も少からざりしとぞ、表面にあらはれたる丈にては特にいふべき事にもあらざれども、内心の苦慮經營に至りては、到底筆紙に盡しがたきものありて存すべし、

◎噴火　明治二十一年七月盤梯山噴火して、惨状を現ぜるは人の能く知る所なり、該山は喜多方町の東五里にあり、岩女が生れし地に隣れるを以て、其驚き悲めるさまは、恰も兄弟を失へるに異らず、東奔西走して多くの淨財を集め、洪養會を營み、紀念碑を建て、生き殘れるものを恤みいたはり、物を施せるなど世の並々にあらざるよしは、とりわけていはずもがな、

◎賞詞　明治二十三年八月、中山從二位の局、松島遊覧の事あり、福島を過らせ玉ふ際、岩女を召してその善行を賞せられ、菓子及び金圓若干を賜はりき、その後出京せる折々も、屢々伺候して毎に面目を施しけり、げにや德は孤ならず、福島に在住せる一婦人岩女は、今や天下の岩女たらんとす、福島縣の大悲母は其名四海に傳はりて、漸く天下の大悲母たらんとするの機運に向へり、

◎請願書　廿四年一月岩女は。出京して、かねての志望を有志の人々に謀り、遂に救育所設立の件と、及び風俗改良を計る一手段として、婦人慈善徽章の制を設くるの趣旨を以て、時の帝國議會に向て、請願書を差し出せしも、不幸にして其事は行はれざりき。

◉廢物利用の初

限りある財を以て限なき不幸に應ずる能はざるは、素より數の明なる所岩女は終始苦心經營するにも關らず常に思に任せぬ事のみ多により、如何がして意外の邊に財源を得たし、彼の氣付ぬ所に救民の料を得たしとは岩女が多年苦慮せる事なりき、之を思へ〳〵之を思ひて通ぜざれば鬼神之を通ずとかやいへる語の如く、岩女の苦慮は水泡に屬せず、遂に廢物利用によりて頗る救民の料を得るに至れり、そは從來世人の全く廢物となし來れる飴の搾り糟より、一種有益の食品を製するとの發明にして、此發明ありしは實に廿一年の頃にぞありける。此發明は後日に至り畏くも九重の奥にもきこえあげたる事なれば、後に至りて之を記すべし、今は年代の都合上こゝに唯其緒を開くのみ。蓋し岩女が此發明を爲せるは偶然の事にあらず、元來岩女は時には膽の大なることあれども、平常細微の事に至る迄、

心を用ふるの密なる、常人の豫想外なるものあり、其用心の一端は既に庭訓の一節に掲げたるも、今は實例に付きて之を擧げ來らん、

◎炭團　飯を炊きて、不用の燠生ずれば、大なるものは消瓶に入れ、其小にして直に灰となる如きものは、水もて之を消し、笊を以て其灰を揮ひ去り、純粹なる炭のみとなして之を貯ひ置き、又一方には辨當或は飯釜を洗ふとき、一粒と雖も決して之を捨てずして之を小甕の中に貯ひ、日を經て形つぶれて糊となるを待ちて、之を前の小炭と混和して炭團を作るに、通常の炭團に比すれば其効力殆んど二倍以上のものあり、是家政上婦人の心得て甚だ得ある事なり、

◎紙織物　我家又は他家にて不用となれる紙屑は之を求め集めて、暇ある毎に之を紙縒りとなし、種々の色を着け、機にかけて之を織り、衣類又は帶と爲す、精勤の婦人には極めて興味あり、又有益なる事なれば、家庭の團欒の際、兒童を集め樂しき話を爲しつゝ、之をまねる婦人あらば、兒童の良氣風を養ふ上に於て又廢物利用の點に於て、有益此上なしと思はる、

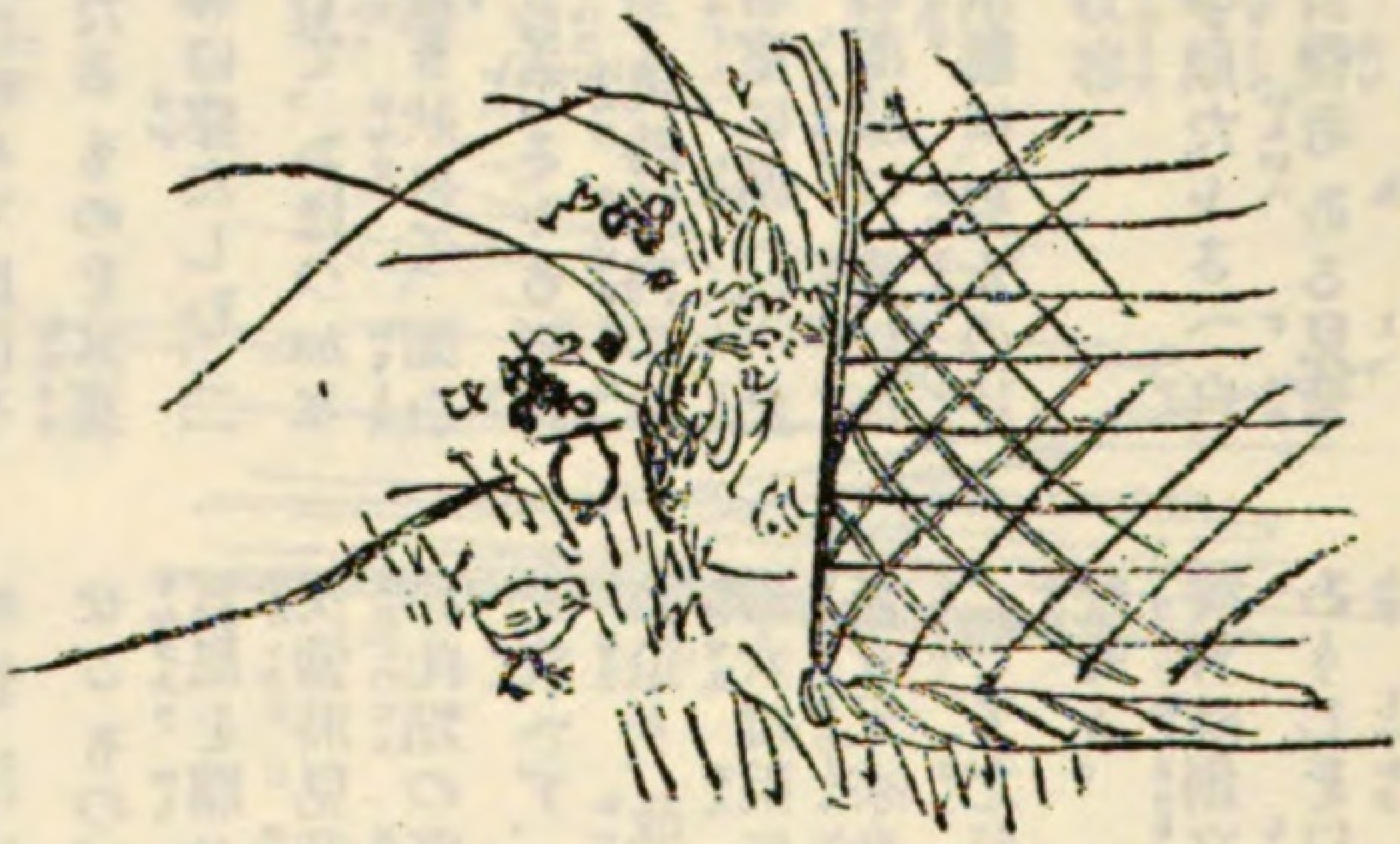
◎漬物　蕪菁又は大根の如きは、其根は之を鹽漬とし、其葉は世人多く之を棄つれども、岩女は之をこきて羹とし、又は飯に混じて炊き、或は鹽漬とす、

◎雪華菜　多く之を購ひ來りて、麻の實、葱等を交へ飯と混じて之を蒸し、悉く之を貧民に施す、其味も亦甚だ悪しからず、

◎魚團子　鹽鮭又は雜魚の頭は、人皆之を棄つれども、岩女は東京に來りて後之を惜む事甚しく、多く之を求めて、之を石上に碎きて粉末と爲し、混ずるに殘飯を以てし、握りて團子と爲し、後油を以て之を煮て、多くの貧民又は乞食等に與へたり。

◎是等唯其一端を示せるのみ、此他竹皮の棄てあるを拾ひて草履を造り、甘藷の切屑より酒を造る等、何一として岩女の眼には廢物なく、常に心を用ふるの細かき人の意表に出づるものあり、此老母世上の廢物を以て之を他人のものとせず、皆自分が棄てたる如くに感じ、種々の工夫を加へて之を利用し、而して之を他に施す

の慈悲心の深き、一たび之に接するもの皆感泣せざるはなかりき、是の如く用心細けれども然れども是等は其親切心が偶々物に現はれたるものゝみ、其他の大事に至りては、又人の意表に出るものあり、學ばずして經濟の理に通じ、不文にして經世の術を心得、婦人らしき用心に加ふるに、男子の如き活眼を具へ、南風の如き慈悲に兼ぬるに、秋霜の如き、烈魂を以てし、切々晝夜を捨てざる精勤と、勇往直進の氣力とを具へたるは人の知る所なり、之を要するに慈善は財を散ずるにあらず、物品を撒くにあらず、實に他を以て自とする一心に存するなり、岩女や實に此本源の滾々たるものなり、其末流の天下に響きしは皆此本源の水の多かりしによる若し其社會に現はれたる濟民の多少効果の如何等に至りては或は他に之に比するものあらんと雖も此本源の斯く清



らかに、斯く盈々たるは、他に多く之を見ざる所、其感化の偉大なりしも抑も亦茲に存せしなり、現時社會を云云し、利民を口にするもの、枝末の如何は之を第二とし、先づ此本源の上に於て岩女に學ぶ所なかるべからず、

岩女と相知り、岩女の福島移轉にも與りて力ありしとか、安達氏喜びに堪へず、直に請待の件を氏に依頼して、歸寓せるが、一たび之を考へ、再び之を考へ、三たび四たびして、喜びの餘眠るを得ず、半夜起き出でゝ、自ら書面を裁して、岩女に紹介せしを以て、菅原氏の招請狀未だ達せざるに、既に承諾の旨の回答來り安達氏が、同院に幹事に就職せし四日目に、岩女は出京して同院に入れり。

◎院内に於ける岩女　岩女院に入るや翌日直に洗濯場に至り襤褸をさき之を編みながら、幼童を自己の周圍に集めて、昔し話しを爲し、又は諧謔交

りに面白き物語りを爲し、愉顏溫容老婆が孫に對する如し、こゝに於てか幼童等は初めて情の溫みを感じけん、岩女に親みて其周圍を離れず、岩女は極めて廉價なる藁草履を求め來りて、彼ボロを編みたるものを其裏として、麻裏艸履に代用して之を幼童等に穿たしむ、二日目位には早や、幼童等も岩女に手傳して、おぼつかなくも一同に之を編み、初て家庭團欒の如き狀にて、面白くさゞめきあふに至り、初の畏縮手すら出さゞるに比すれば、數日にして、雲泥の差を呈せり、現時院內に於て不具のものに草履を編ましめ、以て客室に備へて、參觀者の購求を待つ迄に進步せる、艸履の濫觴は、實に斯の如き歷史を有せるもの、されば院の草履は、岩女の片見とも見つべきものなりかし、

又岩女は寸毫も幼童を叱咤せし事あらず、たゞさへ自ら親なし子の感あり、世にたつきなしとの考ある兒童の事なれば、便りと思ふ人に叱咤せられなば、身の寄る邊なきは素と其所、岩女は同情の念に堪へず、兎の毛ほども、小言がましき語を吐かざりしかば、兒童の氣は初めて暢び、氣の暢ると同時に、躰力も漸々發達し、二三ヶ月の後には頗る肥滿するに至れり、現時院內兒童が快活に一日を送るを得る、其源は岩女の此時に發せるもの、此本源は今に至りて涸れず、漸々相次で、此良風を釀せるなり。

又當時兒童の尤も不平を訴へしは、飲食に在り、岩女も亦此點の衞生に合せざるのみならず、或は老者の衰頽を支へず、幼者の發育を妨ぐるものあるを恐れ、當事者に迫り、改良を促して、稍々面目を一新するを得たり、岩女は院に就職して後、每月一定の俸給を得たるも、此老女元來身心の欲少く、些少の身に要するなきを以て、悉く之れを擲うちて、兒童の嗜める食料を購ひて分配せり。

養育院創立以來大谷派本願寺よりの寄附に係れる會堂ありしを以て、岩女は此中に於て院內先亡者の爲に、法要を執行する事を欲し、切に當事者に迫り、遂に其目的を達して、福田會育兒部の幹事より、法要の寄附を得たり、是院內に於ける每月法要執行の源にして、而し

て各宗僧侶が順次交番にこゝに法話し、こゝに讀經せる其本は實に岩女の方寸より出てたるなり。

又毎年一回盂羅盆會の際、施餓鬼を行ひ、此日は特に佳食を置き、死者に對し、生者に對して、兩分之を慰藉するの要を認め、是亦頗る苦心經營の後此方法を執行し、院內收容者をして現未二世に亘り、大に心を安んぜしむるを得たり、現時院內猶此美風を存するを見る。

岩女が院に就職して以後、其慈愛の眼によつて、之を觀、之を企てたるもの〻中、其大なるものを謂へば、前記の如く、曰く草履、曰く兒童の氣風の一新、曰く食物の改良、曰く法要執行、曰く施餓鬼、施齋、是等のもの是悉く十餘年後の今日猶堅く法則として遵守するもの、岩女の感化影響も亦偉大ならずや、而して養育院に奉職せる時日を問へば、曰く僅々六ヶ月。



寡婦の境遇に就て

上村左川

寡婦の再嫁は德義上に於て間然すべき所があるか何うか、今日にては寡婦の再嫁するとは普通の事と見做されて殆んど異しむ者もなき程であるが、猶何處となく舊習が存して居て、再嫁の寡婦は縱令社會的制裁といふ程のものは受けないまでも、多少婦德には缺けた所があるやうに或部分には信ぜらる〻やうである、從つて寡婦の方に取りては獨棲と再嫁との間に世間に對して往々にして多少の躊躇する所がある、或は世の義理に對して心ならずも獨棲を守るとか、又再嫁するにしても、親の爲めとか、子の爲めとか、其他種々の事情を口實とし、成るべくならば、單に自身の匹偶上の幸福を得る爲めといふとを表白するを憚る傾きがある、勿論中には內實全く

是等の事情の爲めに再嫁する者が無いとも限るまいが、此場合に於ては其第二の結婚は甚だ不完全なもので、殆んど結婚を意味せない、何となれば是或方便の爲めに其第二の夫なる人の幸福を愚弄したもので、結婚の眞意義からいふと殆んど詐僞の性質を帶びたものであるからで、苟も再嫁する以上は、自身が匹偶上の幸福を得るが爲めと云ふとが主なる條件で、上記の如き種々の事情は之に附隨したるものであらねばならない、扨斯く自身の幸福の爲めに、先夫との關係は全く無かりし昔の人に返つて再嫁するのは多少德義上に間然すべき所があるか何うか。

『忠臣二君に仕へず、貞女兩夫に見えず』といふのは從來東洋流倫理の重き原則のやうになつて居て、一旦事へた主君の死に際しては臣たる者が後には決して復た主に仕へず、甚だしきは殉死した例や一旦嫁した夫に死別れては婦たる者が黑髮を斷つて尼法師になるとか、さなくも生涯孤獨の生活を導くのは全たく普通の事であつたが、元來臣として二君に事へず婦として兩夫に見えずといふとは、或境遇上の原因より往々にして發作する人情自然の傾向であると迄は云はれやうが、一般の場合に於て之に背いたものは德義に缺けた所がある者とするのは果して當を得たものであらうか、蓋し情誼の殊に密であつた或君臣の間に於て、其主を失うては外には生涯仕へないとか、又情交の殊に厚かつた夫婦間に於て其夫を亡うては外には生涯夫を持たないとか云ふ情の往々にして起るべきとは自然であらうが、あらゆる君臣あらゆる夫婦は、其境遇上情誼が決して一樣のものであり得ない、君臣なぞの事は素より茲に論ずる範圍でないが、男女間は愛を主なる根基として論ぜざるを得ないもので、例へば相愛の殊に幸福な夫婦間に於て、一朝不幸にして死別する場合は、其片方は他に愛情の向ふべき所なく、自然孤獨の生活を守つても、此場合に於て其孤棲者は、再たび匹偶を求めるよりも孤棲の方が其人自身に取りて幸福と感ずべきであつて、何も我意を枉げ情を矯めて『世間の義理』を守るなどゝ云ふのではない筈である。昔から貞

女烈婦など、云はれた操行堅固の寡婦の間には匹偶上の幸福の殊に圓滿にあつたことが過半の原因を爲した上記の如き例が澤山あらう、勿論各個人の天性に情の濃淡はあるから、同じ境遇に在りても人に依りて行ひの多少違ふことは自然の勢であるが、先づ人情一般の自然の傾向から考察すると、寡婦の獨棲と再嫁とは必ずしも德義上の問題とする程のものでなく、唯其人各自の幸福と感ずる所に從つて擇ばしめて可いと信ずる、此故に獨棲を幸福と感ずるならば再嫁せざるが其人の幸福で、再嫁を幸福と感ずるならば、再嫁するが其人の幸福といふべきまでゝある。

『よくいうて惡くいはるゝ後家の髮』とやらで、寡婦が其孤棲を完たうし得ないことは昔から嘲風家に數多の材料を供給して居ることがあるが、斯ういふことになるのは世間の寡婦の多數が、心ならずも『浮世の義理』の爲めに獨棲をしやうとするからでもあらうが、又必らずしも然うでなく、始めは眞に思慕の切なるより到底再嫁の意なく、自から望んで獨棲を誓つて居たものも、歳月の經つに從つて何時となく其情の薄くなり、或は再嫁を願ひ、又は到底再嫁を爲し得べからざる境遇に在つては思はぬ浮名を流すことになるのもあるので、之は飜つて考へて見れば笑ふべきよりも寧ろ憫れむべき場合が往々にあらう、元來あらゆる情緒は遠くなる程薄くなるとは人情自然の傾向で、是亦造化の恩惠の一つである、肉躰の創庚が時を經れば舊に復する如く、精神上の創痍も時なる靈藥の爲めに復癒ゆるの時期が來るのである、若し哀傷の爲めに一たび精神を破られたら終に癒ゆるの期がないものであつたならば、人生は如何に悲慘の事が多いであらう、唯遠くなれば薄くなる情の傾向あるが爲めに、一旦悲運の暗黑界に入りたるものも、復幸福の光輝を仰ぐことが出來るのである、親子間の死別に際しても之を悲しむが人情であるにしても終生歎いて罷まざるものを必らず人情の至美とは云ひ得られない、一旦匹偶に離れて悲痛に沈みし寡婦の、再嫁して復夫婦の幸福を享け得るのは、一旦子を喪うて悲痛に沈みし親の再たび子を得て親子の幸

福を享け得るのと、人情の本然から論じて決して差があるべきものと思はれない精神の創痍が癒えてしまつた後に再たび人生の幸福を享受するとの何處か間然すべきところがあるであらうか。

世の寡婦が、假令多少心ならずながらも夫へ對する義務とてもいふものに驅られて獨棲するといはゞ、之はまだしも可なれど、唯一旦夫を亡はゞ獨棲をすべきものであるといふ習慣に對して汎べての情を犧牲にしてしまひ、單に虛僞的、形式的に孤獨を守り、斯くして無事に生涯を終つたならばそれが人間の本分を完うしたものと云ふのは甚だ要領を得ない話である。元來寡婦の境遇は萬人一樣に來るべきものでなき故に、幸にして斯かる境遇に逢はなかつたら婦德圓滿にて了り得らるべき女子が、不幸にして此境遇に臨んだが爲めに、徃々にして醜聞の種を作るやうなとに至るのは誠に氣の毒の至りである。

一旦夫婦となる以上は身心共に其人に捧げたものであるから、假令死別れても依然其人に捧ぐべきものであるといふ理から寡婦獨棲の掟を定めたものであるかはしらぬが、それならば獨り寡婦のみならず鰥夫の再娶も道ならぬ道理である。支那流倫理より觀た夫婦は、男女兩性が結婚するといふよりは、女子が男子の奴隷從屬となるとを意味して居るから、女子の幸福は蹂躪した傾きがあるが、結婚は勿論相互の幸福の爲めにするのであつて一方が他者の奴隷となるとを意味するのでもなく、片方の死後に必ずしも我幸福を犧牲にせねばならぬ義務があるとも思はれない。

要するに寡婦の孤棲は、其人の眞の希望から出て其人自身が幸福と感ずる場合に於ては甚だ宜しいとであるが、自身の幸福を犧牲にして迄も強いて之を守る虛僞的形式的の獨棲は無用である、情に弱き女性が習俗の勢力に制せられて、一身將來の汎べての幸福を犧牲にして心にもない獨身生活を企てたり、又は再嫁するにしても再嫁其事を多少の不德の如く感じて十分に幸福を享け得ない傾向があるのは憐れむべきの至である。

實例に於て獨棲を守りたる寡婦の過半數が再嫁よりも

不幸福であるならば、斯の如き虚僞的犧牲的の行爲を美德として稱賛すべき必要がない、斯の如き寡婦の獨棲は精神的殉死である、肉身的殉死は遠き未開時代に於てすらも排斥せられた程であるが、精神的殉死の習俗は今日の世にも猶存して居る！

昔は婦が一旦夫に死別れては殆んど悉く再嫁せなかつたものが、今日にては再嫁してもさして異しむもの丶無いのを見て是亦德義の頽廢した證據と信ずる者もあらうが、之は決して頽廢したのではない、誠に昔は再嫁しなかつたは事實であらうが、それは儒敎の感化を受けた習俗が唯强制的にさかせしめたので、其寡婦の操行が必ずしも完かつたのでなく、又寡婦の汎てが其境遇を再嫁よりも幸福と感じて居たではなからう、兎もあれ德義は其眞理の方へ進まねばならぬから、必ずしも昔を標準とはして居られない。

以上は寡婦單獨の立場に就いて云ふので、子を有てる寡婦が、再嫁によりて其子に不幸を來す等の場合があつたら如何に處置すべきか等の事は是別に親子間の情の關係を說かねばならないから、玆に論ずるの限りでない。

寡婦の再嫁と否とを以て毫も德義上に軒輕すべき所がないとすると、婦道なるものが輕佻に流れて夫の死を何とも思はないやうになるかもしれないと危ぶむ者があるかもしれぬが、決して在樣の恐れはあるまい。元來人情の自然は敎育を以て如何ともし得べきものでない、親子の死別を傷むヿを不德なりと敎へても情の自然は之を傷まざるヿが出來ない、殊に有らゆる愛の根基たるべき男女間の觀念哀別の情に於て人爲を以て何うして其本然を枉ぐるヿが出來やうか、唯習慣の力が虛僞的形式的に僅かに其外形を矯めしめ得るばかりである、而して倫理は上の掟至純なる人情の天眞を標準とし汎べての人に幸福を成るべく圓滿に享けしめるの方術に依るの外がないのである。

女界漫評　につとう生

女の三資格

婦女には、其占むる所の位地によりて、三種の資格を有するものである、而して其資格によりて、其責務に差異を生ずるものである、三種の資格とは何ぞや、他なし即ち、娘としての女、妻としての女、母としての女である、もとより一個の婦女子のみ、されど、其異なれる位地より觀察せば、此の如く其資格を異にするものである、

▲娘としての女、とは言ふまでもなく、所謂處女時代を指して言ふものである、此時代における女子は、未だ情愛深き慈親の下に養育せられ、たとへ其膝下に居らざるにもせよ、其保護を受けつゝあるのは常態である、從つて社會人事に接觸することも少ないから、其心情の稚氣を去らぬ代りには、また少女の心情ほど、清い、美しいものはなからう、彼等は學校に出でゝは日課を學び、家に居りては、樂しき家庭の中に、父母兄弟と和樂し、最も罪のなき、最も自然的の生活を爲しつゝあるのである、而して婦人に尙ぶべき清純の德操も、此間において涵養せらるゝのである、少女は實に未來の妻たり、母たるべきものであるから、よき心掛けを以て、德行上智識上とも、十分の修養を積まなければならない。

▲妻としての女、女は嫁けば人の妻となる、已に人の妻となれる以上は、又た娘の時代とは自から異なるものである、異なるとは其資格上に付て言ふのである、元來女は他家に嫁くべきものとは、古より已に定まれることで、支那の文にては、嫁といふことを、歸すると書くのも、此理由に基くのであらう、故に苟くも女と生れたるものは、皆惡緣を斷ちて、良緣を渴望するのも無理ならぬことである、而して女が必ず人の許に嫁して、人生の歸着點を求むるのは、之れには必ず責務の伴ふものがあるのである、さらば人の妻として盡すべき道は如何、即ち其夫に仕へて柔順なるべきは勿論、若し舅姑其他の家族あらば、上のものは、敬して仕へ、下のものは、愛して使はざるべからず、妻として畢竟の用意は、圓滿

なる家庭を造るに在るのである。

▲母としての女、人の妻となれば多くの場合に於て、此に子女を設け、母たるべきは當然の結果である、妻たるは、母たるべきが爲めにして、母たるは女性最終の目的である、何んとなれば、是れ自然の性情に伴ふものにして、之れありて始めて婦人の本能を盡せるものである、而して母としての責務は如何といふに、其子女に對して、可及的完全なる家庭敎育を施し、以て善良にして有用なる人間たらしむるにあるのである、ソレには餘りに愛情にのみ溺れず、(薄愛は勿論不可なれど)能く其子女の心性に省み、之れを善良の方針に向つて導くを勉めなければならぬ。

女子の結婚

女子は結婚すべきものである、結婚するのは天理天性に遵ふものである、さらぬものは、不具者か、薄命者かにして、天然の幸福を得ぬものである、故に結婚なるものは、女子の順道であると言ふべきものである。

然し、之れは正當の結婚を指して言ふのである、一定の形式を踏んで、喜ぶべき、祝すべき結婚を擧ぐるは、吾人が天下女子の爲めに希望する所のものであるが、若しも不正當なる、否不埒千萬ナ結婚などを行ふが如きは、吾人は最も之れを排すべきものだと思ふ。

然らざるも、世上行はるゝ結婚を見るに、結婚の眞義に副はぬが如き觀を爲すものがある、たとへば、唯に金に目がくれて、婚姻當事者間に重きを置かぬもあり、又た勢威のみに惚れ込んで、人に關する細密の注意を缺くものもあり、甚だしきは、婚姻者の精神上、身躰上に不完全なる點ありて、到底永遠の幸福を充さぬを知りながら、一時的結婚を爲さんとするが如きものもあるに非ずや、されど此等の不良なる結婚は、到底結婚たるものゝ本意を果たし、その圓滿なる結果を見ることが出來るものでない、結婚は人生の重要事である、さるを、此の如き手段方法によりて、輕忽にも結婚を成立するが如きは何んたる意ぞ、是れ或は即ち結婚の理想の低きに坐するのではあるまいか、吾人は此の如き觀察を爲すのである。

早婚の利害

早婚の利害は、何にも新らしき問題ではないが、之れを論ずれば、頗る味のある問題であると思ふ。

結婚は男女兩性の目的であつて、之れに由りて家族は形成し、社會の基礎は造らるゝものであるから、結婚は決して嫌惡の念を抱くべきものでなく、正當の方法を以てせば、人生最も喜ぶべき慶典である、されば、可成的早く結婚する(比較的年少くして)は可なるか、又たあまり急がずに、深慮細考の結果結婚する(比較的年は長ずるにもせよ)は可なる乎、是れは結婚前に於ける人の、皆念頭に浮ぶる所のものであらう、然しながら、早婚却つて幸福を得ることもあるべく、熟婚意外に不幸を見ることもあるべければ、いづれとも輕斷の出來がたいものである、が一言以て之れを論ずれば、彼の福澤翁なども申せし如く、早婚は必ずしも害あらずとは言へながら、之れ極めて少數の人、少數の場合に限るもの多くの人と塲合とに於ては、早婚は決して穩當でない、また奬勵すべき結婚方法でもない、而して之れを説明するには、何にも難かしい理窟を列べる必要はない、何んとなれば、身體及び心神の未だ充分に發達せざる中に、妻女を迎ふるは、たとへ其夫をして俄かに因循姑息の弊に陷れざるにもせよ、多少其人の志業を妨ぐる原因となるものである、又た其妻女たるものも、未だ充分の修養、準備(精神と身體の上に於て)なきの時に於て、妻たり、母たるべき責務を負はしむるは、決して得策の結婚ではないのである、故に吾人は早婚の少利益を思はざるに非ざるも、其大なる害惡のあることを認め、斷んじて早婚の不可を唱道するものである。



社交

交際のしをり

遠方より來客ありし時の心得

故郷の親戚亦は知人にして遠方より來りし客には、先づ何よりも浴をすゝむるか、或は洗足の湯をまゐらせて、身體を拭ひ清めしめ、次に食事を成るべく速にして冬は暖かなるもの　夏は冷かなるものを饗すべし、其夜は成るべく靜なる一室に、早く床を設けて寢ねしめ、其疲勞を休めしむる事肝要なり、自己の珍しく懷しく思ふがまゝに、其疲れを察せずして、夜更るまで物語りなどして、之を困むるは心無きわざなり。夜具、蒲團、枕、表敷の類は、其生活の度に應じて、絹、木綿、何れを用ふるも妨げなしといへども、何れも能く洗濯なしおきたるものを日光に曝し、乾燥せしめて進むべし。汚れ垢づき、或は黴臭く、じめ〳〵したるものは、實に氣味惡く心辛きものなり。寢衣には、必ず洗濯したる單衣を重ねてまゐらすべし。寒き時は、フランチルの單衣を重ぬるをよしとす。又客の枕許には、摺附木、蠟燭、煙草盆、水等を取揃へ置き、氣候の冷熱を酌量して、萬事不自由を感ぜざる樣にすべし。凡て何事も、眞心に厚き情ありて、客の居惡く心苦しき事の無き樣にするが最も肝要なり。

應接の心得

目上の人は勿論同輩たりとも、訪問せられしときは、直ちに出て應接すべし。久しく待たしむるは失禮なり。されば女子たる者は、毎朝起出たらば、やがて身じまひをなして、衣服を着更へ、何時にても、人に面會をし得るやうなしおくべし。

人に接するには、勉めて顏色を和らげ、優美なる詞を撰びて、苟且にも野卑なる語を用ふべからず。言葉の卑しきは、甚だ品下りて見ゆるものなり。且つ成るべく敬語を用ひて、叮嚀なるを宜しとす。且又人と談話するには音調爽に、詞寡くして、能く意味の通ずる樣に語るべ

し。次に僞言は苟且にも言ふべからず。假令我作りなしたることとならずとも、確ならぬことは語らぬをよしとす。

己の辯舌に任せて、己一人のみ語り、人に口開かせぬは惡し。成るべく人をして語らしむるやう注意すべし又談話佳境に入るまゝに、高聲になり、知らず識らず客の傍に進み出で、唾を飛ばし、息を吹きかくるなどは、いと淺ましき事なり。深く注意すべし。

滑稽の語は、漫りに用ふべからず。一時の興を添ふることは無きにしもあらねど、又人の尊敬を減ずること必ずあるべし。さりとて、人の滑稽談をなすときは、不興氣なる顔色を見すべからず。己も同じく打興じたる樣にてあるべし。されど、愛でくつがへるは惡し。

議論がましきことは、構へてなすべからず、且なるべく人に先立ちて意見を述べず、何事も控へ目にして、苟且にも驕慢不遜の風あるべからず。是れ甚だ愼むべき事なり。又外國語を談じ、漢語を交へて、己が才學を衒ふ。烏滸なる事なり。

人の猥褻なる談話をなしたるときは、決して共に打興じなとすべからず。程よく其席を避くるか、又は話頭を他に轉ぜしむべし。且威儀を正し、容貌を嚴にして、復び言ひ出ざらしむる樣にすべし。

人を品評し、他を誹謗するは、女子の最も愼むべき事なり。別けて女達の上に就きては、善惡邪正共容易に口にすべからず。其惡きことを言はざるは勿論、善きも漫りに稱すべからず。言其實に過ぐれば、或は阿諛とせられ、或は不明の譏を受けん。愼むべき事なり。されど、打解けたる同窓の友、或は親しき家族などの圓坐して、心隈なく言ひ出たるとき、獨り言葉を交へずして、眉打顰めゐたらんも、餘りに情なかるべし。其場合により、よき樣に斟酌あるべきなり。

流行のしをり

髮置と袴着（今と昔）

東洲若翁

髪置、袴着、帯解の祝ひは今も猶ほ昔の如く殊に兩三年この方一層の盛況を來し斬新なる意匠を凝らしたる摸様を衣裳に染出して時流に後れざらんことを競ふもの多きを見る抑々髪置とは三歳の男女にして袴着は五歳の男子そして帯解の祝は七歳の女子なりとす

髪置の祝は貞丈雑記に

髪置の祝は菅糸(すがいと)にてしらがを作り、ひろぶたにすへ松、山たち花の作り枝を本の方紙に包しらがの上に置、打亂箱にびん具を入れ持出て小兒を吉方(きつほう)へ向はせしらがをかぶらせ申櫛を取て左のびん三かき右のびん三かき、かく鉢をして櫛を納め退、扨御祝あり、小兒三のとしの祝也

又袴着のことは同書

はかま着は小兒七のとし也小きすあふを廣ぶたにすへて持參し小兒を吉方に向はせてはかま斗を取てめさする也云々

女のはかま着は平人にはなし大名などの御息女にはあり紅のはかまを始てめさする也紅の袴は紅の長袴也内裏上﨟などのめす袴也地は精好なり是も小兒を吉方に向はせてめさする也袴は廣ぶたにすへて出す也是も小兒七のとし也云々

帯解の事は同書に

帯なしの祝を今は帯ときの祝と云ふ是は小兒を吉方に向はせ申付け帯なき小袖をめさせ帯をしめ參らする也廣ぶたに小袖帯をすへて出てめさする也殊なる儀式もなし小兒五のとしの祝也男女同じ

とありて昔より霜月十五日には此祝儀を行ひ來りしなるべし徳川時代には士民一般に其祝日には各其身分に應じそれ相應なる禮服を着し其氏神様へ參詣して其兒の一生を祝したるは東都歳時記に

當月始の頃より下旬迄十五日を專らとす尊卑により分限に應じて各あらたに衣服をととのへ產土神へ詣し親戚の家々を廻りその夜親類知己をむかへて宴を設け女兒の祝ひに白髪又たすきかけと號して麻苧、眞綿に末廣松梅の作り花を五彩の水引を以て飾り結びかつがしめて生土神へ詣るよし江戸砂子に云へり此事近年市中に少し

とあるを以て知るべし今寛政以後に於ける上流の服装の概畧を記さんに

◉髪置男子の服装

▲服紗　縹色羽二重紋付

▲下着　黄羽二重無垢

▲香登理衣　練絹裏花色絹繋き小紋染

但し染色に作法あり生れ年甲乙に當れば赤、丙丁なれば黄戊巳は白、庚申は黒、壬癸は青等なり

▲羽織　黒縮緬紋付但し平袖仕立なり

▲帯　献上博多織

◉同女子の服装

▲表着　縮緬裾摸様（染摸様に好みあり）
▲下着　緋縮緬無垢及び香登理衣
▲帯　大和錦
▲仕扱　縮緬但し色は衣服と帯との釣合に依る

◉袴着の服装

▲上下　龍紋褐色
▲熨斗目　縹色、腰明振袖、服紗なれば黒羽二重
▲襲着　黄羽二重無垢
▲帯　献上博多織

◉帯解の服装

▲襠　綸子、縮緬等の總摸様
▲間着　緋紋縮緬
▲組白　白無垢なり合白の好みもあり
▲間帯　蝦夷錦、大和錦、織物の類

是れは徳川氏即江戸隆盛の時代に於ける御殿風なるものの姿にして此御殿風なる流行は維新の革命と共に何れにか跡を暗まし従つて其祝ひを與ぐるものも稀なりしに星遷り物變りて開け行く明治の有り難さは遂に復古を促し此御殿風もいつしか人々の新を好み華を競ふの有様につれて兩三年此方三祝日に當るべき子女を持つ人々は我れ先にと各其身分に應じ綺羅を飾り新奇を逐ふて父母兄弟姉妹さては多くの従者と共に産土神へ參詣するもの多きを見る元來子女の祝は其兒の生年月をもて行ふは古來の習慣なるをいつの頃よりか毎年十一月十五日となりしや思ふに此日は吉日なるを以ていつしか習慣となり來りしなるべし人或は云はん男兒の髪置きは昔のことにして今日斷髪の時代には髪置きの必用なし、從ふて此祝も不必用なるべしと、去りながら小兒の三歳は漸く歩行を初め片言交りの話を覺へ菓子を貰める等人たる性格を備へんとしつゝある時代なれは此時を以て祝日の一に算するは誠に至當のことなるべし左れば今の世に事古りたる御幣擔きの十干（えとう）の染色香登理衣の作法など無用の調度を除きて濃きは紫縹色淡きは肉色水淺葱、常盤の松の若緑千代よぶ鶴の芽出度を今様摸様に染出して令孃和子様方へ參らせんと若翁が老婆心

◉男兒の服装には

▲熨斗目　地質は羽二重又は縮緬の五ッ紋付紋の大さは鯨の九寸とし地色は黒又は縹色、腰熨斗目の摸様は荒波に千羽鶴、松に鷹、白上の影日向の松あるひはズット武張て白上げの七五三さては來年を氣取りて竹に虎
▲下着　二枚は白羽二重白縮緬か白茶卯色、水淺黄又は上着と同色同模様も宜しかるべし
▲羽織　地質は縮緬羽二重、色と紋と摸様は上着と同じとするか又は熨斗目摸様を兩袖にのみ染出すか胴裏は繻珍緞子の祝ひ摸様の織り出したるもの或は無双と

して胴裏に鯉の瀧昇り富士越龍を友禪染に染出すも一興なるべし

▲帶　贅澤にせば綴織なり其摸樣には苔れ松竹梅か海事思想をどうとやらには船の碇繋ぎなど思付きなるべし又は繻珍博多にして御納戸地に白の一本獨鈷、龜甲崩の類なるべし

▲袴　仙臺平紅入りの松魚縞

◎女兒の服裝には

▲上着　地質は縮緬又は紋羽二重の五ツ紋付紋の大さ鯨の八分、染方には曙染、地落染、薄落染又は際暈し染にして、染色には紅地、紫地、縹色、菫花色等其摸樣には千羽鶴或は鶴の巣ごもり、光琳水に光琳梅、白上の大竹に寒牡丹、紋は雀の加賀紋か松梅の加賀紋或はやはり御定紋として肩に雀の二羽三羽を飛せたる趣向など如何にや

▲下着　上着と同摸樣とするか但しは緋の縮緬、絞羽二重か又は肉色地、白茶地ずつと離れてかば色など派手の好みなるべし下着二枚を無垢とせば上着も引返しなしに裾を上着と同じ色とすべし

▲帶　綴織とせば桐に鳳凰牡丹に唐獅子、吉野立田の摸樣又は繻珍地色は緋色、白茶地、御納戸地なれども白茶地に紅入の摸樣を撰びたまいなば如何なる上着の色合にも適せざること稀なるべし

▲仕扱　縮緬又は紋縮緬の鬱黄色尤も宜し、さなくば肉色崩黄又は極く薄き段染ものなるべし緋色とか紅の鹿の子絞りなどは衣服の摸樣を蹴落す樣にて配色のよからぬものと知りたまへ

流行袷衣の着附　（三井呉服店調）

◎十七八歳の令孃向

▲上着　地質は縮緬或は紋羽二重地色は櫻鼠、薄小豆、薄菫花、藤色、摸樣は萩に尾花、吉野立田、柳に疋田入の槌車、大波に千鳥の類

▲下着　紋羽二重の白か或は肉色地（この仕立上代價五十圓位）

▲帶　繻珍にて牡丹色の地色に疋田入の霞散紅葉御納

戸地には緋の波立涌、花喰鳥、花色地には光淋水に扇面摸樣何れも金糸入(仕立上り代價凡三十圓より五十圓位)

▲長襦袢　紋縮緬緋の無地物か或は綸羽友禪秋草の大摸樣(仕立上り代價無地は十五圓位綸羽友禪は二十圓位)

◎同上別樣好み

▲上着　地質紋御召紫根地笹に龜甲崩し菊のよろけ形

▲下着　霞と秋草の友禪縮緬の通しにて裾廻しは薄牡丹色か紅かけ鼠の類(以上仕立上代價四十五圓位)

▲帶　繻珍にて鉛茶地朽木形に菊唐草、白茶地に崩れ桐に霞摸樣(仕立揚代價三十五圓位)

▲長襦袢　縮緬薄紫根地雪持の大竹摸樣或は薄紫の曙染水に散し紅葉(仕立上代價二十圓位)

◎同廿五六歲

▲上着　地質は縮緬、地色は都鼠、旭鼠摸樣は地落し染、信夫に落葉、若竹に雀、破れ垣に蔦かつら、何れも薄彩色を施したる裾摸樣或は江戸褄摸樣

▲下着　白羽二重の無垢(以上仕立上代價四十五圓位)

▲帶　繻珍にて白茶地古代裂盡又は鐵納戸地に摸樣入の鱗形(仕立上代價二十圓より卅圓位)

▲長襦袢　白紋羽二重或は白の紋縮緬(仕立上代價十五圓位)

◎同年齡の二枚袷衣

▲上着下着　二枚袷衣地質は縮緬地色は松皮鼠、薄葡萄、艶色、小紋は引松葉、鎗梅鐙毘沙門龜甲、行儀矢など小紋に白上の模樣を染め出すも仲々小意氣にて當世の流行なり(仕立上代價四十五圓位)

▲帶　繻珍白茶地、入ツ橋模樣、合京錦、鐵納戸地朽木形に散り紅葉(仕立上代價廿二圓位)

▲長襦袢　縮緬地白大菊花の絞り、染分の絹縮(代價十五圓より二十圓位)

◎三十歲前後

▲上着下着　御召の鉛鐵色、栗梅千草納戸の無地之れに白糸にて定紋を縫出す引返へし附の襲ね(仕立上代價四十八圓位)

▲帯 繻珍にて鐵納戸地色糸の横霞、銷茶地菊に櫻の唐草模樣(仕立上代價三十圓位)

▲長襦袢 草柳色に蝶鳥に箔押の友禪縮緬(仕立上代價四八十圓位)

◎意氣すじの好み

▲上着 御召藍革地、薄よごし地に、やたら雨又は白糸の引霞

▲下着 小紋縮緬栗梅に白の疋田、又は横の山路、胴拔仕立裾廻しはかつ色絹として(仕立上代價三十五圓位)

▲長襦袢 縮緬白地へ紫根の鞘形藍革色の大霞其中に古代更紗の裂散し(仕立上代價十八九圓位)

▲帯 厚板織、薄鼠地寂色の古代唐草其腹合せには黒の無地博多(仕立上代價十六圓位)

◎男子の部(袷衣)

▲上着 は黒羽二重の五所紋にて下着は銀鼠又は柳鼠羽二重通し無垢の二枚襲ね (仕立上代價四十二三圓位)

▲上着 を都鼠御召縮緬五所紋にして下着は紋御召の角通し若しくは縞風通、又藍消鼠、素鼠地等の細き小紋染、羽二重、對の二枚襲ねにて下着の胴は十二支若くば墨繪の竹に虎模樣の繪羽友禪、胴拔染にて裏は勝色の羽二重など粋なる好みなるべし(仕立上代價五十五圓位)

▲其他 紋御召、縞御召の二枚襲ね東華織、諸壁織、平御召(何れも壹反十二圓より十五圓位)など流行の最なる者にて其他地味には諸糸織(十二參圓)結城(拾圓)節糸織(六七圓)銘仙(五六圓)等なるべし

▲羽織 鹽瀬、斜子、羽二重の黒紋付紋は五ヶ所にて大さは鯨の一寸なるべし、其胴裏には錆茶地、古代裂、又は白茶地武器盡し等の繻珍織(仕立上代價二十五圓位)又は地質は同樣のものにて無双羽織とせば胴に墨繪の若竹、月に枯尾花、墨繪の龍等の模樣を友禪染に染出しては如何や(仕立上代價三十五圓位)

縞物には縞絽の無双羽織(仕立上代價三十圓位)東華織、市樂織、繋ぎ糸織、平御召にて胴裏には古代模樣有職摸樣、土耳古形等の繻珍織、純子又は鹽瀬の繪摸樣

(仕立上代價十六圓より廿八圓位)

▲帶　綴織は相變らず紳士向きの上等物にて其他繻珍博多(七圓より十三圓位)等何れも片側は無他一本獨鈷紋織等流行せり

(註に誌るす東華織は本年新に織出せしものにて地合糸織より出でて優に御召縮緬の趣を有し着工合よろし)

東京婦人風俗一斑

近刊の東京風俗志に容儀服裝を說きたる條あり聊か流行變遷の跡を徴するに足るべきを以て玆に其の大要を抄錄す

女髷の風尚

婦女子の髷、身分、年齡等に從ふて異にすれど普通には妙齡に至れば島田、嫁ぎて後は丸髷に結ぶを習ひとす。幼げなる間は男女を問はずお芥子　河童などいふ頭付にすれど、やがて男の兒は散髮に進み、女は髮を延ばす事を力め、禿、お下げなどにし、附髷などをも着く、八九歲になれば兒髷(又おちご)お煙艸盆、鬘下地、蝶々髷などに結び(お下げ)或は南京編(又編下)げにするもあり十二三歲に至りなば、早、銀杏返しなどに結び始め、十四五歲にも至れば桃割れ、唐人髷、ふくら雀などにも結び、やがて島田に進むなり。

◎島田　は娘の尤も喜ぶ髷にして貴きは文金高髷に結ぶ、根を高くしたれば自ら高尚、優美の觀あり、其の根を稍低くしたるを高髷といふ、共に舊幕の頃の腰元髷にしていはゞ御屋敷風なり、これを町風にしたるは中高とす、更に根を低ふしたるものなり、娘島田(奴島田)は全然町家風にして根低く扁平くして形鄙しげなり、中流以下を通じて娘も下女も之れに結ぶなり。潰島田はもと宿場の飯盛女の風に出て、髷の一の反りあがりたるが如きさま甚だ卑し、藝妓など間々之れに結ぶ、また髷の二を分ち、上に移しておやなしたるを夫婦髷といふ、また堅氣の風にあらず、花柳の地に專ら行はるゝ藝子髷あり、髷稍細くして恰も　籜包を載せたるがごとし、生粹といはゞいふべし、また娘島田の上に裂を推くかくるを結綿といふ町家の少女の好むで結ぶ所なり

◎丸髷　は細君髷にして奥樣といはるべきも、お上さんといはるべきも普く通じてこれを結ぶなり、形の大

なるを大一番とし、若きより齡を加ふるに從ひ、番を追ふて小にす、形に貴婦人形、鍋町形、お初形、新橋形、吾妻形、雀形など時々の好尚一ならず、花嫁などまづは第一番に赤の裂をかくるを習ひとす、丸髷の根を高ふして髷を跳返したるやうにし、髻を手柄などにて被ふものを勝山といふ、もと大名などの妾の結びたる風なりしが維新後は殆んど癈れたり

◎銀杏返　は少女より年增に至るまで通じて結はるゝが上に簡易にして手づからにも結ばるれば、最も流行して奥様といはるゝ人もこれに結ぶが多し、松葉がへしも之れに同じ、その他年



(山根醫學士考案改良服の雛形)

增髷、天神髷、をさ舟、兵庫、割唐子、島田崩し、おたらひ等の類あれど多くは藝妓の結び、或は遊船宿、待合、婦女の結び、或は遊藝の師匠、外妾などの結ぶものにして堅氣風のものならず、三輪も其の形ち艶といはるべけれど、又容を正しうするものゝ結ぶ所ならず、又櫛卷、笄卷は櫛、笄を中心として髮を纒ひ一時を支ふるものなれど却て婀娜めきたりなどとて艶を衒ふもの多く總じて髷の風時々の流行異なれども、三十一年の頃までは髮をもつめて結び前髮を大いにして寶珠形にせるを今樣といひしに早蕨の著しく出でゝ

古への鷗髷といふに似たるを當流といへり、又地方には年老ゆれば髮を剃りて法躰となること多けれど都下には殆んど之なく、唯中流以上には切髮にするものあり、高貴の未亡人には切下げにするもあれど一般の風にはあらず。

◎束髮　は明治十七八年の頃より洋裝と共に上流社會は盛に行はれ、其の輕便なるが爲めに延ひて下流に及びしが、もと優美を欠ぐ所ありとて次第に衰へ、女學生の如き一部のものに止まるのみなりしに、近年再び盛になれり、今日尤も行はるゝは夜會結び、英吉利卷とす近時まで揚卷最も行はれしが、今は癈れぬ。

娯樂



秋のたのしみ

天高ふして馬肥ゆ、秋晴水よりも淸し、一年中の好季節なる秋は來れり、勉强もすべく又遊びもすべき秋は來れり、吾等は親愛なる諸孃並びに家庭の主婦たる方々に向ひて少しく秋のたのしみを語らん。

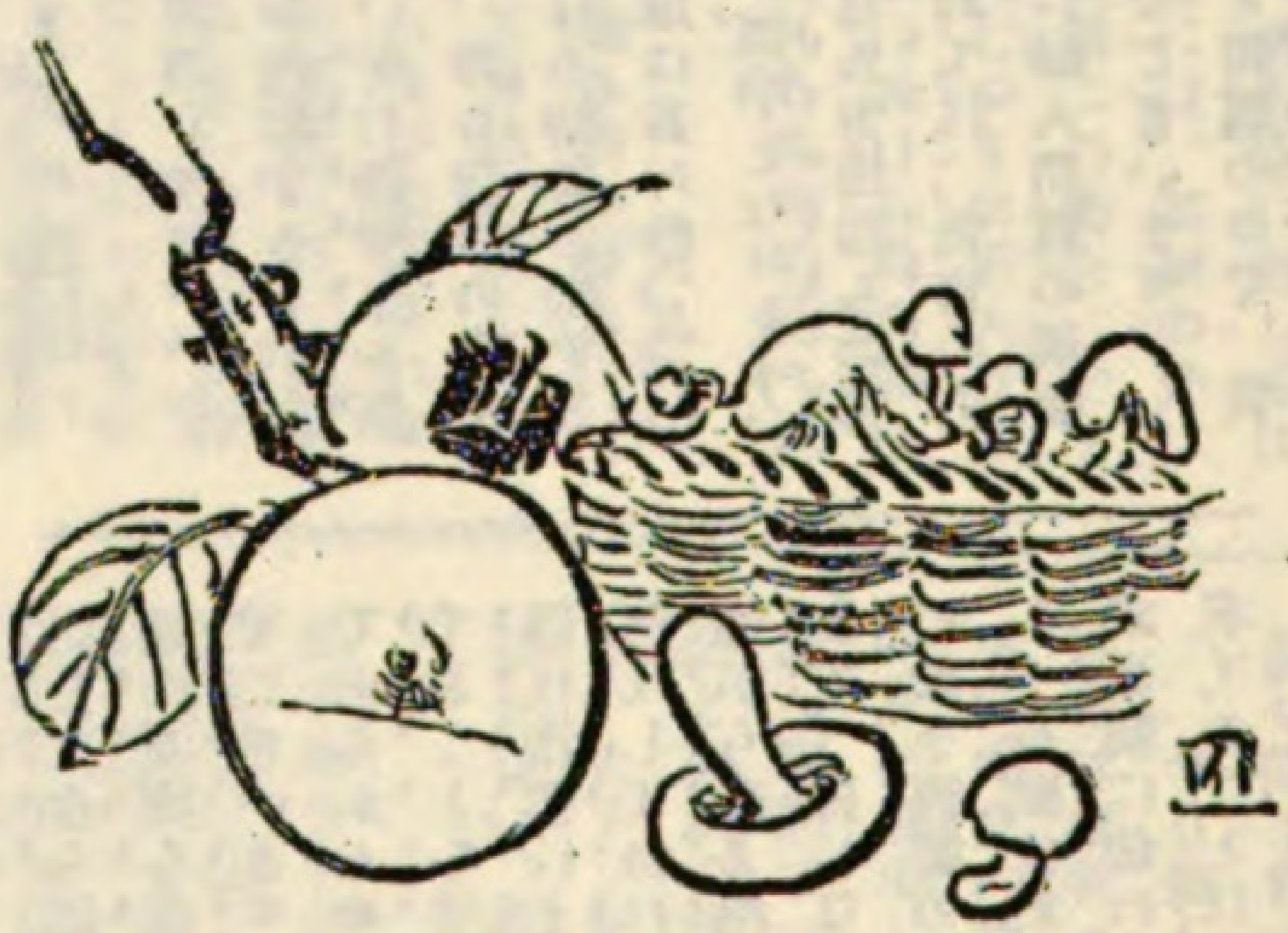
塵は衣を汚がし、都會の空氣は人を汚す、學窓なる諸孃は元より三百六十日、郊外遊樂の機會なき世帶持の主婦達とても、一週間の事は六日になし遂げて、餘の一日は心任せに遊ぶべし、况んや秋の野はまさに絶好の裝ひをなして諸君の來遊を待てるに於てをや、

晴れたる日曜日、若しくは大祭日に、一家打つれ、或は心隔てぬ友達打つれ、都會を離るゝ二里か三里の田舍の野邊に遊び見よ、世に如何に廣ろくして且つ美しきぞ、昨夜の微雨に大空は拭へるごとく晴れ渡りて碧の色は海よりも深く、天高く氣淸く、朗かなる秋の日はうら／＼として萬物殘る隈なく照り渡りぬ。稻田もやう／＼色づきて、見渡す限り遙かの山の麓まで黄金の波をうちそよがせぬ。田を隔てたる向ふの村の森蔭に稻荷の祠の旗のちら／＼せるは、氏神の祭禮にもやわらん、遠く近くにうちよする太皷の響も聞こへ渡りぬ、路のほとりの一と叢薄そよ／＼と秋の風にうち靡き、野

川の土堤に紅なる蓼の花、薄紫なる雛菊の花は、水鏡に影をうつし、崖に倚る彼岸花の紅なる、籬に立てる細菊の花の黄色なる、彼方の田舎家の垣根の萩の紫の珠をつゞりしやうなる庭面を覗けば雁來紅の火のもゆる如くに咲出でたる、いづれか秋の景色ならざる。

百舌山雀の何處にか啼く聲聞きつゝ田舍路を歩めば、處々の野店に柴栗、紅柿の人待顔に照れるあり、薄の穗のうへに富士の高根の聳え立つ（麻布廣尾の野あり）蘆花の間に帆影の隱見する（利根川、隅田川のほとり）あり。

若それ活潑なること猿のごとく、自由なること雀のごとく、愉快なること風の神のやうなる少年少女にありては、友達うち連て、草鞋、草履を穿き、握飯腰につりさげ、勇ましき唱歌をうたひつゝ郊外の散策、如何に愉しくして且つ如何に晴れ〳〵しきよ。



更に行手をかへて野の山近きに至らんか、秋のたのしみは一層深くして且つ多かるべし、昨夜の風に落ちたる山の栗をひろひ、昨日のあめに、生ひ出でたる峰の松茸を尋ね、落葉を踏むで山を攀ぢ、溪聲を聞いて谷にそ下る、皆妙ならざるはなし、林のうちに一枝早く染めたる紅葉の枝を折り、落葉かき集めて山畑の甘藷を燒き、葉がくれに二點三點、紅の星のごとく輝やける柿の霜に飽きたるを摘み、滑る足踏みとめたる、いづれか面白き限りならざらん。秋の山には歌あり文章あり、平日學窓の下にありて螢雪につとむる諸孃若し晴れたる一日を山に送らば其の籠の香しき初茸に滿ち栗に滿つるがごとく諸孃の心には敎場十日の智識にも優る獲物あらん、況んや、其の健康に益する處大なるにおいてをや。

婦人問題

婦人の地位の改良（承前）

東京帝國大學講師
瑞西ジュネワ大學教授　ルイブリデル講演

▲法律的改良　法律は時代の風習の反響也とは決して誤謬ではない、それ故に我々は或程度までは、其國の法制に依つて其國を判斷することが出來ます、併しながら法律は只風習の反響のみではない、又た强勢なる原動力となるものであります、法律の規定する所のもの、即ち法律の命ずる所、禁ずる所及び容認する所の者は、何れも皆重大なる結果を生ずるものでございます、或種類の人に向つては、法律の規定は其行動（品行）の定木となります、少くも善事と惡事を區別する一種の標準となります、詰り國家が其所屬の人民の上に有する所の二ツの有力なる方法即ち教育及び法律の中で、法律の力は風俗及び輿論を作る點に於ては、教育の力よりも決して劣つて居るとは信じられませぬ、それ故に婦人問題の綱領の中で、法律の改良は一の重要なる地位を占むるものでございます、國法、刑法及び民法の部面に於て現はれる所の種々なる問題の中で、我々は今日唯一二の問題に付て申すだけに止めます、婚姻中及び婚姻外に於て、婦人の權利は尙ほ多くの法制に依つて多少否認され、若くは犧牲に供せられて居ります、勿論此點に於ては諸國の法制間に大なる相違がございます、或國の法制は他の國の法制よりも此點に於て遙に優つて居ります、一般に申せば自由の風は親族法及び同附屬法中に漸々透入すると云ふことを證することが出來ます、是は法制の點に於ては尙ほ多くの缺點を持つて居ると看做されて居る國の法制に於てすらも之れを見ることが出來ます、併し累代長く續いた所の特權は、之れを打破るに當つて、其特權を有する者の側からの反對を見ないと云ふ譯には行きませぬ、多くの婦人自身すらも、此の如き婦人の最も神聖なる利益に關する問題であるのに、全く冷淡の地位に立つて居ります、此の如く冷淡なるは如何なる理由によるか、即ち多くの婦人は、此の如き法律上の大なる缺點に對して自ら困難を感じないからでございます、即ち自ら之れに對して直接に痛痒を感じない故に、それに對して少しも痛痒を訴へる事がないのでございます、又た此法律上の缺點の犧牲に供せられて居る婦人は何んであるかと申せば、此等の婦人は多くは之れに對して自分の意見を發表することを得る程の地位に居りませぬ、且つ又た彼等は彼等の困難の原因は法律にまで遡ぼるものであると云ふことを知らずに居ります、又た何うして之れを知ることが出來ませうか、それ故、彼等は是は彼等の天性から來る所で避け得べからざる事であると諦めて之れに服從して居ります、併しながら壓服せられた者が默つて居るからと云つて、それで此の如き彼等の運命は決して不都合なものでないと云ふことが出來ませうか、此點に於ては何程不法な事があるか分りませぬ、

或法制に依れば、夫が貞操を破つたときには、妻が之に對して離婚を請求することは出來ませうが、妻が貞操を破つたときには、夫が之れに對して離婚を請求すことが出來ると云ふ規定がございます、之れに對しては何と申したら宜しいのでございませうか、又他の規定に依りますれば、夫は婚姻以外に於て勝手に他の婦人と關係を結ぶ自由の權利を持つて居ると云ふことが出來る、之れに反して夫を持つて居る所の婦人は、若し其貞操を破りたる行爲があるときには、二年以下の禁錮に處せられると云ふことでございます、此規定に付ては何んと申したら宜しいので

ございませうか、

此の如き民刑法上の不法なる規定を辯護する爲めに、擧ぐる所の議論は決して正しいものとは申されません、乍併如何に不都合なる訴訟でも必ず之を引受くる辯護士を見出すに苦みませぬから、此の如き不法なる事柄も矢張り之れを辯護する口實はあります、其等の辯護者の説に依りますれば、婦人が貞操を破りますれば、其結果として其家の内に夫に屬せざる小供が出來ると申します、是は尤でございます、併し之に對しては容易に答へる事が出來る、即ち夫が貞操を破つた場合には、其家の外に其人に屬する小供が出來ると云ふことが出來ます、此第二の場合に於ては、社會から見ても家族から見ても、第一の場合と同じやうな重大なる結果となると考へられます、併しながら諸國の法制上に於ける此の如き弊害は、漸次に薄らき行くの傾向あれば、文明國と稱する多數の國々は民事及び刑事に於て男女間 少しも區別は致しません、

終りに尙ほ一言したいことがある、それは夫を持つて居る所の婦人は、其法律上の拘束から解放せられねばなりませぬ、即ち其身體に關し、其財產に關し、及び其小供に關して、其權利を承認せられ及び保護されると云ふことが必要でございます、尙ほ婚姻以外の男女の關係には、適當なる規定が設けられなければなりませぬ、殊に私生子の父に對して法律的の責任を與へ、且つ母の權利及び小供の利益を保護すると云ふ必要がございます、利益を目的とする淫猥の行爲に付きては、衞生上の必要若くは取締上の必要の口實の下に、男子に少しも關係なく、唯婦人だけに關係する所の特別の取締規則を設け、若くは罰則を設くると云ふことは全く不都合でございます、此の如き大切なる問題に關して公衆の注意を惹き得ると云ふことは、私の希望する所でございます、

▲**政治的改良**　人類を二つに分けた其一だけが、只今の所では世界の事務に與つて居ります、內政に於ても、外政に於ても唯男子の意見だけが行はれます、之れに反する例外の場合といふものは極く僅かでございます、其結果として我々人類は得て居りませうか、是は耶蘇紀元二十世紀の初に於て我々は如何なる地位に居るかと云ふことを見れば分ります、平和なる人民が野蠻なる兵士の爲めに非常なる侮辱を受け、殺戮せられ、人民の權利は蹂躙せられ、正理及び自由は全く輕蔑されて居る今日では、最も強き者が勝を得、最も巧みなる者が成功すると云ふ有樣でございます、今日最も尊ばれる所のものは只金錢に過ぎない、文明及び進步等の言葉は唯我々の目前に於て不法なる行爲を爲す場合に、之れを隱すが爲めに外皮に過ぎませぬ、誠に嘆ずべきの至りでございます、此の如き文明及び進步と云ふ大なる言葉は、本來の意味からすれば最も高尙なる觀念を聯想すべきものでありますが、今日に於ては此言葉を聞く度 恥と怒とを以て我々は顏を赤くする有樣でございます、是が外政の有樣でございます、又文明國の社會におきまする內政の有樣も、少しも之れに異ならない、最も恐るべき弊害が益々增進の勢を以て起るやうに思はれます、

此の如き不名譽なる狀態の原因と云ふものは固より澤山でございませうが其中に就て婦女子と云ふ原素が絕對的に排斥されて居ると云ふ事情は此等因の一つに數へることは出來ますまいか、今日までの所では婦女子は其十分なる能力を現はすことが出來ませぬで居りました、併しながら彼等の社會的及法律的の地位が高められたならば、彼等の有力なる協同は善良にして且つ平和なる性質のものであると云ふことを推定することが出來ると考へる、終りに臨んで一言す、新なる文明とは何ぞ、即ち人類を形造る所の二つの原素（男女）の上に基礎を持つて居る所の眞の文明であります、我々は日本人にも此希望を抱かれんことを望むのである云々

才媛詞藻

第九回懸賞文披露

和歌

文學士　大町桂月先生選評

《天》秋夜感興　　武藏國本庄町　緒井貞子

いにしへは何をかなしとかこちけむ
　母とながめし秋の夜の月

評、母と共に眺めても悲しかりし月影、その母今はあらず、月影一層悲しさを添へざらんや。何等悲涼の感慨ぞや。（桂月）

《地》同　　栃木町大字栃木六四　前澤幸子

ゆくりなく立ちやまりて笑まるゝよ
　月にをりこし秋に虫なく

評、情も景も淸くしてあはれなり、佳作といふべし。（桂月）

《人》蛬　　埼玉縣江面村北青柳　武井祿子

つゝれだにさゝれぬ宿のきり〴〵す
　きく身もよごと音になかれつゝ

《秀逸》蛬

松原に撫子咲きてあきつ飛びて夕日斜にきりきりす鳴く　　茨城　山口すみ子

行きちがふ賤のわらべの背におひしまぐさのなかにきり〴〵すなく　　新潟　吉田梅子

秋の野を一人暮れゆく旅僧の笈の中にも蟋蟀啼く　　神戸　水越秀子

秋ふけて衣手さむき有明のまくらべちかくきり〴〵すなく　　神奈川　村田ゆか子

嵯峨の野や露おくつきの蛬志らべし琴の音にぞなくなる　　河内　大矢たね子

やむ母のみとりする夜をやれ窓に吹く風あれてきりぎりすなく　　下谷　白井すみ子

やむ母の枕邊うすきともし火にきぬさし居れば蛬なく

本郷　小林しづか

夜もすがら病みますおやのまくら邊にみとりしをればきりぎりすなく　島根　中原たね子

すゝまもる秋風さむみ啼出てゝねられぬ夜半をなくきりぎりす　横濱　長谷川さく

〔秀逸〕　秋夜感興

そら高き秋のゆふべの星をかぞへかぞへかたしと妹より來ぬ　伊勢　奥村ちか子

くもりてはるゝ月夜を志のすたれまきみおろしみふかしつるかな　大坂　大矢たね子

をしかなく聲もきこえてふくる夜にたそや小督のうたひうたへる　横濱　伊東蕙子

秋風にたぐへる里の小夜きぬた誰を慈しむひゞきなるらむ　但馬　藤尾勝枝

鹿となりて木蔭に寢んと思ふかな高尾の月夜もみぢがりして　信州　小林よし子

たらちねもいねずやまさむ旅路なるわれやいかにと此の月を見て　信州　小林菫子

ながき夜のねざめの友と歌ぶくろときては結ぶ折もありけり　滋賀　森千鶴

秋の日を遊ひくらして歸るさの野路の月夜に鹿の音ぞする　京都　河合かつ

打ちむれてさやけき月をのぞむにもなき姉上の忍ばるゝ哉　茨城　渡邊富子

故郷のたよりまつ夜の月ふけてとほきみそらに雁なき渡る　本郷　小林志づか

ふる里をしのぶ思にたへやらで仰げば返る雁の一群　大坂　石原幸子

◉秋夜感興

ともに見し月は變らず我れ獨りかはろうき世なかこつ夜半哉　信州　小林恒子

◉同

雁わたるそらにすみゆく月をしもこゝろとなして我むべなまし　紀州　橘その子

◉同

吹風のおとたに秋は淋しきにふけて身にしむ小男鹿の聲　大坂　白山二三子

◉同

白菊を友は手にしておとづれぬ月きよきに恙なきやと　長野　竹鼻はる子

◉同

たびにある我が世の君におくらむといそぎもうつか妹か夜きぬに　信州　島田治代子

⦿同　赤間關　梶間ひさ子
秋の夜のおく露しげき花のあたり思ひみだれて虫のなくらん

⦿同　本所　宮内千代子
冴やかなる月にこかひて語らへはなかしともなき秋の夜半哉

⦿同　高知　小西まさ子
思ふどち露けきのべにあくがれて夜すがら月をめでにけるかな

⦿同　武州　きよ子
さえ渡る月に心をうばはれて踊るさ忘る濱の若磯

⦿同　鳥取　田中光子
おもふどちまとゐせる夜はいとゞしく月の光もよそならずして

⦿同　福島　もみぢ子
世の人のさびしとかこつ秋の夜に文の林をたどるたのしさ

⦿同　鳥取　尾崎なみ子
來れしばし虫聲る里のうなゐこよ今宵の月をなれと語らむ

⦿蛬　栃木　佐藤よし子
思ひれの枕にちかききり／＼す何のうらみか夜每きかする

⦿同　本郷　岡ろい子
聲そふる心地そすなるきり／＼すわれもふしとになき明しつゝ

⦿同　本郷　岡うめ子
笛のれも琴のしらべもしづまりて夜を我ものときり／＼す啼く

⦿同　水戸　山方とし子
賤の女のつゞりさせとやきり／＼す秋の夜さむをわびてなくらん

⦿同　横濱　關勝子
秋深み病みて我なす圃のあたり夜爽をわびて蛬なく

⦿同　鳥取　尾崎なみ子
すゝばみし行燈小暗き草の家の壁に來てなくきり／＼す哉

⦿同　仙臺　佐藤波子
亡き姉が墓べの萩の下蔭に聲もみだれて蛬なく

⦿同　筑後　乘富はま子
秋深きしづかふせ屋の壁づたひこゝろありげにきり／＼すなく

⦿同　富山　飯野ひで子
つゝがある姉の玉章つきし日の夕べの雨にきり／＼すなく

文章

讀書の趣味

信州上水内郡榮村
住莨木四八一番地　小林つね子

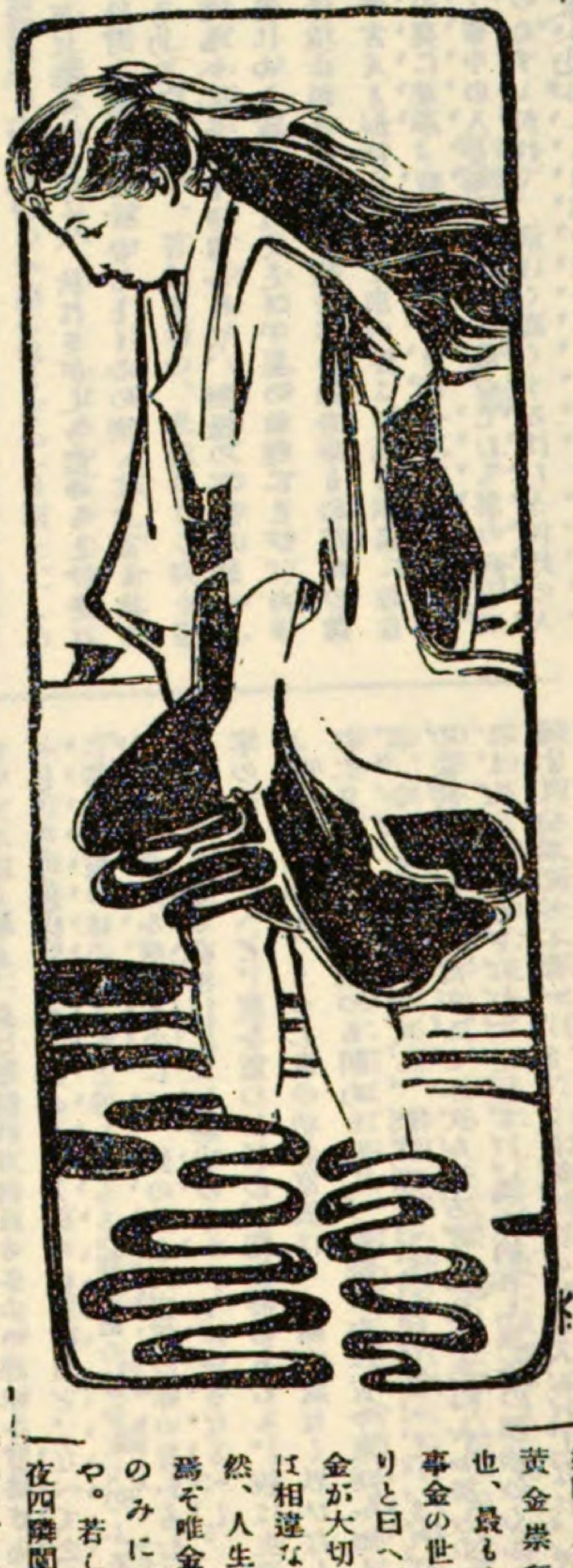
《天》

想起す、德富蘇峯氏嘗て其國民新聞紙上に於て、今日の儘にて之を論ぜば我日本の人民は決して書を讀むものなりと言ひ難しと記したり。我等も亦深く同感を表するもの也。我等の見る處に依れば日本人の讀書の分量は頗る増加せり、然れ共其讀む處の品質に至りては必ずしも進歩せりと言ひ難きに似たり。最も丸善の書肆などの話に近來外國より輸入するものは、理化工藝の書、並に經濟實用の書多しとのこと也。是丈は誠に祝すべきことなり。然し乍ら是は實業の進歩に連れて、其道專門の人の漸く多く之が需用に供せらるゝものなるべくして是を一般讀書界の進歩なりと速了するは謬れり。一般の上より觀察する時は邦人の讀書力は其他の進歩に比して著しき方に非ずと云ふべし。

第一、最近五六年間の出版物を見るに、正直の處創思の天才を見るべきもの尠なく、拮据剪裁の勞を稱すべきものなし、多くは一夜作りの急作

ならずんば、杜撰なる惡評なり。而して之が媒介者たる新聞紙上の批評を見るに、大抵下手宗匠の謡訣點の如く過半は好評也。如斯書物の平氣にて出版せらるゝは之れ著者の無責任なるを示すものにして、著者の無責任なるを看過するものは則ち讀む人に見解なきに起因するものたらずんばあらず。

第二、方今所謂紳士なるものを見るに、好んで書を讀むものゝ如きは眞に晨星啻ならず、其趣味如何にも陳腐にして言語に味なく凡俗極まりたるもの多し、大方は古への戯作者の如く、彼格子の道は知りたれども孔子の道は知らぬ連中耳也。



第三、今の教育は一方より見れば善盡し美盡したるものなれども、他の一方より見れば學生の讀書を勵まさゞるの傾きあり。幵は試驗を以て學生の成蹟を定め、其成蹟に因りては、世に出でたる後の位置にも大に關係するが如き有様なるが故に、學生の心は只管教師の講義を暗記し、一點にても多く取らんと之れのみに心を一にして參考書すら碌々渉獵する能はず、めでたく卒業したる後は神疲れ氣倦みて而して因循枯息たるのみならず既に社會と云ふ舞臺に出でゝ位置を得たるが故に、又往々書卷を抛ちて多く讀まざるに至る。其狀態を換言せば、昔し支那にて今文を以て秀才を試驗したる時は、古今に志ある者にては一先づ今文を修め、試驗及第の上＝進士となりて安心したる後＝始めて古文に取りかゝるが故に大槪の人物にては古文の上手に至るを六づかしかりしが如し。今の學問が大分卑劣になりて飲食學に陷らんとし、趣好も從つて鄙しくならんとするは實に之が爲めなり。豈槪歎の至りならずや。

第四、今の世の黄金崇拜之れ也、最も人間萬事金の世の中なりと曰へば成程金が大切なるには相違なし、雖然、人生の快樂豈ぞ唯金を守るのみにあらんや。若し夫れ中夜四隣闃として萬籟音絶ゆるの時、一穗青燈の下孤身短檠に倚りて、靜かに古人を友とするも、其中の妙趣快味蓋し筆に盡し難きもの無きに非ず。金を揮つて自由に物を買ふも慥に面白さとの一つなり。されど聖經賢傳を讀みて、榮枯盛衰の理を考へ、人生の何者たるを悟るも又快絶の事なるべし。然るに方今動もすれば讀書を侮る者往々あり。咄何等の怪事ぞや。今や吟蟲啾々として、燈下自づから親むべきの候に當り、我等は此點に於て特に日本國民の猛省せんことを希望して止まざる也。

評、見地を具ふる文といふべし(につとう)

讀書の趣味

《地》

陸奥三戸 荒濱しげ子

にごれる塵の世にありて、しばしなりとも心を天外のあなたに馳せ、理想のつばさ自在なる、眞理の光うるはしき、いとも貴き天地に遊び得る、讀書のたのしみあるこそうれしけれ。春はかをれる花の影、夏は緑の木の下に、秋はさびしき燈のもと、冬は雪つむ窓の前、まづ友とする書の數々、ひもとく心の樂には、富も位も名譽も、あえて易ふべき力あらじな。われ大海の粟粒にもなぞらへんちいさき身をもて、無邊の宇宙を胸中にこめ、あらゆる萬有を身につなぎ、翼なくして千里の他鄕にとび、あゆむなくして萬里の絶景佳境にあそび、はた幾千年の過去をもわが眼の前にひきよせて、見ぬ世の古人とかたり得るなど、皆これ讀書の賜にあらずや。あはれ、吾俗界の臭にそみ、暗潮の濁に浮きしづみ、汚れ〳〵し身なりとも、一度去りて書中の人とならば、月を掩ひしむら雲の吹き來る風に散る如く、鄙吝の心すゝがれて、淸けく高くうるはしき世外の人とうちかはり、吾身眞理と同化して自然の母のふところに、つきせぬ生命さとるなれ。あゝ世に樂のあまたあれど、いとも淸くいともたのしく人の心の糧として、偉大の力あるもの讀書をおきて他にあらんや。

評、妙文ならねど、簡潔にして明晰なるは喜ふへし(につとう)

讀書の趣味

《人》

滋賀縣長濱町大字船山廿二番地 藤田れむ子

年頃親しかりつる友の。遠つ方よりゆくりなく訪ひ來るは。最とゞ樂しきわざには有れど。物靜かなる一間に。ひとり文机にむかひて。書を讀むこそ。其にもまして喜ばしう覺ゆれ。されば窓の螢をむつび枝の雪をならす學びの身も。又は商しごり生業いそがはしくて。暫しが程に卒うして文を繙く者も。品こそ變れ。何れも多少の趣味を會得せぬは無かるべし。その趣味たるや。人のまに〳〵一樣ならねど。なべて之を言はんに譬へば飯の味の如きかと推し測らる。即ち飯の鉢をとゝのふる如くに。讀書は心の飢を癒すものにて。鉢の強き人程飯の味の旨からむには。心のすこやかなる者程。文よむ趣味のなか〳〵に饒きなるべし。いかに大牢の滋味といへど。度を重ぬれば必ず飽く時あらむも。飯は生涯之を食ふて厭はぬ如く。うつし世の功名富貴は。一朝味氣なく思ひなして。やれたる履のやうに棄つる期あらむも。片椿の中に古今東西を知る樂しさは。いかに隱逸の人とても。終身忘れやらぬ味なるべし。されば雙が岡の法師も「ひとり灯のもとに文をひろげて。見ぬ世の人を友とするこそ。こよなう慰むわざなれ」と示され。淸少納言も讀書の趣味のくさ〴〵を。うれしき物の中に數へ。さてこそ深く文の林に入られしなれ。古への人の讀書の嗜み大方は此の如し。慕はざるべからず。倣はざるべからず。今や雁空になき。千草にすだく虫の音も哀れに。秋のけはひ最と靜かなる時となりぬれば。いつ旨からぬこと無き飯の味も。刈入れの頃は秋がわきとやらにて。一しほ旨きを覺ゆる如く。常々疎からぬ讀物のわざも。燈火親むべしとなん云へるこの際には。殊更趣味の深きをさとるなるべし。哀れこの好き時節をあだに過さず。專ら心をつくして朝暮にいそし

みなば。たとひ打語らふべき友は無くとも。かず／＼の賢士や才媛ばねんごろに我を導き。遂には學びの道の奥處に至ることを得るになん。勉むべき事にこそ。

評、思想は普通なれど、文章平淡にして却て愛すべし(につとう)

秋の山づと

安藝國安藝郡瀬戸島村　岩崎よし子

《天》

今日は亡き父上の命日なり、生前より好ませ給ひし秋の草花の、今やま盛りならん、いざ折り來てさゝげ奉らんと、床の中より思ひ附き、かたへに伏し居る妹ゆり起し、七時といふに家を出で、ほとなく山路にと差しかゝりぬ、道もせの草におく露にもすそをぬらしつゝたどりゆけば、ふ意に飛びいづる蛙に幾度か驚かされつ、やふ／＼めあての寺山といふに分け入りぬ、木立深ふして空を掩ひ、苔むす岩の、此處かしこ咲き亂れたる白萩、濃き紫の色懐しき桔梗朝露おもたげなる一入床し、今にも「ぽん」と音して裂けんかと思はるゝ斗り、ふくらかなるつぼみの様けに床しともゆかし、かく自然のまゝなる様わか庭に移さばや、日頃とじこめてのみ居たまふ母上の、如何にうるわしとたゝえ給ふらんに、とあきたらず花のおものみ打まもり居れば、妹の後より姉上何にうつとりとして居たまふ、花はいくらも咲きて有るものをといふに、ふり返り見れば、野菊桔梗有るに任せて、頭りにかざしつ、手にも大きやかなる花束持ちぬ、妾の餘りに惜ければといへば、いな事の給ふよ、惜ければこそ態々取りにも來しものを、これ持ちて給へ、妾の折りて參らせんとさかしらげにいふに、否とよ折るは折るべけれど、つぼみの多く付きたるは、根より引きて庭にうへんとて、手頃なる木ぎれ拾ひて、掘り根元を紙にて包みおく、それより其處此處と歩めば、妹の眼さとく赤い「なば」か、と早手をかけんとするに、妾まてよ兼て菌には怖るべき毒有りと、きく別て美しきに多しとか、由なき事したまひぞと制せば手は、引きながらもさすがに惜けなり、妾も餘りの美しさに、後には捨つる共一應取り見んと、共々あさり行く程白き赤きなといつしか「ハンケチ」一ぱいになりければ、いざとて家路に附きぬ、

歸り附きて母上に示せば、これは紅茸よ、是れは白こうよ、よくぞ取り來つるよ、とのたまふに心うれしくて、更に又興をましぬ、近くの親類の許へも分ち持せやれば、珍らしとて嬉しがいて厚く禮いひて使かへしぬ、例の花多く附きたるを、佛前に備へ殘りしは瓶になけ入れつ、根の付きしは、せめて山のに似せばやと、岩かげにうへ今日かたみとなしぬ

評、婉轉玲瓏

秋の山づと

鳥取市立川町　尾崎すみ子

《地》

うら若き山羊の和毛にもまして白く輝ける花瓣よ。

一つ／＼上に湛えたる白露は昨夜の星のさゝやきをしたりしよ。

薔薇のそれには似ずもそゞろゆかしき香のひた／＼と鼻打ちくるに、心地清らかに澄み渡りぬ。

あはれそが無垢なるま白き花瓣、氣高うゆかしき香が心なのわれを引とめし事の如何につよかりしよ。

そは去年の秋の初めつかた、親しき友と打連れて山踏せし折けはしき山路の茂れる千草の中に、咲き出でたる一もとの白菊なりき。

秋のはじめ、さは云へあたりの景色日々に物さびしくなりまさる今日此

頭、雄々しくもたゞ一もと咲き出でたる白菊の花、万綠叢中紅一點とは誰が云ひけん。

さなりそは立田姬の化粧の雫なりき。すらすらと眞直に生ひたてる青き莖、露おける小さき緣の葉はやがて彼女の災難なりしかしらず。

もとよりわれに東籬の風流心あるにあらざれば、根こぎにせんとの心もなくて、朝露多きあたりの小草かき分けてそと手折りぬ。

はらはらとこぼれし露に、一疋のこほろぎの驚き顏につと茂れる小草の中に逃げ入りしは草深の夢をや驚かしたる。

くるくるとそが莖をハンケチにまきて見入れば、さきよりは一層の美しさに見えつるも僻目にや。

あはれ杣人の袖に香ふなるこの花のわれとは如何なるえにしかありけん。

家にかへりつけば、何よりもまず急がれて小さき瓶に水注ぎ入れて指し入れ一ばん高さ本棚の上におきしはあながち弟のちらさんを恐れてにもあらざりしが。

今日よりは親しき友だちの出來たりと人々にほこりたるもうれしかりき。

この夕灯の影に日記したゝめて其末に山つどとして下に小さく白菊一もとゝ記しぬ。

評、此の文は、あまりに、抒情詩的の書振りなるは、人をして倦かしむるも、文詞綺麗なるは、其特色と見るべきや(につとう)

秋の山づと

むらさき

《人》

疊りがちなる秋空も、今日は日影うらゝかに、長閑なる春の日の如く、山の姿、水の色、清きあたりを逍ろ歩く、如何ばかり樂しからめと思ひ立ちたるまゝ、わが姉と弟二人、さては、日頃魂合へる友垣二人をそゝのかしぬ。

四方の山々は、霧立ちこめて未だ霽れやらず、遠く幽かに見えかくれ、近き谿川の邊りに、名なし草一輪二輪、見る人もなき、咲き亂れて、そよよと吹く山風に打ち散りて、流れも早き水に咽びぬ、

行方定めず足のまにまに、大路小路辿り行けば、いつとなく喧しかりし人馬の聲も、やうやう遠ざかり行きて、野邊の草葉もまだ枯れやらず、樹々の梢も只薄紅く彩るのみ。

進み行けば、漸やく足先の仰ぐを覺え、なほ進めば一歩は一歩險しくなりぬ、辛じて攀ぢ徑路を邊りて登れば、天然の奇景は步むに從ひ、ますます奇にして、眼を遷すに從ひ、いよいよ妙なり、かくていつしか、われ等は山頂に達しぬ。

俯して眺むれば、秋の田は漸やく黃み、谿川の流れは遙かに樂を奏し、松風箏を彈く秋の山は、冷かにして秋風は襟に入りて冷かなり。

旭を負ふて薄紅に、夕日を抱きて薄紫に、春の霞、夏の雲、秋の夕、冬の晨も、此の山を見て人となりぬ、而して未だ此の山の如何なる所なるを知らざりき。

今玆に來て見れば、視線の及ぶかぎり、秋の色見えたる、矮草髮の如く、山の頭を蔽ふるものも、谷を埋むるのも、皆な矮艸なり。

そに吹く風の強く颯と吹き下せば、山靡き谷搖らぎて、日の光に向ふ方

は、黄金色の涙を溢らし、日の光に背く方は、金茶色の天鵞絨の涙うてり。

山は皆美しく優にき軟艸のみ生じて、滑かなる毛氈の如く、桔梗女郎花、其の外あらゆる秋の草花、白紅紫紺青幾億萬の草花か撒き散らし、飽かぬ眺めに踏み事なも、打ち忘れてありけるに、いつしか夕日は、西の山端に懸り、紅に匂ふ叢の、夕日影な衣にうけて立てる、折しも遠山寺の鐘の、聲ゆるやかに響き、里の童も牛を追ひ、暮の鴉の聲喧しき頃、樵夫の顔と共に、山を下り元來し路を急ぎぬ。後の思ひ出にもとて、燈の下にてものせしを、同じ好みの人に山づとにとて分ちぬ。

評、實景を寫出せるは、此の文の取るべき所(につとう)

秋草いろ／＼

草間芳江

◉班婕妤に就て

扇とる手もやゝゆるやかに相なり申し候折からいよ／＼御さかむにいらせられ御芽出度ぞんじまいらせ候毎度ながら女學世界うるはしく拜讀いたし候私とものの如きいとまなきもののともには殊更たのもしきおしへ草にこそとひそかに謝しまゐらせ候

さて八月十日發の卷拾壹號久保文學士のものし玉ひし班姫の傳前號より面白く拜し居り候今號は御しるしの秋扇の詩はこゝろなき賤のわらははは常々したしみよみ待りける詩には物の本には今一首わたしゝ樣存じ侍り候まゝたに書きしるしてへんしう方の御示教れかひたてまつり候

紈扇如圓月　　出自機中素
畫寫秦王女　　乘鸞向煙霧
彩色世所重　　雖新不更故
窃憂涼風至　　吹我玉揩樹
君子恩未畢　　零落在中路

是と彼の一首に候妾は常にはこの方を好みて愛誦いたし候窃憂は切然恩未畢は恩未終とありしにやとも存し候へ共只寫誦み候まゝ認め候よく考へ候へば切然恩未終にやと存じ候御明教の程望まほしう候

倘久保學士のあげ玉ひし前首の末句棄捐篋笥中恩情道絶とあり候これは捐棄篋笥裏恩情中道絶にあるべきを販字のさしあやまりと存じ候

このやうの史傳たび／＼御出し被下度まちまゐらせ候あら／＼か祝

◉奥城まうで

長野　久保田すい子

今しも夕陽は立ケ花の一本松に落ちんとして、風なきに散る花のふたひら三片、何となう物淋びしき春の黄昏、おのれたゞ獨り常田裏町を辿りつ、月窓寺なる亡き父君が奥城に詣ず、手向けられし花はしぼみつくしあかの水さへかれ／＼なり。……

あはれ我が父君よ今は此苔の下に永き眠につかせ給へる父君よ、願はくは今ひと度御身開かせ給へ愚なる御養ひ子、いまなん都より還りまうでつるを、過ぎつる十日あまり二日の朝御病ひと聞き心も空に急ぎに急ぎつれど道すがら障り多くて思はぬ日數發し、命ある間に一度は逢はん後の事ども云ひふくめんなど思しつゝ一日千秋の心地にて待ち給ひけんを、其望みにもそひまつらず只幾重にも許させ給へ、されど猶御いたつきの御看護にも任せず御葬の業さへ他人の手にのみまかせ果てつるは如何に本意なくや思しけんあはれ／＼此不孝の罪いかなる言の葉もて御許

し乞ひまつるべき、………

入相の鐘は響き渡りぬ、一杵又一杵……老翁よ、撞木の手を止めて何を愁ふるや。………

あゝうけ難き人乃世に生れ出で只假初の縁とは云へ父と呼び子とよび得ること同じ木蔭に息ひおなじ流れを汲む類にやあらんさるを長き年月めでいつくしみ給ひし御志は白扇倒懸芙容の峰より高く千尋の底ある太平洋よりも深しされば朝に夕に久方の天とも仰ぎあらがねの地とも頼み必ず此惠みかへしまつらでは、離れまつる事あらじ別れまつる事あらじと思ひ定めしを忽ち無常の小夜嵐すさぶまに〱彼の世と此世とにたち分れなつかしき御影も拜さんすべなく暖しき言の葉もきこへまつらんよしもなくなりしこと悲しとや日はん悔しとや言はんあはれ、はかなし。

過ぎつる年都へ舟出せし時そゞろ心の勇めるまゝ家も起さん身をも立てん御名をも揚げんなどさかしらに御返りごと申しゝ事ありしが今より後若し此身たつことありともいかでか嬉しとは聞こしめすべき御名揚るともいかでかあはれとは思しめすべきあなあはれ年久う心をかけ海山の御恩に報じまつらんとせしあらまし事も今は仇となりけるよさは云へおのれ一度御誓ひ申しゝ事は必ずとげんとは思ひぬれど此町にて稍人がましきものゝ樣におもはれたるわが此身も都の俊才の中に立ちまじりては鷄中の鷄の如き心地のみせらるゝされば家も起さん事、身を立てん事いかゞあらん況して御名を揚げまつらんことはいとも〱覺束なき限りなれ、されど「怠らず行かば千里の外も見ん牛のあゆみのよしおそくとも」と古へ人の名歌もあるなれば今よりはつとめに勉め勵みにはげまんに、願はくは天がけり雲がけり給ひ御力を加へ御心を添へられんことを。………

折りしも墓前の花はあやしくたほれ、きらめき初めし新ひ星は西へ流れ去りて天地漸く黒幕に蔽はれぬ。

◉親睦

山口　福永慧子

垣根の朝顔の蕾を少さき指を折りつゝ算へて居つた、五つ六つの娘が、菩もした庭石の上に、腰を掛けて夕顔の花を餘念なく眺めて居つた、十四五の娘の方へかけよりて、

「姉さん姉さんあの子、明朝咲く朝顔はれ、皆であの一十と六つは慈何かれ、そう〱十六咲くの」

「そう」

「あゝそして子、姿のすきの紫のしぼりの子、あれも咲くの」

「そう靜ちやんは、さぞお嬉しいでせう」

「あゝ………あッあんれ大きい蚊取り蜻蛉が」とかけ出すを姉は

「靜ちやんそんな物を取らなくつてよ」

「何故の」

「頁い娘だから子、そんな物をお取りでないよ、姉さんがネ、明日は頁い物を買つて上げるから子」と妹の頭をさする

「そう何を買つてお吳れなの」

「そうれ、靜ちやんは何が好きかれえ」

「わたし、わたしれ、あのう簪が………いゝやお隣の岩ちやんとうの、桃太郎の本がすきの………だけれどもわたし字が讀めないわ………たから矢張簪が頁いの」

日は早や饗畑山の彼方より、暮れかゝつて、世界はだん〱と、夜の幕に掩はれて來て、宵の明星が東の空に浮き出たと見る内に、少さい星が、二つ三つ四つとだん〱多くなつた、

暫くすると十三日の月が閑見が岡の老松の間から現れ出で、向ふの森、紫山寺の鐘樓、稲荷神社の赤き鳥居、總て皆淡く斜に、其半面を照した、

「そら御月様もお登りなさつたよ、さ唄つて御覽、あのーお月様お幾何つッてれ」と姉が云へば、靜ちやんはすぐ、可愛らしい、無邪氣な、鶯の様な聲で、

「お月様お幾何つ十三九つ、まだ歳若いれ、あの子を生んで、この子を生んで、誰に抱かしよ、お滿に抱かしよ、………」と唄ひかけたが、急に空を見て、

「あッ姉さん、今れ星が流れたの、星は美しいれ、わたし星になりたいわ」と空を見つめて居る

「あゝ大層涼しくなつたれ、靜ちやん、もう家へはいらう」

「あゝ………さう／＼それからね、昨夕の續きの、桃太郎のお話を、して上げよう、れ姉さん」

靜ちやんの、話聲の終つた頃には、月も大分高く登つて銀笛の音が、かすかに谷川の音と共に聞えた、

◉裁縫につきて

金澤　白山雪子

裁縫は、家事中の主なるものなれば、女子たるもの貴賤の別なく、必らす、そのわざを知らざる可からず

一家の主婦たるもの裁縫の業に巧なれば、家族舉りて四季に適ふ衣服を纏ひ一門の風采を高め、又經濟にも益ある可し。しかのみならず、良人も其衣は、妻の手によりて成りしと思ひ、子女も、又この服は、母の勞を蒙りしと知らば或は妻を愛し、母を慕ふ、感情一層濃なるべし。

斯くばかり必要なる裁縫を、學事に志す人たちは、數ならぬわざとなし、動もすれば、己れの本分を賤劣なるものと信じ、男子の業務を見て、以て男尊の原因と羨み、從いて裁縫の勉勵を怠るもあり。

かゝる様なれば、此頃の女學者流には、口に理屈を言ひながら、縮緬の着物に袂を造り、袴の積を反對に折り、女子には躰は相當せざるものを着せ、甚しきは、一枚の單衣物を縫ふに、數十日を費すもあり。又稍ゆたかなる人に至りては、女子が天賦の職たるにも拘はらず、緻密精細なる事を執るを厭ひ、人の妻となり人の母となるも、其義務を果すことなく、子女の教訓すら放任し、厨房の事の如きは更に措きて問はざるが多し。小兒の衣服の裂け汚れ等したを見ては、口いと賢こく下婢が不注意を責めて使ひあたるもあり。かくて、家庭の中には常に不快の雲、はれやらぬなり。

されば婦女が裁縫を心得ることの必要は、啻に家計の上にのみ止まらずして大に一家團欒の幸福を、得べき手段たること明なり。

或人曰く、社會進歩すれば、分業ますます行はる。裁縫の如きは專門家に托すれば可なり、何ぞ學ぶことを要せんやと。大なるあやまりと云ふべし。今日日本の時勢より考ふるも、そは幾百年未來の夢にて、女子の職業多忙に至りたるときのことなり。さるを今より裁縫の事のみは、未來の文明にならひて、專門家に委れ、己れむなしく飽食逸居せば、一家の不經濟は積りて國の不經濟となり遂には挽回すべからざる程の、かなしき運命を見るに至らん。豈、寒心すべきことならずや。

◉秋夜月山に遊ぶ

源田鶴代

四季折々雪月花の眺めあれど秋の月はわけて樂し螢おひ月まちつゝむすびし夏に命とたのまれし風もいつしか秋の捨扇と夢の間に過ぎ今は日か

げわびしき枯草にやすむ蝴蝶のかげもなく木の空に經よみし蟬の聲もとだに青々涼しき影とたのまれし庭の木立も骨のあらわれ淋しき枝に小さきかへるの腹うごめかして夜さむをかこちがほなどいと／＼哀れなりつれどすみ渡る月を文の友とするも此上なふうれし

一今宵はしも月の清からんされば池のほとり前栽の椅ども如何におもしろからんなど思ひやりつゝ文くりひろげたるに書のつかれに目ふたむつみて遂に合いぬかゝる中にも月は心はなれず、ふと目ぶたさむ。山際少しあからみて謂はゆる鏡臺山を置く影を示せり、やをらさろじ開くにさとさし入る光は旭にはあらで、さ夜けき月の影になん、耳に入る物は夜さむをわびて鳴く虫の音、目に入る物は千草の露にやどれる月影、誰がゆかしき玉章の使にや月をあびつゝ南へ渡る雁がねいでやかゝる夜こそとて我と我心勵ましてよみゆけば、夜はいよ／＼靜に心はます／＼すみ渡りぬ、折しも何處ともわかぬ方にから竹の古ちくの音幽かにゆかしく耳にひゞけり書よみさして聞くに其調いよ／＼美じるをかし風流たる人の月にうかれて樂しく吹くならんか、思ひある身にはいと心にいへしなど。ひとりごちつゝ復文の林の奥深くたどり入るに。ほと／＼と垣根にをとなふ物あり、又も例の水鳥か文よむ身に妨けなすはと顏だにむけぬに、又我をよぶ聲す誰やらんと出ずればさにはあらでうるはしき友三人四人見ゑたちまち、やよ君此月に何こもりてありけるよ。いかでいつも。うはさする彼の流に思ひはたさずや、いざ給へ／＼とてそゝのかさるればいとうれしくて、ともにいで立つ、垣根の外にかげふめば此處に蓮池あり今ははや盛もすぎけれど、はち蓮葉のにごりしすまぬ心もて何かは露を玉とあざむくと、よまれし法師の心おしはかられてなむ、心あひし友なれば互に思ふまゝかたらへば誰も今宵の月にそと同じ樣にいふぞ心あひし一ならむ、いと樂し、行く程に目さす處につきぬ、こゝは、いと景色よき谷川のほとり帶の如くに流れ行く細谷川の左右、野菊はいまだまばらなれど萩すゝき、をみなめし各がまち／＼我まち顏なるもおかし岩根の流れ鈴の如く響きて歩調を進むる音樂に似て天眞爛熳たるしらべと節とは作らず飾らざる處等容易に聞くべきにあらず、秋なは淺ければ紅葉の見るべきはいまだとふ人小松の物岩のかげなどには鈴虫、松虫きり／＼すなどのすだく音きこゆ、此外瑠璃の玉をつらね紅の珊瑚を集めたるにはあらねどまどわかき草の實こゝかしこ月に露くらすなどいとみしむかひのなみ木立てる松の緣ゆする風音もさすかにゆかしき問とあやしまる、はるか小高き岡の上に至り見れば居ながらにして白雲と呼應し寢ながらにして松風と唱和するを得べく實にも／＼仙界とはかゝる如き地をいふらめ、など語らひつゝ、それよりこゝかしこけしきおひつゝうかるれば誰が問ぞ露ふかくしめるあり木魚はひゞけど寺ありとも見えず物凄ふ、あたり小夜ふけて月中天にあり風寒く行路寂たりたが門のきぬたなるらんしきりては又たゆみ行く、見渡せは野も山もみな月の桂にかげうくいづこなるらん、かる／＼と鐘の音ひゞく數ふればはやも四ッ半なり、あかずは思へど夜すがら見あかしてあすの日かげきらめく日の中、書れてふもの貪るもいと口惜しけれは歩みもどしぬ、されど心は空に

●女子の理科學

大阪　石原幸子

世の開け行くに從ひ、何にまれ、進み行くは、ことはりぞかし。其基となるべきものは、理科學にぞある。理科學は、思考力を起さしめ、其ものゝ、狀態を講究する學科なり。世のおほかたの人は、女子には、理科學の如きものゝ、必要なし、只讀書裁縫の業にのみ、秀でなば、世に出

でても、さしつかへなしと、思へども、こは、大なるあやまりなり。そも女子に理學をまなばしむるの、目的は、第一に、家政上及び、子女を教育する上につきて、至大の關係を、有するものなり、先づ、衣食住よりいはんに、土地氣候によりて、衣服の地合を、異にすべき理、住居の撰び方、飮食物の調理など皆理學の智識を有すべきなり。

女子は、行末人の妻となり、母となりて、其子を養育する、大切なる務あり。殊に幼き小兒のうちは、何事も、うたがひを起し、質問をなすものなれば、その時に乘じて、母たるものは、理學の智識を有し、其理由をくわしく說き聞かし、尙ほ進みて、後來共に、世の開明を圖らんとする、希望を誘導せざるべからず。今、世の中を見るに、種々の機械の發明せられて、千里の道も、またゝくひまに、行き交ふ事得べく、又居ながらに、遠き友と、話す事も得べし。文明の進步、あに、大ならすや、これ等の機械は、皆理科學を應用して、造りしものにして、そを考へし人々は概れ外國の人なりと聞く、故に、我等第二の國民たるものは、今よりよく理科の智識を有して、成長の後、子女を養育するに、彼の西洋大家にまさる子女を養育せざるべからず。

◉秋の夕

青森縣三戸　堀口藤子

夕日影いつしか西のやまにうせ塒をさぐる村からす三つ四つ二つ鎭守の森かげにみゆる秋の夕ぐれ文よむわさにもうみはてければ近きわたりをさまよひて日頃のうさをはらさばやとてやをらみをおこし小萩今を盛りとさき亂るゝ園をそこはかとなくさまよひはくさむらに蟲しきりになきしこき萩の葉末を吹き渡る秋風ひや／＼と身に泌みわたりていと／＼寒けれはいさ書齋に入らんものとふりかへりみかへれは東の山の端にふと光りほのめきぬれは月にやあらんとしはしなかむるうちはや一輪の皎々たる秋月はこんもりとしげれる嶺の松の木の間をもれいてゝ園に今を盛りと咲き亂るゝ小萩の葉末には玉を綴りて又似るものもなくあたりを打見やれは梢にすさぶ松風靜に空には雁の一つら二つらなきわたりければ右き歌とも微吟して露けきくさむらを踏みしわけ書齋に入りぬ

◉人の子うみけるに遣はしける文

本所　松井ひろ子

かれてふくらかにおはすとうけたまはり侍りつるを、昨日たひらかに、清らなる玉のをの子みこをさへ、生せ給ふと聞侍るこそ、いとも／＼めでたけれ、其折とて調しおき侍りつる産衣一くだりまひらす、心ばかりのいふかひなさは、さる方にゆるいてよ、今さふらひてと思ひ給ふるにあやにくに客人のたえ侍られはまつかく覗ひきこゆるになん

◉日記の一節

南筑　三毛野須美子

一月四日、曇りて暖なり、午後寒暖計六十七度正午頃よりポツ／＼降雨夜に入りて漸くしげし

五日、雨降りみ降らずみこのごろの暖さ軒の芭蕉芽をふき既に尺餘も伸びたり

六日、空曇り風あたゝかなり、麥生の小田の何處ともなく雲雀の聲すめるは小寒に入る、けふとしも思はれず夕方風たちて肌身にしむはさすかに冬なり

郷里より荷物着く書籍あり着物あり、琉球薯は父上の手作りの賜なり

柘榴二つ後園の初熟いつにかはらぬ母上のおん慈しみ涙もこぼるゝはかりなり、銀杏は彼の寺の庭に弟妹の拾ひたるものなるべし炒米一袋去歳の初穗おしいたゝきて味ひぬ

七日、日かけあたゝかにさせとも風さむくして冷し寒暖計五十七度

八日、霜甚し

新年初刷の新聞紙大方見盡したり、新たまの年の始に太平を謳歌するはさることなれども新年の歌といふものを見るに、大方は松に竹に梅に將た鶯に鶴に何れも舊き想の景物をのみ取りあはせたるはいと心苦し、福壽草に門松に歌かるたに雜煮に遣羽子に其他新年の景物として は、數多かるへきをこれを捨てゝ徒に古人の糟粕をのみ嘗むることの悲しさ、あはれ革新の烟を濟す者は誰ぞ

九日、尺餘に伸びたる芭蕉の芽遂に萎れはてぬ



不正投書に對する書狀

小說（秀逸）當選

▲里かへり　山口縣吉敷郡山口町後河原福島方　安富直子

貴館御發行の女學世界第拾二號秋季增刊「糸すゝき」に掲載せる前記の文は明治三十年二月十一日少年園發行の文庫中葉櫻新樹子が物せる「里かへり」といふ文を首尾其儘に寫取り記者の目をくらまし濡手に粟をつかむ仕業と相認候間右御注意申上度まで早々（水戸K、S生）

國文（第二等賞）當選

▲磯　草　神田區淡路町一ノ一　山岸種子

貴館發兌の「糸すゝき」（女學世界第十二號）に所載の右文は今年七月五日發行の開成中學校々友會雜誌第二十三號のために小生が起稿いたしたる「磯草」てふ拙文と四五字の差は有之候へども其形式といひ標題といひ全く同一模型にいでたるものと認め候小生は之れが爲めに數多の學友より女名をかたりて賞品を貪りたるものと誤解せられ大に迷惑いたし居申候加之新躰詩欄所載の

▲つきかけ　山岸種子

てふ作品も小生が同雜誌二十一號に掲載いたしたるものにて小生は全く惡戲を働かれたるものと信じ申候小生は女名をかたりて賞品を貪りたるものと誤解せられては男子の潔しとせざる所且父懸賞文募集の當時豫め天下に告白せられたる御注意も有之候事故遂に默するに忍び不申一寸御注意申上候

尙此事實を明らかにするために小生起稿の磯草掲載したる校友會雜誌第二十三號（第六十八頁に有之）御送附付貴覽に入れ申候間御參照下され度

小生は山岸氏の如き者に向つて云々するを好まざるも唯女學世界の爲めに一言此の如く申述へ度草々

本鄕台町五八川島方　內藤濯　拜

▲山岸種子の取消願狀

貴館御發行の「糸すゝき」の懸賞文にて小生出稿の磯草及びつきかけは實に小生の作に無之候間御取消被下度願上候就て賞品は幸ひ未だ御送付無之に付項戴不仕候間序に御斷申上候右御願申上度草々

（右の如き書面來る、他人の作を我物顏にて投稿せるは如何なる理由なるや分明せざるも其悔悟の狀憫むべきを以て此に掲ぐ但し賞品不與）

女學世界冬季增刊

懸賞文募集

才媛詞藻 『磯ちどり』 冬の卷

投書締切 十•月•廿•日

文種

●小説（擬・言 名付） 短篇各種（二十四字詰三百行限）
●國文 文題隨意（二十四字詰五十行限）
●普通文 文題隨意（二十四字詰百行限）
●書簡文 文題隨意（二十四字詰五十行限）
●新體詩 詩題隨意（七五調三十句まで）
●和歌（短歌に限る） （冬季雜題）

秋漸く深うして、燈火親むべきの候、我が女學世界は、此の勉學の好季節に際し、聊か讀書界に貢献せん爲め、來る十一月十五日を以て、第四回の定期增刊を發行すべく、書名を『磯ちどり』と題し、之れが編輯は新意匠を凝らし、好材料を選みて、前刊に倍するの光彩を煥發し、以て本年最終の才媛文壇を飾らんとす、全編の紙數は、例の如く二百頁を超え、其中過半の頁數を懸賞文に充て、剩餘の紙面は、當代名流の手に成れる作物談話を附錄とし、寫眞口繪及び插畫等も、其材料を精選して、錦上に花を添えんとす、乞ふ江湖の才媛諸孃よ、其清閑なる窓の下、徐ろに、想を凝らし、文を練りて、盛んに佳作玉咏を投じ、以て我が才媛文學界に、掉尾の偉觀を呈せられんことを、

十一月十五日發行

賞品

特賞 帶地（代價金十圓位） 壹卷
特賞 反物（代價金五圓位） 壹反
（特賞は小説に限り優等者二名に與ふ）
甲賞（圖書切符） 金參圓 當選者 五名
乙賞（圖書切符） 金貳圓 當選者 六名
丙賞（圖書切符） 金壹圓 當選者 六名
秀逸 金五十錢相當の圖書を賞與す 十二名

（注意）和歌は天地人の三名に乙賞以下の賞品を外に秀逸二十首に薄賞を與ふること
投書の封筒に『磯ちどり』と必ず附記すべし
此募集廣告に特定あるものゝ外に例刊の投稿規程を準用することゝす

懸賞文募集

本誌は初號以來『才媛詞藻』の欄を設け賞を懸けて廣く才媛の詞章を募集し來りしが、今回より改めて毎回必らず文題を設くる事となしぬ。其の選評者は孰れも國文學界の泰斗とも稱すべき名家也、海内の才媛乞ふ其の美感佳想に成れる玉作を投寄されんことを十一月分月題左の如し(〆切十月十五日)

菊見の記 (文體隨意)

鎭守祭 (廿四字詰五十行)

(賞品)
甲 一人 (圖書切符) 金貳圓
乙 二人 (仝) 金壹圓
丙 三人 (仝) 金五十錢

和歌兼題 (〆切十月十五日)

初時雨

鹿

(天、地、人、三名を選び前掲賞品の乙以下を呈す)

投稿規程

一、本誌は女子の手に成れる投稿を歡迎す
一、投書の種類は文章(文體は國文及普通文に限る)詩歌(新體詩及短歌今樣の類)小說は優美にして卑猥ならざるもの等とす
一、投書の期日は規定なきも懸賞文は所定に依る
一、投書の用紙は半紙二ッ折(和歌は端書に限る一葉一首の事)半面十行一行二十四字詰にて文字は正楷に限る
一、投書は各種類を別紙に認め匿名を欲するものと雖とも必ず其姓名住所を記載するを要す
一、投書の送附は博文館編輯局宛にて封筒の表面に『女學世界原稿』と記載すること
一、投書は採否に拘らず一切返戻せざるものとす

(寄稿募集) 本誌の材料として、家庭及び地方風俗、婦人社界の狀況、孝女節婦の美談佳話、各女學校の狀況、その他有益の資料を寄せられんことを希望す

學校案内

淑德女學校

小石川の高臺傳通院の境内に添ふて樹林深き處、清楚なる一校舍あり、淑德女學校といふ本校の目的とする處ろは女子の淑德を薫陶し女子に必須なる高等普通學及技藝を授け日新の智識と實用の材とを養成するに在り

◎學科及課程

▲本校の學科を分つて正科選科とす（尙ほ本校に裁縫補習科を置き正科選科の課程に照し更に一層精深なる裁縫を修熟せしむるものとす）▲正科の科目を修身國語漢文歴史地理數學理科家事裁縫習字圖畫の十一科目とす▲選科の科目は修身を必修とし其他は正科の學科目及び刺繡の中一科若くは數科を修むる者とす但し入學の際受業せんとする科目を記載して保證人より屆出つべし後日科目を變更廢止するを許さず▲裁縫補習科に於ても修身を必要とす▲前三條の外尙ほ英語科及挿花茶事彈琴の三科を設く本校生徒にして之を修むるは其隨意とす▲授業課程及ひ授業數は別表の如し▲各學科の要旨は明治三十二年文部省令第七號高等女學校の學科及ひ其程度に關する規則第三條に準據す

正科選科及ひ英語科課程幷に授業時數表

學科目＼學年	毎週時數	第一學年	毎週時數	第二學年	毎週時數	第三學年
修身	二	人倫道徳の要旨 作法	二	同上	二	同上
國語	四	講讀 作文	四	同上	四	同上
漢文	二	講讀	二	同上	二	同上
歴史	二	本邦歴史	二	外國歴史	二	同上
地理	二	本邦地理	二	本邦地理 外國地理	二	外國地理 地文
數學	三	筆算 整數分數小數 珠算加減乘除	三	筆算 諸比例 珠算 同上	三	筆算珠算百分算利息算 幾何初歩
理科	一	博物大意	一	理化大意	一	生理衛生
家事	一	衣食住	一	家事管理法 家計簿記	一	育兒及ひ看護法
裁縫	七	縫方、裁方、繕方	七	同上	七	同上
習字	二	楷書 行書	二	假名交り草書	二	同上
圖畫	二	自在畫	二	同上	二	自在畫 幾何畫初歩
合計	二八		二八		二八	

刺繡	六	裁縫平縫等	六	芥子縫 管縫 肉入縫	六	鳥獸人物縫
英語	三	讀方、譯解、會話、習字、書取	三	同上 文法、作文	三	同上

裁縫補習科課程及ひ授業時數表

學科目	每週時數	課程
修身	二	人倫道德の要旨 作法
裁縫	二六	裁方、縫方、繕方
合計	二八	

◎修業年限

▲修業年限を定むること左の如し○正科三箇年○選科三箇年○裁縫補習科一箇年

◎學年學期及ひ休業

▲學年は四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る▲一學年を分ちて三學期とす第一學期は四月一日より七月三十一日に至り第二學期は八月一日より十二月三十一日に至り第三學期は翌年一月一日より三月三十一日に至る▲休業日を定むること左の如し
日曜日　大祭祝日　皇后陛下御誕辰　夏期休業三十日　冬期休業十四日

◎入學退學

▲生徒の入學は每學年の始に於てす但缺員ある時は臨時入學せしむることあるべし▲正科選科に入學することを得べきものは品行方正身躰健全にして高等小學科四箇年の課程を卒へたるもの若くは之と同等以上の學力を有し孰れも年齡滿十四年以上の者たることを要す高等小學科四ヶ年の課程を卒へたるものは入學試驗を要せすして第一學年に編入す其他の者は試驗の上入學を許す▲裁縫補習科に入學することを得べき者は品行方正身躰健全にして本校正科選科の課程を卒へたるもの若くは本科を修むるに適當と認めたる者とす▲入學志願者は左式の履歷書一通を差出し其旨申出つべし

◎試驗

▲各學期の終に於て其學期間の學業成蹟及ひ操行を調査し學年の終に於て每學年期の成蹟を考査して及第落第を判定す▲試驗評點は各學科一百點を以て定數とす▲及第落第は左の標準により之を判定す▲各學科の平均點四十點以上通約點六十點以上を得たるものを以て及第とし其他の者を落第とす▲正科選科及ひ英語科に於て各學年の課程を修了したる者には修業證書を最終學年の課程を修了したる者及ひ裁縫補習科の課程を修了したるものには共に其卒業證書を授與す▲各學期の終に於て生徒の操行及ひ學藝の成蹟を保證人に通知す但成蹟は評語を以てす評語は甲乙丙丁の四等に分ち九十點以上を甲とし以下六十點迄を乙とし以下四十點迄を丙とし四十點以下を丁とす

◎學費

學費を定むること左の如し

正科	授業料	金壹圓參拾錢
選科	授業料	金壹圓拾錢
裁縫補習科	授業料	金八拾錢
英語科	授業料	金參拾錢
挿花茶事彈琴	授業料	各金貳拾錢
寄宿費 金壹圓	賄料	金五圓

▲授業料は新に入學する者は入學の即日其後は每月五日迄に之を納むべし但十五日以後に入學する者の其月の授業料は半額とす▲授業料は生徒出席の有無に拘はらす定日迄に納附すべし

◎寄宿

本校は通學を主とすと雖生徒の志望により寄宿を許す但し寄宿に關する規則は別に之を定む(卷頭の寫眞版は現在の寄宿生なり)

雜報

●婦人の受勳者

昨年の北清事件の節、天津籠城の際、我國婦人等が恐れず撓まず其働作目覺しかりし中にも領事鄭永昌氏の夫人濱子は、よく此等の婦人を指揮避難せしめ、居留民の食事、其他の賄等にも皆夫々手當をする等、其勳功は實に尠なからざるとなりしが、此程其功によりて、勳六等寶冠章を賜りたり。實に婦女子の龜鑑とすべきことどもにこそ。因に記す我國婦人にして之の勳章を賜りたるは　皇族の御方を除きては始めてなりと。又佛國大統領は我が山口第五師團長夫人キチ子へ純金製名譽記章を贈與せし由にて同夫人より此程賞勳局總裁を經て受領及び佩用願を差出したり該記章の裏面には佛文を以て左の如く彫刻しありと云ふ

日本廣島陸軍病院へ入院の佛國征清隊負傷兵の爲に致せし山口男爵夫人の配慮を感謝し茲に金製名譽記章贈與す

●慈善旅行と貧民の家庭（口繪參照）

今年春の頃時事新報社の發意にて慈善旅行の擧ありき、陋穢なる貧民窟に育ちて天地の廣きを知らざる細民の子女を集めて畫の島、鎌倉の地に旅行せしめたるは近來新らしき慈善の方法にして感化事業の一端として成績佳良なりしがごとし、而して其第二回の旅行は去八月二十四日より二十七日まで逗子、横須賀に遊戲運動を催ふし、軍艦參看をなす等四日間の旅行に十分の歡樂を見童に與へたるがごとし而して其費用監督等は新報社の負擔にして、これが實際の任に當りたるは基督教主義の慈善家潮田千世子女史なりし、同女史は貧民敎育に熱心にして兩年斯業に經驗ある人なるが、左の談話は即ち女史が貧民の家庭に就て語られたる一節なり。

◎◎◎◎◎貧民の家庭

扨貧民の家庭の事で御座いますが御承知の通り九尺二間の狹い家の内に子供が二人乃至五六人概して子福者が多いと云ふ有樣ですから雨の日は兎も角天氣の好い時には子供は殆んど終日戶外に出て遊んで居るのでたま〳〵家に這入つて來ますと喧しくて叱り飛ばされ新樣な有樣で親が子供に訓へろとか話なして聞かせるとか云ふとは少しもなく勿論親が

子供を教育するのは國家に對する何位の重い責任であるとか或は又親は子の上にどれだけの權利を以て居つて教育をしなければならぬかなどゝ云ふやうなことは少しも考へず我子の性質の宜しからぬ方に進んで行くのも一向氣が附かずに過して居ると云ふ様な譯で御座います其一例を擧げて見ますと私共の近所に居る子供にしても左うで御座いますマア新らしい建築でも致しますと直ぐに其壁なり塀なり樂書を致しますそれを又見て居ながら親は少しも制めません斯う云ふ様な事は誠に些細のことでございますか米國などの話を聞くと子供が往來の道を汚し又壁や塀などに樂書することは嘗て無いことで又親達も亦一の會を設け道路を汚さない様樂書をしない様にと子供を教育するさうでございます日本では左ういふ様なことには少しも注意しませんから其結果は道路の不潔となり其土地の不規則となるのでございませう又子供は責めて六歳から十歳位までゞも教育したら出來ないとも無からうと思いますのに只安閑と遊ばして置くのが親の務めと思ひ就學の年齢から學校に送る事は殆んどない、左う斯うする中に十歳にもなつて手足が伸びると近頃流行の卷煙草を卷かせるとか或は又ボール箱燐寸の箱を貼らせるとか總て工場に通はせて而して僅かの賃錢を取り親がソレを當にして居ると云ふ様な有様であります此事に就て私は毎度親共に話すことで御座いますが神より與へられた子供を教育すると云ふのは親の盡すべき天職であつて親は子供等を教育する爲めにはドノ様な苦みにも堪へ忍び就學年齢になつたら學校へ遣つて一通りのことを學ばせて置かねと成長の後少しも讀み書きが出來ない爲め其子の不自由は如何はかりか何故私の阿母さんは私を學校に遣つて吳れなかつたと云つて必ず親を怨むやうになる、それに又幼稚の時分から金を取らせると云ふのは决して宜いことではない自然と子供の心に私は是れだけの金を取ると云ふような考へがあつて動もすれば父母を輕蔑するやうな結果を見ることがあるから成るべく都合して五厘學校（一日五厘づゝの學校）にでも通はせる様にしたら宜からうと勧めますが容易には呑込めない様子で相變らず子供を遊ばして置くか小兒の守護でもさせて置くのが一般の風になつて居ります近來は又女工と云ふやうなことが大變に流行して參りまして少し大きくなると女工に出すのです昔封建の時代には御大名様の御奉公すると云ふことを大變に善いことゝ致し相當に資産のある立派な商人でも其娘を御大名に御奉公させるのを名譽のやうに思ひました是等のことは今の時弊と比べて至極好いことで假ひ九尺二間の裏店に居つたものでも大名の家庭或は又上流紳士の家庭に奉公すれば自然に其風を見習いますから後日母となり、一家を整理する場合に大變利益を得ることで御座いませう併しながら彼等には左様な考へのないのみならず女工になつて僅かの工錢を得させせんが爲めに成るべく其子の機嫌を損じない様御馳走などを致して奬勵して居ると云ふのは實に心得違ひのことで御座います又彼の女工場と云ふものは試に不取締な淨かならぬ場所であつて無教育の十五六歳の子供が大勢集つて猥りがはしい事を耳にし口にし知らず知らずの間に彼等の精神を不潔ならしめ果は穿 違ひの自由結婚などを行ひ男職工と夫婦になると云ふ様なことは隨分あるさうで御座います一度斯う云ふ習慣の下に育てられた子供は惡しき行ひのあつたときに親が之を制しましても前に御話したやうな有様で親の威力と云ふものが少しも有りませぬからなかなか親の意見などは聞入れませんで勝手我儘の擧動を致します

◉豐太閤と家庭

豐公の英豪たることは今更いふ迄もなく繪本太閤記、

眞書太閤記なども軍談的史傳によりて世人の頭に染み込み小瀬甫安の太閤記は日本外史の其材料をこれに取りしだけ較眞面目にて出來てあれど扨武略一點張の記事が多くて武略以外の豐太閤其人を窺ふべくはあらず伊勢貞丈も物徂來も豐公を無學呼ばはりし台記には腰折一つ詠めぬ人と做し江村專齋の老人談話にて字を知らぬ人と書いてあり、つまり武略以外には豐公其人が無いかの如く其半面は暗黑に葬り了られたりし豐公史の資材は予等が史料編纂上全國より蒐集し得たる文書實に一萬通に近く中には公が眞蹟さへ三四十通あり、尤も其大多數は右筆の手に成れりとするもそれから中には豐公の口うつしと認めらるゝものあるは修史上喜ぶべきの限りなりかし武略以外に、、、、(舊史以外に)豐公の人と爲りを窺ひ知らんとせば其家庭のさまを探るに若かず、豐公の親子妻孥に於けるは慈愛に富める思ひやりの深き人なりし也、中にも一例を擧ぐれば小田原陣中より其母大政所に贈りし消息(眞蹟)の如きは情緒纒綿意到り筆隨ひ一讀人をして坐ろに豐公心情の溫かきに接するの想わらしむめり

そもじさま御ゆさん(遊參)候て氣をもなぐさみわかく御なり候て可レ給候たのみ申候

の一節の如き孝子の老母に對して其年波の寄らんことを氣遣ふる餘り若く御なり下されとて慰むるが如き口氣を筆にほのめかしたる手際は消息文の要訣を會得したるものに非ずして何ぞやその外名護耶陣中より消息とて大政所の病氣平癒を京師の社寺に立願せしめたる文(是は右筆)にも大政所息災ならしめば一萬石宛を寄進せん、それがならずば三箇月命を維がせ玉へ、それもならずば三日なりとも生延ばしめ玉へとある如きは海内を戡定し八道を席捲せし我豐公其人の武略以外傳ふべきの好史話に非ずや　(三上博士の談片)

◉生蕃婦人の演說

去月中浣の頃、帝國大學人類學會に招かれて一場の說演をなせし生蕃の婦人は、臺北縣屈尺酋長の阿孃にして、這回同行の笠氏(三河の人)の妻なるが、陣羽織然たる赤の上着の下に白の股引を穿き、胸には兒童のやうに赤の涎掛をかけ、髮は長くして後に垂れて、耳に箸程の管を差し、顏は三角形にして、額は平面に、皮膚は黃褐色にして、俗に言ふ黃疸の如くに見ゆ、やがて席定るや、鳥居氏の案内に連れられて、彼の孃は、其夫笠氏と

共に演壇に進みしが、生れて以來始めてのことゝて、暫しは耻ぢらひ顔に、紅を潮して容色悄々たりしが、夫笠氏に促がされて、漸く口を開きて、生蕃語にて説演を始めぬ

妾が内地に入るに先ちては凡てのもの悉く新奇ならんと思ひ心も千々に亂れて或は恐れ或は疑ひ居りたれど今日到着して見れば曩に思ひもし案じもせし事は皆是妾の誤解にて今は全く胸の雲も晴れたり此上は一日も早く妾が故郷に歸りて凡ての人々に語るべく、且つ妾は女として而も初めて内地を見舞ひしものなり是迄聞きしには内地の一番可い所に參れば主權者の在はし給ひて凡てのもの皆華美壯大なりと言ふことなりしが、洵に聞きしが如く其處には馬車あり人力車あり荷車あり自轉車あり又多くの人の通行織るが如くなるも而も何たる衝突もなく喧嘩もなく順序を逐ふて相過ぎるものは是ぞ全く尊とき主權者とやらの御力なる可し是は恰も妾等の昔の主權者が統治せしキンサバカンと同しきものなりと思ふ

生蕃の婦人は言葉をつゞけて彼女の故郷の開闢に就て語るらく

妾等の昔の土地たるキンサバカンは尤も娯しき土地にて其處には凡ての事物が人の耳目を娛しましめしなり此内地は殆ど其キンサバカンと同じ、夫れは夜は雷光を採つて燈火として家内を輝かし、道路には小なる太陽を掛けて行人の往來に便ならしめ、殊に海山距てゝ遠國の人々と書信し又談話するが如き一として驚く可き事計りなりそも／＼妾等の開闢の地は此地と同じく砥の如く平かなりき其處に一の奇石あり此石割れて男女生し此夫婦の間に男女八人宛を産せり是ぞ我臺灣人の祖先なり

家内の電氣燈を見て電光と思ひ道路の電燈を見て小なる太陽と思ふなど兒童の觀察と同樣なる所、可憐に覺ゆ

妾の部落の人々は妾の如く親しく内地を見たるものなし尤も今は昔部落の一人が日本に來たりしが其土産話に船に乘りて海底を潜り往來し若し神樣の助なくば必ず水中に葬られたりしならん水の天井が落ちたるならんとのことにてそれを聽きし人々は身の毛も竪立つ程に恐ろしく思ひし也蓋し此人は是迄全く外を見し事のなき一人なれば斯る間違ひを言ひ傳へたるものならむ妾は幸ひに實地を見たれば歸蕃の日は尤も正直に此娛しき事柄を詳らかに物語りて勇猛なる男の人々に内地に來る樣勸む可し

彼女は又た生蕃の首取りに就き辯じて曰く

妾等の種族の惡習として人の首を取ど之も外國の猿共が蠶食して來る故ゑ恐怖のあまり斯る蠻行を爲すのみ若し夫れ蕃人の多くが斯くも娛しき土地あるを知るとならば之れも止むことゝなりて皆喜び勇みて内地に來る可し

彼女は是より躰を直くし兩手を垂れて歌ひ出せり其の唄ふ意味は

私共の方の首取りを止めて來るやうになる
だが話しても分らんから今迄は夫れが出來なかつた
私が此處に來たのは必すチット(神)が付たのであらう
此處に着いたら惡神が祟つたのであらう工合が惡い其内克くなつたら

又話ませう歌と云ふも普通の話しに少しく調子を付けて聲を高くするのみ足も動かさず手も亦振らず左ども其眞摯は經に現はれ人々を感ぜしめたぬ彼女の言葉は支那語にもあらず又臺灣語にあらず馬來語に近きものなり

◉英國の女子教育

久しく英國ケンブリッヂ師範學校長として、同國教育界に重きをなし、這回政府の命を受けて、日本教育事業調査の爲めに渡航せられたるヒューズ女史が、此程津田梅子女史の女子英學塾に於て、英國女子教育につきて爲せる一場の講話を聞くに

同女史は英國人とは云へ、アングロ、サクソン人種にあらで、ウエルス州に生れて愛蘭土人と同じくケルト人種の系統を受け父は醫師にして女史の教育に重きを置きしが幼少の頃、鄉國の女子教育法たる頗る振はず、古來傳習の笑ふべき訓練を守り、女子は聲低く談話すべき事、頭上に板を載せて眞直に歩く癖をつける事等を重として而して校内の規則は頗る綿密に智力の發達に至りては多く意を用ゐざる有様なりしが、女史は之に滿足せず、少しく長ずるやケンブリッヂ大學に學びて最高學科を修め、後ウエルスに歸りて女子の爲に進歩的の教育を開くに勉め、其頃まで幾多先輩の之が爲に奉ずるありて其結果、頓に其面目を一新し、久しからずしてウエルス大學の創設となり之に女子の入學するを許し故女皇は女吏を擧げて同大學評議員の一員に任命せられたり、而して英國人は由來保守的なれども教育刷新後のウエルスは大に其人種の特色を發揮して頗る進歩的のものとなり、大學に於ける總學生の如きも男子八百人に對する女子四百人の多きなるに至りたり、而して英國の教育は過去五十年間に改革と云はんよりも寧ろ革命を經過し、其女子教育の如き良く整頓するを得、其中最も見るべきものは体育の點に非常の進歩をなし、生徒はテニス、クリケット其他に意を用ゐること熱心に、歩行の如きも雄健となりたれば隨つて學業に堪ゆ、又た一特色は學校に在りては女生等教師の定めたる規則に縛せらるゝに非ずして自治をなすことなり、この自治法は米國女學校の如くに個人に重きを置くに非らずして生徒一般の團結を主とし上級生は下級生に對して大なる責任を帶び、評議上に定めたる制度は之を守るべきものとなり、英國女子教育は其初等中等の程度の完備せること大に他に誇るに足るものなりと雖も、其高等教育に至りては未た完らず、如何にすれば最も良く女子に適當したる高等教育あるべきやとは未了の問題にして今後英國教育家の潜心研究せんとする處なり、されど彼の米國の女子高等教育の如くに女子の特色を無視して男子と同等ならしむるものは決して其道を得たるものなりとは信ぜず

述べて、且つ女史は日本の女生徒が今後尤も躰育に重きを置き、教場に在りて躰を曲げ顎をチヨツト突き出しゐるやうなる躰格の自然に反して有害なる風をなすを止めんこと、又た古來の美風を棄てずして飽くまで其保存に勉むべしなど丶忠告せられたり、女史は流石

に英國有數の敎育家たるだけに學識豊贍觀察力に富み談話に長じて且つ頗る快活、接者をして敬服の念禁ぜざらしむるものあり

●天候と金魚

魚の動靜を以て翌日の天氣を知ると言ふは、氣象學の發達したる今日に於て少しく馬鹿氣たる樣なれど實例の二三を記して見んに、先づ縱六尺橫一丈深さ三尺位ゐの池を掘り日光を成るべく池の全面に照り渡る樣になし置き、是れは鯉、鮒、金魚、凡そ五六十放し置いて此の魚の動き方に依つて翌日の天候を知るなり、扨て其の見方は魚が池の南方に集り水面より二寸位の下に在りて東の方には南より尚ほ一層多くの魚が二寸よりも淺く浮きて居る時は翌日の天氣は南の風晴れと見てよろし若し魚が池の南に在りて水面より三寸位ゐの深さにあらば南の風曇り、池中ドコとなく魚が散りて仰向く樣にして口を開き居たならば雨なり又朝と曉とは少々見樣に相違あり若し朝に魚が西に寄つて居るならば、翌朝は北の風、東に寄らば南の風、南に寄れば西の風、北に寄れば東の風吹くと知るべし、晴れたる空にセシヤリと音して水面上に飛躍したる魚あれば、翌日の同時刻には必らず不穩の天候が來ること間違ひなしといふ以上は七月下旬より九日中旬頃までにて夫れより後は今日の食を見て二日目又は三日目の天氣を知ると云ふ有樣にて、雪の降る時分には假令ば二十四日に魚を見て來る三十日の天氣を知ることも出來ると云ふ

●面白き數學式

數學家の戯れに成れるものとして、近刊の某外國雜誌に、左の如き記事あり、一寸面白き數學式なれば、讀者の御慰みにまで此に揭ぐ

$$1\times9+9=1$$
$$12\times9+9=11$$
$$123\times9+9=111$$
$$1234\times9+9=1111$$
$$12345\times9+9=11111$$
$$123456\times9+9=111111$$
$$1234567\times9+9=1111111$$
$$12345678\times9+9=11111111$$
$$123456789\times9+9=111111111$$

$$1\times8+1=9$$
$$12\times8+2=98$$
$$123\times8+3=987$$
$$1234\times8+4=9876$$
$$12345\times8+5=98765$$
$$123456\times8+6=987654$$
$$1234567\times8+7=9876543$$
$$12345678\times8+8=98765432$$
$$123456789\times8+9=987654321$$

當代女流

十二大家投票募集

明治の昭代、文運の隆盛に伴ひ、女學界の趨勢著るしく發展し、女流名家の輩出近古無比と稱す、此時に際し本誌は新たに當代女流の英傑別紙投票用紙に指定せる十二大家を選ばんと欲し、普く江湖に向つて投票を募る、是れ斯界の先輩を稱揚するのみならず、又以て後進才媛の摸範となし、一般婦女社會の啓發誘掖に資せんとするの趣旨に出づ、讀者請ふ、左の規程に由り公正に投票されん事を

最高點の投票を得られたる諸大家へは精巧なる石膏製の塑像を贈呈し且つ其の肖像は明年一月より毎號女學世界卷頭寫眞版（アートペーパア）に掲載し、且つ其の小傳を掲ぐべし

投票規程

一投票は凡て投票用紙に由る事

一投票〆切は十二月十日限の事

一投票披露は來三十五年一月五日女學世界第二卷第一號に於てす

一十二大家中宗教家は佛教、神道、基督教を論ぜず、總じて道德高く信仰深き斯界の名家を擧げ又事業家と稱すべきは慈善事業矯風事業其他一般公共問題に與つて力ある人を擧げ、書家、音樂家は和漢洋を論ぜず凡て斯界に卓拔せる技能ある人を擧ぐべし

一被選者は凡て現存者に限る事

一投票は封筒に入れ表面に女學世界投票と朱書し博文館編輯局宛の事

(此投票用紙を切取り記入の上投寄すべし)

投票用紙

明治女傑十二大家

教育家	宗教家	著述家	英學家	女丈夫	小説家	事業家	交際家	音樂家	歌人	書家	畵家

投票者

氏名及住所

十二大家投票數（九月二十八日迄の分）

百二十一票（教育家）　下田歌子
百七十票（事業家）　奥村五百子
十六票（教）　三輪田眞佐子
二十六票（歌人）　小池道子
五票（教）　平尾光子
二十二票（歌）　中島歌子
五十六票（英學家）　津田梅子
十二票（宗教家）　村雲尼公
四十票（交際家）　大隈綾子（伯爵夫人）
十一票（交）　鍋島榮子（侯爵夫人）
百七十票（著述家）　下田歌子
八票（歌）　鳳晶子
三票（交）　山脇房子
十二票（教）　矢島楫子
八票（歌）　大谷章子（伯爵夫人）
十票（交）　毛利安子（公爵夫人）
四十三票（書家）　跡見花蹊
五十三票（畫家）　野口小蘋
十二票（畫）　馬杉青琴

四十票（女丈夫）　鄭　濱子
四十二票（教）　棚橋絢子
十二票（宗）　潮田千勢子
四十六票（小說家）　三宅花圃
十三票（畫）　跡見玉枝
十四票（音樂家）　幸田延子
三票（丈）　福田秀子
七票（歌）　千種任子
二十三票（交）　鳩山春子
七票（宗）　島村光津
三票（歌）　佐々木雪子
四十二票（丈）　奥村五百子
三十一票（說）　小金井喜美子
五十八票（丈）　野中千代子
十二票（說）　大塚楠緒子
七票（畫）　武村千佐子
五票（業）　原　禮子
二十七票（宗）　矢島楫子
十八票（教）　山川二葉子
七票（歌）　柳原愛子
九票（說）　右在紫琴

女學世界第十四號記事要目

每月一回五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……十二冊 增刊四回…三、六、九、十一月價格同一

郵稅 一冊 二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁廿二行	一頁六十四行
特等	……	……	三十三圓割引
一等	四十三錢	十三圓七十六錢	二十七圓割引
二等	三十五錢	十一圓二十錢	二十二圓割引
三等	三十錢	九圓六十錢	十八圓割引

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の分に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添へ申込あれ。

明治卅四年十月五日發行 第一卷第十三號

編輯人 松原岩五郎
發行人 大橋新太郎
印刷人 石川金太郎
印刷所 株式會社秀英舍 東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

發行所 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

電話本局
三百三番 千十八番
二千六百二十番

博文館諸雜誌發行表

定價

雜誌	定價	郵稅	發行
太陽	一冊三拾錢	郵稅三錢	每月一回
少年世界	一冊拾錢	郵稅壹錢	每月一回
中學世界	一冊貳拾錢	郵稅二錢	每月一回
女學世界	一冊貳拾錢	郵稅二錢	每月一回
文藝俱樂部	一冊廿五錢	郵稅二錢五厘	每月一回
圖書世界	一冊三錢	郵稅五厘	每月一回
太平洋	一冊四錢	郵稅五厘	每月曜日

十月發兌表

六大雜誌

雜誌	號	發行日
太陽	第十二錢	五日發行
少年世界	第十三號	一日發行
中學世界	第十三號	十日發行
女學世界	第十三號	五日發行
文藝俱樂部	第十三號	一日發行
文藝增刊 日本武士	第十四號	二十日發行
圖書世界	第四號	十五日發行
少年增刊 園遊會	第十四號	十日發行

太平洋

號	發行日
○第四拾號	七日發行
○第四拾一號	十四日發行
○第四拾二號	十九日發行
○第四拾三號	廿八日發行

廣告料

雜誌	料金	
太陽	一行一回 金四拾五錢	五號活字十八字詰
少年世界	同 金四拾錢	五號活字廿四字詰
中學世界	同 金三拾錢	五號活字廿四字詰
文藝俱樂部	同 金四拾錢	五號活字廿四字詰
女學世界	同 金三拾錢	五號活字廿四字詰
圖書世界	同 金拾五錢	五號活字廿二字詰
太平洋	同 金四拾錢	五號活字廿二字詰

詳細は御問合せの事

廣告の効力

廣告は商賣繁昌の守護神なり社會の先覺者なり喇叭手なり曉鐘なり目覺し時計なり記臆術なり故に廣告にして其宜しきを得んか百般の事業は立どころに成るべし實に競爭日進の今日に於て商賣の繁昌と事業と擴張とを希望せば須らく廣告の機關を撰び其營業の特色を社會に向て吹聽告白を怠らざるべし然らざれば折角の名作珍品も所謂『寳の持腐れ』とならむ故に世の眞實精良廉價なる商品又は確實有益なる事業を有する諸君は一刻も早く其事業を社會に廣告し吹聽して普く世人を歡迎を受け赫々たる名聲を江湖に博し早く無上の信用と盛大の販路とを一般世界に開發せられよ。

（後付の一）

再版出來　　再版出來

ENGLISHSTORIES
SELECTEDBY
MIss. UME TSUDA.

津田梅子女史編

イングリッシュ ストーリーズ

此書は津田梅子女史が多年敎授上の實驗に基き實用英語の主旨により英米大家の作に成れる小話數編を撰び出で難解の字句には一々脚註を加へたるものなり殊に印刷紙質は共に文部省の規定に準じて鮮明且好なれば尋常中學高等女學校等にて第四リードルを程度とする學年一期間の譯讀會話等の敎科書となすに適し學生をして英米の俗話を知らしむるに甚だ便なり本書出版に先ちて既に採用を諾せられたる學校尠なからず

發兌元　東京神田區猿樂町拾六番地　文武堂
發賣元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

女學世界定期增刊

糸すゝき

第一卷第拾壹號九月十五日發行（定價貳拾錢 郵稅貳錢）

口繪　內外人物風景等斬新警拔なる寫眞銅版拾貳葉を添ふ

才媛投稿　◉小說◉國文◉消息文◉普通文◉和歌◉新體詩等

何れも才媛淑孃の錦心繡腸に成れるものにして艶麗の文優婉の歌實に千紫萬紅

附錄　富士のあけぼの（田山花袋）◉湖畔の夕暮◉米國女學生の狀態（江湖逸人）◉佛國婦人の眞相（菅原白峯）◉題未定（大塚楠緒女史）◉題未定（片山廣子女史）◉箱根紀行（中島眞子夫人）

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

新刊廣告

太陽記者 坪谷善四郎君著 （製本出來）

市制町村制釋義

全壹冊洋裝 菊判二百餘頁 正價四拾錢 郵税六錢

市町村制の始めて施行せらるゝや坪谷君は市制町村制註釋を著し盛に世に行はれて版を重ぬると既に十七回に及ぶ然れ共其後法令の改正せられ又は解釋の進化せるもの多く今に及べは註釋の不備なるもの又は誤謬あるもの少なからず坪谷君近來自ら東京市會及牛込區會等の議員となり平生經驗する所多し故に今回新たに本書を著はし最も簡易明白に法律の理由を解釋し且つ市町村制に伴ふ一切の法令を附記し以て市町村の吏員及議員の爲に座右の寶典たらんとを期せられたり而して今や版成る請ふ倍舊の愛讀を賜へ

市岡正一君編纂 ◎ 改正戸籍事務取扱全書 全壹冊洋裝 賣價金壹圓廿錢 郵税拾六錢

宮川大壽君註釋 ◎ 理由詳説改正戸籍法典 全壹冊洋裝 正價金三拾錢 郵税八錢

坪谷善四郎君註 ◎ 改正府縣制郡制釋義 全壹冊洋裝 賣價金三拾錢 郵税六錢

鷲見金三郎君編纂 ◎ 改正府縣制郡制並關係法規 全壹冊洋裝 正價金五拾錢 郵税拾錢

市岡正一君編纂 ◎ 戸籍吏必携戸籍事務實行問答 全壹冊洋裝 正價金貳拾五錢 郵税四錢

神津禎次郎君著 ◎ 民法戸主必携 全壹冊袖珍 正價金三拾五錢 郵税六錢

博文館編輯局編纂 ◎ 卅四年新法令 全壹冊洋裝 正價金三拾錢 郵税三錢

（後付の五）

發兌元 東京 博文館

鶯亭金升君著

風雅文庫

全部六册袖珍美本

第壹編

都々逸の栞

上製全一册
正價貳拾錢
郵稅六錢

鶯亭金升君の情歌に於ける世既に定評あれば喋々を要せず、本書は斯道作者の參考書として天文地理鳥獸虫魚等各部に別ち今古の秀吟を添へ季題と雜題とを親切に說き卷頭には初心の爲めに作法を集掲げ卷末には雜題見立物詠込折句其他數百吟を集めたる無比の珍書にして、啻に雜俳家のみの重寶にはあらざる可し、尚近刊の第二編以下續々發行の題號を左に掲ぐ。

風雅文庫續刊目次

冠句の栞
狂俳の栞
狂句の栞
狂歌の栞
雜俳の栞

上記の六册を纏めて美帙に裝ひ明窓淨几の下に備へて花月の好伴侶とせば百年の長齢も此の浩氣を養ふの原素となるを得べし雅客たる人必ず一本を購入せざるべからず

新刊 **俗曲大全** 全壹册 鶯亭金升君校訂 正價金六拾錢郵稅拾六錢

再版 **都々逸一千題** 全壹册 鶯亭金升君編纂 正價金參拾五錢郵稅六錢

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

新刊袖珍美本

文學士高山林次郎君序文
文學士大町芳衛君序文

奈良朝

文學士笹川臨風君著

(製本既成)

我邦昔文明の發達は奈良の朝廷時代を推すべし、唐朝制度文物の輸入、佛教の興隆、古事記、日本紀の編撰、假名文字の製作、皆此間にあり、而して道鏡の跋扈、押勝の謀叛其他著大の事蹟も亦此際にありたり。要するに歴史上最も重要にはた興味ある時代と云ふべし。本書は其人物風俗時情に至るまで精叙細論して、太平奈良の都の面影、一讀の下に歴然たるべし

全壹冊金
字入洋裝美本
正價廿五錢
郵税四錢

文學士久保天隨君著

紀行文集 檜木笠

(製本既成)

全一冊
洋裝袖珍
正價四十五錢
郵税六錢
寫眞銅版風景
十六葉入

現時の詞壇行文を以て其能を稱せらる、者固より少からずと雖も天隨氏の如き確かにその上位に在るべきもの天下の公論之を證して餘あり鴻爪雪泥游踪最も廣く隨處の江山悉く記あり而して醉山攪海の筆一種豪健疎宕姿致到底他の摸倣追隨を許さゞる者あり誠に百代の珍と爲すべし本書は氏が最近の紀行文二十餘篇を蒐めたるものにして文中時に詩俳を加ふ明窓の下淨几の上試に一讀すれば紛々たる俗塵を隔離して相伴うて遠く去り青山白水の寰區に逍遙するの感あるを得む

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

(後付の七)

紙數 三百廿頁

日本武士

正價廿五錢 郵稅二錢五厘

文藝倶樂部定期增刊（第七卷第十四號 十月二十日發兌）

記事要目

挿畫（若武者（極彩色刷）……梶田半古筆
挿入畫……古洞、華舟）

講談速記武士龜鑑

●柳田角之進……神田伯山演
●大野九郎兵衛の娘……柴田南玉齋演
●松前鐵之助……放牛舍桃水演
●神田作十郎……一龍齋貞山演
●堀部妙海尼……眞龍齋貞水演
●神崎與左衛門……桃川實演
●村上喜劍……松林伯知演
●伊藤孫兵衛……松林伯鶴演
●大川友右衛門……正流齋南窓演
●稻垣半平……邑井貞吉演
●細川忠興の妻……邑井一演
●大久保彦左衛門……松林伯圓演

（附錄）武藝十八番。武士の家庭。武家の作法

卷頭論說 ●日本武士論……文學士 大町桂月君

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（金子製本）

女學世界

每月一回五日發行

（明治三十四年十月五日發行）　第壹卷第十三號　（明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可）

姉妹を持てる兄弟は繰り返しく

娘を持てる親・妻を持てる夫・母を持てる子・女と云ふ女は見よ

此廣告を讀み玉へ讀みて記憶し玉へ日本國に中將湯と云ふ靈藥あることを……

中將湯の名譽

產科婦人科專門諸大醫の稱賛を得たるのみならず長くも上宮様方の御用を蒙るに到る誠に本劑の名譽にして又同病患者の幸福と云ふべし

醫學博士慈惠病院長　高木兼寛先生（東京）

產科婦人科專門醫學士櫻井病院長　櫻井郁次郎先生（東京）

產科婦人科專門ドクトル　木村順吉先生（東京）

婦人科專門獨逸ドクトル　朝山義六先生（横濱）

產科婦人科ドクトル　佐伯理一郎先生（西京）

大阪緒方病院婦人科醫長ドクトル　緒方正清先生（大阪）

產科婦人科專門ドクトル　小林山卿先生（大阪）

愛知病院婦人科醫長醫學士ドクトル　柴田耕一先生名古屋

ドクトル婦人科專門グラジエト、ハアマシー　大月文先生（福井）

右の外三十餘名の大醫諸君より最も名響ある稱賛を忝ふしたれども畧す

●十年のちの道三週間に全治す●

子宮病血の道產前產後の長き患ひ●下腹子宮腰足引つり痛み●下腹より胸先へ差込或は正氣を失ひ●息切し動氣強く腰より足部へ冷込み●手足しびれ●浮腫



中將湯

定價	郵送料
一日分七錢五厘	二錢
三日分廿錢	二錢
一週分四十五錢	四錢
二週分八十五錢	六錢
三週一圓廿五錢	十錢

●月經不順　年頃になりて月經なき人●逆上頭痛眩暈甚しく●又物事を苦にし氣分惡く常にふさぎ勝の人特に子宮出血白血長血帶下にて久しく患ひ身體衰弱せる病にても全治すること請合なり…（論より證據早々試みよ）

●中將湯各薬店にあり無ば本舗へ申込あれ●東京市中は配達し●遠國は郵送す

●本舗へ御注文の節方は病人の容體を詳しく申込あれ

本舗　東京市日本橋區通四丁目七番地（電話本局千九十七番長距離接續）　津村順天堂本店

本舗　大阪堺筋鹽町北入（電話東二百七十八番長距離接續）　津村順天堂支店

（定價金貳拾錢）

東京秀英舍印刷